
Re:Talk+

祐樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:Talk+

【コード】

N8305P

【作者名】

祐樹

【あらすじ】

Phantasy-Chronicle-Online。剣と魔法の御伽噺。いつか征する千界の迷宮。それは彼らにとって不可思議なゲームでしかなかったはずなのだが。灰色の霧。出現する異形。偽りの世界での冒険はいつしか、現実を侵食する箱庭の幻想と化した。現実世界と箱庭世界。ふたつの世界で紡がれる少年少女の物語。

序章 おわりのはじまり

「ぎやああああ　！？　やばいやばいやばい！　マジでヤバイ！　ホントにマズイ！　死ぬ。本当に死んじまう　って、うぎやあ！？」

背後から聞こえてくる唸り声に、黒髪の少年はほとんど感任せに身体を横に振った。ブンツと耳元を風斬り音が通過し、頬に軽い痛みが走る。

再び悪寒。頬の痛みを感じる間もなく前方に転がると、続けざまの一撃をかわして、起き上がると同時に、背中の鞘から大剣を抜き放った。

身の丈ほども大剣を両手で構えると、彼は振り返って襲撃者と対峙した。

「ぐるるる……ッ」

そこにいたのは、額から角を生やした熊のような生き物だった。

大きな牙を生やした口から唾液を垂れ流し、両手の鋭い爪を擦り合わせてこちらを威嚇している。

ホーンベア。マリーゴールドで資料を見た彼の記憶が正しければ、それが目の前の一角熊の名前だったはずである。

攻撃方法は牙と爪による近接攻撃のみ。適正レベルは7。黒髪の少年の現在のレベルが同じく7なので、やってられない敵ではないのだが、生憎とタイミングが悪かった。

「ああ……くそつ。最悪だ、ちくしょう」

ぜいぜいと荒い息を吐く黒髪の少年の顔色が悪いのは、全力で走ったせいだけではない。正直なところ彼には、戦闘を続行するほどの余力はなかった。

黒髪の少年がホーンベアに襲われたのは、レベル上げを終えて拠点に帰還しようとしたときだった。

体調が万全ならホーンベアの一匹くらいならどうとでもなっただろうが、度重なる戦闘からくる疲労ですでにふらふらだった彼にとつてホーンベアは強敵だった。

分の悪さを感じて逃走を試みたわけなのだが、結果はご覧のとおりだ。逃げること叶わず、こうして一対一で対峙する羽目になったわけである。

こんなことになるのなら限界まで粘らず、適当なところで切り上げるべきだったと、後悔したところで後の祭りだ。

それよりもいまはどうやってこの危機を脱するか考えるべきである。

とはいっても、そう選択肢が多いわけではない。拠点である街までは距離がある。周りに人影はなく助けも期待できない。逃走は失敗してしまった。

ならばこそ、黒髪の少年に残された選択はひとつだけ。ホーンベアを倒す。それだけだ。それしか生き残る道はない。

一角熊とにらみ合いながら、頬から滴る血を片手で拭い、彼は覚悟を決めた。少しでも体調を整えようと一度大きく深呼吸し、黒髪の少年は大剣を振り上げて跳躍した。

長時間の戦闘に耐えるだけの余裕はない。短期決戦。疲弊してい

る自分にはそれしかない。出し惜しみはなしだ。最初から全力でいく。

「ッ。〈息吹〉！」

方術発動。内力術式〈息吹〉。

身体が熱い。身体を構成する生命子が活性化し、重たかった全身に活力が満ちる。

地面を強く蹴り加速する。急に变化した彼の動きに、ホーンベアは対処ができなかった。闇雲に振り回される爪を掻い潜り、大剣を薙ぎ払った。

肉を斬る生々しい感触が柄から伝わってくる。”こちら”にきて二週間。いまだに慣れぬ感触に顔を顰めつつ、抵抗に抗い一気に剣を振り抜いた。

刀身が肉を食い破り、鮮血が宙に舞う。仰け反り苦悶の叫びを上げるホーンベア。黒髪の少年は右足を軸に、身体を反転させ、畳み掛けるように剣を振るい続ける。

戦闘を優位に進めながらもしかし、彼の表情には余裕が感じられなかった。

時間がないのだ。身体から気だるさは消えているが、〈息吹〉による一時的なモノに過ぎない。効果が切れればそれこそ戦闘どころではないだろう。

ホーンベアの懐に飛び込み、息の続く限り剣を振るい続ける。人気がない平原に、血飛沫が飛び散り、異形の叫び声が響いた。

目の前が一瞬、揺らいだ。そろそろ自分の限界が近いことを感じながら彼は、跳ね上げた刀身を翻した。

「これで 終われよッ！」

大上段に振り上げた大剣を渾身の力で振り下ろす。血に濡れた刀身が一角熊を斜交いに斬り、ホーンベアは巨体を小刻みに痙攣させそのまま前のめりに倒れた。

同時にく息吹の効果が切れた。反動で襲いかかってきた鉛のような倦怠感に、彼は大剣に寄りかかるようにして崩れ落ちた。

地面に尻餅をつき、口を大きく開けて呼吸する。大気には血の臭いが混じっていたが、気にすることなく空気を貪る。

「はあつ。……ギリギリだったな」

本当に危なかったがなんとかなった。今回の経験は次回に生かすとして、いまは生き残れたことを素直に喜ぼう。

「はじめて二週間でさよならとか、ちょっと洒落にならないしなあ」

こっちはまだまだ遊び足りないのだ。これで終わりだなんて勿体なさすぎる。

と、一角熊の遺骸が光に包まれた。巨体が形を失い、光の粒子に変換される。中空に四散した淡い燐光は、彼の左手の中指につけられた指輪に吸い込まれた。

地面に突き立てた大剣に背中を預け、黒髪の少年　へキサは頭上を仰ぎ見た。

視界に移ったのは青い空。見渡す限りの青空を白い雲がゆっくりと流れている。ときより吹き抜ける風が、火照った身体に心地よかった。

これが仮想の世界だとは信じられない。

ただのゲーム　と一言で断ずるにはあまりにも不自然。事実、

へキサにはこれがゲームなのか、測りかねている部分があった。

現実ではヴァーチャル関連は未来の技術とされている。実用化の目処が経っているのは、せいぜい3Dゴーグルやグローブ程度なのだ。

それがどうだ。この世界は。風の冷たさ。血の臭い。身体の熱。頬の傷の疼き。なにかもが現実と変わらない、圧倒的なリアルな感覚。

『もうひとつの現実』の看板に嘘も偽りもないと言っわけだ。

あの日の選択は間違いはなかった。そのときの自分を褒めてやりたい。

きっかけは一通のメール。

それがすべてのはじまりだった。

一章 箱庭世界(1)

Phantasy - Chronicle - Online。

その不可思議なゲームの案内が届いたのは、日常の退屈さに嘆いているときだった。ふと何気なく携帯を見ていたら、着信メールの中に目を引くタイトルがあった。

自分だけの物語を貴方に

見るからに胡散臭い内容だった。

ネットゲームと書かれていながら内容は一切不明。運営会社の記載もない。試しにネットで検索をかけてみてもヒット件数はゼロ。

普通なら業者メールだと削除する怪しさに、しかし指示通り空メールを返信したのは、タイトルの言葉に震えるモノがあったからだ。

ちょうどそのときやっていたネットゲームに、飽きを感じていたというのも大きな理由だったかもしれない。

返事がきたのはそれから一カ月後。メールの存在など忘れかけていたときだった。

椅子にだらしなく座りながら携帯をいじり、メールに記されたIDとパスワードを入力し、ログインボタンを押した。

その刹那、現実の彼の意識は、『此処』ではない『何処か』に転送されていた。彼の感覚では瞬き一回の間に、目の前の光景が変化していたのだ。

そこは決闘場。月明かりすらない深い夜。無人の観客席。地面に突き刺さる無数の武器。暗闇のはずなのに何故か視認できる武器の群れに囲まれて、彼は沈黙した決闘場の中央で立ち尽くしていた。

『 選んでください 』

空から声が降ってきた。

声に反応し頭上を仰ぐと、闇色の空を白く発光する物体がくるくると中空を旋廻していた。拳大ほどのサイズの発光する球体は、緩やかに下降すると彼の顔の横で静止した。

『この中からひとつだけ選んでください』

なにを？

『武器を。貴方の持つ魂の形質を示してください』

言われるがままに周囲を見回す。

剣。短剣。大剣。槍。戦斧。刀。大鎚。大鎌。わかるモノからわからないモノまで、様々な種類の武器が地面に突き刺さっている。

声を三度言う。選べ、と。この中からひとつだけ、自分に見合う武器を選択しろと声が静かに彼を促す。

剣がいいな。

彼は武器を見ながら、ぼんやりと思った。理由はない。しいてあげるのならば、彼の意識では剣が一番かっこいいからだ。

とはいえ、一言で剣と括つても、決闘場にはたくさんの剣がある。大きな剣。小さな剣。両刃の剣。片刃の剣。真っ直ぐな剣。曲がった剣。数が多すぎて、あげててはキリがない。

きよろきよろと落ち着きのない視線を左右に泳がせる。焦点の合わない夢遊病者のような挙動だった。

と、彼の注目を引く剣があった。無意識のうちに足を前に踏み出していた。ふらふらと彼が歩み寄ったのは、無骨で頑丈そうな大剣だった。

普通なら振り回すどころか、持ち上げることすら困難な大剣だ。だからこそ、この剣に惹かれたのかもしれない。退屈な日常を破壊するかもしれない象徴として。

手を伸ばす。指先が大剣の柄に触れ 直後、身体に電流が走った。

『 読み込み開始。心的強度：焦燥。属性：真夜。性質：患者。魂の形質を抽出・固定化。心経接続を開始。全工程を終了。幻体アバターの作成を完了します』

一体なにが起こった。

衝撃でふと我に返った彼は、慌てて柄から手を引つ込めると数歩後退った。理解のできない展開に、遅まきながら恐怖が湧いてきた。

『 如何ですか？ アバターの調子は？』

彼とは正反対の落ち着いた声色。

少年とも少女とも判断のつかない中性的な声で訊ねられて、彼は目を白黒させて困惑した。如何と言われも意味がわからない。

そもそもここはどこなのか。さっきまで自分の部屋にいたはずなのに、なんだってこんな映画のセットのような場所に立っているのか意味がわからない。

一から十までなにもかもが不明で謎だった。

『見てください』

未確認発光体がそう言うのと同時に、彼の正面に長方形の物体が出現した。鏡である。姿見に映し出された自分の姿に、彼は息を呑んで絶句した。

そこには自分の知らない自分が映し出されていた。黒髪に黒目と
いうのは現実世界の彼と同じだが、顔の作りはまったくの別人だった。

身に纏っているのも直前までの私服ではなく、漫画やゲームでよく目にする革の防具だった。しかも背中には、鞣革の鞆に収まる巨大な剣が吊るされている。

声の言うアバターとは、この肉体的ことだろうか。本当の肉体ではないのに、違和感がないことに違和感を感じた。

『当然です。そのアバターは貴方の魂から作製された分身。文字通りの意味での半身なのですから』

言つて、発光する球体は滑るように空を舞った。くるくると螺旋を描き、淡い燐光を宙に撒き散らす。

『これから貴方には、とあるゲームに参加して頂きます』

ゲーム。 そう、ゲームだ。

ここにくる直前、自分がなにをしていたのか思い出した。

正体不明のネットゲーム。 Phantasy - Chronicle
e - Online。 確かそんなタイトルのゲームだったはずだ。

『そうです。 Phantasy - Chronicle - Online
e。 ファンシーと覚えてください』

彼の思考を読んだかのようなタイミングで声が響く。

『ここはその始まりの場所。現実と仮想と中間地点。日常と非日常の境界線』

いまのいままで自分の部屋にいたはずなのに、一体いつ連れ出されたのだろう。

『誤解しているようですが、貴方の本来の肉体は現在も現実世界にあります。肉体はそのままに、精神だけがこちらに転移したと考えてください』

転移？　なんだそれ。じゃあ、ここは異世界だとも言うのか。それこそゲームや漫画の世界の話ではないか。

『半分は正解で半分は不正解です。確かにここは貴方のいた世界ではありません。ですが、異世界と呼ぶには規模が小さくて相応しくないのです。隔絶された空間に存在する造りモノの箱庭　とでも理解してください』

ゲームといったが、自分になにをさせるつもりなのだ。

『貴方にはこれから探索者として、迷宮に挑んでもらいます』

迷宮。その単語に何故か心が跳ねた。

まるでそれこそが自分の望みであるかのような不可思議な感覚。

『貴方が挑むのは千界迷宮。千の世界を重ねた神秘の迷宮。貴方は十万人のプレイヤーの一人として、迷宮を攻略してください』

それがこのゲームの目的？

『はい。最下層に辿りつき、そこに存在する”なにか”を倒す。それがこのファンシーで貴方が達するべき目的になります』

……もしも、断ったらどうなる？

『特にはなにも。貴方に生じる不利益は一切ありません。拒否するというのならば、それもまたひとつの選択でしょう』

ただし、と言葉を繋ぐ。

『ひとつだけ。アカウント削除に関する注意事項があります。アカウントを削除する際には、この世界での記憶の全てを消去させていただきます』

記憶の削除？

『はい。また、死亡によってもアカウントは削除されますので、行動には細心の注意を払ってください』

一回死んだら、それで終わりってこと？

『そのとおりです。死亡状態からの蘇生方法はありません。例外はないと断言します』

死亡したらアカウント削除。

これはまた極悪なペナルティだ。一般的なネットゲームでそんなデスペナルティがあったら、間違いなく誰もよりつかない。ゲーム

の出来次第では一部のコアなユーザーには受けるかもしれないが、大半の人間にはそっぽを向かれてしまっただろう。

『これはゲームです。しかし、もうひとつの現実でもあります。やり直しはありません。繰り返します。やり直しは不可能です。一回の人生。一度限りの生涯。だからこそ、意味があり意義が生まれるのです』

夜の決闘場に響く声。

闇の中を淡い光の粒子が踊るように軌跡を刻む。

『どうしますか？ 受諾するのも拒否するのも貴方の意志ひとつです。強制はしません。意志なき意思は不要です。私たちが求めるのは確固たる信念。断固たる決意。最後まで諦めずに戦う存在こそを欲しています』

その問いに沈黙を保っていた彼はゆっくりと口を開く。

彼の非日常がはじまったのは、その瞬間からだった。

一章 箱庭世界（2）

目を開くと見知らぬ天井が見えた。

まだ寝起きで頭が働かない。横になっていた身体をゆっくりと持ち上げて、ぐるりと首を巡らしへキサは室内を見回した。

簡素な部屋だった。家具はベットとタンス、それと丸テーブルがひとつだけ。他にはなにもなかった。本棚がない。パソコンもない。テレビもなければゲーム機もなかった。

どこからどう見ても自分の部屋ではない。

なんでこんなトコで寝ていたんだろう　と目を擦り、唐突に意

識が覚醒した。

ここは現実の世界ではない。ここは箱庭の世界。はじまりの街、ドーナ・ファム。または千界迷宮第0界層。

この世界を訪れたプレイヤーが、まず最初に降り立つ街だ。

そして、この部屋はへキサが生活の拠点としている宿屋の一室である。ちらりと室内の時計を一瞥すると、時計の針は午前7時を指し示していた。

昨日、辛くもホーンベアを撃破した後、モンスターに遭遇することなく、どうにかこの部屋に帰還したへキサは、そのまま倒れ込むように眠ってしまったのだ。

見れば大剣も床に無造作に放り投げている。

着替える余力もなかったため、着ているのも普段着ではなく、簡素な造りをした皮の鎧だった。雑で荒い造りだが、初期装備なのでこんなモノだろう。

いまは生活するだけで精一杯で、装備を買い換えるだけの余裕はないが、まとまった金ができたら装備を一新するつもりでいた。

「……そっか。あれからもう二週間も経つのか」

夢を見ていた。

こちらの世界にはじめてログインしたときの夢だ。

結局、ナビゲーターである発光体に対するヘキサの回答は保留だった。

止めるのにリスクはない。止めるのはいつでもできる。ならば実際に体験してみても、それから判断しても遅くないと考えたのだ。

そして、箱庭世界に來訪してから二週間。黒髪は少年は見事なまでに、このゲーム ファンシーに「ハマっていた」。

実際にゲームの中に入ってプレイする。全感覚潜行型、とでも言えばいいのだろうか、この場合は。明らかに常識離れた現象だ。

最早、科学の世界の話ではない。完全にファンタジー世界の話になっている。

確かにその手の小説は大抵読破しているし、そうしたネットゲームに憧れてはいた。

いつかは体感したいと思いつつも、自分が現役の間に技術が確立することはないだろうと諦めていた。

剣と魔法の世界。異世界 ナビゲーターに言わせると別物らしいが、での冒険。年頃の少年なら誰しも一度は憧れる展開だ。これでハマらない道理はない。

事実、ヘキサはこの二週間の期間、一度もログアウトをしていなかった。

現実が気になる瞬間がないわけではないのだが、正直熱中し過ぎてログアウトするタイミングが掴めないのだ。

もっとも、ナビゲーターが言うには、現実との時間経過速度は十倍。一日が二十四時間なのは現実と同じなので、あちらの一日がこちらでは十日に相当する。

これで計算するとこの二週間も、現実ではまだ二日も経っていないことになる。

それにログインしている間の現実生活についても対策されているらしいので、その点に関してはあまり心配していかないのである。

「ッ。痛すぎるだろ」

上半身を起こした途端、走り抜けた痛みに動きが固まった。

身体中がギシギシと軋み悲鳴を上げている。昨日、無茶な戦い方をした代償だ。全身が筋肉痛のような状態になっている。

それでもなんとかベットから這い出し、よたよたと覚束ない足取りで窓に近づくと、鍵を外して窓を開け放った。

部屋の中に差し込んだ陽光の眩しさに手で目を隠す。窓の外。

そこには現実では絶対に見えないであろう光景が広がっていた。

まさに剣と魔法の世界。

全身甲冑を纏う騎士。とんがり帽子と黒いローブ姿の魔法使い。腰に剣を吊るした剣士が、槍や斧で武装した仲間と楽しげに談笑している。石の階段に腰掛け豎琴を奏でる吟遊詩人の横で、露出度の高い薄い衣を羽織る踊り子が華麗に舞っている。

ヘキサは踵を返すと身体に負担をかけないよう、ゆっくりとベッ

トに腰を下ろした。開けっ放しの窓から聞こえてくる喧騒をBGMに、彼は腰のポーチに手を伸ばした。

ちなみにこのポーチはプレイヤー全員に配布される初期装備なのだが、ただのポーチではなく容量拡張の効果が付加された立派な魔法アイテムである。

見た目の何倍ものアイテムを格納できるうえに、ポーチの重量が増えることもない。中身を取り出すときも、手をつ込めば頭の中に格納しているアイテム一覧が表示され、自由に取り出される優れたモノである。

「……えっと、あれ……ない？」

ポーチの中に手をつ込んだまま首を傾げる。

脳裏に浮かぶ一覧の中に目的のアイテムがなかったのだ。ヘキサが探しているのポーションで、レベル上げで使わなかった一個が残っていたはずなのだが。

「あー、そっか。確か使ったんだっけ……？」

そういえばドウナ・ファムに帰還する直前に飲んだような気がする。ふらふらしてたのでよく覚えていないが多分あっている。

「まいったなあ。身体が痛くて動けないっていうのに　あ、そう
だ」

そこでふと思い出したことがあり、ヘキサは左手を胸の前に掲げた。

「『オープンブック』」

言葉と共に、翳された手の平の上で光が散った。

光の粒子が中空を舞い、一瞬にして本の形に凝縮する。ヘキサの手に収まったのは、金細工で装飾された革張りの本だった。

この本はプレイヤーが一人につきひとつずつ持つ、一言でいうならば本型のシステムメニューである。革張りの本には所有者のレベルやステータス、スキルにアイテムとプレイヤーのすべてが記載されているのだ。

装丁を開く。外見に反して中身は金属質の頁だった。硬質な頁を捲りアイテムの頁を開くと、中空にシステムブックに格納されているアイテム一覧を展開した。

眼前に開かれた半透明のウインドを見て、お目当てだったポーションの予備があることに口元を緩めた。

すぐさま画面をタッチし、ポーションを選択する。すると頁の上に光が渦巻いた。

いきなりの発光現象に驚くことなく、光の中に手を突っ込むと、光が収束してカードに変化した。銀色で縁取られたカードには、赤い液体で満たされた丸い瓶の絵が描かれている。「マテリアライズ」

変化は一瞬だった。再度、カードが発光したかと思うと、次の瞬間には実体化したポーションの瓶がヘキサの手の中にあつた。

ファンシーでは武器や防具、消費アイテムや生産素材などの大抵のモノは、このようにカード化してシステムブックに格納しておくことが可能である。

『マテリアライズ』でカードから実体化させられ、逆にカード化するときは『シール』で実行できる。

わざわざ声に出さなくても思考操作で実体化もできるのだが、それにはある種のコツが必要で、まだ慣れていないヘキサは確実な音声操作で行なっているのだ。

親指でコルク栓を弾くと、中身の赤い液体を一気に飲み干す。口の中に広がる苦味に眉をしかめる。

ポーションは液体の色によって効果が違い、赤いポーションは傷の治癒や体力回復に使われる。この苦味にはいまだに慣れないが、魔法薬の効果は確かだった。

ふいに和らいだ痛みにはほと息を吐くヘキサ。完治にはまだ時間がかかるだろうが、それでも起きがけよりは大分楽になった。

いま飲んだポーションも初期支給品なのだが、いざというときのために残していた正解だった。まあ、ただ単に忘れていただけともいうが。

「『クローズブック』」

用の済んだシステムブックを手元から消して、ヘキサは今日の予定を頭の中に巡らした。

まずはマリーゴールドに行くべきだろう。集めた生命子を吸収しなければならぬし、回収した魔石やアイテムをリラ　この世界でのお金の単位　に換金しなければならぬ。

その後は使い切ってしまった消費アイテムを補充して、それからまたレベル上げに励むべきか。ホーンベアとの戦いで痛感した。自分はまだまだ弱いと。

「よし。今日も頑張るか」

予定が決まったら後は行動するのみ。これから時間が経てば人は

さらに多くなる。そうなる前に一通りの準備を整えてしまいたいところだが、

「その前にちょっと休憩」

完全に取りきれないダルさへキサは、そうつぶやくとベットに横たわるのであった。

一章 箱庭世界(3)

結局、軽くシャワーを浴びたり朝食を取ったりなどで、ヘキサが本格的に行動を開始した頃には、起きてから三時間ほどが経過していた。

がやがやとした活気のある街並み。剣とか杖とか弓とか鎧とか。現実だったら速攻で警察に通報される格好をした人々で、ドウナ・ファムは賑わっている。

マリーゴールドの職員が言うには、いまが一年でもっともドウナ・ファムが活気に満ちているらしい。それというのもこの時期が、ヘキサのような新規者の『補充』が行なわれる時期だからである。

普段、第0界層であるドウナ・ファムにはあまり人はいないのだが、彼ら新規者目当てで多くのプレイヤーが集まっているというわけである。

周囲に目をやれば、自分と同じような格好　つまり、初心者装備を身に纏ったプレイヤーの姿がチラホラとあった。彼らが目指す場所は自分と同じようだった。

人の流れに沿うように歩くこと十分。遠くのほうに目的の建物が見えた。

ヘキサの視界に飛び込んできたのは、周りの建築物よりも大きな白い円形の建物だった。入り口の両扉の上には、天秤を象ったレリーフが彫られている。

ここはヘキサたちプレイヤー 探索者の支援施設、マリーゴールド。秩序を表す天秤は、マリーゴールドのシンボルである。

他のプレイヤーに続いて中に入る。どことなく市役所に似た雰囲気、広い室内には、たくさんのプレイヤーの姿があった。

円形の内部は四階構成になっていて、人々が螺旋階段を歩き来している。建物の中央部分は吹き抜け構造で、天窓から差し込む陽光が、フロアを明るく照らしている。

マリーゴールドでは、レベルアップ。ドロップ品の鑑定と換金。クエスト。などの、迷宮を攻略する上で必要な事柄を一手に担っている。

どうやらタイミングがよかったようだ。思っていたよりも空いている列に安堵すると、後ろに並んで自分の番を待った。

「ユニオンによこそ」

程なくしてカウンターの前に立ったヘキサを迎えたのは、支給された濃紺色の制服を纏った受付嬢だった。豊かな金髪を揺らしながら目を細めて柔和な笑顔を作っている。

「システムブックをこちらに翳してください」

受付嬢に言われたとおりヘキサは、システムブックを取り出すと机の上に置かれた金属板の上に翳した。金属板から発せられた光が、”本”の表面をなぞるように上から下に走った。

「はい。確認しました。アカウントD000154、ヘキサ様ですね」

手元の画面に視線を落とした受付嬢が言った。

いまのは”本”を使用した探索者の個人識別である。マリーゴールドではこのように身分証明書として使われているのだ。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

「えっと、生命循環と換金をお願いします」

「承りました。少々お待ちください」

と、受付嬢は画面を操作し、机の上に細長い棒状のモノを置いた。六角形のそれは金属製のようで、端のほうに『28』と書かれたタグがつけられている。

「こちらをどうぞ。場所は三階の28番になります」

システムブックを消し、金属棒を受け取る。ありがとう、と受付嬢にお礼を言うと、彼は踵を返して受付を後にした。

螺旋階段を上り三階に着くと、周りを見回して28の個室を探す。三階には等間隔に扉が並んでいた。扉には番号のプレートが打ちつけられていて、その下には六角形の穴が開いている。

ヘキサは目的の個室を見つけると、六角形の穴に金属棒を差し込んで回した。カチリ、と小さく音が鳴り、扉が自動で開く。

中に入るとまず、椅子に座る濃紺色の制服を纏った女性の姿が目に入った。彼女の前には丸いテーブルがあり、その上には透明な水晶球があった。

「いつらっしやーい。ほら、座って」

赤いショートヘアの女性はそう言うと、対面の椅子に座るようにヘキサを促した。さきほどの受付嬢とは違い、やたらフレンドリー

な職員だ。

促されて一歩足を踏み出すと、扉が勝手に閉まる。

同時に個室に組み込まれている付加魔法が発動した。透視と盗聴を遮り、探索者の個人情報流出を防ぐための結界である。

これでこの部屋は、外部からは完全に隔離されたことになる。

レベル、ステータスやスキルなどの情報は、プレイヤーにとっての生命線。その情報はときに生死にも直結しかねい。

それ故に決して情報が他人に知られないように、三階の個室すべてに結界が組み込まれているのだ。

「その……よろしく願います」

椅子に腰を下ろすと、小さく頭を下げる。

「ふふつ。そんなに緊張しなくても大丈夫だから」

未だに慣れていないのか。若干、緊張した様子のヘキサに、ショートヘアの女性はクスクスと笑いを洩らした。

「はい。それじゃあ、指輪を見せて」

言われて女性に左手の中指の指輪を見せた。彼女は彼の左手を掴むと、前のめりになって指輪を覗き込んだ。

鉛色の指輪には黒い石が嵌められている。よく見ると黒い石の内部に、なにやらキラキラとした輝きがあるのがわかる。

その輝きを見た女性は唇を尖らせた。

「うーん。成り立てにしては、そこそこ溜まってるわね。……君、しばらくここにきてなかったでしょう」

「うっ。……あの、はい。そうです」

ひんやりと女性の手の感触に、どもりながらもなんとか言葉を返す。

しばらく　といっても、三日くらいなのだが、確かに狩りで疲れて後回しにしていたのは事実である。

「もっつ。駄目よ。面倒でもちゃんと小まめに循環させないと。特に貴方みたいな初心者は、するしないが生死をわけるときだってあるんだからね」

「はい。すみませんでした」

ジト目で見られて素直に反省する。

「わかればよろしい。……じゃ、ちゃっちゃんとやって、終わらせちゃいましょうか」

言つて、片手をへキサの左手に添えたまま、もう片手を水晶球の上に乗せた女性は、集中するように目を閉じた。

へキサの身体に変化が生じたのはその直後だった。

左手の指輪を通して自分の身体に、”熱”が流れ込んでくるのが知覚できる。

指輪から流れ込んでくる”熱”は、身体の中を循環すると自身の血肉となり、黒髪の少年をより強靱な存在に変換する。

この世界のすべては生命子により構成され、あらゆるモノは生命子に還元される。プレイヤーの分身のアバターもまた、生命子による構成体である。

いまへキサが吸収した”熱”は、指輪に溜めた彼が倒したモンス

ターの生命子である。プレイヤーは倒したモンスターの生命子を吸収することで、自身の限界値を上げていくのだ。

彼らが生命子を『経験値』と呼ぶのはそのためである。そして、生命循環とは指輪に溜めた生命子を自身に転換して、吸収させる作業のことなのだ。

「ほい。終わりつと。……あ、レベルが2も上がってる」

生命循環を終えて、水晶球を一瞥した女性が言った。

仄かに光る水晶球には、ヘキサのアバター情報を映し出されている。そこに表示されているレベルが、7から9に上がっていた。

「おめでとつ。でも、これからはちゃんと溜めずにこようね」

再び忠告されてヘキサは、多少気まずそうに頬を掻いた。

ファンシーにおけるレベルとは一言で述べるならば、内在する生命子の量である。

ある一定基準の経験値　生命子を吸収することでレベルアップする仕組みになっていて、当然、高レベルになるほど次のレベルまでに要求される経験値が増えていく。

ヘキサはまだ初心者なのでレベルが上がり易いのだが、それでも一気に2も上がるということは、それだけ生命子を溜めていたということだ。

「……気をつけます」

「うん。そうしなさい。では、これ生命循環は終了ね。そうそう。ステータスポイントは忘れずに振っておくんだよ」

「わかりました。それじゃ、また」

またねー、と手をひらひらとさせる職員に礼を言い、ヘキサは部屋から退出した。

背後で閉まる扉を見やり、次いで首を巡らして辺りを見回した。周囲に人の姿がないのを確認すると、壁に背中を預けて再びシステムブックを取り出す。

”本”を捲り、アバター情報の頁を開くと、空中にウィンドを展開する。

画面にはプレイヤーの名前とレベル。各ステータスのパラメータ値が表示されている。

ステータスウィンドの情報から、10ポイントがステータスに割り振られずに残っていることがわかった。

ファンシーは、ネットゲームでは典型的なスキル制とレベル制の併用型で、レベルが上がると生命子の最大値が上昇し、それとは別にステータスポイントを得られる。

レベルアップにつき得られるポイントは5。プレイヤーはそのステータスポイントを、体力・筋力・敏捷・知力・精密のどれかに振り分けて自身を強化していくのだ。

黒髪の少年は幾ばくかの黙考の後に、3ポイントを筋力に割り、残りのポイントを敏捷に割り振った。

素早くポイントを振り分けると”本”を消し、今度は換金のために螺旋階段を目指して歩き出した。

換金所のある二階に着くと、三階と同じように等間隔に並ぶ扉が目に入った。二階には迷宮探索で手に入れたアイテムを鑑定・換金する施設が揃っている。

違うのは並ぶ扉とは別に、簡易的な換金を行なってくれるカウンターがあることだ。

レアアイテムや他の人に見られたくない取引の際には個室 三階と同様の仕組みが施されている を、換金さえできればいい場合は、このカウンターを利用するのである。

「換金お願いします」

両開き窓の中にはこれまた、整った容姿をした職員がいた。

ヘキサは職員の女性に挨拶すると、予めシステムブックから取り出していたカードをまとめて実体化させた。

小ぶりの爪と牙。それよりも大きな牙に斑色の毛皮。それと白いケースだ。ケースの中には濁った色をした小さな石のようなモノがたくさん入っていた。

魔石である。魔石とは生命子の結晶。内部に蓄える元素の混合率により、その性質を多様に変化させる。純度が高いほど輝きと透明度が増し、内包されている力も大きくなる。

倒したモンスターが消滅するとき、ときどきその場に残すドロップ品だ。爪や牙、毛皮もモンスターから入手した素材アイテムである。

女性は提示されたアイテムを回収すると、自分の横に表示させたウィンドで価格を算出する。

これらのアイテムは換金所だけではなく、プレイヤー同士での売買も可能である。

むしろ、換金所は相場の平均額で計算してしまうので、価値の高いアイテムはプレイヤーと売買したほうが高値で売れる場合が多い。

まあ、初心者であるヘキサはそんな価値のあるアイテムを持っているわけではないので、こうして換金所でまとめて売ってしまっているわけだが。

そんなわけでカウンターに置かれた銅貨を特に文句なく受け取る
と、いつものように礼を述べる。

これでマリーゴールドすべきことはすべてした。後は消耗品を
購入して、今日の狩りに出発するだけである。

よし、と自分に気合を入れて、ヘキサはマリーゴールドを後にし
た。

一章 箱庭世界（4）

千界迷宮1層『常世の森』は、その名前のとおり大半が鬱蒼と茂る森と見晴らしのいい草原の界層である。

探索者になりたての初心者をはじめに踏み入る界層のためか、攻撃的^{クティブ}のモンスターは少なめで、こちらから手を出さない限りは安全な非攻撃的^{ノンアクティブ}のモンスターが多く配置されている。

とはいっても、ホーンベアのような凶暴なモンスターもいるので、あくまでも他の界層に比べたら少ないくらいの認識のほうがいいだろう。

「……見つけた」

大きな樹から顔を覗かせて、様子を伺っていたヘキサが小さくつぶやいた。

彼の視線の先には、ずんぐりとした体を丸めて、鋭い爪で樹の根元を掘り返しているモンスターの姿があった。

額から角を生やした熊。ホーンベアである。

換金して得たりラでポジションなどの消耗品を買い揃えたヘキサは、当初の予定通りその足で千界迷宮の探索にきていた。

ヘキサの視界にいるホーンベアは一体のみ。視線を左右にやり、他のモンスターの気配がないかを確認かめ、彼は背中の大剣の柄を右

手で掴んだ。

昨日まではクルシスというモンスターの子供を主に狩っていたのだが、今日はリベンジの意味も含めて、ホーンベアの生息地でレベル上げをするつもりでいた。

角熊は地面を掻き分けるのに夢中で、まだこちらに気がついていないようだ。いまが先制のチャンスである。

黒髪の少年は深呼吸し　大剣を抜いて、樹の影から飛び出した。

「<衝波>ッ！」

方術、外力術式<衝波>。

上段から振り下ろした大剣から放たれた、赤い衝撃波が無防備なホーンベアの横っ面に命中した。

不意を突かれた角熊は、ギャウツ!? と甲高く叫ぶと大きく体勢を崩して、樹の幹にその巨体を打ちつけた。

巨木が揺れて、無数の木の葉が散る。

ホーンベアが体勢を立て直すより早く肉薄すると、間髪要れずに大剣を薙ぎ払う。肉厚の刃が角熊を切り裂き、傷口から流れる血が刀身を赤く濡らす。

肉を裂く金属の感触に悶え苦しみ、やたらめったらに爪を振り回すが、黒髪の少年にはカスリもしなかった。

右からの一撃を大剣の刀身で防ぎ、次の下からの掬い上げるような攻撃を、焦らずに軽い身振りでかわす。

こちらとて昨日のような疲労困憊ではないのだ。気合も十分。こんな大振りの攻撃に当たってやるわけにはいかない。

相手の行動を見て、的確に一撃を叩き込む。大剣による重い攻撃

を浴び、目に見えてホーンベアの動きが遅くなる。

誰の目から見ても息も絶え絶えで、口からは大量の唾液が流れ落ち、地面にボタボタと音を立てて垂れている。

「これでどうだっ！」

身体を駒のように回転させる。遠心力が加わり破壊力を増した一撃が、腕を振り上げた角熊の胴体に深々と食い込んだ。

だが、ホーンベアは倒れなかった。怒りに満ちる濁った瞳で黒髪の少年を見下ろし、最後の悪足掻きとばかりに腕を振り下ろした。

爪の軌跡の先には、ヘキサの頭部があった。まともに喰らえばただではすまない。下手をすれば致命傷になりかねない事態を前に、ヘキサは逆に一步前に踏み出した。

「あああああっ……！」

気合一閃。渾身の力で身体を捻り、ホーンベアの胴体に食い込んだ刀身を振り抜いた。

吹き上がる鮮血にホーンベアの断末魔が重なった。頭部を粉碎せんとする一撃は狙いを逸らし、ヘキサの頬に浅い爪跡を残すに留まり、角熊の巨体が地面に崩れ落ちる。

末端から光の粒子に変換されるモンスターの亡骸を見やり、ヘキサは詰めていた息をぷはあっと吐き出した。

最後の交差は危なかった。紙一重のタイミングで退けたが、一歩間違っていたらどうなっていたことか。やっぱり、まだまだのようだ。

しかし、それでも昨日に比べたら安定している。体調が万全とはいえ、最初の<衝波>以外に、方術なしでいけるとは思わなかった。

ホーンベアの動きを事前に把握できていたというのもあるが、やはりレベルアップによる基本性能の向上は大きいようだ。

こんなことならサボらずマリーゴールドに行けばよかったと反省する。

と、消滅したホーンベアのいたところに視線を落とし、ヘキサは目の色を変えた。そこには小さな魔石と白乳色の角が落ちていた。

角熊からのドロップアイテムである。

この世界のモンスターは消滅するとき、体内で凝縮させた生命子の塊　魔石と、稀に体の一部をアイテムとして残すことがある。

「やった。幸先がいいな」

ホーンベアの角は魔法薬の原材料であり、また比較的ドロップし辛いことから、そこそこの値で取引されていたはずだ。

これひとつでヘキサの三日分の稼ぎにはなるだろう。

思わぬ収穫に頬が緩む。

などと、油断したのがいけなかった。

ガサリと葉の擦れ合う音がした。背後の物音に振り返ったヘキサが見たモノは、こちらに向かって突進してくる二体のホーンベアだった。

どうやらいま倒したホーンベアの断末魔に引き寄せられたらしい。今度はこちらが奇襲される番だった。

角に串刺しにされなかったのは偶然に近かった。反射的に自分の身体の前に翳した刀身の腹が、奇跡的に一本角による突進を受け止めたのだ。

火花が飛び散り、金属同士がぶつかったような炸裂音が、森の中

に響いた。なんとか串刺しは避けたものの、突進による速度と体重差まではどうにもできなかった。

大きく後方に吹っ飛ばされ、背中から樹に叩きつけられた。肺の中の空気が吐き出され、口からかはつと声が漏れた。

衝撃で息が詰まり、身動きがとれない。しかも、最悪なことに堪えきれずに柄から手を放してしまった。

揺らぐ視界には、もう一体の角熊が突っ込んでくるのが映った。

四足で地面を蹴りながら突進してくるホーンベアの角が、ヘキサの胸を貫く。その刹那、彼は反射的に<息吹>を発動させた。

<息吹>による効果で、身体に力が戻る。

咄嗟に屈む。一瞬前までヘキサがいたところを角が通過し、樹の幹に根元まで突き刺さった。突き刺さった角が抜けないのか、ホーンベアがジタバタと暴れている。

そのまま地面に手をつき、前転の要領でホーンベアの懐から抜け出すと、跳躍して地面に転がった大剣に手を伸ばした。

ヘキサを跳ね飛ばしたほうの角熊がその動きに反応するが、<息吹>により身体能力が向上している彼のほうが早かった。

柄を掴むのと同時に剣を振り抜く。空気を震わせ発生した衝撃波が、傍まで近づいていたホーンベアに直撃した。

怯んだ隙を逃さず追撃の刀身を叩き込む。そこでようやく樹から角を抜いたホーンベアが、怒りの咆哮を上げてヘキサに襲い掛かった。

ヘキサは振られた腕の軌道を読むと、直前で身体を反転させた。唸りを上げる爪は黒髪先端を削り、彼の背後にいた角熊の顔面を切り裂いた。

同士討ちするモンスターから距離を取り大剣を構える。

いける。方術を駆使して戦えば、複数を相手にしても引けをとらない。ホーンベア二体を同時に相手しながら、ヘキサは内心でそう判断した。

方術は生命子を対価として発動する技であり、魔法と並ぶ重要な戦闘技能だ。

一般的なRPGに例えるならば、魔法はMPを消費して使用するのに対して、方術はHPを消費して使用する術式である。

身体能力や感覚機能の強化する内力術式と生命子を物理的な波動に変換して放出する外力術式の二種類に大別される。

魔力を待たないが故に、魔法がまったく使えないヘキサにとって、方術は迷宮探索するうえでの生命線だといってもいい。

現在ヘキサが使用可能な方術は、〈衝波〉と〈息吹〉のふたつ。生命子を衝撃波として放出する〈衝波〉と、生命子を活性化させ身体能力を強化する〈息吹〉は、外力系と内力系それぞれの方術の最も基本的な技である。

魔法と方術。互いに一長一短であり、どちらが優れているというのではない。ようはそのときの環境と状況次第ということだ。

しいて挙げるならば、方術は前衛が、魔法は後衛が好んで使用するといったところか。中にはヘキサのように選択する余地のないプレイヤーもいるが。

角熊の咆哮が森に響く。大剣による攻撃で絶命した二体のモンスターが、生命子の光に変換される。その場には魔石と牙がドロップされている。

「ふう。これならまだまだいけるな」

<息吹>による活性化の余韻に身を引き締め、大剣を背中の鞘に戻すへキサ。

飲み干したポーションの空き瓶を放り捨てると、ドロップした魔石と牙を回収し、へキサは次の獲物を求めて森を徘徊した。

一章 箱庭世界(5)

またねー、とお決まりの台詞に見送られて、マリーゴールドの三階の個室から出てきたヘキサは、はあっと大仰にため息を吐いた。

「……レベル、上がらなかったなあ」

ホーンベアを狩りはじめてから早くも三日が経過していた。あの日以来、毎日マメにマリーゴールドに通っているが、以前レベルは9のままだった。

今日こそは10になれるのでは、と期待していたのだが、そうそう甘くはないらしい。

「これよりマシな指輪に交換できれば、もうちょい効率が上がると思っただけだな」

左手の指輪を眺めながらつぶやく。

ファンシーで採用されているレベルアップのシステム。他存在の生命子を吸収して自己を強化する生命循環。

例えるならばそれは、まったく型の合わない血液を輸血されるようなモノだ。しかも、同じ人ではなくて、種からして異なる異形の血を。

それがどれだけ無謀なことかは語るまでもない。

だが、それでも可能にしようとするならば、それ相応の準備と道具が必要になる。

そして、それが指輪であり生命循環の儀式なのだが実はシステム上、回避不可能な問題がある。非常に効率が悪いのだ。

何故ならば、倒したモンスターの生命子を全部指輪に吸収できるわけではないからである。吸収の際には必ず損失が発生し、さらに生命循環で指輪から体内に取り込むときにも、吸収漏れが生まれる。つまり二重の意味で経験値の損失が生まれてしまうのである。

ただ、根本的な問題解決はないが対策がないわけではない。生命子吸収の要である指輪の質を高めることで、ある程度損失と漏れを防ぐことができるのだ。

ちなみにヘキサがつけている指輪は、初心者に配られる大量生産品。指輪の性能は最低ランクであり、おそらく五割は経験値を損している。

実質獲得する経験値が強制的に半分になるという、笑うに笑えない自体になっているのである。誰もが通る道とはいえ、なんだったこんなシステムにしたのか、もの凄く理解に苦しむ思いだった。

「指輪を買い換える　　っていつても、そんなお金なんてないし」

指輪の買い替えはマリーゴールドでできるが、そのための資金が不足している。

宿屋の宿泊費に消耗品の補充。装備のメンテナンス代も馬鹿にならない。

角熊を狩り対象にするようになって、ようやく一日で稼いだリラの幾ばくかを、装備を整えるための資金に回せるようになったが、それでも全然足りていないのが現状だ。

装備すらままならないのに、高価な指輪を買うなど夢のまた夢だった。

これは本格的に資金繰りをしないとマズいかもしれない。

「うーん。そうだな……クエストでも覗いてみるか」

今日も角熊狩りのつもりだったが、急遽予定を変更することにした。

螺旋階段を下り一階に向かう。

普段なら階段の正面にある玄関からでていくところだが、ヘキサは玄関に背中を向けると、そのまま奥のエリアに足を運んだ。

奥のエリアは仕切りで区切られたブースになっていた。彼は空いているブースに入ると、目の前にある半透明のウィンドに触れた。

灰色だったウィンドが瞬き、画面が切り替わった。

クエストの受注画面である。

基本的にクエストの類はマリーゴールドで請け負うことになる。

中にはマリーゴールドを仲介しない特別なクエストもあるが、一般的にクエストといえばここで受注できるモノを指す。

いわゆるおつかいからアイテム収集、討伐クエストまで幅広いクエストが、レベル別や人数などによってソートできるようになっている。

ヘキサは画面を操作しながら、どのクエストを選ぶか頭を悩ませる。

理想は条件を達しやすく、報酬がいいことだ。繰り返してできるタイプのクエストだと尚のことよい。が、そんなプレイヤーに有利なクエストが早々あるわけがない。

似たり寄つたりのクエストが多くある中、少しでもいい条件の依頼を見つけようと目を皿のようにするヘキサ。

と、右隣のブースからなにやら楽しげな声が聞こえてきた。

仕切りで相手の顔は見えないが、どうやら男女の二人組みのようだ。あーでもない、こーでもない、と笑い混じりの会話に彼は苦い表情をした。

箱庭世界にきてもうすぐ三週間になるうとしてているが、彼がプレイヤーと話をしたのは片手で数えるくらいしかなかった。

内向的な人間にありがちな口下手と人見知りのせいで、こちらからは話しかけられず、あちらから話しかけられても、反射的にその場から離れてしまうのである。

それでも普段、やっているネットゲームならそんなことはないのだが、ここまでリアルだと現実で会話するのと同じようなもので、どうしても尻込みしてしまうわけだ。

おかげでいまもプレイヤーの知り合いは一人もいないという、かなり悲惨なことになっていたりするのだが。

ヘキサがソロなのはそう望んだからではなく、他に選択肢がない故のソロなのである。なんの自慢にもならないし、落ち込むだけなのであまり考えないようにはしてるけれども。

くそつ。【対話】なんてスキルがあれば、真っ先に取るのに。

隣の談笑に内心で毒づくヘキサ。

ないモノ強請りのつまらない嫉妬だとわかってはいるが、こうして充実した迷宮生活を送っている人物に遭遇すると、どうしてもやるせない気持ちになるのだ。

これ以上ここに居続けるのは精神的によくないと判断したヘキサは、画面を切り替えながら手頃そうなクエストを探した。

「ん？ これなんてどうだろう」

。画面に表示されているクエスト名称は、『クルシスの巣駆除依頼』名称にもあるようにクルシスの巣を壊すのが目的のようだ。ソロでの推奨レベルは10と満たしてはいないが、クルシスはいままで狩ってきた 正確には子供だが、ので、特に問題ないだろう。報酬も悪くない。

「決めた。これにしよう」

なによりもこの場を離れたかったヘキサは、受諾ボタンをタッチすると、そそくさと離脱を図った。

「ねえねえ。コレなんてどう？」

「んん？ どれどれ……ああ、これかあ」

画面を覗き込む少女が指差すクエストに、仲間の少年は苦い表情をした。そんな彼の様子に少女は小首を傾げて言った。

「どうしたのよ。なんか問題あるの？」

「あるといえはあるし、ないといえはない」

「はあ？ 意味わかんないんですけど」

「クエストには問題ないよ。討伐対象のモンスターいる場所が問題なんだ」

一種の畏クエストというべきか。クエスト自体は難易度が低く報酬もいいのだが、異なる要因によって危険度が高くなってしまっ

いるのだ。

「ここにはジエムってモンスターが徘徊していて、僕たちみたいな初心者にはかなり厄介だってギルドの人が言ってたんだ」

個体数が少なく遭遇する可能性は低いけど、万が一出くわす羽目になつたら、彼らのような初心者ではどうにもならない。

少年のように情報源のあるプレイヤーならともなく、開始間もなく手探り状態のプレイヤーがこのクエストを選び、運悪くジエムに遭遇するケースが後を立たないそうだ。

毎年、二桁の単位でジエムに殺される初心者があるようなのである。

「こわっ。なんでそんなクエスト仕込んでんのよ」

「だよなー。誰かの悪意を感じるよな」

「わたし、やーめった。別のクエストにしよう」

「それがいいよ。わざわざ自分から危険に飛び込む必要はないからね」

二人は互いにそう言い合うと、『クルシスの巣駆除依頼』と表示されたクエストを画面から消し、別のクエストを探し始めた。

一章 箱庭世界(6)

ひとつの界層はいくつかの要素によって構成されている。

拠点となる『都市』。次の界層に繋がる『回廊』。界層の特色を反映した『フィールド』。フィールドに点在する『ダンジョン』である。

あとはそこに界層固有の要素が追加されたりもするが、基本的に階層はこれらの要素によって成り立っているのだ。

ヘキサが狩りをしているのはフィールド。回廊やダンジョンにはまだ行ったことがない。危険度が上がるからだ。

なにせ死んだら終わりなのだ。ましてこっちはソロで行動している。慎重になり過ぎて損はないだろう。

まあ、マリーゴルドの職員が言うには、10レベルになったら回廊に行く頃合いらしいので、レベルが上がったら一度どんなところか覗いてみようかとは思っている。

などと思案していると、いつの間にか目的地のすぐ傍まで来ていた。

ヘキサの右横には彼の動きに追随するウインドが表示されている。1界層のフィールドマップである。

マップは表示モードの切り替えも可能で、拡大と縮小ができ、メモやマーカールの書き込み、クエストの場所をアイコンで知らせてくれるなど便利な機能が搭載されている優れモノだ。

1界層のフィールドマップはマリーゴールドが無償で提供してくれるが、次の界層からは自分の足で調べるか、情報屋で購入もしくはプレイヤー間で交換する必要がある。

目的地は草原だった。地面には複数の穴が開いている。これがクルシスの巣である。巣にはクルシスの子供と親がいて、これを殲滅した後で、巣を破壊すればクエストクリアだ。

全部破壊する必要はない。ひとつだけでいい。時間と余裕があれば片っ端に壊してもいいが、どうせしばらくしたらリポップするの
であり意味はない。

ヘキサは草原を見回して、他の巣から離れた場所に開いた穴を見つけると、マップ表示を消して大剣を抜いた。

クルシスの外形は巨大化した兎そのモノで、攻撃方法も単調でホーンベアに慣れたいまとなつては実に張り合いがなかった。

親は子供とは違い多少強化されているようだが、それでも許容の範囲内だった。さくさくと兎のモンスターを狩り、特にこれといったハプニングもなく巣を破壊すると、これからどうしたモノかと思案する。

他の巣も壊してもいいが、それで報酬が上がるわけではない。経験的に考えても、この場に留まっている理由はなかった。

「……ホーンベアのトコに行こうか」

そう決めたヘキサだったが、この思考時間が彼の命運をわけることになった。

「ン、なんだ？」

背後から聞こえた音に振り返る。

どこまでも広がる草原に、気のせいか、と小首を傾げ、突如として草を掻き分けて現れたモンスターに、ヘキサは咄嗟に大剣を構えて警戒態勢をとった。

が、その警戒心もすぐに緩んだ。拍子抜けしたような表情をするヘキサの前には、ふるふると震える軟体状の不定形モンスター。

半透明の軟体の中心には白い球体が浮かんでいる。不定形モンスターは地面をゆっくりと移動しながら、ヘキサのほうへと近づいてくる。

徐々に接近するモンスターに、しかしヘキサは気の抜けた声でつぶやいた。

「なんだ。スライムか」

緊張して損した。

初めて遭遇するタイプのモンスターだが、スライムといえれば古今東西あらゆる漫画において雑魚の代名詞。戦闘にも慣れたいま、負ける要素などなかった。

どうせならもう少し、歯応えのあるモンスターと戦いたかった。さっさと倒して先に行こう、と目前まで迫ったスライムに剣を振り上げた。

大上段からの一撃に、不定形モンスターは驚くほど呆気なく両断され、光を撒き散らして消滅しなかった。

「、え？」

次の瞬間、ヘキサが目撃したのは、弾力のある軟体に弾かれる大剣と、自身の左肩を貫通する鋭い針状の物体だった。

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。

攻撃が弾かれたと認識した瞬間、細長い針が肩を貫いていた。見ればスライムの軟体の一部分が伸びて、細長い針のような形状に変化している。

いままで体感したことのない激痛に、口から引き攣った声が漏れた。

ふらりと身体が揺らぐ。蹈鞴を踏んだ拍子に肩から針が抜けて、真っ赤な血が傷口から噴出した。

反射的に右手で肩を押さえるが、手の平から零れ落ちる血が皮の鎧を赤く染めた。しかもスライムの持つ能力なのか、傷口が酸を浴びたかのように焼け爛れている。

半身を濡らす鮮血。ぜいぜいと犬のように舌を出して荒い息を吐き、全身にはびっしょりと嫌な汗をかいていた。

痛い。痛い。痛い。

白熱した頭にはそれしか浮かばなかった。自分が置かれた現状も、目の前のモンスターのことも、痛みの衝撃で吹っ飛んだ。

ああ、そうか。

これが”はじめて”だった。

傷を負うことはあった。しかし、精々それは切り傷の類であり、ここまでの激痛を伴う負傷はこれがはじめてなのだ。

もはや戦闘どころではない。ここには駄目だ。早く逃げなければ一方的になぶり殺しにされてしまう。

じりじりとゆっくり距離を詰めてくるスライムが、いまのヘキサには途方もない怪物に見えてしかたがなかった。

喉の奥から声が零れる。ヘキサはその場に大剣を放り捨てると、雑魚と嘲笑ったスライムに背を向けて、脱兎の如く駆け出した。

幸いにもスライムの動きは遅い。全力で走れば逃げ切れるはずだ。沸騰した頭で下したにしては、正しい判断だった。

敵が一匹だけだったのならば。

涙で歪む視界の端になにかが映った。そう認識したときにはすでに手遅れだった。

いつのまにか死角から迫っていた別のスライムが、軟体を鋭い針状に変化させて襲ってきたのだ。

右足を貫く半透明の針。右足を発せられる熱と痛みにも、ヘキサは顔から地面に転倒した。顔面を地面に強打し、鼻から鮮血が滴った。足をやられてもう走ることができない。絶望が全身を支配する。

この世界にきてまだ一ヶ月と経っていないというのに。ここで終わってしまうのか。

脳裏をナビゲーターの言葉が過ぎる。

ファンシーにはセーブもリセットもない。死んでしまえばそれで終わり。箱庭世界から永久に退場させられてしまう。

血を流しすぎたからか。意識が朦朧とする。薄暗く明滅する視界には、こちらに近づく複数のスライム。さらに数は増えていた。見える範囲だけでも五匹はいる。

もう駄目だ。そう覚悟した刹那だった。横から直進してきた青い衝撃波が、その五匹のスライムをまとめて薙ぎ払った。

燐光を残して消滅するスライム。呼吸一回の間に、すべては終わっていた。二度・三度と青い閃光が瞬き、ヘキサの背後にいたスライムも一掃される。

目まぐるしい展開の変化についていけない。なにが起きたのかわからないヘキサは、最後の力で身体を捻ると背後を振り返り。そ

して見た。

力強い後ろ姿だった。まるで存在感が違う。真っ白な髪に白いレザーコート。黒い襟飾りが風にはためている。

それはまるで。

そこで限界だった。意識が落ちる。目蓋が勝手に閉じ、ヘキサは深い暗闇に転がり落ちるように気を失った。

.....。

.....。

.....。

「ん、ん」

目を覚ますと青い空が視界に飛び込んできた。心地よい風が吹き抜けた。青空をゆつくりと流れる白い雲をぼんやりと眺める。

天気がよく陽光は温かい。こんな日に昼寝でもしたら気持ちいいんだろうなあ、と寝惚け眼で考え、スライムに殺されかけた記憶を思い出し、一瞬で意識が覚醒した。

背筋に氷柱を突き刺されるような感覚を覚えつつ、横たわっていた上半身を跳ね起こす。違和感にはすぐに気がついた。

「あれ……傷が……」

ない。貫かれたはずの左肩と右足。痛みはなく傷跡もなかった。ただ穴の開いた衣服。それに血で黒ずんだ皮の鎧が、夢ではなかったことを物語っていた。

なんだ、これ？ と頭の中がハテナで埋め尽くされたときである。傍で足音が聞こえて、頭上から声が降ってきた。

「お。ようやく目が覚めたか」

反射的に伏せていた顔を上げると、青い双眸と目が合った。

白髪に白装束。首元には黒い首飾り。左腕には小型の盾。腰の後ろに剣が収まった鞘が吊るされている。

そのいでたちに束の間、気を失う直前に見た後ろ姿が重なった。

「ほら。これお前のだろう？」

「う、うん。ありがと」

手渡されたのは投げ捨てた大剣だった。どうやらわざわざ拾ってきてくれたらしい。軽く頭を下げて、大剣を背中の鞘に戻す。

「しかし、見事にやられたモンだな。俺が通りがからなかったら死んでたぞ」

そのとおりだった。白髪の少年に助けられなかったら、確実に死んでいた。

「ひよつとして傷も？」

「まあな。……つつても、口にポーション突っ込んだただけだけど。

ああ。気にしなくていいぞ。どうせ余りモンだ。ポーチの中で腐らせるくらいなら、人助けに使ったほうがよっぽどマシだろ」

言つて、彼は笑つた。

対してヘキサはまた俯くと唇を噛みしめた。情けない。まさかスライム相手に死にそうになるとは。これでは先が思いやられる。

「そう落ち込むなつて。ジェムはこの階層では最強の部類に入る。初心者がソロで勝てる相手じゃない。伊達に『初心者殺し』なんて呼ばれてないつてことだ」

ジェム。それがあのスライムの名前らしい。というか、いまなにやら聞き捨てならない言葉が聞こえたのだが。

「初心者殺し？ スライムが……？」

「なんだ知らないのか？」

白髪の少年曰く。

スライム ジェム種は軟体状のモンスターで、身体のどこかにある核を破壊しない限り、何度でも復活する特性を持っているらしい。半透明の軟体に浮いていた白い玉がそれである。

一階層に出現するジェムの攻撃方法は軟体を鋭く尖らせる、もしくは体当たりだけと単純な物理攻撃だけなのだが、実はここに思わぬ落とし穴があったのだ。

単純は単純でも軟体から繰り出される攻撃は出が読み難く、対処が辛かつたのである。

これが動物や人型なら攻撃の予備動作を見てから対処も可能なのだが、人型とゲル状の軟体とはかつてが違い過ぎた。

考えてみれば当然だ。よほどの事情がない限り、プレイヤーの大半は現代の一般市民。ましてやそのときは、ペーパーの初心者である。

初心者にそこまで求めるのは酷というものだ。

さらにジエムの弾力のある軟体は強酸性であり、斬撃による攻撃に強く、魔法耐性も持ち合わせているため、初歩魔法では有効打になり得ない。

楽勝だろうという根拠のない考えのもと、ふるふる震えるジエムに突撃した結果、ヘキサのように返り討ちに合うプレイヤーが続出

結果、いつしかジエムは初心者殺しなどという、ちょっと洒落にならない呼び方をされるようになったわけである。

長年のゲームの影響で、スライムは雑魚という印象が、脳に焼き付いてしまっているのも大きかもしれない。

「不運でいえば不運だったな。この界層でジエムが出てくるのはこの辺りだけ。しかも個体数も少ないってのに、よくあんな大群に出くわしたな」

運がいいんだか悪いんだか、と肩を竦めて嘆息する。

「そうなんだ。知らなかった」

「誰も教えてくれなかったのか？」

何気ない発言に言葉の刃が心臓を貫いた。

どんよりとした空気を背負い、はははと乾いた笑みを浮かべる。

「……知り合いなんていないからね」

そもそもここにきたのだって、半分はそれが原因なのだ。

「あーそう、か」

地雷を踏んだと悟ったのか。白髪の少年は気まずそうに頬を掻いた。

「ところでこれからどうするつもりだ？」

「どうするって、なにを？」

質問の意図が見えず訊きかえす。

「ファンシーだよ。あんな痛い思いをしてもまだ続けるのか？」

その言葉にヘキサは無意識のうちに左肩を押さえる。痛みも傷跡もないが、残滓のようにこびりつく不快感に顔を歪める。

正直に言えば痛い思いをするのは嫌だ。もし、このまま探索を続けていけば、もっと酷い重症を負う危険も十分にあり得た。

しかし、

「続ける」

真っ直ぐ白髪の少年を見上げてヘキサは言った。

「僕は止めない。このままやられっぱなしなんて嫌だ。こっぴど見えても僕は負けず嫌いなんだ」

「まあ……それもアリ、か」

ぼそりとつぶやき、白髪の少年はなにか考え事をするように頭上を仰ぐ。そして、こちらを見やるヘキサに言った。

「だったら俺が鍛えてやるっか？」

思いがけない言葉だった。きょとんと目を点にしていると、口の端を曲げる白髪の少年と目が合った。

「ここで会ったのもなにかの縁だ。俺でよければ戦い方教えてやるよ」

「本当にいいの？」

「せっかく助けてやったのに、あっさり死なれちゃ後味が悪いからな。基本的な知識は一通り叩き込んでやるさ」

なんだろう。なにかトントン拍子に話が進みすぎている気もするが、ここで断る選択肢はヘキサにはなかった。

なにしろ一度死に掛けているのだ。白髪の少年の申し出を謹んで受け入れる。それに個人的にも彼ともつと話がしたかった。

「決まりだな。しばらくの間よろしくな。と。そういや、まだ名乗ってなかったっけ。俺はデュラン。デュラン、だ。お前は……？」

「僕はヘキサ。よろしく。デュラン……さん」

「呼び捨てでいい。俺もそうするから」

わかった、そうすると頷く。

確かに黒髪の少年の命運は、この出逢いにより大きく変わることになる。それがいかなる結果をもたらすのか。

二人はまだ知らない。

知る術を持ち合わせていなかった。

一章 箱庭世界（6）（後書き）

どうも、祐樹です。

はじめまして。お久しぶりです。

色々あって無茶苦茶間が開いてしまいました。が僕は元気です。これからは更新も復活するはず。です。詳しくはそのうち近状報告にでも書きます。

それとよければ感想ください。

本人のテンションと更新速度が上がるかもしれません。

正直、手探り状態で方向性を決めかねている部分があるので、意見をもらえると割りと本気で喜びます。

では、また二章でお会いしましょう。

ちなみに、二章はヘキサとデュランの二人旅です。

……ヒロインなんて必要なかったんだ。

二章 正しい迷宮攻略のススメ(1)

目を開くと見知らぬ天井　ではなく、借りている宿部屋の木製の天井が見えた。

いくら借り部屋とはいえ住みはじめて三週間近く経つ。それだけ暮らしていれば、それなりに愛着が湧いてくるというものだ。

当初よりも雑貨品の増えた室内を見回し、ヘキサは大きく欠伸をして伸びをした。

昨日、白髪の少年との出逢いの後、ヘキサは狩りを切り上げて彼と共にドウナ・ファムに帰還した。デュランはすでに別の宿屋に宿泊していたらしく、ここにはいない。

ヘキサはベットから飛び起き、寝間着を脱ぎ捨てると、木張りの床に視線を落とした。

床には布がひいてあり、その上に皮の防具が置いてあった。皮の防具は左肩の部分に穴が開き、こびりついた血で黒く変色している。

変色は鎧の左半分に及び、その範囲の広さが、いかに重症だったかを物語っているようである。知らずヘキサは身を震わせ、買っておいた洋服に着替えた。

手早く着替えると、壁に立て掛けてある大剣に触れ、小さく「シール」と言葉を発する。瞬くような光が失せると、指先から硬質が感触が消え、代わりに紙のような滑らかな手触りを感じた。

実体化を解きカードに変えた大剣を懐にしまい、ふと彼は床に放置してある鎧に近づくと、大剣のときと同じように触れて口を開いた。

「シール」

合言葉に反応して、皮の鎧はカードに　ならなかった。さっきまでと変わらない鎧にヘキサは、やっぱり駄目かという風に肩を落とす。

皮の鎧がカード化しない理由は明白だった。

この皮の鎧が防具としては死んでいる。使い物にならないからである。

ファンシーのアイテムの大半はカード化できるが、モノによってはカード化できないモノもあるのだ。武器でいえば損傷の激しいモノや壊れているモノは、『基本的』にカード化できないとされている。

防具修理の専門家に頼めば修繕することも可能であるが、このランクの防具なら買い換えたほうが早いし、なにより安上がりだ。

そんなわけで今日は、デュランと一緒に露天を巡る予定だった。いまの時期は初心者を対象とした、掘り出し物が多くあるらしい。と、そのとき部屋のドアが軽くノックされて、これから色々世話になるであろう少年の声が聞こえてきた。

「おい。起きてるかー？」

「起きてるよ。いま鍵、開けるから」

ドアを開けると、そこには白髪の少年がいた。彼はヘキサを見るとニカッと笑い、片手を上げてみせた。

「おつす。迎えにきてやったぞ」

「おはよ。僕も準備ができたトコだから、早く行こう　ぐえ」

「まあまあ、そう慌てんなって」

そのまま宿屋を後にしようとして、部屋の外で待機していたデュランに首の後ろを掴まれて前につんのめった。

「その前にやることがあるだろうが」

「げほっ……やることってなにさ」

咳き込みながら言葉を返す。

すると白髪の少年は大げさにため息を吐き、へキサのほうを指差した。

「お前だよ、お前。どこまで把握してるのか知らんと、今後の予定が立てられないだろ。それにどうせ装備揃えるなら、他にも買うもんはまとめて買ったまおうぜ。……そうだな。へキサ、ちよつと”本”を見せてくれ」

わかったと頷き、中空からシステムブックを取り出す。

システムブックの情報はプレイヤーの生命線であり、本来なら秘匿すべき情報のだが、初心者へのキサは他人に見せて不利になる情報などないから、あっさりと”本”をデュランに手渡した。

「どれどれ……うわあ。これは酷いな」

”本”を開き、中空に展開された半透明のウインドの内容に、デュランは顔をしかめると呆れたような眼差しでへキサを見やる。

「そんなに酷い？」

「酷い。てか、全然駄目。スキルスロットに【両手大剣】と【方術】しかセツトされてないって、いったいなんの冗談だ？ しかも【方術】はく衝波>とく息吹>しか習得されてないし。……マジで初期設定のままなんだな」

システムブックに一通り目を走らせ、ヘキサの現在の状況にデュランは嘆息した。

「んー？ なんだお前、固有アビリティ持ってんだな。『戦歌の鼓動』。初期のアビリティにしては当たりじゃないか」

「え？ 『戦歌の鼓動』……？ なに、それ。僕は知らないよ」

ステータス画面を見ながら言うデュランだったが、当の本人はなんのことだかわからないと首を傾げた。

白髪の少年の後ろに回り込むと、肩越しに彼が指差す箇所を読む。

「ホントだ」

確かにそこには『戦歌の鼓動』と記されている。

常時発動型のアビリティで、効果はレベルの上昇に比例して戦闘時に、基本性能に補正が加わるというものだ。

デュランの言うとおり中々いいアビリティだが、一体いつの間に増えたのだろう。少なくとも昨日、マリーゴールドでステータスを確認したときは空欄だったはずである。

「なんだ。知らなかったのか？」

「全然。いまはじめて見た」

「ってことは、昨日死にかけて発現したアビリティだな、これは」

死にかけた？ それはスライムモドキに殺されかけたときのことか。

「流石にアビリティのことは知ってるよな」

「うん。プレイヤーの特殊能力だよな」

ああ、と頷くデュラン。

アビリティはスキルではなく、プレイヤーに由来する固有の能力である。

スキルとは違い、必ず持っているわけでもなければ、自由に選択することもできないが、中には非常に強力なアビリティも存在しているらしい。

ヘキサはこれをアバターの作成時 先天的なモノだと思っていたのが、そうでもないようである。

「勘違いしてるみたいだけど、アビリティは偶発的に発現する場合もあるんだよ。俺もそうだったしな」

彼が言うには、アビリティには先天的なモノと後天的なモノがあり、後者の場合は精神に強い刺激や衝撃を受けたときに発現することが多いとのことだ。

「ああ、なるほどね」

確かにそれなら納得がいく。

死にかけたショックで力が覚醒する。お約束といえばお約束だが、思わぬ収穫であるのには変わらなかつた。

「しかし、本当になにも知らないんだな。……さてはお前、マリ

「ゴールドの講座途中でボイコットしたな」

「……はい、そうです」

半目になるデュランに、ヘキサは目を逸らして肯定した。

実ははじめてマリーゴールドを訪れた際、初心者のための講習が行なわれたのである。

諸々の施設やシステムブックの使い方。迷宮の探索方法。モンスターの戦い方に基本的な注意事項などを親切に教えてくれていたのだが、逸る気持ちを抑えきれず本当に初歩的なことの説明を受けた段階で、マリーゴールドを飛び出してしまったのだ。

ヘキサの知識が中途半端なのはそのためである。

「いや、ほら、僕、実戦派だから。ゲームもマニュアル読まずにはじめるタイプだし。だから……その、イけるかなーって思ったんだけど」

「そう上手くはいかなかったと」

後悔したときにはすでに遅かった。

一応、その後マリーゴールドの職員に質問したりもしたのだが、それも完璧ではなく今回のようにとところどころ抜けがあるわけである。

「いるんだよなー。毎年必ず、それで墓穴掘る奴が」

よくこんなんでもソロしてたな、とジト目が暗に語っているように、ヘキサは気まずそうに視線を横にズラした。

「これは本当に一から教えないと駄目だな」

「……よろしく願いします」

やれやれと肩を竦める白髪の少年に、へキサはそう言いつと深々と頭を下げた。

二章 正しい迷宮攻略のススメ(2)

陽光が降り注ぐ原っぱに穏やかな風が吹き抜けた。

見晴らしのいい草原には人影がふたつ。ヘキサとデュランである。

「よし。はじめろぞ」

周囲に他のプレイヤーやモンスターがいないを確認して、デュランは目の前に立つ黒髪の少年にそう言った。

「うん。よろしく」

頷くヘキサが纏っているのは、鋳で補強された革鎧だ。いままで装備していた皮の鎧とは見た目からして頑丈そうだった。

背中に鞘に収まっている大剣も、初期支給品だったブロードソードからアイアンソードに買い換え　ブロードソードは売ってもただ同然のため、記念品として手元に残しておくことにした　　ている。

どちらも固有名のない量産品ながら、鍛冶師の手による製造品で、NPCの販売品よりも性能値が高くなっている。

さらに指輪もワンランク上のモノに変更していた。これは知らなかったのだが、指輪には装備同様にレベル制限があったようである。

クルシスからの経験値とジェムからの経験値で、次の指輪を装備できる10になったのは、結果だけ見れば運がよかったといえるだろう。

これらの装備は、当然へキサの懐事情で購入できる代物ではなく、すべてデュランから買ってもらったモノである。

買ってもらったというのが実に情けないが、デュランの『装備品はケチるな』の一言で購入することになったのだ。

彼は出世払いで返してくればいいよ、と半ば冗談混じりで笑っていたが、できるだけ早く返そうと密かにへキサは決意していた。

「まずはへキサのいまの実力を見せてもらおうか」

「どうやって？」

手頃なモンスターとでも戦うのかな、と思っていただけに、デュランの次の言葉はへキサにとって意外なものだった。

「うーん、そうだな……じゃあ、俺が相手になってやるよ」

え？ と目を瞬かせるへキサを一瞥すると、デュランは黒髪の少年から距離をとった。両腕を地面に垂れ下げたまま不敵に笑った。

「ってなわけで、勝負だ。かかってこいよ、へキサ」

「……いや、そう言われても」

やる気満々の白髪の少年とは反対に、へキサは眉根を寄せて困ったような表情をした。そして、背中の大剣を指差しながら言った。

「勝負ってこれを使って……だよね？」

「？ 当たり前だろ」

「そっか。そうだよな」

「なにか問題でもある　　ああ、そういうことか」

戸惑ってこちらを見やる彼にデュランを小首を傾げたが、すぐに合点がいった様子でがしがしと白髪を掻いた。

「一応訊いておくけど、モンスター以外に剣を向けたことはあるか？」

無言で首を横に振るへキサ。

つまりはそういうことだ。モンスターとは戦えても、同じプレイヤー同士では戦えない。ましてや互いが使用するのは、玩具ではない。真正正銘の武器。凶器である。

それをなんの躊躇いもなく人に振るえるほどの度胸など彼にはなかった。

この箱庭世界には現実と同じように五感がある。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚　そして、もちろん痛覚もだ。

パソコンのモニター越しとは、まるで違う現実感。

この現実と同様の圧倒的な現実味こそが、良くも悪くもファンシの最大の魅力と言っても過言ではない。

デュランが自分よりも遥かに格上のプレイヤーだというのは承知している。それでも武器を向けるのには強い抵抗を感じた。

相手が強い弱いは関係なかった。行為そのものに拒否反応が生まれているのだ。

「まあ、気持ちはわからないでもないけど。だったらなおのこと、いまのうちに慣れておいたほうがいいぞ。『荒城派』の連中と鉢合わせたときのためにもな」

でも、と渋るヘキサにデュランが続けて言った。

「それにいまのお前じゃ、俺にはかすり傷すらつけられないと思うぞ。だから心配するなつて」

それは彼なりの気づかひだったのだろう。

別にヘキサに対して含みがあるわけでも小馬鹿にしているわけでもない。彼もそれはわかっている。

だが、そう言い切られてしまうと、それはそれでなんだが面白くなかった。

「……やってみなくちゃわからないよ」

「いやいや。流石に素人相手に傷つけられるほど鈍くはないさ」

むっとした顔になるヘキサにデュランは口の端を歪めると、食いついたとばかりにワザと挑発するように言った。

「よし。じゃあ、ごうしよう。俺をこの場所から一步でも動かしたら、お前の勝ちでいいぜ。買ったならご褒美をやるよ」

その言葉にヘキサは無言で大剣を構えた。そこまで言われたら退くに退けない。せめてぎゃふんと言わせてやらないと気がすまなかった。

「デュランは剣を抜かないの？」

「ハンデだよ。ハンデ。俺は素手でいい」

流石にカチンときたのか、ヘキサは「わかった」と吐息を吐き、

「 <衝波っ！>」

剣を横に振り抜いた。

刀身から放たれた赤い衝撃波が、デュランに牙を？いて襲いかかる。開始の合図もなく、不意打ち気味の一撃を前にしかし、彼は顔色ひとつ変えずにつぶやいた。

「甘いな」

まるで小蠅でも払うような仕草で軽く手を振るい直後、唸りを上げる衝撃波がパン！と呆気なく弾け散った。

「……はあ？」

これでケリはつくとは思っていなかったが、こんな対処をされるとも思っていなかったへキサは目を丸くした。

<衝波>を素手で弾く。しかもへキサが見る限りデュランは方術を使っていない。素の状態でそれをやってのけたのだ。

「これで終わりか？」

「！ まだまだこれからだっ。 <息吹>ッ」

気を引き締めなおす。

<息吹>で身体能力を強化すると駆けだす。さらにもう一度<衝波>を放つと、その影に隠れるようにして前進する。

結果は変わらない。赤い衝撃波はあっさりと弾かれる。だが、そこにいたはずの黒髪の少年の姿はどこにもなかった。

「これならどうだ！」

横手から耳朵を打つ声。

<衝波>が打ち消されるのと同時に、デュランの横に跳躍したヘキサは、着地した足を軸にして大剣を振り下ろした。

デュランに<衝波>を防がせて、動きを止めたところに大剣の一撃を見舞い回避させる。それがヘキサの算段だった。

しかし、その目論見は脆くも崩れ去ることになる。

「はい」

唐突に大剣が静止した。

見れば肉厚の刀身をデュランが片手で受け止めていた。刀身の側面に添えられた五指。

信じられないことに大剣の動きはそれだけで完全に束縛された。柄を掴む両手にあらん限りの力を込めるがぴくりともしない。

と、唐突にデュランが指を離した。

必死に大剣を引き抜こうとしていたヘキサは、急なことに対応できずに、そのまま後ろに倒れてしまった。

地面に打ち付けた腰の痛みすら忘れて、自分を見下ろす白髪の少年を凝視する。

「どうした？ もう降参か」

「ッ。だれが！」

跳ね起きる。その頭からは人に剣を向ける拒否感はすっかり消えていた。いまあるのはどうやって彼に一矢報いるかそれだけだ。

幾度となくいなされようと立ち上がるヘキサだったが結局、一太刀入れることも叶わず、疲労で地面に突っ伏すことになるのであった。

二章 正しい迷宮攻略のススメ(3)

地面に大の字になって寝転び、ときどき咽ながら呼吸を繰り返す。鉄鎧の下の噴きだす汗の感触は気持ち悪かったが、吹き抜ける風の冷たさは心地よかった。

全身が熱い。全身が冷たい。ぐつぐつと煮立っているかのような感覚と、末端から冷えていくような感覚。相反するふたつの感覚に、ヘキサは顔をしかめた。

身体が熱いのは内力系方術を過剰使用によるもので、身体が冷たいのは外力系方術で生命子を過剰放出したからである。

内力系の乱用により体内の生理機能のバランスが崩れての異常発熱。外力系の乱発によるアバターの生命子の損失が、肉体の低温化という形で現れているのだ。

今回は限界の一步手前で止まったためこの程度で済んだが、限界を超えればそれはアバターの崩壊に繋がりがかねない危険な行為である。

そして、そこまで身を削っても、白髪の少年は遠くて手が届かなかった。

「ほれ、これ飲んどけ。楽になるぞ」

「げほつ。ありがと」

苦い笑いするデュランに手渡されたポーションを飲む。相変わら

ず赤い液体は苦かったが、身体の変調は緩やかなものになった。
はあっと一息吐き、地面に横になったまま青空を見上げた。

「まったく、無茶しやがって。そんなんじゃこの先、身体がもたないぞ」

隣に腰を下ろすデュラン。その横顔は汗をかいていないどころか、息ひとつ乱してはいなかった。

その場から動かせることも、剣を抜かせることもできなかった。
これが本当に同じプレイヤーなのかと疑わしく思える。

そんな感想を脳内に浮かべつつ、ヘキサは気になっていた疑問を口にした。

「デュランは、どこの、派閥に……属してるの？」

「俺か？ 俺は 『居城派』かな」

「あ……そう、なんだ。『王城派』……じゃないんだ」

「正確に言えば脱落者さ。途中で、ついていけなくなってな」

息を乱しながらの質問に答えるデュランの顔は、どこか寂しげで悲しそうだった。

それにしても彼の實力でも脱落するなんて、一体『王城派』の連中はどれほどの化け物なのか。いまのヘキサには想像すらできなかった。

プレイヤーは行動指針によりみつつの派閥に分類される。

ひとつは、『王城派』。

千界迷宮の攻略を最優先事項として、常に迷宮の最前線で戦う者たちだ。

大概がこの世界に魅入られた重度の中毒者だが、その實力は正真正銘の本物。幾多の試練を乗り越えてきた歴戦の猛者たちである。

白髪の少年が言う脱落者とはなにかしらの要因により、彼らの攻略速度についていけなかった者たちのことを指す。

ふたつは、『居城派』。

三種類の中ではもつとも人口の多い派閥である。

冒険。クエスト。商売。彼らの行動方針は様々。ヘビーユーザーに対するライトユーザーといったところか。

ある意味この箱庭世界を純粹に楽しんでいる者たちと言えるかもしれない。

そして、問題なのはみつつ目の『荒城派』。

モンスターではなくて、プレイヤーを殺すことを縄張りとする者たち。強盗や恐喝に身を染めた、いわゆるプレイヤーキラーと呼ばれる人種である。

殺すことが手段になっている者。殺すことが目的になってしまった者。

中には『王城派』を筆頭とするトッププレイヤーに並ぶ、あるいは凌駕する非常に危険なプレイヤーも存在している。

「そついやヘキサ。……お前はじめてこの世界にきたとき、コロシムみたいなところに飛ばされなかったか？」

「そつだけど、それが、どう……か、した」

唐突に話題を振ってきたデュランに、意図がわからないまま返答する。

「いや、お前の方術に対する適正が妙に高かったからな。……自覚はないと思うが、普通あんな無茶な方術の使い方したら、ぶっ倒れるよりも先に身体が壊れるぞ」

「え。そう、なの……?」

なにしろいままでずっと一人で行動してきたのだ。そんなことを急に言われても、なんと返事していいのか困ってしまう。

「それとステータス見ていて気づいたけど、魔力もないみたいだし。多分、コロシウムじゃないかなってさ。先見の儀式でコロシウムに当たった奴は、どいつも例外なく体内に回路が生成されないからな」

意味がわからずにきょとんとするへキサを見やり、デュランは続けて口を開いた。

「あれは一種のイベントでな。初回ログインの場所や行動で、アバターの性能が変化するんだよ。ナビゲーターも言ってただろ? 魂の形質を示せてな」

確かに言っていた。

急転の展開に困惑するへキサに、ナビゲーターは言ったのだ。魂の形質を示せ、と。

「それが 先見の儀式 ……?」

「ああ、そうだ。アバターの傾向は初回のログイン場所がどこかで、大まかに特定できるようになっているってわけさ」

つまりキャラクターメイク時の行動や選択で、初期のステータスや装備武器が変動する、ゲームでよくあるチュートリアルイベントなのか。

「コロシウムは俺やお前みたいなの、方術の扱いに特化した奴が選ば

れるステージだ。体内に余計な変換回路を待たないが故、純粹な生命子 方術への適正が高いってのが、巷の一般的な見解だな」

「ちょっと、待って。じゃあ、デュランも魔法が……」

「使えない」

途端にどんよりとした空気を纏う。

どうやら魔法を使えないことに劣等感があるらしい。

回路というには、生命子を魔力に変換する体内機能のことである。魔力は魔法の原動力。当然、魔力がなければいかなる魔法も使用することができない。

生命子の増大に比例して拡張する特性があるのだが、彼らのように最初からないモノを拡張することはできない。

とまあ、そういうことである。

「いいよなあ。魔法の使える奴らは。……くそつ。指先に火を点す

くらいでできたっていいじゃんかよ」

「わかる。凄くよくわかる」

ははは、と半笑いのデュランに深く同意する。

実用性の有無ではないのだ。

魔法のある世界観で、魔法が使えないだなんて、一体なんの嫌がらせだろうか。当初、魔法が使えないと知ったときの落胆はいまも忘れていない。

「……話を戻すぞ」

これ以上は不毛と判断し、デュランは頭を振って会話の軌道を修正する。

「へキサ。ちなみにコロシラムの様子はどんな感じだった？」

「コロシラムの様子……？ えっと……真つ暗な夜で、地面には色々な種類の武器が刺さっていたかな」

「観客はいたか？」

「いない。観客席は無人だった」

星の輝きも月明かりすらない闇夜。沈黙する武器の群れに囲まれた無人のコロシラム。寂しいといえば寂しい光景だった。

「実は同じ場所だったとしても、細部はプレイヤーによって別でな俺の場合は昼だったし、観客席も満員で声援がうるさかった。それと地面に突き刺さっていた武器も、片手剣が一本だけだったな」

それがなにを意味するのかは、誰にもわからない。だが、きつとなにかしたの意味が含まれているのだろうとデュランは語る。

「……どうせ俺にはもう関係ないか」

「なんだって？ ごめん。聞こえなかった」

「ンや、なにも。それよりも、どうだ。体調は回復したか？」

風で流れてきた小声に聞き返すも、デュランは曖昧に言葉を濁した。代わりにへキサのほうに手を伸ばすと、腕を掴んで彼を起き上がらせた。

まだ若干、体調に不安はあるものの、ほぼ回復していた。さつき飲んだポーションのおかげか。おそらく自分の使用しているものよりも上級の薬だったのだろう。

「問題なさそうだな」

黒髪の少年の様子からそう判断したデュランは、拾った大剣をへ

キサに渡すと空を仰いだ。

「日もまだ高いし、これからレベル上げるか。……とりあえず目標は、一ヶ月で5界層に到達することだからな」

「わかつ　え？　ちょ、無理でしょう」

頷きかけて慌てて否定する。

三週間経つても1界層だというのに、一ヶ月で5界層とか無茶すぎる。どれだけの強行軍で突っ走る気でのやらだ。

「大丈夫。大丈夫。こんくらいの界層の難易度なんて、似たり寄りたりだって」

「……本当に大丈夫なのかなあ」

へキサのつぶやきは誰の耳にも届くことなく、青い空に吸い込まれ消えていった。

二章 正しい迷宮攻略のススメ(4)

時刻は午後六時。ちょうど夕食の時間ということもあり、酒場は空腹を満たそうとするプレイヤーたちで繁盛していた。

がやがやとした喧騒で賑やかな店内の片隅で、ヘキサとデュランは二人がけのテーブルに腰かけて食事を取っていた。

熱せられた鉄板の上で、一口サイズに切られた肉がじゅっじゅっと美味しそうな音を発している。漂ってくる匂いに食欲がいつそう増進された。

ヘキサはフォークを肉に突き刺すと、無我夢中で口に運ぶ。塩と胡椒で濃い目の味付けをされた肉は、いまの彼にとって最高のごちそうだった。

「おいおい。ちょっとは落ち着いて喰ったらどうだ。そんなに慌てなくたって、誰も取ったりしないって」

対面に座るデュランが肉を貪るように食う、ヘキサに苦笑しながら言った。

肉ばかりを頬張るヘキサとは対照的に、彼は樽に注がれた林檎ジュースを飲みながら、パンやサラダを食べていた。

ヘキサは三皿目を完食すると、空になった皿の上にフォークを置いた。

樽の林檎ジュースを胃の中に流し込み、ようやく一息吐けたように思えたが、まだ食べ足りなく感じた。

自分でも呆れるほどの食欲だった。
元々、自分はこんな大食漢ではなかったのだが、この世界にきてから大量に食べるようになった気がする。

「そりゃ方術は生命子を消費するからな。燃費が激しくなった分、それを補おうと大食いになるのは仕方ないさ。俺だって大技を連発した日は、めちゃくちや食べるぜ」

「すみませーん！」

「って、おい！ 人の話を訊けよっ」

手を上げて店員を呼ぶ。

すると他の席に料理を運んでいた三つ編みの女性が、彼の声に反応して、こちらに駆け寄ってきた。

「はい。注文ですかー？」

「これと同じのをひと……いや、二皿ください。それとジュースもお願いします」

「わかりました。すぐにお持ちしますね」

店員を後ろ姿を見送っていたヘキサだったが、ふと視線を白髪の少年のほうに移すと、呆れたような半眼と目があった。

「どんだけ食うんだよ、お前」

「あはは。久しぶりの肉だったから……その、ついね」

普段、ヘキサは食事を宿屋の備え付けで済ませていた。理由は安いからだ。とてもではないが、いまの彼の財政事情ではこんな店にはこれない。

すでに喰っているだけで、実に一週間分の食費を超えていた。ちなみにここ料金は、またもやデュラン持ちだったりする。

最初は遠慮して控えめにしようと思っていたへキサだったが、久しぶりのごちそうを前にして、あっさりとタガがはずれてしまったのである。

宿屋の食事が不味いというわけではないが、やはり安めの価格設定の分、味の質が落ちるのは仕方がない。

「ほい。お待たせ」

ほどなくして、へキサの目の前に追加の鉄板が置かれる。熱い鉄板で焦げる肉の香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。

「ありがとうございます」

「いえいえ。でも、食べすぎには注意してね」

空の樽に林檎ジュースを注ぐと、ポケットから栗に似た木の実を取りだして、へキサに手渡した。

「これは……？」

「私からのサービス。食後に食べてね。胸がすっきりするよ」

「あ……どうも」

ぼかんとするへキサにくすりと笑い、三つ編みの店員は別の客の注文を聞きにいった。

しばらくの間、木の実と彼女とを交互に見ていたへキサだったが、デュランを見やるとぽつりと言葉を洩らした。

「ねえ、デュラン」

「ン？ なんだ？」

「……彼女たちって、NPCなんだよね？」

NPC ノンプレイヤーキャラクター。

なにかしらの役割を背負わされた、魂を持ち得ない人形。構築された世界を成り立たせる要素にして、舞台を盛り上げる演出装置のひとつ。

ネットゲームをよくやっているヘキサからしたら、おなじみの存在ではあるが、ファンシーのNPCたちは文字通りの別格だった。

この世界の人々は、十万人のプレイヤーを除くすべてが、NPCたちである。

街で暮らす住人も、マリーゴールドの職員も、当然ヘキサに木の実をくれた三つ編みの店員もNPCである。

しかし、はたして彼らをNPCと一言で括ってしまっているのか、ヘキサは前から疑問を抱いていた。

あまりにも挙動が人間ぽいのだ。

はじめにNPCだと知らされていなければ、ヘキサは彼らを自分と同じプレイヤーだと認識していただろう。

いまだって半信半疑なのだ。

一人ひとりに人格があり、確立した意識がある。少なくともヘキサは、彼らと言葉を交わしてそう感じた。

「まあ、お前の言いたいことはわかる」

物言いたげな表情をする黒髪の少年に、デュランは酒場を見回した。

両手に料理を持ち、テーブルの隙間を縫うように歩くウェイトレスの顔は明るく、いきいきとした姿は、とてもではないが作り物とは思えない。

そもそも彼女たちの正体を知る者はいないのだ。

最初からこの世界に存在した彼ら。それをよくわからないから、とりあえずNPCと呼ぶことにしたのはプレイヤーなのだから。

「いや、でも……ひとつあったな」

中身を飲み干した樽をテーブルに置いて口元を拭う。

「なにが？」

「噂だよ。あいつらの正体は」

と、そこまで言って彼は口を噤んでしまった。

そして、「やっぱりやめた」と言つと、さきほどの店員にジュースの追加を頼んだ。

「ちょっと。そこまで言うておいてやめるのかよっ」

「いいんだよ。どうせつまらない噂なんだから。都市伝説とか怪談とかその類の、聞くからにうそ臭い話さ。わざわざ改まって話すことでもない」

何故かムスツとしながら言つと、注がれたジュースを一気に飲み干す。

「NPCなんて言うてはいるが、本当のところは不明もいいところだ。そもそもNPCって言葉も、『一期生』の連中がかつてに名づけたんだしな」

「……一期生。確か最初にここに来た十万人のことだっけ？」

「ああ、そうだ。流石にお前も知ってるだろうけど、この世界の単位で一年後ごとに、その一年間で出た欠員が補充される」

それはアカウントの一字目でわかるようになっていた。最初の年が『A』。次の年が『B』という具合だ。

「俺は二年目からのスタートで『二期生』。ヘキサは今年からだから『四期生』だな」

ヘキサのアカウントはD0000154。

これは四年目の154番目に登録されたことを表しているのである。

「『一期生』か。……きつと強いんだろうね」

「古参だからな。そりゃ強いさ。ある意味、基礎を作った連中だからな」

この世界で使われている様々な用語は、『一期生』が自分たちのわかり易いように、馴染みのあるネットゲームから引っ張ってきて流用しているモノが大半である。

それがいまも定着して使われているのだ。

「なににせよ、あんまし考えすぎないほうがいいぞ。答えなんてでないんだからさ」

「それはそうだけど」

時々、どう接していいかわからないことがあるのだ。

「まあ、普通に接すればいいじゃないか？ 意識するところくなことにならないからな。俺はそうしてるぞ」

「そうだね。……うん。そうする」

結局はそこに落ち着くわけだが、こういつのは結果よりも過程が大事だと、意味不明な弁解を自分にする。

「……なに言ってるんだか」

ぼそりとつぶやく。

お酒は飲んでいないのはずなのに、テンションが妙な方向に飛んでいる。久しぶりに他人と一緒に食事しているからか。気分が高揚しているのが自分でもわかった。

「それよりも、明日から厳しくいくからな。喰った飯の分はビシビシしごいてやるぞ」

「ええ！？ なに、それ……！」

とりあえずいまはこの時間を楽しもう。デュランとくだらないやり取りをしながら、ヘキサは密かにそう思った。

日が落ちても酒場から人が絶えることはなく、箱庭の世界の夜が静かに深けていった。

二章 正しい迷宮攻略のススメ(4) (後書き)

どうも、祐樹です。

これにて二章は終了です。

次章もヘキサとデュランの二人旅をお楽しみください。

……ヒロインいつになったら出るんですかね。

それと、よければ感想ください。

見ての通り好きかってにやってるので、結構不安な部分が多いです。意見もらえると嬉しいです。

では、またお次章で会いしましょう。

三章 凶刃と英雄狂(1)

振り下ろされた刃を紙一重でかわす。

耳元を通過する金属の圧力に背筋を冷やしながらも、続けて真横に薙ぎ払われた剣から逃れるべく、後方に大きく飛び退いた。

空振りした刀身が石の壁を抉り、砕けた破片がばらばらと床を叩く。

ヘキサは大剣を器用に旋回させ構えると、対峙するソレの挙動に全神経を集中させた。

纏ったぼろぼろの布切れの隙間から見える白い骨。両肩からはもう一組の腕が生えている。虚ろな眼孔の奥。骸骨の双眸に宿る赤い光が、自身の領域に侵入してきた無礼者を不気味に見下ろしていた。

ヘキサの視界に映る骸骨のモンスターには、赤いカーソルが重なっていた。二重円の上には、レッドアイと表記されている。

赤い瞳 レッドアイ。それが現在黒髪の少年が戦っている、10界層のボスモンスターの名前である。

「つく。流石に強いな」

時期尚早だったか。

そんな弱音がちらりと顔を覗かせる。

10界層は初心者にとって第一の壁だといわれている。この界層

をクリアすることで、ようやく初心者から一人前の探索者として認められるわけだ。

レッドアイは多腕をかざすと目を瞠る俊敏さで、ヘキサに向かって突進してきた。

空気を切り裂き振り下ろされた剣をヘキサは大剣で受け止める。

重い一撃に身体が軋み、足元の床にヒビが入る。

噛み合う刀身の悲鳴に、強引に剣を振り抜くと、迫る横殴りの刃を掻い潜る。懐に跳び込み剣を振るおうとし、背筋を走る悪寒に制動をかけ、必死の思いで横に飛び退った。

死角からの一撃が髪の毛の先をかすめる。

地面をごろごろと転がり、骸骨剣士から距離を取り立ち上がると、黒い瞳が油断なくレッドアイを見据えた。

あのまま突っ込んでいたら、いまごろどうなっていたか。脳裏を巡る予測に、柄を握る両手が汗で滑った。

ひんやりとした空気が肌を撫でる。

緑が豊かだったフィールドとは異なり、灰色の石で構成された回廊は、いかにも迷宮然とした場所だった。

ヘキサが立っているのは、その10界層回廊の最深部。目の前の骸骨剣士を倒せば、このこの界層をクリアし、次の界層への扉が開く。

だが、それは早々簡単なことではないと、彼はその身をもって知った。

黒髪の少年の思考を反映して、視界に小さなウインドが表示される。

小窓にはレッドアイに関するデータが表示されている。【解析】スキルによるレッドアイの詳細情報一覧である。

10界層を攻略するにあたって、ボスを含むこの界層のモンスターのデーターを、あらかじめ【解析】スキルにインストールしておいたのだ。

外見通りレッドアイはアンデット系統のモンスターであり、本体属性は闇と霊の二重属性である。アンデットらしく光属性が弱点のようだが、ヘキサ自身が魔法を使えないため決め手に欠けている。

武器は四本の腕にそれぞれ持つ、剣から繰り出される斬撃で、魔法的な攻撃手段を持たないことが救いだったがその反面、物理攻撃力と防御力が10界層のモンスターとしては突出していた。骨の癖に重たい攻撃は正面から食らえば防ぐのがやっと。反撃に回せる余力はなかった。

それでも怒涛の攻撃を隙をつき、なんとか右腕を根元から切断し、さらに左肩から生えた腕の手首を砕くことに成功していた。

もっとも、代償としてこちらは持ち込んだ切り札である、光属性付加の魔法薬を消費してしまい残るのは、手に持っている一本だけだ。

曲線を描くポーションの瓶とは違い、菱形の瓶には無色透明な液体が満たされている。

ヘキサは親指で透明な硝子栓を弾き、小瓶の中身を刀身にぶちまけた。すると鉛色だった刀身が仄かに発光し、水面の波紋のように光を散らす。

「赤字覚悟の大盤振る舞いだ。これで倒せなきゃ嘘だろッ」

武器に一定時間属性を付加する魔法薬は高価かつ貴重品で、そうそうお手軽に使える代物ではないのだが、状況が状況だけに出し惜

しんでいる場合ではない。

ヘキサは空になった瓶を捨てると、剣を振り上げるレッドアイに斬りかかった。

頭の中で行使する方術のイメージを思い浮かべて剣先を翻す。連想したイメージ通りに振るわれる剣から放たれた赤い衝撃波が、骸骨剣士に命中して炸裂した。

砕けた骨の欠片が宙に散り、衝撃でレッドアイは蹈鞴を踏んで後退する。間髪入れずに接近し、追撃の刀身を叩き込む。

光の属性が付加された一撃は効果絶大で、斬撃を見舞った箇所からは白煙が上がり、炭化したように黒ずんで剥離する。

カタカタと顎を鳴らし、双眸の赤い光がチカチカと瞬く。怒りを込めて振り下ろされた左手の剣はしかし、黒髪の少年の身体を捕らえることはできなかった。

空振りして空しく床を叩く剣。

瞬発力はレッドアイよりも、<息吹>で強化したヘキサのほうが上だ。彼は踏み下ろした足を軸に、身体を反転させて掲げた大剣を、渾身の力で骨の左腕に振り下りした。

柄を伝わる鈍い手応え。直後、刀身が食い込んだ箇所を中心に、ピシリと乾いた音が聞こえたかと思うと、レッドアイの左腕が半ばから断ち割れた。

異形の咆哮をフロアに響かせて、残された右肩の腕の剣を出鱈目に振り回すレッドアイ。だが、そのときにはヘキサはすでに、骸骨剣士の攻撃範囲から離れていた。

好機とばかりに翻る刀身から放たれた<衝波>が、無防備になったレッドアイの顔面に命中。骸骨の半分を砕き割った。

方術にはふたつの発動方式がある。

それが発音式と思考式であり、いままでヘキサは使用していたのは発音式のほうだ。稀に思考式で使用したこともあるが、緊急時における偶発的なものでしかなかった。

発音式はその名の通り、方術の名前を発音することで使用出来る形式だ。条件が名前を言うだけなので、初心者にも簡単に使用ができる。

だが、知能のないモンスターが相手ならともかく、対人戦で発音式を使うということは、自分でこれからどんな攻撃をするのかを相手に教えるようなものだ。

それでは勝てる試合も勝てはしない。なによりも発音しなければいけない関係で、どうしても方術の発動にタイムラグが生まれてしまう。

そこで登場するのはもうひとつの方式である思考式だ。

思考式は方術の使用イメージを思い浮かべ、脳内トリガーを引くことで発動する形式である。相手に使用する方術を悟られず、また発音式に比べて発動が早い。

とはいえ、この攻撃モーションを連想する作業が曲者なのだ。イメージが足りないと方術が発動せず、逆に格好の的になってしまう。慣れないうちは、十回に一回発動すればいいほうだろう。まして戦闘中となれば、当然相手の存在も視野に入れなければならない。

敵の動き。ときには仲間の動きも頭に入れながら思考式を使うのは、存外に神経を削る。思考式を使いこなすには高い技術と集中力が要求されるのだ。

故に、思念式は上級技術とされ、トッププレイヤーの仲間になるための必須技術となっている。

この一ヶ月半の朝から晩までの反復練習により、<衝波>と<息吹>に關しては常時思考操作による発動が可能となるレベルまで達していた。

三本の剣を失い、度重なる攻撃に晒されて、レッドアイの動きは明らかに落ちていた。隻眼になつた赤い瞳が、切れかけの豆電球のように明々する。

床を蹴つて肉薄する。

薙ぎられた剣の側面を打ち、がら空きになつた懐に跳び込み、上から落ちてきた骨の腕にヘキサの動きが止まつた。

手首を砕いた左肩の腕である。レッドアイは腕そのものを鈍器代わりにしてきたのだ。武器が持てないことで、完全に彼の意識から外れていた一撃だつた。

それでも咄嗟に剣を翳して防ぐが、無理な体勢から防御したこと
で身体が横に大きく揺らいだ。レッドアイは剣を手元に引き戻す
と、動きの止まつたヘキサ目掛けて、切っ先を真っ直ぐ突き出した。
鋭利な刃が彼の身体を貫く。その刹那、黒髪の少年の姿が掻き消
えた。

内力術式<俊転>。ヘキサを貫くはずだつた剣は脇腹を裂くにと
どまり、逆に彼の突き出した剣が、赤い隻眼を深々と抉つた。

「あああああッ！！」

気合一閃。方術を切り替える。

内力術式<剛力>。

両腕に万力を込め、そのまま剣を下に落とす。聖なる光を宿した
刀身が、抵抗など一切関係なく、骨の身体を縦に割つた。

レッドアイの動きが静止し、次の瞬間、多腕の骸骨剣士は木っ端微塵に碎け散った。

三章 凶刃と英雄狂(2)

生命子の輝きに変換されるレッドアイの遺骸を確認し、ようやく勝利を実感できたヘキサは、張り詰めていた緊張の糸が切れた様子で、その場に倒れてしまった。

もはやお約束のように軋む身体にため息を吐き、ポーチから取り出したポーションを一気に飲み干す。回復薬の効果で和らぐ全身の痛みと、脇腹の傷口がふさがっていくむず痒さに、顔をしかめて我慢する。

と、そのとき黒髪の少年しかいないはずの空間に音が響いた。パチパチと響く乾いた音。拍手である。

突然の拍手にしかし、ヘキサは特に驚いた素振りもなく、床で横たわったまま顔だけを傾けて、拍手のする方向を見やった。

「10界層クリアおめでとう。これでヘキサも初心者卒業だな」

視界に映った白髪の少年はそう言うと、拍手を止めてこちらに歩み寄ってくる。

言うまでもなくデュランである。今回のボスモンスター攻略に挑むにあたり、万が一の自体に備えて、ヘキサの背後からついてきていたのだ。

もっとも、攻略中ずっとヘキサには、彼の気配を感じることができなかつたわけだが。同じフロアにいたレッドアイも、最後までデュランには気がついていなかった。

レベルとスキルのおかげとデュランは言うが、相変わらず実力の底が見えない。本当になんでこれで脱落者なのか。理解に苦しむ思いだった。

「会った当初とは見違える動きだったぜ。……最後のほうはちよいとばっかし危なかったけどな。一瞬、飛び出そうか迷ったぞ」

デュランの言葉に苦笑する。

結果的に勝てたからよかったものの、戦闘の内容は彼の言葉とおり、まさに紙一重で僅差の勝利だった。

<俊転>と<剛力>は<息吹>からの派生方術。

全身を平均的に強化する<息吹>に対して、<俊転>は脚力を<剛力>は腕力といった感じで、身体の一部の強化に特化した内力術式である。

これらの方術は体得してから日が浅く、思考操作の成功率は五割を切る。それが二回連続で成功するとは、どうやら天は自分を見放していなかったようである。

「はは……まあ、運も実力のうちってな。なにせよ勝ちも勝ちだ。もっと素直に喜んでいいと思うけどな」

そこまで言って、デュランはヘキサの背後を指差した。

「ほれ。早くそこに落ちてるアイテム拾って、11界層に行こうぜ」
「？」

「わかってる」

促されて立ち上がると振り返る。

さきほどレッドアイが消滅した場所には、いまだに光の残滓が燻り、渦を巻く燐光の中心には、床に突き立つ剣があった。レッドアイからのドロップアイテムである。

形状から察するに、カテゴリーはおそらく大剣。

通常、モンスターが落とすアイテムは、魔石か素材のどちらかなのだが、一部のモンスター　主にボスクラス　からは、稀に武器や防具などの武具を入手できるときがある。

それらの武具は入手した界層のモノより高い性能値を示し、ときには武器固有の能力を秘めていることもある。

そのため一種のステータスシンボルのような扱い方をされる場合もあるのだ。

ヘキサは剣に近づくと、柄を掴んで引き抜いた。

思いのほかあっさりとは抜けた大剣の刀身はずっしりと重く、黒曜石のような輝きを放ち、武器特有の妖しげな引力を感じさせた。

わくわくしながら、試しに刀身を指先で叩いてみるが、出現するはずの武器詳細の画面が出てこない。

おそらく未鑑定品だからだろう。

どうやら性能を確かめるのは、街に帰ってからになりそうだ。仕方なく手に入れた大剣をカード化する。

「へえ……なかなかよさそうな剣じゃないか。鑑定が楽しみだな」
「うん。早く行こう」

背中越しに自分の手元を覗き込むデュランにそう言い、ヘキサはカードからフロアの中央に視線を移した。

そこにはレッドアイが健在だったときにはなかった、正八面体の透明な結晶体が浮遊していた。転移結晶^{ポータル}である。

ポーターは各界層のマップや街に設置されていて、プレイヤーはこの物質を使用し、他の転移結晶の設置場所まで、瞬時に移動することが可能なのだ。

特性によってポーターの種類はふたつある。行き先の指定型と固定型の二種類であり、これは後者。次層の拠点都市への一方通行のポーターである。

彼らはポーター近づくと、表面に触れた。つるりとした硬質な感触を手の平に感じた瞬間、転移特有の浮遊感に包まれ、二人の姿は回廊から消失した。

マリーゴールドから出るといつもと同じように、壁に寄りかかっていたデュランが、ヘキサに向かって手を振ってきた。

「どうだった？」

「レベルが19から21になったよ」

「お、ホントか。ボスを単独撃破だしな。やったじゃんかっ」

「そっだね」

「……その割には嬉そうじゃないな？　なんかあったのか？」

神秘的調子のヘキサに、デュランは訝しむと小首を傾げた。

「なんか　って、わけじゃないんだけどさ。その……これが、ね
……」

と、彼が懐から取り出したのは、レッドアイから入手した大剣のカードだった。生命循環のついでに鑑定を済ませていたのだ。ぼりぼりと頬を掻くデュラン。

「あーなんだ。ひょっとして性能が微妙だったのか？」

「逆」

「え？」

「その逆だよ」

そう言ってヘキサはカードの表面をなぞると、他人からは見えなようにして、表示された武器の詳細画面をデュランの前に翳した。グロリアス。それが大剣の銘だ。

製作者の欄が空なのは、モンスタードロップだからである。固有能力を持つ銘入りというのも驚きだが、瞠目すべきはその性能値だった。

「……なんだ、これ？ 冗談だろうか？」

ぼかんとしながらデュランはつぶやく。

画面には10界層で入手した武器としては、ぶっ飛んだ性能が表示されていた。レアドロップを考慮しても、明らかに低界層で手に入れている武器ではない。

下手をすれば20界層後半 否、表記されている固有能力を加味すれば、30界層クラスの武器と比較しても遜色ない。

それでいて、装備条件が恐ろしく緩いのだ。なにせ現在のヘキサでも、装備条件を満たしてしまっているくらいである。

「職員の人も言った。こんなのはじめて見たって」

「俺もはじめて見た」

ほつつと感嘆の吐息を吐くと、デュランはへキサの肩をぽんぽんと叩いた。

「ひよつとしたらへキサは、女神様に愛されてるのかもな」

「女神様……？」

「そつ。ナビゲーターや職員が言ってるだろう。貴方に女神様の加護をつてさ」

言っていた。ナビゲーターも別れの瞬間に言っていたし、マリーゴールドの職員もよくその言葉をお別れ代わりに使っていた。

「え？ あれつて単なるあいさつじゃないの？」

「うーん。へキサも上の界層に行けばわかるけど、結構それっぽいこと口にするNPCがいるんだよ。この箱庭の管理人、親愛なる女神様つてな」

あくまで噂だけど、と付け足すと、デュランは頭上を仰いだ。

「さてと……これからどうする？」

「僕はちよつとライラのトコに行ってくるよ」

「ふうん。そつか」

「……な、なんだよ」

途端、なにやら意味ありげな目線を向けてくる白髪の少年に、若干どもりながら言葉を返す。すると彼は「別にー」と言って、身体を反転させた。

「それじゃあ、今日はこれでおしまい。あとは自由行動つてことので」
「わかった。じゃあ、また明日」

「おう。 あ、それと」

ひらひらと手を振り遠ざかる背中だったが、ふいに彼は立ち止まると冗談めかした口調で口を開いた。

「NPCにハマるのも大概にしとけよ。お前、そういうのに耐性なさそうだし」

「な、う……は、ハマるって、僕はそんなんじゃない。ああ、もう、さっさと行けよッ！」

「あはは、じゃあなー」

今度こそ人ごみに姿を紛れさせるデュランにムスっとし、ヘキサもまた馴染みの店に向かうべく、彼とは反対の方向に歩き出した。

三章 凶刃と英雄狂(3)

最初の十万人が降り立つことを想定していたためか、はじまりの街ドウナ・ファムは箱庭世界の数ある街の中でも最大の規模を誇り、その構造を完璧に把握しているプレイヤーはおそらく存在していないと言われているくらいである。

特に整備されている表通りは別として、一步裏通りに足を踏み入れればそこは、蟻の巣のような様をなしているのだ。

立体的に入り組んだ道がどこまでも続き、不用意に見知らぬ裏路地に入ってしまったえば、五分とかからず迷子になる自信がある。

だからこそ、その店を発見できたのは偶然でしかなかった。

重なる建物で陽光すら届かない細い道を、ヘキサは一人黙々と歩いている。

視線は前ではなく手元のカードにやってはいるが、それでも足元に散乱するゴミを器用に避けながら足を前に進めている。

最初は目的地までの道順を記したマップを見ながらも右往左往したもののだが、流石に一ヶ月以上も通っていればこの程度は造作もなかった。

「うーん。どうしようかなあ」

例のカードの縁を、指先でなぞりながら嘆息する。

正直のところ、彼はこの武器の扱いに困っていた。

別にインチキして入手したわけではないのだから、普通に装備すればいいのだが、どうにも決まりが悪いのだ。

できれば目立つような真似は避けたい。

それに不相应な武器に頼ると、ろくなことにならないそうだし。かといって、売るなんて論外。急ぐわけでもないし、しばらくは保留でいいだろう。

なんてことを考えていると、いつの間にか目的の店の前までやってきていた。

見るからに寂れた印象の店だった。建物と建物の隙間にあるような、こじんまりとした小さな店だ。玄関にぶら下がった『ライラ道具店』の小さなプラカードがなければ、そもそもここが道具屋だとは思わないかもしれない。

我ながらよく中に入る気分になったものだ、とはじめてこの店にきた日のことを考え、なんだか感慨深い気持ちになった。

まあ、当時は面白半分で街を探索しようとして迷子になり、誰もいないから道を訊きたくて店に入ったので、純粋にモノが欲しかったわけではなかったのだが。

ヘキサはドアノブを掴み、たてつけが悪い扉を半ば強引に引つ張って開ける。ギイツと扉が軋み、括りつけられた古ぼけた鈴が乾いた音を響かせた。

寂れた外装とは異なり、内装は小奇麗にされていて、整頓された棚には様々な種類のアイテムが並んでいる。

回復アイテムなどの消耗品はもちろん、用途のわかるモノからわからないモノまで、幅広い商品が並んでいた。

「まったく」

きよろきよろと店内を見回していると、伶俐な声色が鼓膜を振るわせた。

「あれほど扉の開け閉めは、静かにと言っているのに」

店の奥から現れたのは、フリルがふんだんにあしらわれたゴシック調の服を着た、金髪の少女だった。緩やかにカーブを描く金髪に、エメラルドを連想させる澄んだ瞳。

可愛らしい洋服と相まって、人形のように可憐な少女だったが、外見に騙されると痛い目を見る羽目になることを、この一カ月半の生活でヘキサは知っていた。

「羨のなっていない駄犬ですね。そんなに矯正して欲しいんですか……？」

「やれやれとばかりに首を振り、彼女は冷ややかな視線をこちらにやった。」

「たてつけが悪いんだから、仕方がないじゃないか」

「そうやってすぐモノのせいにして。……本当に救いようがありませんね」

ふつつとこれ見よがしに、ため息を吐いて見せる。

金髪の少女の名前はライラ。

玄関のプラカードに記されていたように、彼女はこの道具屋の経営者であり、この世界の住人であるNPCだ。

頬にかかる髪を手の甲で払うと、いつもの平坦な口調で口を開く。

「10界層の攻略はどうでした。無事なところを見ると、命惜しさに尻尾を巻いて逃げ帰ってきましたか？」
「言っと思ったよ。……でも、残念だな」

毒舌少女の口にした想像通りの台詞に、ヘキサは不敵な笑みを浮かべると、彼女の驚く顔を期待して結果を報告した。

「10界層はクリアした。これで僕も一人前の探索者ってわけだ」
「それはよかったですね」

「……えっ？」
「なんです。馬鹿面晒して」
「誰が馬鹿だ　じゃなくて。ちょっと、反応薄すぎないか」

淡泊な反応に彼のほうが驚いた仕草をした。
もっとことう大げさなりアクションを期待していただけに、しれっと流されてしまって、がっくりとするヘキサ。

「これだから駄犬は。たかだか10界層をクリアして騒がれましても、こちらのほうが困ります。調子に乗ってるといつか痛い目を見ますよ」

正論を叩きつけられてぐうの音もでない。
辛辣な物言いだ、的を得た発言だけに始末が悪かった。

「それで？　なにか言いたいことはありますか？」
「……ありません」

はしゃぐ子供を嗜めるような口調が、心に突き刺さるようだった。
シヨックでがっくりと頂垂れていると、「……仕方がないですね」

と彼女はつぶやいた。

「確かに10層ていどでは驚くに値しませんが、そうですね……貴方にしてはよくやったのではないですか」

「……本当に？」

「ええ。今回のところは褒めてあげてもいいですよ」

なんてことを言われてしまえば、いくら相手が無表情であろうと、嬉しさを隠せないヘキサだった。

途端にやる気を取り戻す彼の耳に、

「飴と鞭の使い分けは重要ですからね」

といった小さな独り言が聞こえなかったのは、彼にとって幸福と不幸。はたしてどちらなのだろうか。

「なんでしたら、ご褒美に頭を撫でてあげましょうか？」

「……恥ずかしいからそれは止めてくれ」

「それは残念」

肩を竦めるとヘキサのほうに近づいてくるライラだったが、そのときヘキサは彼女の動きがぎこちない　より正確に言えば、右足を引き摺るようにしているのを見逃さなかった。

前々から気になってはいたのだが、そこを馬鹿正直に訊ねるほど、空気の読めない人間ではないと自負している。

自分勝手な好奇心で、相手を嫌な気分させるのはゴメンだ。

「気になりますか？」

ヤバいと思ったときは手遅れだった。

どうやら知らず彼女の右足に注視していたようだ。平坦な声に跳ねる心臓を強引に押さえて、努めて動揺が表にでないように注意する。

「なにが？」

「私の右足です。いつも気にしていますよね」

「ン？ そうかな？ 僕はそんなつもりじゃなかったけど」

「嘘が下手ですね。……別にいいですよ。そんなに気を使わなくても」

言って彼女はなにを思ったのか。

いきなりその場でスカートを捲くった。白いニーソックスに覆われた両脚に、ヘキサは引き攣った声を洩らしたが、それも彼女が右のニーソックスを下ろすまでだった。

露になった華奢な右足には、抉られたような傷跡があった。明らかに深いであろう生々しい傷跡だった。

突然の展開になにを言っているのかわからず、黒髪の少年は口を閉ざしてしまった。

しばしの沈黙の後、言葉を洩らしたのはライラのほうであった。

彼女はニーソックスとスカートを元に戻すと、

「イヤらしい」

なんてとんでもないことを口にした。

「いやいやいや……っ。なにがさ!？」

道端の石ころを見るかのような目つきに、たまらず待ったをかけ

るへキサ。さきほどまでの重たい空気など一瞬で霧散していた。

「欲情した目で見ないでくれませんか？ 正直、不快です」

「見てないよ！？ いったいどこからそんな発想がでてくるの！？」

「そうですか。私はてつきり逃げられないのをいいことに、めっちゃめっちゃに犯されるのではと思いましたよ」

「しないよ！ ってか、なんでそうなる！？」

自分は彼女にはどう見られているのだろうか。

むしろ、どういう思考回路をしていれば、そうした結論に達するのか、割と本気で意味不明だった。

三章 凶刃と英雄狂(4)

ジタバタと手足を振り回して抗議するへキサの姿に、金髪の少女は目を細めてふっと冷ややかに笑った。

「冗談です。貴方にそんな度胸があるとは思いませんからね。童貞でしょうし。いまみたく動揺して、取り乱すのがせいぜいですか。……童貞でしょうし」

なんで二回繰り返したし。
顔を真っ赤にして、口をぱくぱくとさせるへキサ。言葉に衣を着せぬ発言に、こちらのほうが恥ずかしくなる。

「だ、誰が……ど、どうて……ッ」
「あら？ 違いましたか。それは失礼しました。ちなみに相手は誰です。どこかで商売女でも抱きましたか。貴方の趣味をどうこう言うつもりはありませんが、病気には注意したほうがいいですよ」

などと面と向かって言われてしまい、頭が沸騰寸前まで追い詰められる。

「そん、な……だれ、が、しょ、しょうばっ
「でしたら、やはり童貞ですか」
「い、いや。だから……そ、その うわう」

ああ言えばこう言う状態に、もはや言葉すらでてこない。
と、テンパるヘキサを一通り眺めて、ライラは満足がいった様子
で含み笑いを洩らした。

「ふふつ。仕方がないですね。まあ、割りと楽しめたので、今日の
ところはこれくらいにしておいてあげます」

「……頼むから、そういう心臓に悪いのは遠慮してくれ」

心持ち機嫌がよさそうなライラに、げっそりとしながら口を開く。
戦闘をしたわけでもないのに、どっと疲れた気がする。

「ここは早く用事を済ませて、撤退するのが吉かもしれない。そう
判断した彼は中空から”本を”取り出し、必要分の貨幣を実体化さ
せると、それをライラの前に差し出した。

「これは……？」

「代金だよ。前は持ち合わせがなくて、渡せなかったからさ。ちょ
っと遅くなったけど、いま渡すよ」

それだけでは伝わらなかつたらしく、小首を傾げる彼女に説明を
補足した。

「ほら。属性付加の魔法薬だよ。僕が頼んだのは二本だったのに、
ライラ四本入れてただろう？ これはその二本分の代金だ」

ヘキサの手の平には銀色の細長い金属棒がひとつ。

この世界の貨幣単価であるリラは、このように必要に応じて実体
化させることができる。

100リラで銅棒ひとつ。銅棒百個で銀棒ひとつ。銀棒百個で金
棒ひとつの価値になる。そのうえにもいくつか貨幣の種類はあるの
だが、ヘキサが実物を拝める機会は、まだ当分先の話であろう。

「ああ、そうでしたか。……でしたら、そのお金は受け取られませんか」

「なんで？　ちなみに多かった分の魔法薬も全部使ったから、現物では返せないよ」

属性付加薬の価値は、ヘキサが日常で使用しているポーション十個に相当する。種類としてのランクは一番下なのだが、元々も価値が高いためである。

「元々は私の不手際です。原因が自分にある以上、代金を請求するのは、私の主義に反します。ですからそのお金はいりません」
「……不手際ね」

では、今回に限らずいつも注文したアイテムと、受け取ったアイテムの種類と数が違うのも、不手際の一言で片付けるつもりなのだろうか。

黒髪の少年が彼女に頭が上がらない要因のひとつだ。
デュランから資金の提供を受けてるとはいえ、それに甘えてはならないと、彼からの援助は必要最低限に抑えている。

なので、基本的に消耗品などは自分のお金であり、毎回この店で揃えているのだが、いつもプラス方向に数や種類がズれているのだ。マイナス方向にズれていたことは一度もない。
ライラのサービス　なのだろうが、ヘキサはいつも申し訳なく感じていた。本当に彼女とデュランには足を向けて寝られない。

毒舌で辛辣ではあるが、決して悪い人物ではないのだ。

特に今回は彼女のサービスがなければ、レッドアイには勝てなかった。なにしろ手持ちを全部使ってギリギリだったのである。

そんなわけで、今回の攻略で得た資金で魔法薬代くらいは払いたかったのだが。結構強情なところがあるし、ごり押したところで受け取りはしないだろう。

結局、自分は誰かの手助けばかり借りていて、一人ではなににもできないのだと、つくづく思い知らされるようだった。

「じゃあさ、今度一緒に食事にも行こうよ。奢るからさ」

「あら？ デートのお誘いですか。私はそんなに安い女ではないですよ。まあ、期待せずに待っています」

相変わらずの無表情。

だが、本当に僅かだが彼女の口元が緩んだ気がして、へキサは「そうしてくれ」と照れ隠しに黒髪をかきながら言った。

.....。

.....。

.....。

「楽しいパーティーの準備はどうなってるんだ？」

「こっちは完了してるわ。計画通りに事前の仕込みも終わってるし、

あとは開演の合図を鳴らすだけ。いまから待ち遠しいわ」

「ボクのほうも大丈夫です。いつでも動けますよ」

「オツケ。……そんなじゃ、少しばっか遅れちまったが、楽しい楽しい新人歓迎会といこうじゃないか」

眩しい陽光に目を細めて、デュランは欠伸をかみ殺し、ヘキサとの待ち合わせ場所に向かって歩いていった。

プレイヤーで溢れていたドウナ・ファムも、いまは以前ほどの活気を感じられなかった。時間が経ち『四期生』が拠点をより上層に移したためである。

「しっかし、一ヶ月半で10層クリアとはな。ホント、話題の尽きないやつだよな」

一ヶ月で5層クリアとは口にしていたが、まさか一ヶ月半で1層に到達するとは思っていなかった。彼の予想よりも一ヶ月は早い。

拳動の端々から潜在能力の高さは承知していたが、まさかここまですとは。

単純に攻略速度でいうのなら、黒髪の少年よりも早く、10層をクリアしている『四期生』は他にも多くいる。

しかし、それは先輩探索者の助力があった場合、もしくはソロではなくてパーティでの攻略によって、クリアした者がほとんどのはずだ。

助力ならばヘキサもデュランに手を借りてはいるが、基本的に黒

髪少年は一人で攻略に望んでいた。

彼が協力したのは初期段階での装備資金の提供と、戦闘を横で見ていると感じたことを、助言していたことである。

おそらくソロでの攻略を前提条件にするのならば、ヘキサは『四期生』に限らず10界層攻略最速の一人ではなからうか。

もしかしたら、彼に低界層であんな性能の飛び抜けた武器が与えられたのは、それが一因になっているのかもしれない。

銘はグロリアスだったか。

付加されている固有能力から察するに、自分の腰の剣と同じく、魔剣属性の武器であろうことは間違いない。

ファンシー全体で見るとならば、そこまで高性能な武器ではないが、この世界に降り立ち二ヶ月と経たない探索者が持つには、過分にすぎた武器である。

「ったく。これも女神様のご加護ってヤツなんかね？」

くあつと大あくびしながらつぶやく。

女神のご加護 と冗談めかしていたのは、いったい誰だっただろう。あるいは本当に、女神に属する人物がいるのかもしれない。

なにしろこの世界は謎が多い。あまりにも多すぎる。

まるで漫画の中の話のような展開。製作者 と呼べる人物がいるのなら の目的も不明。一から十まで皆目検討もつかない。

そもそもこちらはなにかしらの対価を、求められているわけではない。なんの目論見の元になりたつ世界なのかすらわからない。

それがときどき薄気味悪く感じることもあるのだ。

もつとも、自分のことすらままならないような奴が、世界の秘密がどうこう言えるわけがないのではあるが。

「……マジでどうしよっかな」

仲間たちの顔を脳裏に思い起こす。書き置きひとつを残し黙って出てきてしまったが、現在はなにをしているのやら。

「ってか、絶対に怒ってるよなあ」

間違いない。書き置きを見つけたときの激怒ぶりが、リアルに連想できる。しかもその対象は自分なのだ。

「と、とりあえずはいいか。もうしばらくは大丈夫　なはず。うん。多分。確証は全然ないけど」

背筋を走る寒気に頬から大粒の汗を流し、必死に自分に言い聞かせるデュランは、遠くのほうに見慣れた姿を見つけた。

ヘキサだ。彼もこちらを発見したようで、大きく右腕を振っている。

いまはもう少し、いまを楽しもう。

そんな柄でもないことを考えながら、デュランも腕を振ろうとし

直後、都市を駆け抜ける劈くような轟音に表情を一変させた。

連続で炸裂する閃光と爆発音。甲高く響き渡る悲鳴と異形の咆哮が木霊する。

最初の衝撃から立ち直ったデュランとヘキサが見たモノは、青空を汚す大量の黒煙と、街中に溢れかえるモンスターの軍勢だった。

目前の光景に脳が追いつかない。

悲鳴を上げて逃げ惑う人々の間を縫い、駆け寄ってきたヘキサの顔にも、恐怖と驚愕が張り付いている。

「どうしてモンスターが街の中に……!? ねえ、デュ」

「 ”デュオ” じゃねえか」

瓦解する街に声が響く。

大きな声ではなかったが、決して無視できない圧力のようなモノがあった。

心臓を鷲掴みにされたような衝撃を感じ、一瞬、街の惨状も忘れてヘキサは声のした方角に視線をやった。

建物の屋根の上。

そこにひとつの人影があった。

茶色の髪の毛のどこにでもいそうな普通の少年だがしかし、瞳に宿るキラついた光に理由もわからず身体が震えた。

隣りで白髪の少年が見たことのない顔をしている。彼は腰の剣の柄に手を伸ばして、鋭い視線と声を飛ばした。

「レイウンツ!!!」

「久しぶりだな、英雄^{ドシキホーテ}。元気にしてたか？」

悠然とヘキサたちを見下ろし、凶刃は獰猛な笑みを浮かべた。

三章 凶刃と英雄狂(5)

沈黙が場を支配する。

人々の悲鳴もモンスターの奇声も、遙か遠くに感じられた。

肌を刺すピリピリとした静電気のような感覚。嵐の前の静けさは、こういうモノをいうのかもしれない。

急展開の過負荷からか、処理落ちた脳で、ヘキサはぼんやりとそんなことを思った。

デュオ。茶髪の少年は、デュランをそう呼んだ。それが彼の本当の名前なのだろう。

白髪の少年がなにかを隠していることには、薄々ではあったものの感づいてはいた。追求しなかったのは、いまの時間が壊れることを恐れたからだ。

楽しかった。女つ気のない二人行動だったが、それでも楽しかったのだ。いまのこの時間がこの先も続きますように、と願わずにはいられなかった。

だが、その願いが聞き届けられることはなく、崩落の使者はあちらのほうから破壊を引き連れてやってきた。

「なんでここにいるッ。この騒ぎの犯人はお前なのか！」

殺気が込められた声色だ。

鞘から半ばまで引き抜かれた剣の刀身が、陽光を反射して剣呑な

輝きを放つ。

デュラン　否、デュオのこんな姿を目の辺りにするのははじめてで、なんと声をかけていいのか判断がつかず、唾を飲み込んでこのなりゆきに注視する。

「ハンツ、それはこっちの台詞だ」

凄まじい敵愾心を露にする白髪の少年に臆することなく、レイヴンと呼ばれた少年は鼻を鳴らすと、考えごとをするような仕草をした。

「姿が見えないって報告は受けてたが、まさかこんな低界層で鉢合わせするなんてな。オレたちの計画に感づいた　って、わけじゃないか」

それならば、デュオだけがいる理由がわからない。彼の仲間たち。最低でも虹のお姫様と赤の道化師がいて然るべき状況だ。

「ホント、なんだってこんな低界層に……、ン？」

そこではじめて気がついたとばかりに、レイヴンはデュオの背後にいる黒髪の少年を見やると、場違いな存在に首を傾げた。

「誰だそいつ。見たトコ、新参みてえだが」

彼はそこで言葉を切った。口を閉じざるを得なかったのだ。

神速の一撃だった。

すぐ後ろにいたにも関わらず、ヘキサにはデュオがいつ剣を抜いたのか、見えなかったし理解ができなかった。

刀身から放たれたのは<衝波>。ヘキサもよく使用する方術だが、彼のそれはまったくの別物だとしか思えなかった。

速度が違った。威力が違った。錐のように鋭い形状をした青い衝撃波が、茶髪の少年に牙を？く。<衝波>は屋根を粉碎しなおも威力を落とすことなく、直進すると背の高い建物に直撃して、大きな風穴を穿った。

とんでもない威力だ。あんなモノを喰えばただではすまない。一瞬で消し飛んでしまっても不思議ではない。

そう、”まとも”に喰らえばだが。

「おいおい。話くらいさせろ」

右から左に。音もなく別の建物に着地した、レイブンの声は緊張感に欠けていた。ヘキサでは反応すら不可能な攻撃も、彼にとっては容易い代物のようだ。

トントン、とつま先で屋根を蹴る。彼の右手には、指の間に挟まれた一枚の紙があった。どこにでもあるような正方形の白い紙だ。

「ヘキサ」

名前を呼ばれて、視線を上から下に戻す。ヘキサの瞳に黒い襟飾りを靡かす、白いレザーコートの背中が映った。

「マリーゴールドに行け。いまこの街で一番安全なのはあそこだ。他のプレイヤーも避難しているはずだ」

「でゆ、デユラ デュオは？」

「俺はあいつをぶちのめす。この世界から叩きだしてやる」

「……わかった」

僕も一緒に残る、などと言えるわけがなかった。どう考えても足手まといにしかならない。自分にできるのは、彼の迷惑にならないように、この場所から遠くに離れることだけだった。

「悪かったな。別に騙すつもりはなかったんだ」

「別にいいよ。気にしてないって」

余裕のつもりなのか。二人の話に茶髪の少年は、割って入ろうとはしなかった。指で挟んだ紙で肩を叩き、こちらを睥睨するに収まっている。

「理由は後でちゃんと話す。全部な。だからいまは……行け、ヘキサッ！」

舗装された地面を踏み砕き、彼は高々と跳躍した。

一挙動でレイヴンの元に跳んだ彼は、青白い残光を纏った剣を振り下ろす。甲高い音が響き、余波で空気が激しく振動した。

「話し合いは終わったか」

「どつという風の吹き回しだ。お前がお行儀よくしてるなんてな」

デュオの剣はレイヴンの手前で止まっていた。

否、止められていた。

紙だ。彼は右手の紙で、デュオの斬撃を防いだのだ。手を伸ばせば触れられる距離で、鏝迫り合う二人の少年。

「おいおい。オレだって空気くらい読むって。やればできる子なんだぜ？ オレは」
「っざけるッ！」

剣を振り抜く。

自ら後方に跳ぶレイブンとの間を刹那にして詰め、首元目掛けて剣先を跳ね上げる。しかし、その一撃はまたしても防がれた。

「あーあ。そもそも手前は、今回のパーティーに招いた覚えはねえんだけどなあ」

”紙の短剣”で片手剣を受け止めたまま、器用に肩を竦めて嘆息するレイブン。

「まあ、いいさ。飛び入り参加は祭りの醍醐味。せいぜい楽しんでいってくれやー!!」

短剣の刀身を滑らせ、返礼とばかりに切っ先を突きだす。頸動脈を掻っ切るうとする刃を、首を捻ることかわすと逆襲の一撃を見舞う。

そこからはヘキサの踏み込むことのできない領域の戦闘だった。

白髪の少年の本当の意味での戦いを見るのはこれが初だが、自分とは桁が違う戦いに棒立ちのまま見入ってしまう。

「早く行け！　ヘキサー!!」

戦闘状態を維持したまま声を張り上げる。

ふとその声に我に返ったヘキサは、踵を返して一直線に駆け出した。その背中を茶髪の少年の声が打った。

「おい、その新参！　ひとついいことを教えてやる。街にバラまいたモンスターは、ほとんどが10界層クラスの雑魚どもだ！　が、それだけじゃあ面白くないんで、何体か『当たり』を混ぜておいた。

遭遇しないことを祈るんだなッ！」

嘲笑するかのような言葉に奥歯を噛みしめる。

見慣れたはずの街並みが変わっていった。幸いにもモンスターの姿は見えないが、ときおり人間のモノではない叫びが耳に響いてくる。

走りながら周囲に視線を配ると、逃げ遅れたNPCたちが必死の形相で逃げ惑っている。申し訳ない話ではあるが、彼はその姿にほっと胸を撫で下ろした。

これならいまごろライラも、どこか安全なところに避難しているだろう。できれば合流したところではあるが、連絡手段がない以上は無理だ。

いまは自分の安全を優先しよう　そこまで考えて、ヘキサはなにか重要なことを忘れているような錯覚に襲われた。

見落とせば致命打になる。胸に渦巻く不安に彼は考えを巡らした。なんだ。なにを忘れている。思い出せ。

ライラが逃げる。

そこに違和感を感じるが、それがなにかが判断できない。そもそもおかしいことなどあるようにも思えない。自分の勘違いではないのか。

自問自答するヘキサ。

冷静になって整理してみよう。

逃げるとしたらその手段はなんだ。もちろん、走ってに決まっている。他に手段はない。ここは現実世界ではないのだ。自転車も車も存在していない。

走る？

その単語に総毛だった。

どうやって。だって、ライラは……右足が……ッ！

真っ白になる意識に反して、身体は半ば自動的に動いていた。空中にマップを展開させ、現在の位置とライラの店の座標をマーカーで表示させる。

黒髪の少年は急制動をかけると、横の裏路地に跳び込んだ。頭からはマリーゴールドのことなど消え失せていた。

ただただライラの無事だけを願い、彼は全速力で混乱の坩堝と化した街の中を駆け抜けた。

三章 凶刃と英雄狂（5）（後書き）

どうも、祐樹です。

これで三章は終了です。

いよいよ次の章で長かったプロローグも完結予定です。

……おかしいですね。内容は大体予定通りなのに、分量が何故か予定の倍以上になっていたりします。

いつものことだと言ってしまうえば、それまでですけど。

それでは、また次章で会いましょう。

あ、それと、感想をいただけると嬉しいです。なによりの励みになりますからね。

ではでは。

四章 誰がための剣(1)

「 酷い」

モンスターが徘徊する魔都と化した街並みを見下ろし、少女は目を伏せると悲しげな吐息を洩らした。

「派手にやらかしてるな」

「そうね。間に合わなかったわ」

彼女は目の前の惨状に唇を噛みしめた。胸元の両手は固く握られ、血の気が失せて白くなっている。

「知らせがきたタイミングがタイミングだし、仕方がないって。むしろ、襲撃に間に合っただけ、運がよかったと思うんだな」

まさに紙一重だった。報の届く時間が前後にズレていたら、自分たちはここにはいなかった。結果的に被害もさらに拡大していたはずである。

「それにまだ終わったわけじゃない。これから挽回すればいいだけだろ。モンスターを一掃して、犯人をぶちのめす。それで解決だ」
「……ええ。そうね」

違うか？ と問いかける少年に、彼女は身に纏っているクロークを靡かせた。白いクロークの裏には、合計で七本の杖が格納されている。

鈍い光沢をした金属製の短杖で、先端にはそれぞれ違う色の宝石が嵌められていた。彼女はその中から、緑色の宝石が象嵌された短杖を引き抜く。

くるくるとバトンのように短杖を回転させると、眼前で構えて目を閉じた。可憐な唇が空気を震わせ、短杖の先端の宝石が明々する。ざわりと大気が揺れた。金属杖から色のない透明な波動が放射状に広がり、街全体をすっぽりと包み込んだ。

「どんな感じよ？」

「やっぱりモンスターは街の全体に展開してるみたい。数は多いけど単体の強さはさほどでもないわ。ただそのうち何体か、生命子が極端に高いのが混じってる。生命子の量から判断するに、おそらく30界層クラスだわ」

まるでドウナ・ファムを俯瞰しているかのように、淀みない口調でモンスターの位置座標を口にする。流星に現在の場所からだとは固情報までは把握できないが、位置を特定するくらいならば朝飯前だ。

「ふうん。ここら辺の連中が相手するにはキツいな」

「それから この反応。あいつら……!!」

舌打ちする。露骨に顔をしかめる少女に、少年は口に啜えた煙草を揺らした。

「やっぱりいたか？」

「いる。レイヴンにパルマ。カイリもいるわ」
「こりやまた、豪勢なことだ。問題児が勢ぞろいってか」

常日頃から彼女から問題児扱いされている自分のことを棚上げすると、煙草から紫煙を燻らせて、楽しげに口の端を歪めた。

「……不謹慎」

「失礼。性分なんでね。勘弁してくれ」

ジト目に肩を竦める。

戦力としては申し分ないのだが、この性格をなんとかしてくれないかと思うのは、こちらの求めすぎなのだろうか。

もっとお仕置き 物理的な意味で すれば矯正できるかしら、と怖いことを考えながら、張り巡らした網に意識を集中させる。

魔法の効果範囲を維持しつつ、索敵対象を前述の三人に変更する。

いま彼女の脳裏には、ドーナ・ファムの立体的な画像が浮かんでいる。細部までは再現されていない大雑把なモノだが、対象の行動を把握する分にはこれ十分だ。

指紋や声紋が人によって異なるように、生命子の波長にも個人差が存在しており、それは生命子が膨大になるほど顕著になる。

あらかじめ生命子の固有反応を記憶しておくことで、広範囲の索敵でも個人の識別が可能になるのだ。

どうやらレイブンとパルマは合流しようとしているようだ。二人の座標を示すマーカの距離が縮まっている。

カイリは わからない。一見すると闇雲に彷徨っているように思えるが、なにか目的があるのだろうか。

それと気になることがもうひとつある。どうもレイヴンの動きが変だ。パルマと合流しようとしているのだろうが、その移動ルートが一直線ではないのだ。

法則性のないジグザクのルートに小首を捻る。加えて、彼と併走する反応がひとつ。ふたつの反応は近づいたり離れたりを繰り返している。

「ひよつとして誰かと戦っている？」

しかし、誰と？

少女の知る限り、レイヴンと互角に戦える人物は少ない。そんな人物が用もなく、こんな低層にいるとは思えないのだが。

気になった彼女は、そちらの反応に索敵対象を切り替え、

「え？ うそ……なんで、ここに……？」

膨大な生命子の反応に瞠目した。

現在、この街から感じる固体としては最大の生命子だが、彼女が驚いたのはそこではなかった。その生命子の波長が、彼女の知る人物と一致したのだ。

「勘違い？ ……ううん。やっぱり、そうだわ」

「どうした？ なにか問題でも発生したか？」

切れ長の目を瞬かせる少女は、顔を少年のほうに向けると端的に言った。

「デュオがいる。レイヴンと戦ってるみたいだわ」

「……はあ？ なにやってんだアイツ」

書き置き一枚だけを残して、突如として自分たちの前から姿をくらました白髪の少年。今頃、なにをしているかと思えば、ここでその名前を聞くとは。

これも主人公体質のなせる技なのか。

「私たちよりも先に気づいた？ ……いえ、だとするとこっちに連絡がないのにおかしいし。いくらなんでも一人で突っ込んだりはしないはずだわ」

過程がわからない仲間の行動に、少女は爪を噛むと反応のする方向を睨んだ。

白髪の少年には言いたいことがたくさんあった。相談もなく突然姿を消した理由もそうだし、いままでどこで油を売っていたのか問い質したい気持ちもある。

だが、いまはそれどころでないのも十分理解していた。

「私はデュオのところに行くわ」

モンスターの駆除も大切だが、なによりも主犯であるレイヴンたちを捕まえることが第一優先だ。こんな惨状を二度と作らせるわけにはいかない。

「愛しの王子様との再会か。胸が高鳴るな」

「ウン？ ゴメン。聞こえなかった。なにか言ったかしら？」

「いや。空耳じゃないか」

につこりとした笑顔に真顔で返す。

機嫌の悪いいまの少女に、迂闊な発言は命取りとはわかっているのだが、それでも茶化さずにいられないのは自分の性分なのだろう。

「ンで？ オレはどうすればいい？」

「カイリをお願い。それとモンスターも片付けて」

「おいおい……オレ一人で潰せってか。流石に無茶だろ。日が暮れちまうぞ」

単純に強さでいうのならば、彼だけでモンスターを全滅させることは可能だ。とはいえ、モンスターが散らばっている以上、一人では時間がかかりすぎる。

速やかに殲滅するには頭数が必要不可欠である。

「増援は呼んでるわ。しばらくしたらくるから、それまではよろしくねー！」

そう言い残して、少女はふわりと宙に舞った。

「それと、データーはそっちに転送しといたから。有効に活用して！」

制止する余裕もあればこそ。あっという間に霞んでしまった小柄な姿に、やれやれと肩を竦める。

「あらら。行っちまいやがった。なんだかんだ言って、アイツが心配ってか。そのうち胸焼けするぞ」

啜えた煙草を下に落とす。足で煙草の火を消しながら、データーマップを表示させる。画面は無数の赤いアイコンで点滅している。

「バラまきすぎだろ。処理するほうの身にもなってほしいぜ」

赤いアイコンの多さに帰りたくなかったが、そんなことをすれば待っているのは、お仕置きという名の惨劇である。これというのもすべては白髪の少年のせいだ。

戻ってきたら一晩中愚痴ってやる、と心決めて、どこからともなく出現させた大鎌を旋回させた。鋭利な曲線を描く刃が、獲物を求めて妖しく輝く。

「さて、と。そんじゃあ、お姫様に文句言われないぞには働きますか」

言っ、赤い衣を纏った少年は、モンスターが犇めき合う街に身を投じた。

四章 誰がための剣(2)

これは選択を誤りましたか、とライラは自分が置かれた現状を再確認し、目の前の光景にそう内心でつぶやいた。

小奇麗だった店内に、モンスターの唸り声が木霊する。

床には棚から落下して割れてしまった薬の瓶や、アイテムの類が散乱していた。

落下による破損を免れたアイテムも、モンスターに踏まれてしまい、大半のモノが壊れて使用不可能な状態になっている。

中身を床にブチまけた高価な回復薬をぼんやりと目つきで眺め、頭上から響いてくる獰猛な唸りにそちらを見やると、興奮に血走る異形の瞳と目があった。

店内に侵入した額から角を生やした熊のモンスターが、振り上げた腕をライラ目掛けて振り下ろした。

鋭い爪が金髪の少女の身体を引き裂く 直前、彼女を中心に展開された不可視の障壁が、角熊の攻撃を弾き返した。

グルル……ッ。苛立ちに喉を鳴らし、ホーンベアは両腕を振り回すが、その悉くが障壁に遮られ、ライラには届かない。

彼女の右手には、細長い金属板が握られている。錆色の金属板は仄かに発光し、金髪の少女の周りに防壁を発生させている。

モンスターを退ける障壁を発生させる結界アイテムである。

ホーンベアが店の壁をブチ破り、店内に入ってきた際に、衝撃で足元に金属板が転がってきたのは幸運だった。

こちらに突進してくる角熊の攻撃を障壁で防ぎ、後は見てとおりの膠着状態である。

ホーンベアの攻撃は金属板の効果で防げるが、自分のほうも目の前のモンスターを撃退する方法がないのだ。

店内には攻撃アイテムもあるが、それには結界の外にでなければならぬ。そんな悠長な動作をモンスターが許すはずがない。

加えて、この膠着状態がそう長くは続かないことを、ライラは理解していた。

視線を手元の金属板に落とす。効果を発動させた当初よりも、発光が鈍くなっている。それに耳を澄ませば、キシキシと小さな軋み音が聞こえてくる。

耐久力が限界にきているのだ。元々、低界層用の緊急回避アイテムで、長時間の使用は考慮されてはいない。

そうしたアイテムもあるにはあるが、店内に散らばったアイテムに混じって、どこにあるのかわからなくなってしまっている。

すべては判断ミスをした自分の責任だ。

外の異変に気がついたときには、すでにモンスターが街に解き放たれたあとだった。

その時点でライラに残されていた選択肢は、このまま店に立て籠もるか、安全地帯まで歩いて逃げるかの二択だけだ。

結果として彼女は前者を選択したわけだが、籠城のための準備をしようとした矢先に、ホーンベアの襲撃にあってしまったのである。

もし、あそこで店を跳びだしていれば　と考えると、ライラは静かに被りを振って自身の思考を否定した。

走れない自分の足で街に逃げたとしても、一度もモンスターと遭遇せずに、人のいるところまで辿りつけるとは思えない。

モンスターに見つかり抵抗する暇すらなく、殺されてしまうのがオチだろう。所詮、自分は奪われる側の存在なのだ。

哀れな一般市民でしかない自分に、戦う術などあるわけがない。

こういった事態に巻き込まれた段階で、自分の運命は決まっていたのだ。後は遅いか早いかの違いでしかない。

しかも、その時間もすでに尽きかけている。アイテムの効果が続いた瞬間、角熊の爪が自分の身を切り裂くだろう。

自分の生命が終わるその瞬間を予期し、そのうえで尚、彼女の表情が変わることはなかった。目前に死の恐怖が迫っているというのに、まるで動揺した気配が感じられない。いつもと同じ無表情がそこにはあった。

ピシリ、と金属板に亀裂が生じた。同時に展開されている不可視の障壁が揺らぎ、相殺できなかつた一撃の余波が、緩やかにカーブする金髪を乱した。

「……………限界ですか」

空気を震わせる声は、やはり醒めた音を響かせる。

障壁は持つて後、二発三発といったところだろう。それ以上は持つまい。これで終わりか。そう判断する思考も冷静で、心には小波ひとつ立たない。

ふと代わりに思ったのは、昔に読んだことのある絵本の内容だった。色褪せた記憶の中で、色彩を保つ数少ない思い出のひとつ。

悪い魔物に襲われたお姫様を助ける王子様。

それだけの話だ。どこにでもあるような作り話故の幸せな物語。物語だからこそその結末であることを彼女は知っていた。

知っているからこそ、助けがくる　なんて考えなど、ライラには微塵もなかった。

奇跡はあるかもしれない。しかし、それが自分とは関係のない世界の話だと、彼女は過去の出来事から痛感していた。

無意識のうちに右足を細い指先でなぞりながら、金属板を強く握りしめる。

助けはこない。自分を助けてくれる存在など元からない。いなのだが、何故か脳裏に過ぎる気の弱そうな顔があった。

「ふふ。まさかですね」

期待しているのか。彼が自分を救ってくれることを。度し難い。それこそ夢物語だというのに。……ただ、無事を願うくらいならいいだろう。

そのていどには交流があったと思うから。

バキンツ、と金属板が割れた。目には見えなくても、障壁が消えていくのが気配でわかった。なによりも、眼前のモンスターの圧力が、増したように感じられた。

自身を守る唯一の手段が失われ、死に抗う力も方法もない。

だからだろうか。

我ながら本当に度がし難いとは思っただが、

「ライラ ツ！！」

金属板が砕けた刹那、玄関をぶち抜き飛び込んできた黒髪の少年に、まったくもって不覚なことではあるが、一瞬だけ物語の主人公の姿を重ねてしまった。

玄関を蹴り破り、店内に踏み入ったヘキサは、勢いを殺さずに跳躍すると、ホーンベアに大剣を振り下ろした。

怒りが込められた刀身はギロチンの如く、角熊の野太い首を一太刀で両断する。

ゴトンと重たい音を立てて首が落ち、頭部を失った胴体が血を吐きだしながら、ゆっくりと床に崩れた。

その光景をライラは、信じられない想いで見つめていた。あるいはその一瞬だけ、心臓が止まっていたかもしれない。

それほどの衝撃を彼女は受けていた。死を確信しても顔色ひとつ変えなかった少女が、目を見開き呆けた表情をしている。

淡い粒子に変換されるモンスターの遺骸を傍らに、黒髪の少年は軽やかに着地した。鋭い視線で店内を見回し、他にモンスターの姿がないかを確認する。

そして、警戒態勢を維持したまま、ライラに駆け寄り 床に転がっていた硝子球を踏みつけて、勢いよくカウンターに顔面を打ち

つけた。

「はあ」

ライラの口から吐息が漏れたのも仕方がないことだった。

なんというか……流石に、これは酷い。物語が空想の特権だったとしても、やり方があるのではなからうか。

顔面を強打し、鼻から血を滴らせ、痛みから床をのた打ち回るへキサを横目に、ライラは思わず頭を押さえてしまった。

「まあ、彼らしいといえば、らしいかもしれませんが」

コンコンと頭を叩いてさっきの妄想を追いだすと、口元に微苦笑を湛えて、金髪の少女は右足を引き摺りながら、へキサに歩み寄った。

四章 誰がための剣(3)

想定外の痛みに顔面を押さえて身悶えていたヘキサは、傍の気配に伏せていた顔を上げた。涙で歪む視界に、金髪の少女が映る。

「……ライラ」

「貴方という人は、なにをしているのですか」

いつもの無表情と無愛想な物言いに、彼は心の底から安堵した。

「よかった。無事だったんだ」

「ええ。おかげさまで。なんとか無事ですよ。……むしろ、ヘキサのほうが大丈夫ですか。なにやらもの凄い音がしてましたが」

「こ、これくらいなんともないよっ」

理由がわからないが温度の低い視線に、ヘキサは慌てて鼻を嚙ると、大丈夫なところを見せようと立ち上がった。

一瞬、ふらりと眩暈を感じたが、それもすぐに収まった。背中に大剣を戻したときには、すでに鼻血も止まっていた。

「そうですか。よかった」

ほっとしたような吐息に、ヘキサは鼓動を早めて、

「これで玄関の修理費を請求できますね」

その一言で現実に引き戻された。

「え！？　そこ！　その心配なのっ！？」

「はい。きつちりと支払ってください」

真顔で肯定するライラに、わなわなと慄くヘキサ。まさかこの夕イミングで、修理費の請求をされるとは思わなかった。

「いやいや。つてか、なんで僕が払わなくちゃならないの。僕はライラを助けたんだよ！？　不可抗力でしょ！」

「でも、壊したのはヘキサですよね？」

冷静な一言だった。

「……まあ、その……確かに、僕だけどさ」

「あ。ついでに壁の修理費もお願いします」

「なんか増えてるぅー！？」

そのうち壊れたアイテムの代金まで、払わせられそうな空気だった。無茶振りを平然とする辺り、流石はライラだと驚きを隠せない。だが。

「平気そうで安心した」

本心だ。店の壁に大穴が開いているのを見たときは、正直生きた心地がしなかった。ひよつとした、もう　と最悪の事態に、青褪める思いだった。

「……無事だと言ったはずですが」

そうだけどさ、とモゴモゴと口の中でつぶやきつつ、きよるきよると周囲を見回す。彼が感知できる範囲内にモンスターはいないようだ、それとて安心できるモノではない。

茶髪の少年が言っていた『当たり』とやらも気がかりだ。早急にライラを安全な場所に連れて行く必要があった。

「ライラ。修理費の話は後だ。まずはここから逃げないと」

「それもそうです。……では、こちらはもう結構ですので、早く

”行ってください”

「……ねえ、ライラ」

金髪の少女の言葉に不吉を感じたヘキサは、確かめるような口調で問うた。

「もちろん、ライラも一緒に逃げるんだよね」

「いいえ。行きません」

しかし、問いに対する返答は否定だった。

「私はここに残ります。ヘキサは一人で逃げてください」

「ごめん。意味がわからない」

正気とは思えない。

いつまたモンスターが現れても不思議ではないのだ。それなのに一人で残るなどと、自殺行為だとして考えられなかった。

「ヘキサも知っているでしょう。私は走れません。足手まといになるだけです」

「だから残るっていうの？」

「安心してください。私とて自分から死ぬつもりはありません。幸いここには対モンスター用のアイテムがあります。準備さえ怠らなければ、そうそうやられたりはしませんよ」

窓の外に視線を向ける彼女の顔には、いつものように表情がなかった。知らずヘキサは噛みしめた奥歯を鳴らした。

何故だろう。その無表情に安堵を抱いていたのに、いまはそれが無性に腹立たしくて仕方がなかった。

「ふざけるな」

喉の奥から搾り出すような声だった。自分の声とは思えないしやがれた声が、沈黙する室内の空気を小さく震わせた。

「ふざけてなどいません。まったく。聞き分けのない駄犬ですね。

貴方は早く逃げなさい。……間に合わなくなりますよ」

「ライラッ！！」

「それから修理費ですが、私が生きていたらでいいですよ」

その一言でヘキサは完全にキレた。

「ヘキ きゃっ!？」

ヘキサは無言でライラに近寄ると、彼女の背中と両脚に手を回し、有無を言わずに抱きかかえた。

所謂、お姫様抱っこである。これは流石のライラも恥ずかしいのか。白い頬を紅潮させると、ヘキサの胸をぽかぽかと両手で叩いた。

「な、なにをッ。くっ、離しなさい。駄犬！ 本当に矯正しますよ

!？」

ジタバタと全身を使って暴れるライラだが、仮にも探索者であるヘキサを振り解くには至らなかつた。

「うるさい」

普段のヘキサからすれば大胆すぎる行動だったが、頭に血が上っているためなのか、気後れは一切感じなかつた。

「一人で逃げる？ つぎけんな。なんのためにここまで来たと思ってるんだ。これでスゴスゴ引き返すなんて、ただのお間抜け野郎じゃないか」

そんなのは嫌だ。それではライラを助けにきた意味がない。そもそも彼女の足が不自由など、こちらは先刻承知しているのだ。

尚も腕の中で喚くライラの罵倒を無視し、ヘキサは彼女を抱きかかえたまま、壁に開いている大穴から外にでると、マリーゴールドに向かって駆けた。

道中、ライラがいることもあり、彼は細心の注意を払いながら左右に視線を配る。少しの違和感も見逃すまいと、瞬きすら惜しんで注視した。

視界に二重写しで表示されている【解析】画面を確認しつつ、一秒でも早くマリーゴールドに到着しようと、ヘキサは息を乱しながら走り続けた。

いまの状態でモンスターに遭遇する事態は避けたかった。

両手が塞がっているのは咄嗟に反応できない場合もあるし、ライラを危険にあわせる可能性をできるだけ排除したいという考えもあっ

た。

なによりも怖いのが、レイブンの言うところの『当たり』である。ときおり【解析】スキルの有効範囲内に入ったモンスターが反応するのだが、解析不能の文字を見たときは冷や汗が止まらなかった。

現在、ヘキサは20界層までのモンスター情報を、【解析】にインストールしている。つまり解析不能ということは、確実にそれよりも上層のモンスターだということである。

とてもではないが、やりあつて勝てる相手ではない。しかも、有効範囲から逆算するに、相手との距離がさほど離れていないのは明らかである。

壁に背中を預けて、そつと先の通りを覗き、モンスターがいないのがわかると、物陰から飛び出して次の建物まで走りぬける。

ずっと全力で走っているためか、全身から汗が噴きだし、額からは玉の汗が滲んでいる。目に入るのが鬱陶しいが、両手が使えないので拭うことすらままならない。

と、下から伸びてきた腕が、手に持ったハンカチでヘキサの汗をそつと拭った。

「本当に強引なんですから。……まさかとは思いますが、他の女にもこんな風に迫ってるのではないでしょうね」

口から吐きだされる言葉は相変わらず痛烈だが、汗を拭く動作は丁寧だった。

「ライラ……その……」

「いまさらなにか言うつもりはありませんよ。……その代わりしつ

かりと連れてってください」

苦い笑みを浮かべるライラに、彼は真剣な面持ちで頷こうとし、

「おや？ ここにも逃げ遅れた人がいましたか？」

ふいに響いた声に、ぞくりと背筋が総毛だった。

弾かれたように振り返ると、いつの間にかそこには、柔和に微笑む少年の姿があった。線の細い顔立ちをした、穏やかそうな好青年だ。

「怪我はありませんか？」

こちらを心配するような仕草をするが、ヘキサは無言で後退った。レイヴンのとくと同じだ。本能が眼前の人物に警鐘を鳴らしている。

「ふむ。大丈夫そうですね」

にこにここと笑う。爽やかな笑みだったが、いまの状況を考えると、ヘキサにはその笑みが不気味なモノにしか見えなかった。

「それですね。初対面のところ申し訳ありませんが 死んでくれませんか？」

一歩で間合いを詰めると、にこやかに微笑む少年は、驚愕する黒髪の少年に右手のナイフを一閃した。

四章 誰がための剣(4)

その一撃を回避できたのは偶然でしかなかった。

最初からヘキサが警戒していたこと。反射的にライラが体重を後ろに傾けたこと。なによりも相手が本気ではなかったこと。

それらの事柄が重なった結果、狙いが逸れた切っ先は、黒髪の少年の背後にあつたモニュメントを切り裂いた。

まるで熱したナイフをバターに押し当てたかのように、金属製のモニュメントに斜めの線が生じ、上半分が滑るように落下した。

鏡のように滑らかな切断面には、驚愕の表情を浮かべるヘキサの顔が映っている。

恐ろしいまでの切れ味である。ナイフをどのように使ったら、このような凄まじい切り口を作られるのか、まったく想像がつかなかった。

「ほう。外しましたか。中々の幸運に恵まれた方々ですね」

手元のナイフとヘキサたちを交互に見やり、感心した様子で言葉を洩らす少年は、彼に抱えられている少女に目を細めた。

「その君。その少女を殺しなさい。そうしたら君は見逃してあげますよ」

状況の推移を一切無視した一言に、ヘキサは恐怖すら忘れて呆けてしまった。言葉の内容に衝撃を受けたというよりは、純粹になにを言われたのか理解できなかった。

「偶然とはいえ、ボクの一撃をかわした褒美です。それとちよつとした余興ですよ。ただ殺したのでは面白くないでしょう」

「……本気で言ってるのか？」

「はい。そうですが……それがなにか？」

「頭がおかしいだろ、お前」

嫌悪感を露にするヘキサの言葉に、意味がわからないと言いたげな調子で、微笑する少年は小首を傾げた。

「そうですか？ 君からしても悪い話ではないと思いますが。……見たところ彼女はNPCのようですね」

笑う。それしか感情がないとしか思えないほど、ナイフを持つ少年は笑っている。

「NPC一人を殺すだけで、自分の命が助かるんです。こんな好条件なんて、滅多にありませんよ」

今日は機嫌がいいので、ボクからの大サービスですよ、とナイフをチラつかせる少年に、しかしヘキサの答えは決まっていた。

「お断りだ」

「……本当に？」

「当然」

それ以外の答えなど持ち合わせていない。

「へキ」

「ライラは黙ってる」

話の途中で強引に打ち切る。

どうせろくな話ではないのだ。聞くだけ無駄である。

彼女を犠牲にしてこの場を生き延びて、それでなんになるというのだ。一生後悔するのは目に見えている。それにそれでは、彼に顔向けできない。

目を閉じれば鮮明に思い出せる。黒い襟飾りに大きな白い背中。あの背中を指す者として、他者の犠牲を許容するわけにはいかない。

「そうですね。だったら仕方ありませんね」

ふつつと吐息をひとつ。くるんと回したナイフを逆手に持ち替えて、にこやかに笑う少年は静かに言葉を紡いだ。

「さようなら」

反応する間すらなかった。

額を貫かんとするナイフが振り下ろされる　その刹那だった。

「ハッハ　ッ！！」

上空から快活な声が降ってきた。

太陽の残光である白い軌跡が目には焼きつく。頭上からの強襲にはじめて顔色を変えた少年は、バネ仕掛けのような動きで跳ね跳んだ。

曲線を描く刃が空を斬り、地面を深く切り裂いた。軽やかに着地した闘入者は赤い衣を靡かせると、大鎌を肩に担いでヘキサのほうを振り返った。

「よう、ご両人。間一髪ってか」

野生的で精悍な表情をする少年だった。

長めに切られたボサボサな金髪。刃物を連想させる三白眼の瞳。

ローブに軽装鎧を合わせたような赤と白の装束を身に纏い、どこかけだるげな雰囲気を漂わせているが、その立ち振る舞いには隙が微塵も感じられなかった。

「我ながら神がかり的なタイミングだな、おい」

「まったくです。実は登場の機会を窺っていたのでは？」

茶化したような物言いに、微かな熱を含んだ声色が重なった。

「これはまた、誰かと思えば。お久しぶりですね、ナハトさん」

「はっ。オレは二度と会いたくなかったけどな。カイリ」

どうやら二人は既知の間柄らしい。彼の語調にはヘキサたちのときとは違い、ある種の親近感にも似た響きがあった。

「残念です。君はこちら側の人間だとばかり思っていましたけど……。いつから趣旨を変えたので？ 随分と”らしくない”ことをしている」

「ああ。それについては同感だ。こういうのは”アイツ”の専売特許なんだがな。なんだってオレがこんな役割、やらされてるのかね」

ナハトと呼ばれた少年は嘆息して肩を竦めると、やれやれとばかりに首を振る。

「ま、いまさら文句言っつて、どうこうなるわけでもない。お姫様からの頼みごとを断ると後が怖いんでね。これからお前をマリーゴールドに引き渡して、オレは報奨金で憂さ晴らしと洒落込むさ」

だから、と言葉を切り、大鎌を頭上で旋回させた。鋭い刃の先端を笑う少年に向けて、厳かに結末を宣告する。

「抵抗するなよ。生け捕りにしたほうが、高く売り渡せるんだからな」

凶悪なプレイヤーに対しては、ときにマリーゴールドが賞金首として、報奨金をかけるときがある。賞金の額は対象の危険度に比例するが、殺すよりも生かして連れきたほうが、得られる額が多いのが一般的だ。

「賞金首、ですか。勝手なことをしてくれませよ」

「喜べよ。また額が上がってるぜ」

「ホント酷いですよね。たかだが五十人ていど殺したくらいで、人を血に飢えた猛獣扱いですよ？ 拳銃の果てに切り裂き魔リップパーなどと、不名誉な名前で呼ばれるようになっていましたし。失礼だとは思いませんか？」

「相変わらずいい具合に壊れてやがるな。一度病院で診てもらったほうがいいんじゃないかな。なんだったら、一生入院してる。きっと世界平和に貢献できるぜ」

と、そこでナハトは状況の変化についていけず、放置状態だったへキサたちを見やり、おどけたような口調で言った。

「ってなわけだ、お二人さん。盛り上がってきたトコで悪いが、そろそろご退場願おうか。流石に片手間にやりあうのはダルいんでね」

へキサはライラとナハトを交互に見た。

「行きましょう。へキサ」

ちよんちよんとライラがへキサの腕を引っ張る。彼女の綺麗な瞳の中の自分は、顔を歪めて泣きそうに見えた。

「……うん」

白髪の少年のときと一緒だ。自分にできることはなにもない。役に立てない。できることは逃走だけ。いるだけで邪魔になる。

僕は脆くて、そして弱い。

「あの……ナハト、さん、ですか。……その、ありがとう」

「気にするな。これも頼まれごとの一環で、やってるだけだからな」

ひらひらと手を振るナハトに小さく頭を下げ、ライラを強く抱え、とその場から、脱兎の如く駆けだした。

黒髪の少年の背中が見えなくなったのを見送り、ナハトはナイフを構えるカイリに視線を戻した。

「あっさり行かしたな」

「よく言う。下手に手をだしたら、その隙を狙うつもりだったのでしょ」

「見つけた以上、見殺しにするとお姫様のお仕置きが待ってるんでね。あんな拷問紛いのお仕置きに悦ぶのはアイツだけで十分だ」

「……変わりましたね」

顔に張りつかせていた微笑がなりを潜める。

「以前の君はもっとギラギラしていました。なにかに突き動かされていたと言ってもいいほどに。少なくとも他人と行動を共にするよ
うな人ではなかった」

「……かもな。まあ、いまの境遇にはそれなりに満足してる。アイ
ツらと馬鹿やるのは面白いし。楽しませてもらってる分は働いてや
るさ」

「ボクとしては疲れるだけなんで、遠慮したいところなんですがね」

カイリはポツリと言葉を零すと、振られた大鎌にため息を吐いて
回避行動に移った。無人の広場に金属音が響き、弾けた鮮血が地面
を紅く濡らした。

四章 誰がための剣(5)

すでに大半が避難をした後なのか、街は無人でまるで廃墟のような有様だった。否、事実として街は大部分の機能を失っていた。

建物は破壊されて中には原型を留めていないモノもある。綺麗に舗装されていた地面は、あちらこちらが抉られ穴ぼこだらけで、走りづらくて仕方がなかった。

さらに最悪なのは、街を囲うように配置された七基の結界発生装置のうち、五基が破壊されて、結界の機能が消失してしまっていることだ。

タリスマンは云うならば、ライラが使った錆色の金属板の強化版である。

障壁には外部からのモンスターの侵入を遮断する効果と、なにかしらの手段で内部に持ち込まれたモンスターの能力を低下させる効果がある。

これによって万が一、モンスターの進入を許してしまった場合でも、被害を最小限にすることができるのだ。

大規模の街には必ず配置されている装置であり、複数の機構を共鳴させることで街そのモノを包む、巨大な障壁を展開させられるのだ。

ヘキサも見た最初の爆発は、この結界発生装置を破壊するための

モノだったらしく、七基中三基が大破、二基が中破状態にある。

一基や二基ならば他の装置で一時的に代用することも可能なのだが、流石に半分以上が動かないとあっては、結界を維持するのは不可能だった。

犯人は間違いなくレイヴンだろう。さっきのカイリも一枚噛んでいるかもしれない。どちらも推測の域をでない考えではあるが。

「……くそがつ」

荒々しい罵りを抑えることができない。

それは街をめちゃくちゃにした犯人に対するモノであり、情けなくて不甲斐ない自分自身に対する怒りでもあった。

カイリに殺されかけたとき、ナハトが現れなければどうなっていたのか。答えなど推測するまでもなく明白だった。

自分は弱いなど百も承知だ。10界層をクリアしたばかりの探索者で、レベルだってまだまだ下から数えたほうが全然早い。

上を見上げれば数え切れないと理解しながらも、それでも抑えきれないモノが胸の奥からふつふつと溢れでるのを止められなかった。助けると言っておいて、結局自分は誰かに助けられてばかり。助ける側の人間ではなく、助けられる側の人間だと、嫌というほど認識させられた。

本当に彼女を無事にマリーゴールドまで運べるのか疑わしく感じられる。できることならば、いつそのこと誰が別の

「へキサ？」

沈みかけていた思考が、その一言で引き上げられた。気がつけばヘキサは走るのを止めて、道のと真ん中で棒立ちになっていた。

「ゴメン。考えごとした」

「……すっかりしてください。寝惚けるのは安全が確保できてからにしてくださいませんか？ いま襲われたらひとたまりもないですよ」

そのとおりだ。一人で勝手に落ち込んだ挙句、不意を突かれてモンスターに襲われるなど、当初の目的を忘れた本末転倒以外の何物でもない。

「わかってる。早く行こ」

突然、視界に出現した赤い二重円に言葉が途切れた。モンスターの示すカーソルがゆっくりと移動している。位置的には右斜め前の建物の裏側だ。

反射的に離脱を図るヘキサだったが、初動の遅れがそのまま命とりになった。

赤いカーソルが建物の裏でピタリと静止し、直後、建物の壁が粉々に吹っ飛んだ。内側から破裂するかのような激しい衝撃に、砂埃が舞い瓦礫の破片が撒き散らされた。

壁をブチ破り勢いを落とすことなく、見上げるほどの巨体がこちらに向かって突っ込んでくる。地響きを響かせて迫る巨体に、ヘキサは硬直する身体を強引に動かすと、力いっぱい地面を蹴って跳んだ。

まるで巨大な石の塊だ。真横を高速で通過する圧力に、彼は胸のライラを庇うようにして、地面に這いつくばってやりすごした。

暴風がおさまるのを待つて面を上げると、興奮に血走る縦長の瞳孔と目があった。そこにいたのは、両手に巨大な斧を持った、二足歩行の牛の化け物だった。

一目で内に秘めた怪力を把握できる発達した筋肉。灰色の肌から発せられる熱で、周囲の光景が歪んで見えた。

ミノタウロス。彼に判別できた情報はそれだけだった。その他の情報に関してはすべてが不明。解析結果も判別に失敗している。

それは【識別】にインストールされていないモンスターであり、いまのヘキサでは実力差がありすぎて、独力では詳細データを探れないということだ。

これがレイヴンが言っていた『当たり』なのだろう。

ただし、不可解なことにミノタウロスは、万全の状態ではなかった。誰かと戦闘を繰り返した後なのか、全身に決して浅くない傷を負っていた。

身体中の裂傷から血を滴らせ、フーフーと荒い鼻息を吐いている。牛の頭部の両側から生えている捻れた角も、片側は根元から折れ、もう片側にも薄くヒビ割れていた。

モンスター故の強靭な生命力でまだ立っているのだろうが、これが人間だったらとうの昔に死んでいるだろう。

ブモオオオオツ！！ ミノタウロスが吼え、薙ぎ払われた斧が、瓦礫を木の葉のように巻き上げた。

そして、ヘキサが覚えているのはそこまでだった。

ふと我に返ってみれば、彼は不法侵入した家の中で、息を殺して蹲っていた。おそらくミノタウロスから無我夢中で逃げ回った結果

なのだろうが、よく無事だったモノである。

「ッ。ヘキサ、痛いです。力を緩めてください」

無意識のうちに、強く抱きしめていたようだ。耳元で囁かれて、慌てて両腕から力を抜いた。

「……ここは、どこかな？」

「さあ、どこでしょうか。なにしろ私の言葉など耳に入っていない様子で、あのモンスターから逃げ惑っていましたから」

「逃げ切れたのかな」

「さあ、それはどうでしょう。私としては樂觀視するには、状況が逼迫していると思いますが……ヘキサには聞こえませんか」

言葉の意味がわからないヘキサだったが、すぐに理解させることになった。遠くのほうで連続して破壊音が木霊している。

理屈ではなく直感で、彼はその音の発信源がさきほどのモンスターだと悟った。

ヘキサがライラ。あるいは二人共かもしれないが、どうやらミノタウロスに補足されているようだ。一時的に見失っているのだろうが、音は確実に近づいてきている。

「よくもまあ、こうも次から次にイベントを起こせますね。呆れを通り越して関心してしまいます。実は呪われているのではないですよね」

冷静な一言に反論できないところが痛かった。今度、厄払いをしてもらいに、教会に行こうかと真剣に悩んでしまった。

「ヘキサ。時間がないので簡潔に言います。私をここに置いて行きなさい。貴方一人だけなら、逃げ切れるかもしれません」

「お前、またそんな」

「聞けと言ったでしょう。私は可能性の話をしているんです。そうそう都合よく、助けがくるはずがない。このままでは共倒れです」

客観的に状況を見るのならば、ライラの言っていることは正しい。それくらい考える頭はヘキサにだってあるが、それを受け入れられるかは別問題である。

「それともなにか妙案でもあるのですか？ この状況を打開する考えが。……ないのでしょう？ だったら、素直に私を」

端的な物言いだった。

虚を突かれたライラを床に下ろすと、ポーチに手を突っ込んで金属板を取り出した。彼女が店で使っていたアイテムと同種のモノだ。

気休めにしかならないだろうが、ないよりはあったほうがマシだろう。

起動させたそれを彼女の傍に置くと、続いて呼びだしたシステムブックを開き、補充したばかりの回復アイテムをまとめてポーチに移す。

その他にも使えそうなモノを片っ端に詰め込む。

「なにを……しているのですか……？」

「あいつを倒してくる」

「……貴方、馬鹿ではありませんか」

直球に直球で返すライラ。無謀としか思えなかった。素人である自分ですらわかる。いくら相手は半死状態とはいえ、彼よりも遙かに格上の存在なのだ。

「目を覚ましなさい。貴方は英雄ではありません。過ぎた願望は身の破滅を招きますよ」

知っている。誰よりも自分自身が理解している。しかし、ここだけは譲れない。この一線だけは退くわけにはいかなかった。

自分を無視して黙々と準備を整えるヘキサの姿に、業を煮やしたライラの甲高い声が、部屋の空気を震わせた。

「私は貴方が心配だと言ってるんです！ どうしてそれがわからないんですか！？」

耳朶を打つ声にヘキサは手を止めた。ライラの怒号を耳にするのは、これがはじめてだったが、できればいままではなくて違う状況下で聞きたかった。

四章 誰がための剣(6)

止めていた手を再び動かすと、意図的にライラの顔を見ないようにしながら、ヘキサはゆっくりと口を開いた。

「わかってる。僕は弱い。そんなこと散々、思い知らされたさ。……でも……それでも、僕は行く。行かなくちゃ駄目なんだ」

「何故ですか。……そもそも貴方はどうしてそこまで、私の生死にこだわるのです。二ヶ月にも満たない付き合いですよ。たかだがそのていどの浅い関係に、命を賭ける価値があるとは到底思えません」

「僕にはある。あると思ってるから戦うんだ」

「本当に貴方は意味のわからないことを。……それともひよっとして貴方、私に惚れてるのですか？ だから無謀な戦いに挑もうとしているのですか？ でしたら、残念なお知らせですが、私は貴方のことを好きでも嫌いでもありません。わかりますか？ 私とヘキサは所詮、商売上の付き合いでしかないのですよ」

捲くし立てるように言葉を吐きだすライラ。普段の平坦な話し方からは、想像もできない感情のこもった語調だった。

「なんでしたら、お情けで一回くらいなら抱かれてあげてもいいですよ」

「……ライラこそ、なんでそんなに投げやりなんだ」

パタンとシステムブックを閉じる。役目を終えて消滅する”本”

を見ながら、ヘキサは淡々と言葉を紡いだ。

彼女の露骨な挑発に、怒りよりも疑問を感じてしまう。

「諦めるなよ。確かに僕は頼りないさ。信用してくれなんて言える身分じゃないけど、頑張つてライラを守るから」

「現実を見なさい。努力では覆せないことも世の中にはあります」

ライラを守りたいヘキサに、ヘキサに無謀な行いをしてほしくないライラ。互いが主張を変えない以上、二人の会話はどこまでも平行線だった。

「前にも言ったでしょう。私は自分の不手際に他者を巻き込むのが我慢できない性質なのです。私の不運にヘキサを巻き添えにするつもりはありません」

「……僕はいつも助けられてばかりだった」

唐突な言葉にきよとんとするライラを横目に、黒髪の少年は独白するような調子で、暗い天井を見上げながら言葉を洩らした。

「いつもそうなんだ。……今日だけで何回助けられたか。もう嫌なんだよ。誰かに助けられてばかりなのは。不相応だとは思っけど、僕は助ける側になりたいんだ」

「結局、ただの偽善ではないですか」

「そうかもしれない。でも、いいんだ。そうなりたいて思ったのは本当だから」

憧れた背中がある。焦がれた想いがあつた。自分もあなりたいたいという感情は、なによりも強く衝動として、彼の根本で脈打っている。

だからこそ戦おうと決めた。力不足だろうが、不資格だろうと、

いま彼女を守るために戦えるのは自分だけなのだ。

「もつとも……他の人に聞かれたら、NPCのために命張るなんて馬鹿な奴だって言われそうだけどね」

たかだかNPC、そういうプレイヤーも中にはいるだろう。だが、少なくともヘキサに限っていえば、NPCはただのモブキヤラクターではない。プレイヤーと同じ人間なのだ。

「いまなんていいましたか？」

黒髪の少年の独白じみた言葉にしかし、ライラは眉根を寄せると片手で耳を押さえた。

「一瞬だけ耳鳴りがして、聞こえなかった部分があったのですが」
「……それならそれでいいよ。どうせ大したことじゃないし」

耳鳴り、と彼女は言っているが、その現象がなんなのかヘキサは知っていた。プレイヤーの間では、フィルターと呼ばれる現象だ。

MMORPGによくある禁止用語対策のようなモノだ。チャットなので特定の単語を表示させないようにするアレである。

ライラのような俗にNPCと呼ばれる存在は、『NPC』や『現実世界』などの言葉を認識できないようになってきているのだ。

さきほどのヘキサの発言も、フィルター対象の部分が認識できず、彼女にはその箇所だけ口パクで話されたように感じたのだろう。

プレイヤーとNPCを分かつ、相違点のひとつである。

「まあ、いいでしょう」

前のめりになっていた上半身を壁に預けると、毒気が抜けた様子でライラは言った。

「もう知りません。そんなに死にたいのなら、勝手に野垂れ死にすればいいでしょう。人の忠告を無視する駄犬には、ある意味お似合いの最後かもしれませんよ」

とはいっても、ヘキサの態度に思うところがあるのか、不機嫌そうに唇を尖らせると視線を横に逸らしてしまった。

さつきよりも破壊音が大きい。ミノタウロスが近づいている証拠だ。残されている時間は幾ばくもなかった。

ヘキサはライラに向かって口を開き、喉の奥につつかえている言葉を吐きだすことなく、そのまま飲み干してしまった。

「仕方ないですから待っていてあげます。早く 迎えにきなさい」

「……うん。すぐに片付けてくる」

「戻ってきたら一回ヤラせてあげましょうか？ ちなみに私は処女です」

「……遠慮しておきます」

妙に長い沈黙の後のお断りだった。

「なんでそこで、急にヘタレるのですか」

温度の低い声だ。ライラに背中を向けているのに、彼女がどんな顔をしているのかわかるような気がして、ヘキサは脂汗をかくと俯いた。

「そこまでカツコつけたのなら、最後まで突き通しなさい」

拳句の果てに駄目だした。これだから……、なんて嘆息が聞こえてくる。白茶けた雰囲気胸に痛かった。

だが、こんなモノなのかもしれない。

自分は英雄ではない。いまの自分には 大変遺憾ではあるがこれくらい、シリアスになりきれない雰囲気相応しいのだから。

「じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい。退屈ですから、早く戻つてきてください」

ひらひらと手を小さく振るライラに見送られて、ヘキサは空き家から外にでた。奇しくもドンピシャのタイミングだった。

通りに跳びだしのとほぼ同時に、向かい側の建物の壁を破壊して、怒りに狂う傷ついたミノタウロスが姿を現した。

はち切れんばかりに膨張した筋肉の熱で周囲が歪む。全身から血を滴らせ、陽炎のような揺らめきを纏うミノタウロスに、ヘキサは蛇に睨まれた蛙のように硬直した。

目を逸らせば殺される。そんな強迫観念すら抱く。そして、それは彼の思い過ごしではない。一寸先にあるかもしれない結末なのだ。

戦おうとする心とは逆に、この場から逃げ出そうとする自分に気づき、ヘキサは平手で思いつき頬を引っ叩いた。

強く叩きすぎてしまい、口の中が切れて血の味がした。ズキズキと口の中が痛むが、キツケにはこれくらいがちょうどよかった。

オーケー。覚悟を決めろ、僕。

強く自分に言い聞かせる。背後にライラがいる以上、逃亡は許されない。ここでミノタウロスを倒す。

進むべき道は定めた。後はその道を脇目も振らずに駆け抜けて、目の前に立ち塞がる壁を叩いて砕くだけだ。

深呼吸をして大剣を抜く。汗で滑る柄を握りしめ、ミノタウロスに突進する。

モンスターの怒号に、ヘキサの咆哮が重なる。瓦解した街を舞台にして、黒髪の少年にとっての死闘の幕が上がった。

四章 誰がための剣(6) (後書き)

どうも、祐樹です。

前章の最後に今回でプロローグ終了って言うてましたけど、見てのとおりです。終わりませんでした。

うーん、おかしい。遅筆に展開の遅さが重なって、全然話が先に進みません。

どうしてこうなったし。

これは多少、展開端折ってでも、話進めるほうを優先したほうがいいんですかね。そこいら辺の意見をいただけると嬉しいです。

では、また次章で。

第五章 踊るように戯れる(1)

自身を囲むように浮遊する紙の風船に、デュオは小さく舌打ちした。

あらかじめ仕掛けておいたのか。後退するレイヴンを追いかける彼を待ち受けていたのは、青空に浮かぶたくさんの紙風船だった。

ふわふわと空中を漂う紙風船だが、触れた瞬間に内部に蓄えられた魔力が反応して、爆発する一種の機雷であることをデュオは知っていた。

逃げ道を塞ぐように展開する無数の紙風船の向こう側には、茶髪の少年の背中が見える。

露骨なまでの誘いだったが、奴を逃がすわけにはいかない以上、真っ直ぐ突っ切る以外に選択肢はなかった。

壁を蹴り空中に身を晒すと、こしだめに構えた剣を水平に振り抜いた。

刀身から放たれた錐のような形状をしたそれは、一見するとく衝波に思えたが、練り込まれている生命子の量が桁違いだった。

青い衝撃波は直進すると、浮遊する紙風船の手前で弾けて、無数の弾丸と化した。まるで散弾のようだ。

四散した弾丸が紙風船をまとめて撃ち貫き、貫通の衝撃で着火した風船が爆発した。連鎖して次々と爆発する風船機雷が、青い空に

紅蓮の大輪を咲かせる。

外力術式 雹雨。前面に大量の生命子の弾をバラまく方術で、ひとつひとつの弾自体の貫通力も高い。

大気中で燻る紅蓮の残滓を突き破り、黒煙から飛び出したデュオは、身体を反転させて飛来した紙の短剣を弾いた。

効果を失いただの紙に戻った短剣を切り裂き、前方の建物の屋根に着地する。面を上げれば、強烈な光を孕んだ双眸と視線があった。

屋根を挟んで対峙するデュオとレイブン。

「まいったね、こりゃあ。……あんだけやって無傷かよ」

口ではそう言いつつも、彼の口調に陰りはなかった。むしろ、白髪の少年ならそれが当然といわんばかりの口振りである。

「ホントにデタラメなヤロ ギイツ!？」

自身の胸に食い込んだ切っ先に、レイブンの口から奇怪な音が漏れた。

瞬きひとつの間に間合いを詰めたデュオの剣が、半ばまで彼の胸を貫き、背中からは赤い液体に塗れた切っ先が覗いている。

白髪の少年は鮮血に顔色ひとつ変えずに剣を引き抜くと、身体を駒のように反転させて剣先を翻す。下から鋭角に跳ねた刀身が、レイブンの首を不気味なほどあっさりとは切断した。

手毬のように飛んだ頭部が、青い空に朱の線を引く。首から上を失った身体がゆっくりと倒れ 無数の紙片になり、風に煽られて宙に舞った。

螺旋を描く紙片がデュオを取り囲み、その身を切り裂かんと殺到した。触れるモノすべてを両断する鋭利な紙が、彼の周囲にあるモノを微塵にする。

鋼鉄すら断つ紙吹雪を目前にし、デュオは目を細めると、軽く腕を振った。

それは方術ですらなかった。体内で練った生命子を、指向性を持たずに放出する。彼がやったのはそれだけだ。

それだけで紙吹雪は、膨張する生命子の圧力に耐えかねて、木っ端微塵に弾け散った。細切れになった紙の切れ端が、風に運ばれて空に吸い込まれていく。

不意に視界が暗くなった。見るとデュオの周囲には、歪な形状をした影が射している。頭上の違和感に空を仰げば、そこには巨大な手があった。

肘から先までの巨大な『左腕』が宙に浮いている。四本指の手は白く、目を凝らせばそれが、何万枚もの紙で形作られていることがわかるだろう。

頭上から落下した巨大な紙の腕が、建物ごとデュオを押し潰した。丈夫な構造のはずの建築物が鉛細工のように拉げ、メキメキと轟音を響かせて崩壊する。

周り建物を巻き添えにし、地響きを伴う紙の腕が地面を砕き迸る閃光が手の甲を貫いた。天を衝く青い光の奔流が、紙の腕を遙か上空に押し上げる。

もうもつと砂埃が舞い上がる中、ゆらりと人影が立ち上がった。デュオだ。青い光は彼の右手の剣から迸っていた。

激しい濁流に晒されたが如く、『左腕』を構成している紙が一瞬

にして蒸発していく。

外力術式 絶一剣。対大型モンスター用の大技。絶大な威力を誇るが消費する生命子の関係で、ほとんど使い手のいない術式だ。右手を一闪。それだけで『左腕』は一片すら残さず消滅した。噴出する生命子の残滓が、大気中でキラキラと輝く。

デュオは何事もなかったかのように襟飾りを翻し跳躍すると、余波で半壊した建物の屋根に着地した。

「やれやれ。これでも駄目か」

横から耳朵を打つ声に、驚いた様子もなく、そちらを見やった。

そこには壁に寄りかかるようにして立つ、茶髪の少年の姿があった。

「並の自称『王城派』なら、いままで七割殺しくらいにはできるんだけどなあ」

「……なにが目的だ」

「ああ？ なんだって？」

「この馬鹿騒ぎの目的だ。なにがしたくて、街にモンスターをブチまけた」

ぐるりと首を巡らして、変わり果てた街並みを見回す。

遠くのあちらこちらで黒煙が立ち上っている。耳を澄ませば風に混じって、獣の唸り声が聞こえてくるようだった。

いま立っている場所が郊外なためか、この辺りの被害は比較的軽微だが、街の中心部は騒乱は相当に逼迫しているはずだ。

特にいまは人数の補充期間が終了し、多くのプレイヤーが上層に移動している時期である。戦えるプレイヤーが少なくなれば、それ

だけ被害も拡大してしまう。

「理由ねえ。そうだな……」

問われたレイヴンは一拍の間を空けると、

「暇つぶしだな」

飄々とした態度で、そんなことを口にした。ふざけているとしか思えない答えだが、それがレイヴンという少年なのだ。

ナイトメアシンдрローム
悪夢症候群。

プレイヤーキラーのみで構成された闇ギルド。数ある闇ギルドの中でもっとも、危険視されている集団である。

所属しているプレイヤーも頭の螺子が外れたイカれた連中ばかりで、全員がなにかしらの罪で、多額の賞金が賭けられている。あるいは、それこそが ナイトメアシンдрローム への入団条件だと揶揄されているくらいだ。

そして、眼前の人物こそが ナイトメアシンдрローム の創設者にして、ファンシーにおける最重要危険人物。闇に誘う悪魔のシンボルを掲げるリーダーである。

凶刃、レイヴン。

デュオに言わせれば典型的な愉快犯だ。

モンスターを街中に持ち込んだ方法には、いくつか心当たりがあるが、そのどれもが過程で膨大な時間と資金を必要とするモノばかりだ。

それだけ準備に手間をかけておきながら見返りはなにもない。普通ならば実行しないであろうことを、自ら進んで平然とやっつける。

利益もコストも手間すら度外視にして、やるといったら必ず実行する。自分の一時の悦楽のためならば、仲間を巻き添えにすることすら厭わない。

自分本位の愉快犯。その捻じ曲がった本質こそが、凶刃の凶刃たる所以である。

「そうかよ。……じゃあ、もういいや」

白髪の少年の雰囲気の変化に、レイヴンの顔から笑みが消えた。デュオの右手の刃が鳴る。所有者の意思を反映するかのように、刀身から仄暗い鬼火のような青い光が揺らめく。

一触即発の空気が充満する。息すらできぬほどの苦しい重圧の中、沈黙を破ったのは濡れるような熱を帯びた声だった。

「楽しそうねえ。わたしも混ぜてくれないかしら？」

屋根が炸裂した。足元から伸びる厚みを持たない複数の黒い手が、白髪の少年に狙いを定めて襲いかかる。

予期せぬ不意打ちもしかし、デュオを害するには至らなかつた。剣先が霞む。群がる黒い手をほぼ同時に切り裂き、レイヴンの傍らに立つ女性を睨みつける。

紫のドレスを纏った女性だった。露出の高いドレスから均整のとれた褐色の肌を晒し、大きな瞳を微熱に潤ませている。

「はあい。元気にしてたあ？」

甘ったるい調子で言うと、パメラは口元を歪めた。

五章 踊るように戯れる(2)

パメラはドレスと同じ紫色の瞳を細めると、隣りに立つレイヴンにその褐色の肢体を押し付けるように纏わりつかせた。

「遅かったじゃない。待ちくたびれちゃったわ」

「悪い悪い。途中で怖い正義の味方様に遭遇しちゃってな。いまもこうして、追いつけ回されていたところだ」

「それは大変だったわね。だったら……」

パメラの足元の影がざわめいた。

影の表面がぼこぼこ泡立ち、そこから再び黒い手が飛びだしてきた。紙のように厚みのない黒手は、瞬く間にその数を増やしていく。

実に三十を超える異形の手が、妖艶な女性に群がるさまは、見る者に吐き気を催させるには十分だった。

「二人で退治しちゃいましょう」

直後、鎌首を擡げた黒手の群れが、白髪の少年目掛けて放たれた。屋根を蹴って、後方に跳ぶ。一瞬前までデュオがいた地点の屋根を砕き、黒手は細長い指を気味悪く震わせて、猛然とデュオを追跡する。

デュオは空中で身体を捻り黒手をかわす。すかさず別方向から迫る黒手が、宙で身動きのとられない彼に腕を振るう。

だが、その黒手の一撃も白髪の少年には届かなかった。彼は脇を通過する黒手に剣を突きたてた。ゴムのような弾力が柄から伝わってくる。

ぐんつと身体が横に引つ張られて、目前まで迫っていた黒い腕が空を切る。剣を引き抜き黒い手の側面を蹴りつけて、右側に見える黒腕に飛び移った。

黒手の動きは決して遅くない。高速で動き回るそれらを、視界に捉え続けるのは至難の技といってもいい。一度その手に捕まれば、抵抗する間もなく蹂躪されるだろう。

だというのに、それを三十以上も行使し、それでも白髪の少年を捕らえるには力不足だった。当たらない。かすりすらしない。魔法の産物故の常識を無視した軌道も、先読みしたかのような動作によって捌かれてしまう。

と、そのとき視界の端に映る影があった。モンスターである。背中から蝙蝠の羽を生やした醜悪なモンスターだ。

バットデビル。10界層クラスのモンスターである。血の臭いに酔っているのか。普段ならば生存本能で絶対に近づかないであろう、デュオに上空から奇襲を決行する。

結果はわかりきっている。バットデビルはすれ違いざまに一蹴されてしまうが、それによってデュオに僅かな隙が生じた。

三十を超える黒手がデュオを取り囲む。上下左右。逃げ場はない。一斉に襲い掛かってくる黒手に、彼は胸の前で剣を構えた。

キーン、と剣から高周波めいた甲高い音が響く。刀身に蓄積された生命子が輝き、周囲に青い光を放射する。

眼前の魔手を見据え、デュオは青く輝く剣を振り抜いた。

刀身から放たれた斬撃が、拡散して無数の刃と化す。外力系方術蓮華。虚空に刻まれた斬線が、すべての黒手を一瞬にして切り刻む。

バラバラになった黒手が大気に解ける　かに思えたが、瞬時に復元するとまたしても彼に向かって歪な手を伸ばす。

一方、デュオにも動揺はなかった。元を断たなければ意味がないのは承知していたことだ。白いレザーコートの裾を翻し、迫る黒手の群れをかわず。

黒手への魔力の供給源。つまりはパメラだ。彼女をどうにかしない限り、この鬼ごっこには終わりが無い。

この箱庭世界の大気には、特性の異なる七色七種類の粒子が含まれている。

赤は火素。青は水素。緑は風素。茶は土素。白は光素。黒は闇素。紫は霊素。この粒子こそが元素であり、魔法使いの力の源でもあるのだ。

魔法使いたちは自身の魔力と大気中の元素を干渉させることで、あらゆる超常的な現象を発動させる。

これが魔法だ。そして、魔法使いが使用可能な魔法は、自身が視認できる元素の属性に限定されているのである。

そのため誰しもが自由に魔法を使えるわけではない。

単一の元素しか視えないプレイヤーはその属性の魔法しか使えないし、複数の元素が視えたとしても、それ以外の元素を行使する魔

法は使用不可能なのである。

視認可能な元素は基本、アバター作成時に決定されて、それ以降は変化しない。後天的に開花するケースもあるが、それは本当に稀なことなので除外してもいいだろう。

魔法は素質の世界、と云われる所以である。

デュオの知るところでは、パメラは闇属性の扱いに長けた、単一特化型の魔法使いだ。闇は扱いの難しい属性で、使い手の数も少ない。彼女ほど闇素の扱いを心得た魔法使いはいない、とは彼の仲間が洩らした言葉だ。

剣が閃く。放たれた斬撃が、前方の黒手をまとめて薙ぎ払う。斬撃はそのまま明後日の方向に飛んでいくと、直角に軌道を変化させ、褐色の女性へと牙を？いた。

飛燕。外力に系統される方術。軌道を途中で変化させることができるが、事前入力式なので、扱いには相当の練度を要求される方術だ。

「闇よ、溢れる」

眼前に出現した闇の障壁が、青い斬撃を受け止めた。予想外の事態でも、咄嗟に障壁を展開するのは流石というべきか。

しかし、パメラにとって想定外だったのは、飛燕に練り込まれた生命子の量だった。通常では考えられない量の生命子に、ガリガリと障壁が削られて悲鳴を上げる。

パンツ！と障壁が弾けた。パメラを貫こうとする飛燕に、紙の刃が食い込んだ。さらに紙による盾を形成。青い斬撃は紙盾の表面に穴を穿ったところで力を失い消滅した。

「あつぶねえー」

デュオから視線を外さずにつぶやくレイヴン。

あわよくばデュオに強襲をしかけようとしながらも、黒手を避けながらこちらへの警戒を怠らなかつた彼に、隙を覗っていたがそれどころではなさそうだ。

外力は生命子を放出する特性上、内力よりも消耗が早い。加えて、白髪の少年がこれまでに使用した方術を考えるに、並のプレイヤーならばすでに生命子が枯渇してしまっている。

にも関わらず、デュオには枯渇するどころか、消耗している素振りすらない。痩せ我慢 ではない。本当にまだまだ余力があるのだ。

「化け物め。やっぱり普通じゃねえな」

二人がかりでこれだ。全力でやらないと本気でヤバイ。なんてことを考えていたときだ。またしても状況が変化した。

空中で炸裂した閃光が、黒手を焼き払う。パメラが魔力を供給させている限りは、自動的に対象を追尾するはずの黒手が、跡形もなく消滅した。

光属性による闇属性の相殺。

突然の事態に顔色を変えたのは、パメラだけではなかった。

「……ヤバイ」

”慣れ親しんだ”反応にデュオは、青ざめた表情でこちらを見や

り、白いクロークを靡かせる少女を発見して絶句した。

「ふふ。やっと見つけたあ」

満面の笑みに蕩けるような声色。

なのに何故か怖気が止まらなかった。少女の後ろに鬼の姿が見えるのは、はたして自分の目の錯覚なのだろうか。

「ど、どうしてここに……？」

「それはごっちの台詞よ。どうしてデュオがここにいるのかしら？」

「さ……さあ、なんででしょう」

先ほどまでの冷静さが嘘のような動揺ぶりである。

「ふうん。……いいわ。その話はまた後で。いまは」

視線を白髪の少年から、二人組みのプレイヤーキラーに移す。茶髪の少年はどこか愉快げに、褐色の女性は嫌悪の眼差しでこちらを見ている。

「あいつらを捕まえるのが先。この惨事の代償を払わせてやるわ」

先端に白い宝石が嵌められた金属の短杖を翳す。

「行くわよ、デュオ」

「ああ。了解。さっさと片付けよう」

「それから……これが終わったら、デュオにはお仕置きフルコースだから。覚悟しときなさい」

「……いい」

絶望的な表情で相槌を打つと、デュオは剣に生命子を走らせた。白い光と黒い光が入り乱れ、噛み合う金属音が周囲に木霊した。

五章 踊るように戯れる(3)

耳元で旋風が唸る。迫る死の気配にヘキサは、硬直しそうになる心を無理やり滾らせて、鋼鉄の斧の軌道に全神経を集中させた。

ミノタウロスとの戦闘を開始してから、まだ幾ばくも経っていないというのに、彼の息は荒く全身に嫌な汗をかいていた。

肉体的な疲労からくるモノではない。ミノタウロスの攻撃に晒され続ける重圧からの精神的な疲労。それが身体にまで影響を与えているのである。

加えてもうひとつ。見過ごすことのできない要因がある。デュオだ。強敵と戦うときは、いつも彼が傍にいた。

確かにデュオは戦闘に参加していなかった。だが、いざというときは彼がいる、というのは自分で思っていた以上に、精神状態に作用していたのだ。

安心感である。デュオがいるから集中できたし、全力をだしきることができた。手をだしてはいないから、一人で戦っていたなどと思い上がりもいところだった。

一人になってそれに気がつくなんて、本当にどうしようもなかった。

石で舗装されている地面を削り、跳ね上がった斧をギリギリのところでかわす。眼前を巨大な鉄の塊が過ぎたかと思うと、ぱっくりと額が割れて血が滴った。

避けそこなつたわけではない。ただの風圧で裂けたのだ。風圧だけでこれならば、あの斧が命中すればどうなるかなんて、想像でも考えたくなかった。

まるで削岩機だ。周りにあるモノを斧で豆腐のように切り刻む。木だろっ石だろっが、おかまいなしだ。

これで本当に半死状態なのか、と声を荒げたくなる。

いや、違う。すぐさま自分の思考を否定する。半死だからこそ、まだこうして立っていられるのだ。でなければ、最初の一撃で死んでいた。

まがりなりにも自分がミノタウロスと渡り合えるのも、敏捷性が極端に落ちているからに他ならない。本来の万全の状態ならば、一合とて持たない相手なのだ。

だからって、気休めにもなりはしないけどっ！

頭上から振り下ろされた斧を半身になってかわす。砕かれる石の破片を横目に、右足を軸にして小さく身体を回転させる。

遠心力を加えた一撃が、前傾姿勢になっているミノタウロスの角に食い込んだ。まるで金属をハンマーで叩いたような衝撃に両腕が痺れる。

「おおおおお　っ！」

構わずに大剣を振り抜く。角に入っていたヒビが拡大し、抵抗がなくなったと感じた瞬間、残されていた角が半ばからへし折れた。

折れた角はくるくると回転しながら地面に落ち、からんと乾いた音を立てた。身悶えしながら雄叫びを上げるミノタウロスに、ヘキサは口元の笑みを堪えることができなかった。

通じる。対処方法さえ誤らなければ、いまの自分でもこの牛の化け物と戦える。倒すことだってできるはずだ！

その思考こそが対処の過ちだと悟ったときには、すでにことが終わったあとだった。

ミノタウロスの筋肉が弾けんばかりに膨張する。血走った目で纏わりつく小蠅を睨みつけ、鉄塊のような斧を真横に薙ぎ払った。

気の緩みから反応が僅かに遅れた。それでもなんとか斧から遠ざかるうとし、瓦礫に足を引っ掛けて体勢を崩した。

旋風が巻き起こり、眼前に鉄の塊が迫る。避けられないと悟ったへキサは、反射的に大剣を盾のようにし、自身と斧との間に割り込ませた。

劈くような金属音が木霊する。大剣の刀身は斧を防ぎ、拍子抜けするほどあっさりと砕けた。陽光を反射して破片が輝く。

「、え？」

呆けた声が漏れた。

大剣を砕いた斧は勢いをそのままに、黒髪の少年の腹部を打った。鉄鎧の防御などあつてないようなモノだった。

腹部の重い衝撃を感じる間もなく、彼の身体は中空を舞っていた。受身をとる余裕すらなく地面に叩きつけられる。

「げぼ……っ」

口から鮮血が溢れた。視界が赤く明々している。腹に持っていた手が、ぬるりと暖かい液体に濡れた。口からはひゅーひゅーと、

空気の抜けたような音がしている。

凄まじい激痛が全身を駆け巡る。ジェムのときの比ではない。あまりの痛みに気絶することすらできない。

負けたのか。朦朧とする意識で、ぼんやりと思う。

地面と水平になった視界に、ミノタウロスの脚が見えた。ドシン、と重たい足音が、地面から伝わってくる。

これで終わりか。情けない。結局、自分は守る側にはなれなかった。音が遠くなる。それに従い、視界も狭くなっていく。

ミノタウロスの脚がゆっくりと振り下ろされ 地面に倒れ伏すへキサの身体を跨ぐと、振り返ることなく前へと進む。

見逃された？ ……いや、どのみち自分は助からない。せいぜい死ぬまでの時間が少しだけ伸び、死因が変わるていどの違いではない。

意識が落ちる。その刹那、ミノタウロスの向かう先になにがあるのか。奇跡的に思考がそこに至ったへキサに電撃が走った。

おい、待て。止まれ。止まれれば。そっちには行くな。駄目だ。だってそっちには。そっちの方角にはライラが。
早く戻ってきてください。

意識が戻る。ぼろぼろの身体は相変わらず動いてくれないが、落ちかけていた意識は鮮明になっていた。

「…………ざ…………け…………る…………な」

それだけは駄目だ。許容できない。認めない。

意識は戻った。しかし、身体は動かない。動くわけもなかった。

当然だ。意志でどうにかできるレベルではないのだ。

指先が地面を引っ掻く。それだけの動作で戻った意識が、再び遠のきかけた。地面には流れた血液で、血溜まりができています。それでも足掻く。身体は動かなくても、意志は止まらない。

失いたくないから。守ると約束したから。まだ話したいことがたくさんあるのだ。だから、動けよ。いまだけでいいんだ。

ここで立ち上がり。

アカウント、D000154。ユーザー名称、ヘキサ。

潜在意識に魂の慟哭を確認。

ラウンドテーブル
円卓委員会による審議を開始。

心象：憧憬。心属性：剣。心域色：青白い炎。

心経接続限界値突破。ノーブル・サーガ 貴き英雄譚の創造を要求<<<<<<不許可。ユーザーのレベル不足。ステータス不足。プライオリティ不足。

英雄条例、第四条と第七条を適応。ノーブル・サーガの創造を再要求<<<<<<不許可。ユーザーのレベル不足。ステータス不足。プライオリティ不足。

了承。ノーブル・サーガの創造工程を強制終了。

代案を提出。アカイザ 図書館の閲覧を要求<<<<<<許可。

スキルの習得を要求<<<<<<条件付きで許可。

ステータスの修正要求<<<<<<不許可。

英雄条例、第三条を適応。ステータスの修正を再要求<<<<<

<条件付きで許可。

了承。処理を開始。アーカイヴに接続。閲覧範囲を第一深度で設定。スキル一覧より検索を実行。

.....。
.....。
.....。

検索完了。該当スキルなし。

閲覧範囲を第四深度まで拡大。再検索を要求<<<<<<<<不許可。
閲覧範囲を第三深度に縮小。再検索を要求<<<<<<<<許可。

検索を再実行。

.....。
.....。
.....。

検索完了。該当スキル、4。キーワードを追加。再検索を実行。

.....。
.....。
.....。

再検索完了。該当スキル、1。

1、【自己再生】。第三深度。細胞活性化による自然回復力の向上。回復速度は生命子の最大値に依存。

許可。【自己再生】を習得。スキルスロットに登録 不可。スキルスロットの空きなし。スキルスロットの増設を要求<<<<<<<<許可。

スキルスロットを5から6に増設。【自己再生】を登録。効果を自動で発動。

ユーザーの内在生命子を+50。戦闘終了まで全ステータスを+5。戦闘終了後に全ステータスを-2。

以上。処理を終了。

汝に女神の祝福を。

なければ意味がないだろう！

意志に反応して身体が動いた。動かないはずの身体が動く。その事実をヘキサには疑問にも思わなかった。思う必要もなかった。

地面から身体を引き剥がす。

ミノタウロスが脚を止めた。振り返る。地面に立つ黒髪の少年を見やり、動揺したように充血した目を瞬かせた。

懐に手を入れるとヘキサは、そこから一枚のカードを取り出した。血に濡れたカードの表面には、剣の絵が描かれている。マテリアライズ。カードが実体化して、黒曜石のような刀身を持つ大剣に出現した。

ずっしりとした両手の重さに、上半身が前に傾く。

グロリアス。10界層クリアの際に入手した大剣。いまのいままで存在を忘れていたなんて、本当に間が抜けている。これじゃあ、あの背中はずいぶん、と苦笑いした。

と、そうだ。ひとつ言っておくことがある。

この大剣の詳細ステータスを、デュオに見せたときの記憶が脳裏に浮かぶ。珍しく神秘的な面持ちをしながら彼は言った。

その魔剣を使うのは構わないけど、固有能力は絶対に使用するな。いまの前には反動がキツすぎる。……下手すると死ぬぞ。魔剣。デュオはそう言った。

固有能力を持つ武具は、その特性によって、聖剣と魔剣の二種類に分別される。正式な呼称ではない。プレイヤー間で定着した俗称のようなモノだ。

利によって利を成すのが聖剣であり、害によって利を成すのが魔剣である。ようは保持者にもたらずのが、祝福と呪いのどちらかということだ。

白髪の少年は固有能力から、この大剣を魔剣だと判断した。

しかも、かなり強力なモノらしい。魔剣としての呪いと代償は比例する。まだまだ未熟な自分が無闇に使用するのは、自殺行為だとデュオに念押しされていた。

ああ。確かにデュオは正しい。僕にはまだ不相応だ。……でも、さ。デュオ。僕は思うんだ。いま使わなくて、いつ使うの？

「アクティフ 駆動 エンブリオ 自己暴走」

黒い刀身が鳴動する。柄に象嵌された赤い宝石が縦に割れ、己の能力を開放できる歓喜の叫びを轟かせる。

真紅の軌跡を空間に刻み、黒髪の少年の姿が霞んだ。

第五章 踊るように戯れる(4)

鬱陶しかつた雑魚が宙に舞った。自分の片角をへし折った忌々しい雄は、地面に叩きつけられるとそれつきり動かなくなった。

否、僅かに身じろぎしているところを見ると、まだ息をしているようだ。もっとも、それも時間の問題だろうが。

ミノタウロス。30界層のモンスターでは、最強クラスのモンスターである。強靱な生命力に他を圧倒する怪力。魔法耐性こそ低めだが、単純に戦闘力のみを考慮するのならば、40界層クラスと比べても見劣りしないだろう。

あるていど実戦を積んだ探索者ならば、感覚で理解できることなのだが、実はモンスターには固体差が存在しているのである。

その中でも特に種族としての枠から外れてしまったモノを変異種と呼び、その強さはもはや元とはまったくの別物である。

このミノタウロスは変異種ではないものの、かなり”できる”固体だった。それ故なのか、ソレにはおぼろげながら意志というモノがあった。

ソレは怒っていた。住処である岩場から暗い場所に閉じ込められたかと思えば、見知らぬ場所に放り出されていたのだ。

怒りから暴れ回っていたところを、赤い衣の人間に殺されかかっ

た。己が助かったのが、人間の気紛れだと理解したとき、ソレの怒りは限界を突破した。

屈辱だった。憤怒に我を忘れて、傷だらけの身体で暴れていたところで、今度は二人の人間に遭遇した。

一度は見失ってしまったが、匂いを追跡し片割れを見つけて後はご覧のとおりだ。不様に這い蹲り死にかけている。それに雌のほうの居場所もわかった。

鼻を鳴らす。血臭に混じり雌特有の匂いが鼻をくすぐる。匂いの強さからそう遠くはない。すぐに見つけられるだろう。

元より複雑な思考はできない。ソレの脳内からは死にかけの雄のことなど消えていた。あるのはどうやって、雌を殺すかだけだった。のっそりと動きだす。このとき雄を踏み潰さなかったのは、ちょうど跨ぐ位置にいたからであり、単なる偶然だった。

そして、その偶然がソレにとっての致命傷になった。

背後からの物音に振り返ると、そこには立ち上がる雄の姿があった。全身を自身の血で赤く染め、幽鬼のような瞳でこちらを見据えている。

死にかけだ。誰が見ても明らかに死ぬ寸前であり、反撃する余力など持ち合わせていないのは明確だった。

だが、目はまだ死んでいなかった。血に濡れた顔面は蒼白だったが、黒い目だけは違った。強い意志を内包した、苛烈な光を宿している。

雄は黒い刀身の大剣を虚空から取り出すと、地面を蹴ってこちらに突撃してきた。鉛色の斧と黒い大剣が噛み合い、眩い火花が飛び散った。

膨張した筋肉が軋み、足元の地面が砕けた。雄の一撃は速く、なによりも重かった。先ほどの比ではない。全力で対抗しなければ押し切られる。

思考ではなく本能で察したソレは、大剣を弾くと斧を振りかぶった。渾身の力を込めた一撃はしかし、黒い大剣によって受け止められた。

ソレは驚愕した。さっきはこれで大剣を砕き、雄に致命的な一撃を喰らわした。なのにいまは、ビクともしない。揺るぐことなく斧を防いでいる。

あまつさえ、雄は反撃に転じた。斧から抵抗が消えたかと思うと、殺意が込められた一撃が、ソレに襲いかかった。

際どいところで斧で防ぐが、予想以上の一撃に拮抗状態を維持できず、斧が押されて肩に刀身が食い込んだ。

信じられない力だ。本当にこれが死にかけの人間だというのか。目が合う。黒い瞳が宿す炎に芯が冷える。死に損ないの人間に気圧される己に気づき、ソレは血の混じった咆哮を木霊させた。

許さない。許してなるものか。この一撃で殺す、とソレは斧を振り下ろすが、またしても黒い刀身に受け止められた。

理解ができない。どうして防げる。どうして反撃できる。

いつしかソレを支配していたのは、燃えるような怒りではなく、凍るような恐怖だった。己を貫く衝動のままに、ソレは斧を振り回し続けた。

剣を振るう。

白熱する思考。白熱する身体。ただ無心でヘキサは剣を振った。削岩機と評した連撃をことごとく防ぎ、同じ数だけの攻撃を叩き込む。大剣と斧が凌ぎ合い、発生した突風が周囲のモノを巻き上げる。

劈く金属音が響く度、彼の腹部の傷口から血が噴きだし、足元に新しい血溜まりを作っていく。【自己再生】による回復よりも、衝突によるダメージのほうが大きいのだ。

そもそも習得したばかりの【自己再生】は熟練度が低く、初級ポーションの回復量にすら満たない。せいぜい気休めが精一杯だ。

ところが、ヘキサは全身を駆け巡る激痛など無視している。腹部の裂傷から溢れる血に、顔色ひとつ変えない。

事実、ヘキサは痛みを感じていなかった。いまの彼は戦闘行為を継続するうえで、邪魔な痛覚が遮断されているのだ。

大剣の柄に嵌められた、赤い宝石がぎよろりと蠢く。縦に割れた宝石がまるで単眼のように、保持者である黒髪の少年を見ている。

黒の魔剣、グロリアス。その固有能力エンブリオは、保持者の戦闘力を大幅に引き上げる。倦怠感の損失。身体能力の強化。痛覚の遮断。

現在のヘキサは物理的に肉体が破壊されるまで、動き続ける一種のゾンビのようなものだ。息の根を止めない限り、途中で戦闘を放棄することはない。

だが、それはあくまでも代償の先送りにすぎない。限界を超えて蓄積するダメージは、保持者の心身を蝕み、ときには死に至らせる。魔剣の魔剣たる由縁だ。

愚直なまでに剣を振るう。

前に。前に。前に。立ちはだかる壁を壊すため、その先に進むために、がむしゃらに振るわれる剣が加速する。

黒髪の少年の目にはすでに、モンスターのは姿は映しだされてはいなかった。彼が見ているのは届かぬ背中。あの日、憧れた白い背中だ。

互いに足を止めて近距離での応酬。

どれだけの時間が経過したのかわからない。一分かもしれないし、一時間かもしれない。都合何度目かも不明な激突の後、小さな異変が生じた。

爆発じみた激突音が響く中、ピシリと乾いた音が響いた。音の出処はミノタウロスの持つ斧の先端。刃の部分が欠けていた。

破碎音は激突を重ねるたびに大きくなり、斧の破損は離れたところからでも確認できるほどになっていた。

届け。

手が届かないとわかっているからこそ、それに向かって手を伸ばす。いつの日か自分も、ああなりたいと憧憬を抱いて。

斧の破損が拡大する。ヒビは柄にまで入っていた。刃の下半分は完全に砕け、すでに斧としての輪郭を保っていない。

対して、黒の魔剣はいまだに刃毀れひとつない。黒曜石のような光沢を持つ刀身が、陽光に濡れたような光を反射する。

届けッ！

それだけを願う。思考から乖離した意志。振るう剣の重さを支えるのは、強い願いだと思いが故に。
だから。

「と、ど……けええええ　　ッ！！」

孤を描く真紅の軌跡。黒い刀身が鉛色の斧を粉碎した。踏み込む。感覚のない手足。それでも戦う意志は折れていない。

翻った剣先がミノタウロスを深々と切り裂いた。肩から腰まで斜めに刻まれた傷口から、噴水のような鮮血が青空を赤く染める。

モンスターの両手から残された柄が滑り落ちる。直後、灰色の巨体がぐらりと傾き、前のめりになって地面に倒れた。

「たおし、た……？」

地面に突き立てた剣に寄りかかり、沈黙したミノタウロスを見下ろす。身体の末端が光に変換されている。それがなによりの証明だった。

「や　　だあっ!？」

口元を緩めた瞬間、エンブリオの効果は切れた。赤い宝玉から光が消える。身体を貫く痛みにも、声もなく地面に崩れ落ちた。

仰向けに倒れて咽る。指一本すら動かせない。痛覚の処断が切れているのに熱を感じない。感じるのは寒気だけだ。

意識を保っていられたのは一瞬だけだった。急な坂道を転げ落ちるよつに、意識が深い闇に没われる。

記憶が途切れる瞬間、複数の足音と声が聞こえた気がした。

五章 踊るように戯れる(5)

「むう。ねえ、デュオ。……この人、自己回復系のスキルかア
ビリティなんて持つてるのかしら？」

「いや。オレは知ってる限りはないはずだ」

「そっか。……でも、おかしいわね。だったらどうしてかしら？」

遠くで声がした。

水を挟んだような曖昧な響きだった。

「この人の傷、私の治療とは別で勝手に回復してるみたいなの」

「へ？ マジでか」

「ええ。効果自体は微量みたいだけど」

ぬるま湯に浸かっているような心地よさが全身を満たしている。

特に後頭部を包む柔らかな感触が最高で、できることならずっとこ
うしていたいくらいだった。

「あの……それでヘキサは大丈夫なのですか？」

「ええ。心配ないわ。傷は塞いだし、枯渇していた生命子も安定域
まで補充したから。……でも、今後は気をつけてね。自分でいうの
もなんだけど、私がいなかったら間違いないで死んでたわよ」

「まったく無茶するヤツだな。コイツ10界層クリアしたばかり
なんだろ。半分死にかけとはいえ、ミノタウロス相手に単独で突っ

込むなんてよ」

「ってか、そもそもナハトが殺し損ねたのが原因なんだよな」

「おいおい。ワケは話しただろう。カイリの反応を発見して、そっち優先したって。そうしてなかったら、コイツとそこの嬢ちゃん、アイツにバラされてたトコだぜ」

このままたゆたっていたいと思う意志とは裏腹に、身体のほうは目覚めようとしていた。曖昧だった感覚が収束し、意識が浮上していくのが感じられた。

「ふうん。……っで？ その肝心のカイリはどうしたんだよ」

「オレに恐れをなして、尻尾巻いて逃げちまったぜ」

「つまり逃がしたと？ ふうっ。これはデュオと一緒に仕置きかしら」

「勘弁しろよ。オレはどこぞの誰かさんと違って、イジメられて悦ぶような趣味は持ち合わせてないぜ」

「おい。その誰かさんって、俺のことじゃないだろうな」

「自覚症状アリならそうなんじゃね」

「はいはい。そこまでっ。怪我人の前で喧嘩しない！」

パンパン、と手の平を打ち合わせる音がした。それをきっかけにして、寝ぼけていた頭が急速に覚醒する。

「大体、それを言ったらお前だって、レイヴンとパメラを捕り逃したじゃねえか。しかも二人がかりで。そこんトコ、どうなのよ。ドンキホーテさんよ？」

「その名前で呼ぶな。……仕方ないだろ。あの馬鹿、元素爆弾持ちだしてきたんだから。起爆を止められなかったら、被害がエライことになってたぞ」

目を開く。まず視界に飛び込んできたのは、白い雲と青い空。そして、逆さまになった金髪の少女の顔だった。

「起きましたか」

「らいら……？ あれ、ここは……」

状況が理解できずに困惑の表情を浮かべると、ぼんやりとした眼差しでライラの整った顔を眺める。

と、そこでどうして彼女の顔が逆なのだろうかという疑問を抱き、後頭部の柔らかな感触に彼は顔を真っ赤にした。

膝枕である。いまのヘキサは地べたに座ったライラの膝の上にいるのだ。

「ちょ、ま……ッ」

慌てて上半身を起こそうとし、引き攣った痛みに動きが止まった。おまけに貧血のような立ち眩みを感じ、またしてもライラの膝の上に逆戻りしてしまった。

「こらっ。無理しないの。いくら傷を塞いだからって、さっきまで重傷だったのよ。しばらくは安静にしてなくちゃ駄目だからね！」
「え……は、はい。わかりました」

知らない少女だった。白いクロークを纏った少女の、やんちゃな子供を叱るような口調に、ヘキサはこくこくと頷いた。

「無事 ではないか。まあ、大事にならなくて安心した」

「デュラ……じゃない、デュオ。それに……」

「よう。また会ったな」

デュオとナハトを交互に見る。彼らがここにいるということは、街は救われたのだろうか。表情からなにを言いたいのかを読み取り、デュオがやんわりと口を開いた。

「モンスターはあらかた倒した。残りもすぐ片付く。レイヴンたちは逃がしちまったが、当面の危機は去った」

「そっか。よかった」

ほつと安堵の吐息を吐く。

安心して張り詰めていたモノが切れたのか。またしても睡魔が押し寄せてきた。ふわっと欠伸をすると目を擦った。

「ごめん。ちよつと眠いから寝る」

「そうですね。では頑張ったご褒美に、膝枕をしてあげますよ」
優しく黒髪を撫でられる。

こそばゆい感覚に目を閉じると、そのままへキサは深い眠りに誘われた。

爽やかな風を全身に受け、へキサは大きく伸びをした。

一週間で寝たきりの生活をしてきたため、すっかり固まってしまった身体をほぐしながら、眼前の街並みを眺めた。

レイヴンたち ナイトメアシンドローム の襲撃により破壊された街は、驚異的な速度で元の風景を取り戻しつつあった。

裏路地の建物や外装などは破壊されたままだが、主要な施設の機能は早くも回復していた。白髪の少年曰く、ドウナ・ファムのような拠点となる大規模な街の場合、NPCの手によって速やかに復元されるらしい。

逆にフィールドに点在する村や小規模の町が、なにかしらの理由で破壊されたときは、復元されることなく、そのまま放置されることだ。

「もう寝てなくてもいいのか」

背後から近寄ってきたデュオが、ヘキサの横に並ぶと聞いてくる。

「うん。ようやくライラの許可がでたんだ。大分よくなったから、出歩くくらいならいいってさ。迷宮に戻るのは、まだ先になりそうだけだ」

あの日からヘキサはライラと、ひとつ屋根の下で暮らしている。店の修理の目処が立たないため寝るところがなく、また彼の看護もしなければとのこと、連絡なしで転がり込んできたのである。

もちろん、テンパったヘキサは拒否した。お金をだすから別の部屋を、という意見は一言で断たれ、他の意見も受け入れてもらえず、半ば押し切られる形で了承してしまったのだ。

当初は夜も眠ることができず、このままでは衰弱死するのではと、本気で危惧したのだが、人間は慣れる生き物らしい。いまではどうにか折り合いをつけて生活している。

「そつちは？」

「俺？ 俺は……あれだよ。あれがあれしてあれだったさ」

あれとはなんだろうか。そう思わずにはいられなかったが、虚ろな表情で青ざめるデュオを見ると、訊かないのが優しさなのかもしれない。

だからヘキサは変わりに、この一週間ずっと気になっていたことを訊ねることにした。

「これからデュオはどうするの？」

「戻るよ」

それはヘキサの想像通りの答えだったが、彼自身の口から実際に聞くと、やはりショックは隠せなかった。

「見つかったからな。戻らないと色々と面倒なことになるんだよ」

「……それじゃあ仕方ないね」

「本当はもうちょい、隠居生活をしてたかったんだけどな。……そういや、ヘキサにはまだ、俺がこきた理由を話してなかったけ」「いいよ。別に話さなくても」

少なからずいまの生活を気に入っていた。彼がそう思っていてくれたならそれで十分だ。理由を訊く必要はない。

そっか、と言葉を洩らすと口を噤む。

お互いに口を閉じ、会話のない時間が続いたが、不思議と嫌な感じはしなかった。たまにはこうした時間の使い方もいいかもしれない。

なんてことを考えていると、ふいにデュオが口を開いた。

「なあ、へキサ。俺と一緒にこないか？」

第五章 踊るように戯れる(6)

それは思わぬ提案だった。

ヘキサの想像にはなかった提案である。デュオとはここでお別れだと考えていただけに、彼の言葉は強く黒髪の少年を揺さぶった。

「お前にとって悪い提案じゃないと思うぞ」

「でも……僕のレベルだと迷惑なんじゃ」

「心配するな。そこは問題ない。ちゃんと許可をもらっている。この件に関しては、他のみんなも了承済みだ」

ここまでお膳立てしてきているのならば、答えは決まったようなモノだった。デュオと一緒に行けば、ソロで行動するよりも遥かに早く成長できるだろう。

「一緒に行こう、ヘキサ」

差し込まれる手。後はその手を掴めばいい。それだけで強くなれる。なによりも、これからも彼と冒険ができる。一人にならずにすむのだ。

ゆっくりと手を伸ばし デュオの手を掴むことなく、ヘキサは伸ばした手を引っ込めると、申し訳なさそうな表情で言った。

「誘ってくれたのは凄く嬉しいけど……やっぱり止めとく。自分の力だけで強くなりたいんだ。デュオと対等な立場になるためにも」

ミノタウロスと戦ってわかったのだ。自分はデュオに甘えすぎていた。彼に着いて行って強くなっても、それは本当の意味での強さではない、とそんな風に考えたのだ。

贅沢すぎる悩みだと呆れられるかもしれないが、これだけでは譲れない。自分にとっての目標に辿りつくために。

「せっかく誘ってくれたのにゴメン」

「……謝ることじゃないさ。ヘキサがそう決めたなら、それでいいんじゃないか。自分の信念に従えばいいさ」

「だから待っててよ。必ずデュオに追いつくから。そしたら今度はパーティの仲間として、一緒に冒険しよう」

言ってから照れたように頭をかくヘキサに、デュオもまた苦笑した。

「なら、早く追いつけ。そうじゃないと、先にどんどん進んじまうぜ」

「もちろん。すぐに追いついてみせるっ」

「おう。待ってるぞ」

饑別の言葉を残し、白髪の少年は踵を返した。黒い襟飾りが風に煽られ、白いレザーコート裾が翻った。

「行くの?」

「ああ。じゃあ、”また”な」

「うん。またね」

別れは簡潔に。湿っぽさは必要ない。最後に一言だけ言葉を交わし、二人の進む道が分岐した。再び交わるかどうかは彼ら次第だ。

長い別れになるかもしれない。少々ハードルはキツイが、目指す目標は高いくらいがちょうどいいだろう。

目標は遥かに遠く、いまは足元すら見えない。しかし、諦めなければ道は開けるかもしれない。すべては自分の意志ひとつ。

辿りつくべき背中を目指し、黒髪の少年の戦いがはじまった。

そして。

.....。

.....。

.....。

”奴”を殺そう。

パーティの誰が言いだしたかはわからない。しかし、その提案がだされたとき、パーティの全員が頷いていた。拒否する者はいなかった。

彼らは 聖堂騎士団 に所属するプレイヤーたちである。

聖堂騎士団 は三大ギルドの一角を担う『王城派』のギルドであり、ここに所属することは一種のステータスであるといっても過

言ではない。

これで自分たちも一流の仲間入りをした。所属が決まったとき彼らはそう考え、それが間違いであると気づくまでに、そう時間はかからなかった。

彼らが訪れたのは、千界迷宮70層『砂塵の墓場』。名前が示すとおり、界層全体が砂漠で構成されているのが特色である。

目的はこの界層のフィールドに存在する、オアシスのダンジョン。そこに棲息する植物型のモンスター、マッドプラントである。

より正確にいうのならば、マッドプラントが低確率でドロップする黄色い花の収集が、ギルドから彼らに与えられた役割だった。

マッドプラントが落とす黄色い花は、高品質の魔法薬の原材料になる。噂では現在の最前線である80界層の攻略が、そろそろ佳境に入ったと聞く。

ボスとの戦闘を目前にし、準備を整えておこうということなのだろう。彼らのほかに多くのメンバーが、それぞれのアイテムの回収を命じられているのだ。

結局、彼らは 聖堂騎士団 の中の下っ端にすぎないのである。上の下。それが自分たちに対する評価だと、彼らが一番よく理解していた。

ボス攻略などの重要なときには招かれず、今回のような人手が必要なときだけ召集されるのが、如実にそれを物語っている。

最前線より10界層下ではあるが、『砂塵の墓場』の攻略難易度は決して低くはない。

低くはないのだが、仮にも『王城派』である彼らにとって、なんだか物足りなく感じるのは当然だった。

経験値が美味しいわけでもない。レアアイテムがドロップされるわけでもない。ただ言われたことをこなすだけの単純な日常だった。レベルが低いから重要案件で召集されない。召集されないから、どうでもいいときだけ呼びだされて、レベルが上がらないし装備も整わない。この悪循環である、

一時は嫌気が差して 聖堂騎士団 の脱退も考えたが、それでは今度は本当に孤立してしまう。そうしなければいまの位置を維持するとすら難しくなる。

『王城派』に属するプレイヤーの大半が、なにかしらの形で三大ギルドに関わっているのは、それが自己を強化する手段として最善だと判断しているからだ。

ソロが通じるのは中界層まで。高界層でソロなど自殺行為ではない。 もっとも、極一部分はその限りではないのだが。

なんにせよ、つまらないダンジョンにつまらない任務。機械的な狩りに辟易しているときに、それは彼らの前に突如として現れた。

それは彼らがその日のノルマを達成し、帰路につこうとした直前に起こった。事前に決めてあった集合場所に集まり、解散しようとした彼の目に映ったのは一人の少年だった。

白髪に赤い瞳。白いレザーコートを身に纏い、腰の後ろに鞘を吊るし、左腕に小型の円形の盾を装備している。

何故”奴”がここにいいのか。理由は皆目検討もつかなかったが、チャンスであることには変わりなかった。

もしここで”奴”を殺すことができたのならば、自分たちは一気に有名になれる。 聖堂騎士団 の幹部席だって夢ではない。

幸い向こうはまだ、自分たちに気がついていない。遠くで見る限り”奴”は一人で行動しているようだ。一方、こちらは四人一組のパーティが五組。二十人いる。やっつてやれないはずはない。

彼らは背後から”奴”を強襲し　直後、二人が『喰われた』。なにが起こったのか正確に把握できた者はいなかった。

何故か”奴”が自分たちの背後にいて、仲間の二人が地面に倒れていた。身体が揺れているので、死んではいないようだ。

いつ間に抜いたのか、”奴”の右手には片手剣が握られていた。刀身は血に濡れ、不気味な雰囲気を発している。

退けば見逃す。無機質な赤い瞳がそう言っているようで、激昂した彼らは各々の武器を振り上げ、”奴”へと突撃した。

結果からいえば勝負にすらならなかった。それは一方的な蹂躪だ。”奴”と対峙して五分と経っていないのに、立っているのは二人だけだった。後は地面にうずくまり、呻き声を洩らしている。

その二人のうちの片方も、腕を切断され戦闘不能になった。

朱の線を引き空中に跳ね飛んだ腕を、おもむろに”奴”が掴まえた。”奴”の手の平の中で、腕の輪郭が崩れ、淡い光に変換される。

輝く粒子は緩やかな螺旋を描き、残滓も残さずに”奴”の身体に吸収された。喰っているのだ。生命子を。

本来、同類であるはずのプレイヤーの命を喰らい、自分の糧にしているのである。

あまりにも非常識。

あまりにも理不尽。
あまりにも出鱈目。

自分たちを馬鹿にしているとしか思えない、不条理の塊がそこにはいた。こんなプレイヤーが存在しているなど信じたくなかった。

ああ だからなのか。

自分たちが所属する 聖堂騎士団 をはじめてとし、名だたるギルドが”奴”を抹殺しようと躍起になっているのは。

いまのいままで彼は、それを大げさと感じていた。たった一人のプレイヤーにそこまでこだわるなど、時間と労力の無駄だと呆れていた。

だが、違った。正しかったのはギルドのほうだった。”奴”は存在してはいけないプレイヤーなのだ。それをまざまざと思い知らされた。

10万人の憎悪と嫌悪の象徴。
同胞殺しの悪鬼。

殺人鬼Aの後継者。

現在の箱庭世界においてもっとも凶悪なプレイヤーキラーにして、その首に最高額の賞金を懸けられた狡猾で残虐な殺戮者。

即ち

「^{マシイタ}人喰い、ヘキサツ!!!」

憎悪に濡れた声に答えることなく、白髪の少年は振り上げた剣を無慈悲に振り下ろした。

第一部【青空と真夜】

- 了 -

五章 踊るように戯れる(6) (後書き)

どうも、祐樹です。

これにてプロローグは終了し、次の章からようやく本編に入ります。お馴染みのキャラたちもぞくぞくと登場予定です。

物語も本格的に動きだします。多分。

ちょっと悩みごとをひとつ。

最近、感想が全然ないです。一言でもいいんで、できれば感想をください。反応ないのが一番辛いです。判断がつかんとですよ。なので、感想もらえると嬉しいです。

まあ、そんなこんなでまた次章でお会いしましょう。
ではでは。

第六章 廻る齒車（1）

茹だるような暑さに呻きが漏れる。

へキサは実体化させた水筒に口をつけると、中身の水を一気に飲んだ。

喉を通る水の冷たさが身に沁みるが、涼しさを感じる間もなく押し寄せる熱波に、汗が全然止まらなかった。

暑いというよりも熱い。

このままでは干乾びてミイラになってしまいそうだった。肌をじりじりと炙る陽光に、仏頂面になると、顎から滴る汗を手の甲で拭く。

「あつっー。いくらなんでも暑すぎるだろ」

持参してきた日傘など、気休めにもならない。

まったく。リアル過ぎるのも考えモノである。眼前の白い砂の大地を見回し、へキサはうんざりとした様子で愚痴った。

砂と岩。目に映るのはそれだけだった。ときおり見かけるモンスター以外は、代わり映えのしない砂漠がどこまでも広がっている。

頭上には晴天の空に輝く太陽。降り注ぐ太陽光が、容赦なく体力を削り取っていく。暑い暑いとは訊いていたが、想像以上の暑さだ。

この界層にくるのはこれがはじめてだったが、以前に別の界層で砂漠や火山などの暑い場所に行ったことがあった。

なので、暑さへの耐性ができていると思っていたのだが、どうやら考えが甘かったようだ。一箇所に留まり続けなければいけないのも大きい。

千界迷宮70層『砂塵の墓場』。

フィルのすべてが砂で構成された荒原の世界。例外はオアシスを模ったダンジョンくらいである。後はなにもない。せいぜい岩と枯れたような植物だけだ。

日の沈まない灼熱の世界でヘキサは、周囲を一望できる岩の上に腰を下ろし、目の前の砂原とじつと睨みつけるように凝視していた。

一体いつになったら標的は現れるのか。待つこと早くも五時間。

さっきオアシスに水の補給を兼ねて、一時退避したのを除けば、一日中ここにいることになる。

一向に訪れることのない兆候に、もはや嘆息しかでてこなかった。信頼している情報屋の言葉を疑うわけではないが、このままでは待機しているだけで、先に暑さで参ってしまいそうだった。標的は定期的に縄張りを移動するタイプなので、すでにここにもいない可能性もなくはない。

運がないというか、なんというか。さっきオアシスで 聖堂騎士団 の連中と一悶着あったのといい、今日はトコトン運のない日なのかもしれない。

聖堂騎士団 。三大ギルドのひとつ。所属している探索者の規模と質は、ファンシーに無数あるギルドの中でも飛び抜けているだろう。

攻略ギルドの名門として有名だが、日頃から粘着されているヘキサからしたら、悪い印象しか持ち合わせていない。

そういえばオアシスに放置してきた連中は大丈夫だろうか。彼らの身を案じて　　いるわけではもちろんない。心配しているのは別のことだ。

一応、殺さないように手を抜いたから、死にはしないだろうが、ギルドに戻って自分の存在を報告されたら厄介なことになる。

オアシスから現在地までは距離があるので、早々発見されることはないだろうが、楽観視している状況でないのは、過去の経験が物語っている。

団体でこようとも負けるつもりはない。ないのだが、そうなってしまつては、標的云々どころではないのは確かだ。

今日のところは一旦引き上げて、後日改めたほうがいいのかもしれない。などと、撤退を検討していたときだ。

ヘキサの表情が変わつた。無意識に息を殺すと、砂漠の一角に鋭い視線を飛ばした。

本来ならば見える距離ではないのだが、内力系の方術で視力を強化している彼の目には、それがはっきりと見えていた。

視線の先には三匹のモンスターがいた。デイノックという爬虫類型のモンスターで、この界層を代表するモンスターであるが、彼が注目したのはそこではない。

手の平を岩にあてる。太陽に熱せられた岩を通じ、微かな振動が伝わってくる。彼が待ち望んでいた兆候。そして、それはついに姿を現した。

砂原が爆発した。激しく砂が飛び散り、デイノックがまとめて空

中に放りだされたかと思うと、砂の中から飛びだしたモンスターに丸呑みにされてしまった。

巨大なモンスターだ。三匹のディノックを一口で喰らったそれは、頭から砂に突っ込むと大量の砂が舞い上がらせた。

尾ヒレに背ヒレ。ヒレの形をした手足。岩のように角ばった黒い肌。その巨大さといい、砂の中を自在に泳ぐサマといい、まるで鯨のようなモンスターである。

イルブ・カトラス。砂漠の悪魔の異名を持ち、この界層のボスマンスターよりも強いと噂される大型のモンスターだ。

フィールドを自在に移動し、縄張りを変えることから捕捉が難しく、奇襲を許せば『王城派』のプレイヤーですら全滅することから生けるトラップとも云われている。その強さは70界層のモンスターとは別格であり、ソロで挑むなど自殺行為でしかない。

だが、イルブ・カトラスを目の前にし、ヘキサは口元に笑みを浮かべると、立ち上がって腰の剣に手を伸ばした。

「じゃあ、行きますか」

軽い調子で言い、岩から飛び降りる。岩の側面を一度だけ蹴り、砂漠に着地すると、剣を抜き放ちイルブ・カトラスに突撃した。

柔らかい砂の地面を苦もなく踏破。イルブ・カトラスに接近し、先制の攻撃を叩き込む。外力術式 鏃。

貫通力に特化した一撃が、砂漠の悪魔の胴体を穿つ。 鏃 は堅牢な岩の肌を貫き、濁った液体を撒き散らせた。

白髪の少年に気がついたイルブ・カトラスが吼える。大音量の咆哮は半ば物理的な衝撃を伴って、彼の身体を強く打ちつけた。

鼓膜が破けそうな衝撃にヘキサは顔をしかめたが、構うことなく足を前に進めた。

剣を真っ直ぐ突きだす。皮膚に突き立てた剣を基点として、イルブ・カトラスの巨体を器用に駆け上がり跳躍する。

イルブ・カトラスの巨体を眼下におさめ、頭上に掲げた剣から生命子の輝きが迸った。猛烈な勢いで進む赤い閃光が、天を衝く架空の剣を形成する。

対大型モンスター用、外力術式 絶一剣。振り下ろされた赤光が、イルブ・カトラスの背ヒレを砕き、岩の肌を削ぎ落としていく。体液を蒸発させながら背中部分を大きく抉り、唐突に赤光が途絶えた。

甲高い音を立てて、ヘキサの持つ片手剣が砕けた。許容量を超えて流し込まれる生命子に、剣のほうが耐え切れなかったのである。

残った柄を投げ捨てる。その瞬間、ヘキサの手には新しい片手剣が握られていた。レリテイススキル【換装】の効果である。

剣を反転させて逆手に持ち替えると、垂直に落下し、イルブ・カトラスの挟まれて内部が？きだしになった背中に剣を突きたてた。

外殻を砕かれ内部に直接攻撃されて、イルブ・カトラスは巨体ののたうち回せる。ヘキサを激しい振動が襲うが、剣をより深く突き刺し、振り落とされないように踏ん張った。

と、がくんと大きく縦に揺れたかと思った瞬間、背景が後方に流れだした。イルブ・カトラスが砂の中を移動しはじめたのだ。

背中にヘキサを乗せたまま、イルブ・カトラスが加速する。蛇行しながら岩に巨体を叩きつけ、背中が無礼者を振り落とそうと暴れ

る。

砂混じりの風に飛ばられ、目を開けることすら困難だった。落下してきた岩の破片が、際どいところをかすめていく。

「ッ。このおっ！」

突き刺さっている刀身を根元まで押し込み、開放した生命子を叩き込む。刀身を伝わり指向性を持たない生命子が、体内からイルブ・カトラスを蹂躪する。

イルブ・カトラスが跳ねる。内部から己を喰い破る生命子の輝きに、さきほどよりも激しく暴れ回ると、ヒレで砂を叩き宙高く跳んだ。

一瞬だけ滞空し、砂原に激突する。水飛沫ならぬ砂飛沫が大量に弾け飛び、同時に剣が粉々に砕け散った。

さきほどと同じだ。衝撃からくる金属疲労ではなく、耐久限界を無視した生命子に内側から破壊されたのだ。支えを失ったことで宙に放りだされたヘキサは、慌てることなく新しい剣を虚空から取り出した。

【換装】は通常の過程を省略し、瞬時に武具を手元に出現させることができるスキル。彼の場合、最大で四本の武具をストックしておくができるのだ。

津波のように押し寄せる砂の壁を切り裂く。さらに内力術式で強化された身体能力を駆使し、着地するやすぐさま安全域まで後退する。

砂煙がおさまったとき、そこにはイルブ・カトラスの姿は影も形

もなかった。どうやら地中深くに潜ってしまったようだ。しかも、潜行したことで【識別】の範囲を外れてしまい、どこにいるのか特定できない。

「ぺっ。逃がすかつ」

口の中に入った砂を唾と一緒に吐きだし、砂原に刀身を埋める。方術を発動。外力術式 波紋。放射状に放たれた生命子はソナーの役割を果たし、イルブ・カトラスがどこにいるのかを探りだす。

【識別】とは違いヘキサの技量では、対象の区別や詳細な情報は得られないが、位置を割り出すだけならばこちらのほうが有効範囲が広い。

生命子の網に引つかかる巨大な影。位置は 直下！ 徐々に大きくなる振動に、その場が全力で跳び退く。

砂の中から飛び出したイルブ・カトラスの大きな口が、直前までヘキサがいた空間に喰らいついた。反応が少しでも遅れていたら、デイノックと同じ結末を迎えるところだった。最悪、体内から攻撃するという手もあるが、流石にそれは避けたい。

着地するイルブ・カトラスの巨体が地響きと砂煙を巻き上げる。直撃こそしなかったものの、視界を覆う砂煙で黒い巨体の輪郭しか見えない。

砂煙を払おうとし、それよりも一瞬早く、舞い上がった砂が自然なおさまりかたをした。まるでなにかに吸い込まれるような晴れ方に、ヘキサは顔色を変えると剣を砂に突き立て、左手の盾を眼前に翳した。

視界の向こうには、丸い口を開くイルブ・カトラス。砂煙はすべて砂漠の悪魔の口腔に吸い込まれている。

イルブ・カトラスは巨体を逸らし、限界まで溜めた息を一気に吐きだした。

プレス攻撃。それはさながら指向性を持たせた小型の台風だ。体内に取り込んだ大量の砂を混ぜることで、凶悪性が跳ね上がっている。

触れるモノを容赦なく削り取る砂嵐が、白髪の少年に牙を？く。プレスが直撃する直前、生命子に反応して、盾に組み込まれた機構が駆動する。

盾を中心にして半球状の白く発光する障壁が出現した。ヘキサを覆うように展開される防壁が、プレスを弾いて彼の身を守る。

途方もない衝撃がヘキサに襲いかかる。嵐に翻弄される小船の如く、吹き飛ばされそうに身体を必死に固定し、プレスの放射が終わるのを待つ。

耳朶を打つ轟音。途切れることのないプレスに、先に盾のほうが悲鳴を上げた。展開されている障壁がぐにやりと緩み、生じた裂け目から入り込んだ石礫が頬を裂く。

元々は緊急回避用の機能にすぎないこともあり、生命子の過剰供給で変換回路が焼き切れたのだ。ぱんつと風船が割れるように障壁が消滅し、遮るモノがなくなったプレスがヘキサを直撃した。

あらゆるモノを薙ぎ払う砂嵐の吐息。イルブ・カトラスが息を吐き尽くしプレスが途切れたとき、もうもうと立ち込める砂煙で、周囲一体はなにも見えない状態になっていた。

静まり返る砂原に金属音が木霊する。視界を覆う砂煙を突き破り、

白い影が解き放たれた矢のように、イルブ・カトラス目掛けて突撃した。

白い影　ヘキサは傷だらけだった。白いレザーコートは擦り切れ、全身に刻まれた裂傷から鮮血が滴っている。ブレスを耐え切った代償はしかし、まるで映像を逆回しにするかのように急速に回復していく。

内力による細胞活性と【自己再生】による相乗効果だ。魔法や回復薬に頼らずとも、裂傷くらいならば自力で治ってしまう。

赤い光が迸る。二度目の　絶一剣　を発動。真横に薙ぎ払われた一撃が、イルブ・カトラスの口腔を胸の辺りまで切り裂いた。

どす黒い体液を垂れ流し、イルブ・カトラスの悲鳴が響く。引き裂かれた傷口から溢れる体液が、砂原に吸い込まれて白い砂を黒く汚す。

大破した剣を捨て、新しい剣を取る。

これで剣のストックは残る二本だが、こっちは最初から短期決戦狙い。元より長期戦は考慮していない。持ちえる最大火力で捻じ伏せるのみだ。

荒ぶるイルブ・カトラスの巨体を駆け上がり、空中に跳ぶと視界に砂漠の悪魔の全体をおさめる。くるんと柄を回して逆手に構え、耐久力を度外視した生命子を注ぎ込む。

光が収束する。許容量を超えて注がれる生命子に、赤熱する刀身は半ば溶解し、どろどろとした熱せられた金属が零れる。

「いつけえええ　　ッ！！」

剣を投擲する。青空に赤い線を描く剣が、イルブ・カトラスに命中した。

外殻を豆腐のように穿ち、肉を抉り致命的な一撃を与える。斜めに貫通した剣の軌跡が、砂漠の悪魔の巨体に大穴を開けた。

残り一本。

間髪入れずに三度、発動させた 絶一剣 が、イルブ・カトラスの命を刈り取るべく振り下ろされた。

迸る赤光に砂漠の悪魔の断末魔が重なった。地響きを上げて崩れ落ちる巨体を見やり、岩の上に着地したへキサは剣の残骸を放り捨てた。

手応えはあった。これで終わり などと思ったのが間違いだった。

イルブ・カトラスは手ヒレで掻き揚げた砂でへキサの視界を塞ぎ、最後の力を振り絞ると逃走を試みた。

「ちよ ま、ふざけんなっ！」

顔にかかる砂を腕で防ぎ、へキサは大慌てで声を張り上げた。

瀕死なのは間違いない。巨体から立ち昇る輝きがそれを示している。生命子の乖離現象がはじまっているのだ。こうなってしまうのはそう長くは持たない。

だが、逆にそれこそがへキサを焦られる要因だった。彼の目的はイルブ・カトラスを倒すことではない。それはあくまでも手段であり、目的は別のところにある。

それ故に、ここで逃がしてはすべての苦勞が水の泡だ。たださえこっちはもう、剣を五本も失い盾や防具もメンテしなければなら

ず、大赤字が確定しているというのに。

「冗談ではない。ここで逃がしてなるものか。最悪は素手でぶちのめしてでも止める。システムブックから予備の剣を取りだす動作すら惜しい。」

舌打ちをして、膝を撓めた、その瞬間、

「 穿ち、貫く、氷柱の鉄槌」

凜とした声が砂原に響く。

熱せられた大気の温度が急速に低下し、突如として空中に出現した巨大な氷の柱が、逃げるイルブ・カトラスの頭上に落下した。

ぐしゃりと鈍い音がした。氷の柱に押し潰された巨体が、何回かビクンビクンと小さく跳ね、全身から力が抜けて沈黙した。

突然の事態に呆けた表情で固まるヘキサ。なんでこんな砂漠のど真ん中に、いきなり氷柱が出現するのか意味がわからない。

生命子に変換される砂の悪魔の遺骸を眺め、ぼかんとする彼の耳朶を、鈴の音を転がすような声がくすぐった。

「ふふつ。ギリギリセーフってトコかしら。私に感謝しなさい、ヘキサ」

白い砂の大地を背景に、長い黒髪の少女が軽やかに笑う。

美しい少女だ。水晶のように無機質的めいた美貌の少女が纏っているのは、至るところに黒いフリルがついている黒地の衣装。ゴシック調の洋服の上からは、足元まである黒いクロークを羽織っている

る。

「リグレット。どうしてここに……？」

「なに言ってるの。貴方が呼び出したんでしょう。熱で頭がヤラレたのかしら。……なんだったら、私がおのの頭を冷やしてあげましょうか？」

「うおっ！？ 思いだした。思いだしたからっ。こっちに杖を向けんな。危ないだろうが！」

水色の宝石が象嵌された金属の短杖。先端に渦巻く光に、身体を仰け反らせながら喚く。

確かに出かける前に、伝言のメモを残していた。この炎天下の中で長時間待機しているうちに、すっかり記憶から飛んでいたのだ。

「それは残念。あのモンスターののように、冷やしてあげようと思ったのに」

「押し潰すだけなら、氷である必要性はないだろう。ってか、よくこの砂漠であれだけ大規模な水魔法が使えたな」

砂漠にそびえ立つ氷の柱を見上げて、感心したようにつぶやく。

大気中に満ちる魔法の原動力である元素は、均等に充滿しているわけではない。界層の特色によって偏りがあるのだ。

例えば『砂塵の墓場』。一面見回す限り砂漠の世界の大気は、火素と地素の比重が非常に大きく、逆に水素の割合は極少量。元素が魔法の原動力である以上、元素の比重はそのまま魔法の威力に直結する。

そのはずなのだが、灼熱の砂漠で水の大魔法を使用した少女は、長い黒髪を片手で払うと、こともなげに言っていた。

「あら、風情があつていいじゃない。それに私、暑いのが苦手なのよ」

「あー………そうですか」

クロークの裏地のホルダーに短杖を戻すリグレットを見る。まるで消耗した様子のない彼女の姿に、ヘキサは流石というしかなかった。

第六章 廻る歯車(1) (後書き)

なにこれ怖い。

感想の多さに定例句がでてこないです。ちょっと寝ぼけてたんで一瞬、他の人の感想みてるのかと思いましたよ。

正直、想像以上の感想の多さに戸惑っています。僕としては三件くらいくればいいなあ、とか考えていたんですが、流石にこれは予想できませんでした。

応援に応えるためにも、早い更新を心がけたいんですが、毎日更新するのは今週だけで、来週からはまた元に戻りそうです。

ここからは長めの文章になります。

この場を借りていくつか言いたいことがあります。

>書き直し多すぎるだろう。

はい。そのとおりです。返す言葉がありません。これについては全面的に僕が悪いです。以後はしないように心がけます、としかいまは言えないです。

本当にすみません。

>返信について。

長文の感想をいただいたとき、僕からの返信が短いときがあると思いますが、正直に言ってしまうと返信を書くのが苦手です。

長文の感想に対しては長文の返信をしたいのですが、どうしても短くなってしまうことがあります。申し訳ないです。

今後もしういったことがあると思いますが、返信の不備は作品で挽回したいと考えていますのでご容赦ください。

長々と書きましたが、感想どうもありがとうございました。今後もどうぞよろしく願います。
では、また。

第六章 廻る齒車(2)

「暑いのが苦手なら、その服脱げばいいんじゃないね」

上から下まで黒で統一された彼女の服装に、ヘキサは小さく言葉を洩らした。ただでさえ暑いというのに、さぞかし熱がこもることだろう。

「外で服を脱げなんて……イヤらしい」

「何故そうなる」

自分の身体を抱きしめるリグレットに、半眼になるヘキサ。

彼女と行動を共にするようになって、そろそろ三ヶ月になる。いい加減、このていどの言動には慣れた。いつまでも動揺すると思ったら大間違いだ。

「裸は駄目だけど、下着姿くらいなら見せてあげてもいいわよ」

「……別に見せなくてもいい」

「そのワリには返答の間はあったみたいだけど？ ……私、脚線美には自信があるの」

流し目で言っつて、クロークの裾を捲り上げる。フリルのついたスカートから伸びる真っ白な脚を、見せびらかすように強調する。

咄嗟に視線がそちらにいきそうになるが、ぎりぎりのところで堪える。ここで慌てては駄目だ。いつものパターンに陥ってしまう。

ここは冷静に大人の対応をするべきだ。

「おおお、俺だって、い、いつま、までも、だだだ……」

訂正。どうやらまだまだのようだ。

くすくすと愉快そうに笑うリグレットから赤くなつた顔を逸らし、へキサは氷柱のほうへと歩み寄る。砂漠に突き刺さつた氷塊の周囲の空気は冷たく、戦闘で汗だくの身体にはとても心地よかつた。

しばらくこうしていたかつたが、聖堂騎士団の件もある。あれから結構時間が経っているし、さつさと用事を済ませて撤収するべきだろう。

目的の物が氷塊の下敷きになっていたらと心配したが、どうやら杞憂だつたようだ。氷柱の傍に転がっている剣を見つけると、砂を払い持ち上げて陽光に翳した。

振り返つた琥珀色の刀身を持つ、片刃の片手剣。イルブ・カトラスからのドロップだけに、相応の業物だろうが、未鑑定品のため性能は不明だ。

「ふうん。綺麗な剣ね。今回はよさそうじゃない」

「どうだろう？ 鑑定してみないとなんとも言えないな」

片刃の剣をカード化して、システムブックにしまつ。とりあえず目的のモノは手に入れた。後は鑑定の結果次第だが、その前に。

「一回、帰ろう。まずは風呂に入りたい。着替えもしなくちゃならないしな」

自身の酷い格好を見下ろしてつばやく。

イルブ・カトラスのプレスで、レザーコートはスタボロ。ここま
でスタスタだと、新調したほうが早そうなくらいだ。おまけに最後
の悪あがきで全身砂塗れ。身体を揺らすと零れ落ちる砂に涙がでそ
うになる。

今日の出費をざっと計算し、彼は頭痛を堪えるように嘆息した。

拠点に帰還するために、ポーターに触れようとしたヘキサの手が
止まった。

白髪の少年は殺風景な岩場を見回した。戦闘時の真剣な表情で、
左右に素早く視線を走らせると、横のリグレットに低い声色で呼び
かける。

「リグレット」

「ええ。私もいま気がついたわ」

「数は？」

「ひとつだけ。離れたところに複数の反応があるけど、戦闘範囲外
だからとりあえずは無視していいと思う。……ふん。一人でくるな
んで大した自信じゃない。どういたぶってあげようかしら」

口元に暗い笑みを浮かべるリグレットに苦笑し、ヘキサは表情を
引き締めると、腰の予備の剣に右手を添えながら声を張り上げた。

「もういいだろ。誰だか知らないけど、早く出てこいよ」

「あはは。流石にいい勘してるね」

と、誰もいないはずの岩場に、彼ら以外の声が響いた。声がした直後、ヘキサの立つ場所から右正面の突きでた岩の後ろから、ひとつの影がひょいと顔を覗かせた。

「つて、なんだ、お前か」

「なんだとは酷いなあ。久しぶりの再会なんだ。もうちょっと嬉しそうにしてくれてもいいと思うよ」

なんてこと言いながら近づいてきたのは、温和そうな笑みを浮かべる整った顔立ちの少年だった。青い長髪に碧眼。純白の鎧に目に焼きつくような真紅のマント。

突然現れた見知った顔にヘキサは、拍子抜けしたように肩を竦めて見せた。

「つて、言われてもな。生憎と男に会って喜ぶような趣味はないんでな」

「そうか。それは残念」

「ヘキサ？」

「ああ、こいつは大丈夫。戦いにはならない」

「そうそう。僕は”古い友人”と話にきただけよ。……だから、その物騒なモノから手を放してくれないかな」

ヘキサの身体に隠れるようにして立つリグレットの、クロークに忍ばせた右手を目敏く見とがめるアレク。右手はホルダーに収まった短杖を掴み、いつでも魔法を撃てるよう発動直前で待機状態にしてある。

「いいの？ こいつは 聖堂騎士団 の団員なんでしょ」

アレクの纏う純白の鎧の右胸に刻まれたシンボル。交差した剣と

盾のシンボルを、リグレットは冷やかな視線で睨んだ。

「ちょっと事情があつてさ。アレクだけは信用していいから」
「……わかった」

視線をアレクから外さず、短杖から手を放す。一触即発の事態を回避できたことに安堵しつつ、ヘキサは言いづらそうに口を開いた。

「それと悪いんだけど、先に帰っててくれないか。俺もすぐに帰るからさ」

「……つまり、もう用はないから、とつとと失せる雌猫ってことかしら」

「め、雌！？ いやいやいやいやいやいや。え、なにそれ。言つてないよ！ そんなこと一言も言つてないよな、俺っ！」

「どうせ私はヘキサにとつて、都合のいい女でしかないのね」
「待て、せめて言葉の撤回を……！」

言い切る間もなかった。リグレットがクリスタルに触れた瞬間、彼女の姿が眩い光に包まれて消失した。

キラキラとした転移光の残滓に呆然とする。はっと我に返ると、同じくきよとんとするアレクを見て、どう訂正しようかと悩む。

「アレク。これは違うんだ。あいつが言ってるのは、事実無根の戯言で」

「どうやら気を使われたようだね」
「そうだな」

本当にリグレットには頭が上がらない。自分には勿体なすぎる。そこで一旦、会話が途切れる。しばらく疎遠だった友人に、いきなり出くわしたかのような微妙な空気が流れる中、最初に口を開いた

のはへキサだった。

「……その、久しぶりだな。アレク」

「うん。半年ぶりになるかな」

アレクは口の端を緩めると静かな口調で返答した。

半年。時間が経つのは早いものだ。もうそんなに経っているのかと、今更ながらに驚くへキサ。と、まじまじと見たアレクの格好に違和感を感じて首を傾げた。

「なあ、ひとつ訊きたいことがあるんだけどいいか」

「ン？ なんだい？」

「お前の腰の剣、前より増えてないか？」

違和感の正体に気がついたへキサは、アレクの剣帯に吊るされた『七本』の剣を指差しながら言った。

へキサがアレクと最後に会ったとき 半年以上前の話だが

は、彼の腰に吊るされていた剣は五本だったはずである。

「あ、やっぱり気になる？ そうだね。そりゃ気になるよね」

嬉しそうなその表情に、へキサはしまったと思ったが既に手遅れだった。

「いやーセシリアが頑張ってくれてさ。最近になってようやく実装にこぎつけたんだ。彼女には迷惑かけっぱなしでね。こここのところずっと徹夜してくれてたみたいだし。お礼に今度、遊びに連れてってあげようかと思うんだけど、へキサはどこかいとこころ知らない？」

知るか、と内心で独白する。なんで他人の惚気話なんて聞かされなければならぬのか。そういやこういう奴だったあ、とヘキサは感慨深げに思った。

「そういえばネイトさんに会いたかったって言ってたっけ。ヘキサは彼女の居場所知ってるんだよね。ちよつと伝言しといてくれないかな」
「……マジで止めとけ。あいつセシリアをことを天敵だと思ってるからな。顔合わせたら絶対、ろくなことにならないって」

ヘキサの経験上、話題にセシリアの名前がでると、途端に不機嫌になるのは明らかである。そして高確率で自分に飛び火するのだ。

「と、まあ、前置きはこのくらいにして、だ」

こほんと咳払いをひとつ。表情を改めるとアレクは、未だに剣の柄を握っている彼の姿に苦笑いしながら言った。

「あの娘も言ってたけど、ここにいるのは僕だけだから。一緒にきた人たちには、申し訳ないけど離れたところで待機してもらってる」

そう言われて、はじめてヘキサは柄から手を放した。

リグレットにも言ったがアレクだとわかった時点で、戦闘になる可能性は低いと認識していたが、自分の立場上用心するに越したことはないのである。

もつとも、惚気話の時点で、戦意なんてとうに失せてはいた。まあ、別の意味で斬りたくなってはいるが。

「ここにきた目的は俺か？」

「運の悪いことに報告が入ったとき、偶然本部にいてね。こうして

駆りだされたワケさ」

へキサの言葉を間接的に肯定するアレク。

だろうな、と彼は声にださず内心で思った。それでもなければこんななにもない界層に、聖堂騎士団でも指折りのプレイヤーである彼が、姿を見せるわけがない。

「どうあっても君を抹殺したいみたいだよ。へキサの名前がでた途端、目の色を変えて部隊を編成してたからね」

「ご苦労なことだな」

「それだけ危険視してるってことさ。Aの恐怖がいまでも忘れられないんだよ」

殺人鬼A。”初代”マンイータ。かつて箱庭世界を恐怖のどん底に叩き落した、最強最悪のプレイヤーキラー。

「そろそろ戻るかな。あまり時間をかけると怪しまれるだろうしね。ま、久しぶりにへキサの顔が見れたから、今日はそれで我慢しておくよ」

「いいのか。聖堂騎士団の一員が、俺を見逃しても」

「僕は元々反対だったからね。ギルドの決定だから仕方なく従ったけど、それはいまも変わらないよ。適当に徘徊してギルドには、もう君はいませんでしたって報告するよ」

なんてやり取りをしながらアレクの背中が遠ざかり、不意にその足が止まった。

「へキサ。僕からもひとついいかな？」

「……なんだよ。改まって」

旧友の声色に眉を潜め、

「『クルルの悪夢』」

彼の次の一言で表情を一変させた。

「そろそろ話してくれないか。四ヶ月前、あそこでなにがあったのかを」

「……別に。ただ馬鹿が馬鹿して馬鹿やったってだけの話だよ」

喉の奥から搾り出すようにそれだけ言うへキサ。

「そうか。……じゃ、またね」

ひらひらと片手を振る少年の姿が、岩陰に消えていく。かに思えた直前、彼は再び足を止めるとへキサのほうを振り返り叫んだ。

「避けるッ！」

「はっ？ なに言って」

るんだ、と最後まで言葉にすることなく、一瞬で鞘から引き抜かれた剣が、飛来した炎の弾丸を切り裂いた。

渦巻く炎の残滓が消えるよりも早く跳躍。刹那まで自分がいた場所に、赤い弾丸が連続で撃ち込まれる。

穿たれ砕け散る岩を横目に、着地したへキサは襲撃者を確認するため、弾丸が飛来してきたほうを見やり、「げっ」と呻いた。

「見つけたわよ、へキサ」

へキサの視線の先には、岩場の上に立つ一人の少女。

肩口で切りそろえられた髪は燃えるような赤。黒のインナーに赤いジャケット。ホットパンツという格好で、白髪の少年をねめついている。

彼の方向に突きつけられた左手には、鋭角な形状をした金属製の手甲が嵌められている。手の甲に象眼された赤い宝石が、持ち主の意思を反映するかのように強く輝いている。

「今日こそ逃がさない。決着をつけるわよ！」

高らかに言い放つ赤毛の少女　ハズミは、勝気な笑みを浮かべると左手を翻す。指先の軌跡を沿い、火の粉の残滓が空中に弾けた。

「またかよ。お前の頭にはそれしかないのか」

「うっさいッ。いまから黒焦げにしてあげるから覚悟しなさいッ」

げんなりとした物言いに対する返答は、殺気を滲ませた炎だった。紅蓮の尾を引く三本の炎が、へキサ目掛けて放たれる。直線ではなく曲線。緩やかな弧を描く炎に舌打ちしつつ剣先を跳ね上げる。

二本は剣で打ち消し、三本目は後方に飛び退くと同時に盾で防ぐ。着弾の衝撃で揺れる身体を押し込め、続けざまの火炎弾を迎撃する。詠唱もなしに撃たれる炎弾。しかも微妙に速度を変えているので対処がし辛い。

「アレクツ！　なんでハズミがここにいるんだ!？」

「えーと今回は　聖堂騎士団　と　天上神歌教会　の合同だって話

……あれ？　してなかったっけ？」

「聞いてねえよ。初耳だ!!」

もしもそれを事前に聞いていたら、有無を言わず速攻でこの界層から脱出していた。

「あたしを無視するなあ！」

どうやら自分以外の存在に意識を向けているのが気に入らなかつたようだ。岩を蹴り宙に身を躍らせると、頭上に掲げた左手に炎を収束。

剣の形状にした炎を振り上げて、ヘキサに猛然と襲い掛かった。だが、近接戦闘に関してはヘキサのほうに一日の長がある。

頭上からの一撃を半身になってかわすと、火の粉を散らす炎剣に肉厚の刀身を叩きつけた。直後、炎の剣はその形を失い、内側から弾けるように消えた。

「ああ、もう！ 相変わらずムカつくわねッ」

自分から距離をとる白髪の少年に悪態を吐く。忌々しそうに彼を睨みつけ、周りに旋回させた火球を解き放つ。

「見てないで止めるよ！」

通常では考えられない密度と速度の炎を剣で切り裂き、傍観しているアレクに助けを求めるヘキサ。割と必死な白髪の少年とは対照的に、のんびりとした口調で彼は口を開いた。

「いや、でも、ほら……楽しそうだし。僕が邪魔しちゃ悪いでしょ？」

「ぶざけるなあああ　　ッ！ お前の目は節穴かあ！？」

さきほどまでのシリアスな雰囲気は完全に粉碎された。にやにやするアレクと躍起になるハズミに挟まれて、剣を振るうへキサの哀れな悲鳴が岩場に響き渡った。

第六章 廻る齒車(3)

金と銀。夜空には現実とは違う、ふたつの月。界層ごとに異なる世界で、唯一変わらないふたつの月が、冴え冴えとした光を放っている。

夜の帳が落ちたクノックスは、しかし街灯や店先から洩れる光によつて、昼間と変わらぬ明るさと喧騒に包まれていた。

見れば道の端には露天が立ち並び、様々な商品を並べるプレイヤーと、商品を物色するプレイヤーとでひしめき合っている。

クノックスのある千界迷宮65層は『鋼炎の世界』と呼ばれ、灼熱の活火山と荒廃した大地の界層である。

いくつもある鉱山からは豊富な種類の鉱石を発掘でき、その鉱石を求めて多くの鍛冶師がこの階層に集まっている。

そのためクノックスは鍛冶師の街としても有名であり、彼らの武器目当てのプレイヤーも多数この街を訪れ、いま箱庭世界でもっとも活気のある街のひとつだ。

がやがやとした喧騒の中、どんよりとした陰を背負うプレイヤーが一人。ヘキサだ。彼は舗装された通路の端を俯き加減に歩いている。

フードの奥の表情は暗く覇気がない。まるで徹夜明けの社員のような有様だ。

いまのヘキサは普段の格好の上から、濃紺の外套を纏っている。一見するとただの地味な外套だが、認識及び索敵システムのスキルや魔法を遮断する、強力な【隠蔽】効果つきの一品だ。

防具としての性能は紙に等しいが、街への出入りに細心の注意しなければならぬ立場にある彼には、欠かすことのできない装備である。

前に一回、些細なミスで正体がバレてしまい、エラいことになったときがあったのだ。逃げ惑う民衆。すっ飛んでくる守衛。プレイヤーとNPCを巻き込んだ大騒動。流石にあれをもう一度はゴメンだった。

「……疲れた」

「重たい身体を引き摺るようにしてつぶやく。

ハズミに追っかけ回されて、時間も無駄に浪費してしまったし、今日は散々だった。

あの後、ハズミの一瞬の隙をつき、ポーターに跳びこんだものの、イメージ操作を誤り別の界層に放り出されてしまい大変だったのだ。

すぐに目的の層に跳ぼうにも、ポーターには使用制限により一時間のデレイタイムが必要であり、その間は一切ポーターを利用できないのである。

ポーターによる転移は発音ではなくて思考で行う。故に、転移先のイメージがあやふやだと、今回のような誤転送が起きてしまうのだ。

思考式は発音しないでいい分、緊急時は便利なのだが、こうした

事故が起きるときがあるから考えものだ。

とはいえ、普段だったらこんな初歩的なミスはしないのだが、直前のアレクとの会話が存外に動揺を誘ったようである。

そう考えるとハズミの乱入で少しは気が紛れたので、そこは感謝してもいいのかもしれない。代償は思いのほか大きかったが。

そんなわけで、転移結晶の傍で待ち惚けすること一時間。ディレイタイムが終わり、一端拠点に戻り風呂に入ったりして、ようやくクノックスに到着したのである。

おかげで肉体的より精神的に疲れ果てていた。

本当なら一休みしたいというのが本音なのだが、用事をさっさとすませてしまいたいという思いもあり、こうして疲労を堪えて歩いているというわけだ。

夜になっても絶えない人々の活気に、ヘキサは外套のフードを深くに被り直すと、目立たぬように街路の隅っこを歩いて馴染みの店に向かう。

知り合いの店はクノックス中央区画の転移結晶から、歩いて十五分ほどのところにある。黙々と歩いていると、ふとアレクやハズミの姿が脳裏に浮かんだ。

まさかあの二人があそこにいるとは思わなかった。大方、ギルド間の微妙な関係やらんやらの結果なのだろう。

「しかし、 聖堂騎士団 と 天上神歌教会 の合同ね」

ヘキサの記憶が確かならば、ふたつのギルドの仲は険悪とまではいかないものの、『王城派』ギルド同士、千界迷宮の攻略において敵対関係にあったと認識していたのだが。

規模の大きなギルドにありがちな構図だ。ギルド同士、仲良く腕を組んで攻略しましょうなんて考えがあるはずもない。

それでも手を組むとするならば、よほど差し迫った理由があるときくらいだ。アレクが言っていたように、それだけなりふり構わず自分を排除したいということなのだろうか。

それとも自分の知らないところで、なにか問題が起きているのかもしれない。

今度、クライスさんに聞いてみよう、などと考えながら歩いていくと、遠くから金属を叩く金槌の音が響いてきた。

鼻をくすぐるモノを焦がす匂い。鍛冶師の集うこの区画からは昼や夜を問わず、真つ赤な炎と金属音が途切れることはない。

白髪の少年の目的地はこの区画の奥。人の寄りつかなさそうな路地の端にある、こじんまりとした小さな店だ。

店の前に立ち窓越しに店内を見やり、客がないのを確認すると、へキサは扉を開けて中に入った。片手剣や両手剣。刀に曲剣など。小綺麗な店内には複数の武器が、整然と種類別に纏められて飾られている。

「おう、へキサじゃないか。今日はどうしたんだ？」

奥のカウンターに座っていたニット帽の青年が、フードを脱いだへキサの姿に、ひらひらと片手を振ってみせた。

ニット帽の青年の名前はハリー。へキサの知り合いであり普段、彼が武器のメンテナンスを頼んでいる鍛冶師である。

「武器の鑑定を頼む。それと剣の補充とメンテもな」
「あいよ。ちよつと待ってる」

手渡された片刃の片手剣の、琥珀色の刀身に指を滑らせる。剣の重みを確かめるよう持ち上げると、感嘆の吐息を洩らした。

「へえ。中々、いい剣じゃないか」

「鑑定してないのにわかるのか？」

「いままでどんだけ、武器を扱ってきたと思うんだ。武器の良し悪しくらい、触ってみればわかるっての。……どいつからのドロップ品だ？」

「イルブ・カトラス」

「なるほど。そりゃいい武器がドロップするはず……イルブ・カトラス？」

強大なモンスターとドロップアイテムの質は比例する。

ヘキサの言葉に頷くハーリーだったが、ぴたりと唐突に動きが止まった。片刃の剣をカウンターの上に置くと、考えごとをするような仕草をしながら言った。

「あつと、イルブ・カトラスって、70層のイルブ・カトラスのことか？ あの砂漠の悪魔って呼ばれてる……？」

「そうだけど。それがどうかした？」

「はあつ。どうしたって。ヘキサのことだから、当然ソロで倒したんだよな？」

何故か驚きと呆れが半分ずつ混じった問いに、首を傾げながら肯定する。正確に言えば最後はリグレットの助けを借りたのだが、ソロと言っても問題ないだろう。

「なんてーか、相変わらずさりと、とんでもないことやる奴だな。普通、ソロでイルブ・カトラスを倒そうだななんて考えないぜ」

前提としてイルブ・カトラスのような大型モンスターは、パーティ単位で挑むのが当然であり、間違ってもソロで戦うべきモンスターではないのだ。鍛冶師が本業であるハーリーはモンスターに詳しくないが、そのていどは基本知識として知っている。

「流石というかなんというか。よく無事だったな」

「全然、無事じゃない。剣は盛大にぶつ壊れる。防具もスタボロ。盾なんて回路が焼き切れたせいで、フルメンテの必要があるし、大赤字もいいところだ」

これで唯一の成果である片刃の片手剣が、大したことない安物だったらと思うと。笑うに笑えない事態である。

「ってなワケだから、鑑定に期待するぞ」

「いや、別に俺が性能を決めるワケじゃねえし。……頼むから期待ハズレでも、俺に八つ当たりするなよ」

カウンターに手をつき、前のめりになるヘキサに一言。ハーリーは琥珀色の刀身を指で叩き、【鑑定】スキルを使用して片手剣の上に小さなウインドが表示された。

「どうだ？」

「まあ、そう慌てるなって。どれどれ……あーと、これは、あーはいはい」

画面の記述にざっと目をとおすと、頬をかきながら口を開いた。

「良い知らせと悪い知らせ。どっちから訊きたい？」

「……いいほうから」

「銘は、アラクトル。純属性。全ステータスに+10。固有能力は自己治癒力の強化。聖剣だな。イルブ・カトラスからのドロップだけはあつた。大した性能値だ」

「悪いほうは？」

「いい剣だけど……駄目だな。耐久力自体は既存の剣とほぼ同じだ。お前の全開には耐えれそうにない」

「あー。そうなのか」

がつくりと肩を落とす。今回はイケるのではと期待していただけに落胆も大きかった。

「いいさ。俺、片刃つてあまり好きじゃないし。むしろ、よかったよ」

「それでどうするんだ？ 使わないなら俺が買い取るぞ。これなら武器の補充とメンテ代払っても、お釣りがくるから赤字は回避できると思っけど」

「……買取でお願いします」

他に選択肢なんてなかった。「まいどありー」というハーリーの声が、頂垂れるヘキサの耳に物悲しく響いた。

第六章 廻る齒車(4)

使える武器が手に入らなかったのは残念だったが、赤字は回避できそうなので今日のところは良しにしようと、ヘキサは自分にいい聞かせた。

「それじゃあ、防具と盾を渡してくれ。明日までに整備しといてやるよ」

「悪い。いつも手間かける」「あははっ。なあに、いいってことよ。ヘキサは俺のお得意様だからな。これくらいは優先してサービスしてやるさ。……剣の本数はいつもと同じでいいか?」

「それで頼む」

受け取ったレザーコートと盾のカードをしまい、それとは別に剣の絵が描かれたカードの束をヘキサに手渡す。彼はカードの枚数を数え、十枚あるのを確認すると、システムブックに放り込んだ。

別にハーリーを疑っているワケではないが、トラブルを未然に防ぐための措置である。信用問題に関わるだけに、知り合いだろうとそこは徹底しているのだ。

「お前も難儀な奴だよなあ」

カウンターに頬杖をつきながら、その様子を見ていたハーリーがつぶやいた。

「こっちは在庫がぼんぼん捌けるから大助りだけど、使ったびに剣が壊れるとか、たまったモンじゃないだろ」

「まあね。でも、こればかりは仕方がない。壊れない武器が見つかるまでは、これで我慢するしかないよ」

大きなため息を吐きながら、システムブックを閉じるヘキサ。口では仕方がないと言いながらも、不満だらけなのは見え見えだった。それも当然だ。戦闘の度にこれでは、いくらリラがあっても足りやしない。これだけ武器を使い捨てにするプレイヤーなんて自分くらいだろう。

剣一本のコストを抑えるにしても、ある一定ラインの質は確保しなければならぬ以上、値段を下げるのにも限界がある。

どうしてこのような事態になってしまったかといえば、自分の全開放した生命子に耐えうる武器がないからである。

武器には蓄積できる生命子の限界容量がある。

当然、容量の高い武器ほど多くの生命子が流せ、それが威力の向上に繋がるといっわけなのだが、ヘキサの場合、膨大な生命子に武器のほうに耐え切れないのだ。

大技を使えば必ずといっていいほど大破する剣。格下相手なら手加減もできるが、イルブ・カトラスのような大物相手ではそうもいかない。

いかに武器を壊さないよう運用するかではなく、【換装】スキルを用いた武器の破損前提の武器消費型の戦闘スタイルは、そうした事情からである。

とはいえ、このままではギリ貧なのは確かだ。いい加減、根本的な解決案を見つけないといけないのだが、これが中々難しいのである。

プレイヤーの生産品では駄目だった。

ハーリーが言うのは、鍛冶師の腕の良し悪し以前に、素材に使用する金属自体が、ヘキサの生命子に耐えられないとのことだ。新しい素材が見つからない限りは、プレイヤーの生産品に頼るのは不可能なのである。

となれば、後はボスクラスのモンスターからのドロップ品に頼るしかない。

事実、極一部のプレイヤーが持つ武器ならば、彼が生命子を注がれても壊れないらしく、これが一番現実味の高い手段である。

しかし、ここにもまた問題がある。それらの武器が入手できる可能性があるのは、現状最前線のモンスターに限られているのだ。

『王城派』のプレイヤーがひしめく最前線に、賞金首であるヘキサが近づけるワケもない。迂闊に顔を見せれば、酷い目にあつのは目に見えている。

「 聖堂騎士団 辺りが武器を市場に流してくれればいいんだが。……あいつらは自分たちの中で回しちまうから、こっちに流れてこないんだよなあ」

他人よりもまずは自分たちの強化。当たり前の理屈だ。数が少ないこともあり、市場にでてくるのは当分先になりそうだった。

結果としてヘキサは今回のような、最前線ではないけど最前線に

匹敵するモンスター　イルブ・カトラスのようなモンスターを求めて、千界迷宮を右往左往する羽目になっているというワケである。

お世辞にも効率的と言えないが、他に方法がないのも確か。いまはひとつひとつの可能性を、片っ端から試していくしかないのだ。

なんて言い訳しながら落ち込むヘキサを見やり、その微妙に冷えた空気を嫌ったのか、雰囲気を変えようとハーリーは思考を巡らすと、

「そつだ！　ヘキサ。お前の懸賞金、また上がったぞッ」

最悪の話題を口にしていた。

「……ハーリー？」

「あーマジでスマン」

半目で睨まれてハーリーは後退った。

「はあつ。いいけどさ。　つてか、なに。また上がったのか？

この前、上がったばかりだろうが。マリーゴールドはなに考えてるんだ」

あの事件以降は、割と大人しめに　襲いかかってきた連中を、返り討ちにはしているが　行動を控えているのに、どうしてこう自分の懸賞金ばかりが、どんどん吊り上っていくのだろうか。

「連中としては初代の二の舞は避けたいんだろ。だから二代目のお前を排除しようと、躍起になってんじゃねえのか」

またか、と内心で舌打ちする。

ここでもまた、Aの名前がでてきた。彼が後ろには常に、Aの名前がついてまわり、切り離されることがない。もはやヘキサとAを同一視しているとすら思えるほどに。

「なににせよ気をつけるんだな。いまは大分落ち着いて小康状態だけど、いつまた爆発するかもしれないんだ」

言われるまでもない。それは騒ぎの中心にいた自分が一番よく知っている。当時の騒動を思い起こし、ヘキサはうんざりした調子で肩を竦めた。

「、、」

ヘキサ 否、樋口友哉ひぐちともざはゆっくりと目を開いた。

まず目に飛び込んだのは見慣れた天上だった。自室のベットに横になっていた友哉は、上半身を起こし 脳裏を過ぎる記憶に額を押さえた。

それは数日間の記憶だった。

朝起きて、学校に行つて、帰宅してからベットに寝転んでいた。それだけの記憶。そして、自分の知らないはずの記憶だ。

何故ならそのとき自分は、ファンシーにログインしていたのだから

理屈も理由もわからない。ただ周囲の情報を整理すると、ログイン中の自分は一種の自動操作状態にあるらしい。

ファンシーからのログアウトの際、その間の記憶が流れてくる奇怪な現象。俗にフラッシュバックと呼ばれるそれを嫌うプレイヤーは多い。

友哉もその一人だ。自分の知らない自分の記憶は思いのほか不気味で、基本的に彼がログインするのが就寝直前なのはそのためである。

この時点でいかにファンシーが、異質であるかがわかるだろう。科学が云々ではない。完全にファンタジーの領域である。

当然、友哉もそう思っているのだが、それでもファンシーを止めるつもりはなかった。止めるのは目的を果たしてから。それまでは絶対に続けると固く決心している。

「あー喉が渴いた……あぶっ」

友哉は飲み物を求めてキッチンに行こうとして、足を前に出した拍子に雑誌を踏みかけて危うく転びかけた。転ばないように踏ん張りバランスをとる。

「これは掃除しなくちゃ駄目かな」

部屋を見回し、嘆息する。

我ながらというか、部屋の中は物が散乱して、ひどい有様だった。絨毯にはゲーム雑誌やらマンガやらが無造作に放り投げられ、足の踏み場がない。

正面の机の上にはパソコンが鎮座している。その横にはテレビがあり、その前にはいくつものゲーム機が使われることもなく置かれていた。教科書が入った鞆は部屋の隅に投げ捨てられている。

友哉はモノを踏まないように気をつけながら自室を出て、キッチンのある一階に行くために階段を下りようとして、

「あっ」

階段を上げてってきた短髪の少女の姿に足を止めた。

彼の妹の樋口奈緒だ。

「……なによ」

「いや、その……別に」

「ならどいて。邪魔だから」

興味がないとばかりに素っ気なく言う奈緒。

「う、うん」

慌てて横に退ける。奈緒は友哉の脇を通り抜け自分の部屋に戻った。

彼と妹のやりとりはいつもこんな感じだ。二言三言、言葉を交わすだけ。それで終わり。外で話した記憶などここ数年を振り返っても一度もない。

小さい頃は仲がよかった筈なのだが。中学生くらいだろうか。妹と徐々に会話する機会が減り、いつの間にかいまの関係になったのは。

それとも現実の兄妹関係なんてこんなモノなんだろうか。

少し考えて 答えはすぐに出た。

顔も平凡。成績も平凡。趣味はネットゲームのオタク野郎。両親が共働きで家にいないのをいいことに、遊び呆ける毎日。

媒体が変われど、いまもそれは変わらない。好かれる要素がないから好かれない。ただそれだけのことなのだ。考えるまでない。気づいてみれば単純だった。

「そんな兄貴なんて自慢にならないよなあ」

しばらく友哉は奈緒が消えたドアをじっと見つめていたが、ふと視線を外すと喉の渴きを癒すため階段を下りていった。

第六章 廻る齒車(5)

千界迷宮67界層『汚泥の沼』。
湿度の高い生温い空気に、沼地を覆う白い霧。足元のぬかるんだ泥の大地は足場が悪く、ふとした拍子に体勢を崩しそうになる。

視界の端の霧が揺れた。反転させた身体をかすめるようにして、巨大な物体が通過する。その影は地面を大きく抉り、鎌首をもたげるとへキサを睥睨した。

それは巨大な蛇だった。細長い体で泥に跡を刻み、赤い舌を覗かせながら、金色の双眸で白髪の少年を威嚇している。

この沼の主、クトルクス。その亜種である。本来は赤い鱗が緑の光沢を放ち、体のいたるところから刃のように鋭い棘を生やしている。体格も二回りほど大きい。

己の体液で緑の鱗を濡らすクトルクスはすでに満身創痍だった。裂傷だらけの体を旋回させて、ガラガラと喉を鳴らしている。

白髪の少年と緑蛇が同時に動いた。クトルクスの突進を右方向に回避。鱗に剣を突きたてようとするへキサの背後から、棘のついた太い尻尾が襲いかかった。

咄嗟に掲げた盾で、尻尾の一撃を防ぐ。重たい衝撃が彼に押しかかり、泥に足を取られて地面に片膝をついた。

再び振るわれる尻尾による強打に、へキサは滑るように地面を転がった。

白いレザーコートを泥まみれにしながら、頭上を通過する尻尾を見据えると、生命子を刀身に叩き込み剣先を跳ね上げる。

強化された刀身は強固な鱗をもともせず尻尾を両断した。切断面から体液を撒き散らしながら、体をくねらせて周囲のモノを薙ぎ払うクトルクス。

役目を終えて砕けた剣を捨て、新しい剣を虚空から引き抜いて投擲する。刀身に込められた生命子が、霧を裂いて赤く輝く。

間髪入れずにもう一度【換装】を発動。剣を掴むと泥を蹴った。投擲した剣は鱗を砕き、根元まで深く埋まった。

ヘキサは暴れるクトルクスに接近すると跳び、突き刺さった剣の柄を踏みつけ、緑蛇よりも高く跳躍した。こちらを見上げるクトルクスの眉間を、逆手に構えた剣が貫いた。

剣から手を放して離脱。足から地面に着地すると、いつでも剣を取れるように準備しながら、目の前の緑蛇に注視した。

鋭い牙を生やした大きな口から苦悶の叫びを上げて、巨大な緑蛇が地鳴りを打ち地面に叩きつけられた。衝撃で泥が跳ね、茶色く濁った沼に斑紋が広がる。

緑蛇は棘の生えた尻尾を一度だけ揺らすと、それつきり動きを停止させた。光沢のある滑った緑色の鱗が淡い粒子に変換される。

同時にヘキサは自分の身体に、“熱”が流れ込んでくるのを感じた。クトルクスの生命子である。白髪の少年は指輪を介さずに直接生命子を吸収しているのだ。

『生命循環』とはまた違った感覚に、ヘキサは知らず顔をしかめた。指輪を使わなくなりしばらくが経つが、いまでもこの感覚には慣れない。

否、慣れたくないのか。自分のやっていることが、この世界の法則から逸脱していると理解しているが故に。

ユニークアビリティ『捕食』。マンイーターのマンイーターたる所以。箱庭世界で二人目の保有者にして、現存するたった一人の保有者。

それがヘキサだ。

良くも悪くもこのアビリティは、白髪の少年の状況を一変させた。マンイーターなんて二つ名　悪名が、その最たるモノである。

「ああ、くそっ」

なにに罵っているのかも不明だった。自分の周囲を渦巻く現状にか。自分にか。他人にか。それ以外のモノ。あるいは全部。それすらも把握できない。

理解できないための苛立ちをため息と一緒に吐きだし、ヘキサは自分の身体を見下ろして、さつきとは違う意味で顔色を変えた。

沼地を派手に転がったせいで、全身が泥まみれだった。服の中にまで入り込んだ、泥の感触が気持ち悪かった。

砂やら泥やら。最近はこのばかりだ。早いトコ、拠点に戻って風呂に入りたい。さっさとドロップアイテムを回収して帰ろう。

「っても、あんまり期待できないんだよなあ」

このクトルクスは亜種だけあり、通常種よりは遥かに強かったが、イルブ・カトラスと比べては見劣りしてしまう。

今回もおそらく望みは叶わないだろう。ならばせめて、苦労した分が報われるよう、高値で売れるドロップがでて欲しいモノである。

なんてことを考えながら、ヘキサは消滅したクトルクスのほうを

ホワイトオーダー
白翼からの命令。

乱数調整。

ドロップアイテムの変更を実行。

『天秤機能』による干渉率の測定。

白翼：1＝黒翼：0。

『天秤機能』+3。

以上。

処理を終了。

見やり、彼は首を捻った。

ないのだ。なにも。緑蛇の遺骸があったところには、ドロップ品らしきモノがなかった。魔石もない。あるのは泥だけだった。

「ちよ、なにそれ！？マジかよッ！」

声を荒げるヘキサ。完全に予想外だった。高値云々どころではない。そもそもドロップ品すらないとは、なにかの間違いだと思いたかった。

慌てて駆け寄るヘキサだが、目を凝らしてみてもなにもなかった。

泥に埋没したのかと、手を泥に突っ込んで探ってみるが、ドロップ品らしきモノは見つけられなかった。腕が空しく泥をかき混ぜて

いる。

「ふざけんな！ 冗談だろ。勘弁してく　ン？」

憤りを露にするヘキサだったが、泥の中に光を反射する小さな”
なにか”を見つけて動きを止めた。指先には泥とは違う金属の感触。
指で摘んで持ち上げて、手を振ると泥を落とす。

摘んだそれは装飾が施された銀色の鍵だった。状況から考えるに、
この鍵がドロップアイテムなのだろうが、なんといいばいいのか。
返答に困る。

微細な細工がされているとはいえ、これ自体が高値で売れるとは思えない。おそらくはなにかのキーアイテム。もしくはフラグアイテムといったところか。

問題なのはそれがなんなのかが、まったくわからないということだ。少なくともヘキサの記憶には、銀の鍵に関する情報は見つからない。

「わっかんねー。なにに使うんだ、これ？」

いくら悩んだところで、答えはでそうになかった。

仕方がない。まずは戻って風呂に入ろう。鍵のことはその後で考えればいい。そうした結論に達し、ヘキサは銀の鍵をしまった。

念のために他にアイテムがないか、沼地を見回してやはりないかないことがわかると、ヘキサは嘆息して踵を返した。

六章 廻る歯車(5) (後書き)

どうも祐樹です。

今回はこれにて終了。

次章もご期待ください。

感想・ご意見は随時募集中ですのでぜひどうぞよろしくです。

ではでは。

七章 原初の光景（1）

千界迷宮。

”千”の”界”を重ねた”迷宮” と云われるだけあり、一界層が恐ろしく広く、条件次第では攻略に一ヶ月以上を費やす界層もある。

これだけ様々な特色のある界層があれば当然、不人気で過疎の界層も存在するワケで、中にはプレイヤーの滞在人数が十人なんて界層もあるくらいだ。

過疎化する理由は様々あるが、大抵がモンスターの強さと経験値が釣り合わなかったり、レアドロップの有無だったりする。

千界迷宮30界層『鬱蒼の森林』も、そんな過疎でプレイヤーの姿がない、不人気界層のひとつ。31界層の開放と同時に見切りをつけられた界層だ。街や村もNPCばかりで、プレイヤーの姿を見かけること自体が稀。

もつとも、だからこそ隠れ家を作るのには、うつつつけど言えるわけなのだが。なんてことを考えながら、ヘキサは鍵穴に差し込んだ鍵を回した。

白髪の少年が訪れたのは、31界層の最南端にある小さな村である。ポーターが設置されていないような、本当に小さな村だ。

だが、村から歩いて二十分くらいの箇所にポーターがあるので、

そこまで交通に不便さは感じていない。道中のモンスターにしても、低層の敵など無害も同然だ。

「あら……こんにちわ、へキサさん」

木製の扉の軋む音で気がついたのか。扉を開けると、椅子に腰掛けていた人物が、へキサに微笑みかけてきた。

口元に指を添えて上品に微笑するのは、外ハネした茶色の短髪にくりつとした黒い瞳、小柄な身体にはだぶだぶの白衣を羽織った少女だった。

「まあ、どうされたのですか？ 泥まみれで酷い格好ですこと」

「ちよつと沼地で一戦やらかしてな。……リグレットとリンスは？」

室内を見回しながら口を開く。木の机に木の椅子。雑貨品がごちゃに置かれて、実際よりも狭く思える室内。部屋の奥には二階に続く階段が見える。

「まだお二人とも来ていません」

「そつか。今日の予定とかなにか聞いてる」

「いいえ。私はなにも」

茶髪を飾る猫の耳のようにも見える大きな黒いリボンを揺らし、少女はそう言うつと視線を部屋の隅に移した。

「ですが、昨日そちらのボードにメモをしていかれたようですよ」

さんきゅ、と言い、部屋の片隅に置いてあるメモボードに近づぐ。小さな長方形のボードには、彼女の言葉通り紙切れがピンで留められていた。

恐らくリグレットの文字だ。ピンを外して紙切れに書かれた綺麗な文字に目をとおす。

ファンシーには一般的なネットゲームでいうところの、『囁き』や『ショートメール』に相当するモノがない。なので、第三者にメッセージを送ろうとしたら、伝言やメモなどの原始的な手段に頼るしかないのだ。

一応、導具の中には、離れた相手と会話できるモノもあるのだが、非常に高価なうえに持ち運べる大きさではない。

現実で例えるならば、公衆電話はあっても携帯電話がないといったところか。だからといって公衆電話を担いで歩く馬鹿はいまい。

これを保有しているのは、マリーゴールドの本部と規模の大きな支部、聖堂騎士団のような大ギルドくらいだろう。

ちなみに導具というのは、生命子を動力源とするアイテムの総称である。この世界には現実のように電気がない。代わりに生命子を利用した機構が、発達しているのだ。

特にインフラ関係はすべて、魔石より抽出した生命子によって、賄われているのである。

「お二人はなんと？」

「それぞれ野暮用で遅くなるってさ。もうちよいでくるんじゃないか？」

「そうですか。では、それまでは私とヘキサさんの二人だけですね」

ふふふ、と頬に手を当てて微笑む少女に、しかしヘキサは生暖かい目で彼女を見ていた。

「いやですわ。そんなに見つめないでください」

その視線に恥ずかしそうにはにかむ少女だが、変らない白髪の少年の眼差しに、彼女はふうつと吐息を吐くと、

「ふんつ。なんか文句あんのかよ」

「ああ、よかった。いつものネイトだ」

口調を一変させた短髪の少女に、ヘキサは安堵したように言った。

「やっぱりそうでなくちゃ。お嬢様口調のネイトなんて、ネイトじゃないや」

「悪かったな。こつ見えてもボクは、人の目は気にするほうなんだよ」

頬を膨らませるとそっぽを向くネイト。

今更言うまでもないが、さっきまでの彼女は営業用　つまり、猫かぶりなのだ。普段のネイトを知る身としては、彼女の猫かぶりには違和感しか感じないわけである。

「それはそうと、風呂借りるぞ。気持ち悪くしてしょうがない」

「あ、ちよつと待て。その前にシステムブックを渡せ。調整してやるから」

「でも、定期調整はまだ先だぞ」

「どうせ暇なんだろう？　新しく構築した術式の調子も見たいし、ついでに調整もやってやるよ」

「……そうだな。じゃあ、頼む。『オープンブック』」

虚空から”本”を取りだすと、それをネイトに渡す。

わざわざ”本”を渡さなくても、所有スキルだけを第三者に見せ

することもでき、若干手順を踏まなければいけないが、普通はその形式でやりとりが行なわれる。

しかし、ヘキサはシステムブックをあっさりとネイトに手渡した。それだけで彼がいかに彼女を信頼しているのかがわかる。

本を受け取ったネイトは、表紙を捲くりスキル一覧が記載されているページを開くと、スキルの詳細画面を展開させた。

空中に出現した半透明の画面には、複雑に絡み合った図形や記号などが表示されている。彼女はその画面を見やり、手馴れた手つきで調整を加える。

ぶつぶつと小声でつぶやきながら、記述を書いたりあるいは消したりしていく。ウインドウを凝視しながらも、両手は止まることなく画面を操作し続けている。

「生命子の過剰供給に過剰使用。相変わらず無茶苦茶な使い方してるなあ」

術式の使用ログを見やり、思わず呆れた吐息を洩らしてしまう。

中でも外力系の方術の使い方が酷い。いつもながらの生命子の量に任せた強引な使用。せつかく人が苦勞して、威力を落とさずに生命子を抑えるよう術式を改良してやっているのに、これではまるで意味がない。

「悪い。でも、ほら、ネイトも知っているとおり、どうにも俺は外力術式が苦手だ。生命子の加減がどうにもわからないんだ」

魔法にもいえることだが、方術には相性がある。

外力系が得意なプレイヤー。内力系が得意なプレイヤー。あるい

は特定の方術のみ異常に相性がよく、通常では考えられない効率を生み出すプレイヤー。本人の特性により色々だ。

そして、ヘキサは内力系に傾倒した使い手である。反対に、外力系の操作を極端に苦手としている。彼が使う外力術式が、精密性を必要としない単純な”生命子の放出”に重点を置いているのはそのためである。

それとて、ネイトのデザイナーとしての腕があつて、はじめて成立しているのだ。

「それにしても限度があるでしょ。……調整するデザイナーの身にもなつてほしいよ」

そのこのトコを理解してるのかコイツ、と言いたげな目をされ、ヘキサは気まずそうにポリポリと頬をかいて沈黙した。

デザイナーというのは、ネイトのようにスキル全般の改造及び作成を専門に扱うプレイヤーの総称である。

定められたルールの範囲内ならば、誰でも自由にスキルをカスタマイズできるというのが、ファンシーの大きな特徴のひとつだ。

故に、同じスキルひとつとっても、使用者に応じて効果が違うことがよくある。使用者の癖がスキルに反映されるためである。

とはいっても、やはり得意不得意はあるわけで。誰でもカスタマイズできるというのと、誰でもカスタマイズが成功するかどうかは、まったくの別問題である。

ファンシーが開始された当時、三日三晩スキルの改造に挑んだ拳句、性能が通常時よりも低下したなんてのが多々あったらしい。

そこで登場したのが、スキルの扱いに特化したデザイナーというわけだ。

彼らは顧客の要望に合わせたスキル改造を行うことで生計を立てている。中にはスキルの『特許料』のみで生活している者もいたりするのだ。

「そもそもヘキサはボクに対する尊敬の気持ちが、ちよいとばっかし足りないんじゃないか。まったく……少しは感謝しろっ」「とと。いや、感謝してるって。いつもありがとうな」

ていやつと投げられた木彫りの小物を受け止めて、ヘキサは苦笑いを浮かべる。

「うそ臭い顔すんなよ。……ほら汚いから早く風呂に入ってこいっ」

その言葉をどう受け止めたのか。しっし、と手で払うような仕草をするネイトに、ヘキサはそそくさと奥の浴室へと足を運んだ。

七章 原初の光景(2)

どうやら二人はまだきていないようだ。浴室で泥を落としてさっぱりとしたヘキサがりビングに戻ると、一人で黙々と中空の画面と睨みあうネイトの姿があった。

目まぐるしく画面が切り替わる。彼女がスキルの調整を行なっている間、ヘキサはいえななにをするわけでもなく、ただぼけっと椅子に座っていた。

素人の自分が口を挟んだところで、ネイトの邪魔にしなければならないと重々承知しているからだ。彼女の操作するスキルの構成は複雑で、彼にはなにがどうなっているのかチンプンカンプンだった。

横で見てもまるで理解できない。感覚的には異国の文章を見ている感覚に近いかもしれない。彼はもう自分にはわからない世界だと諦めている。

決してこっさり自分でスキルを改良しようとして、エライ目にあつたとかそんな事実はない。ないつたらないのだ。

「うし。これで終了、と」

しばしの作業の後、そう言ってネイトは画面を消して本を閉じた。

「ほれ。生命子の循環経路を調整したから、剣にかかる負担が前よりは緩和されたと思う。他のスキルにも軽く手を加えといた。な

にか違和感を感じたら、すぐボクに教えるよな。再調整するから」

わかった、とヘキサは本のほうに手を伸ばし、唐突に先日のアレクとのやりとりを思い出した。ネイトさんによろしくと言われた会話だ。

どうしようかと思案する。無視しても問題ないと思いつつも、彼の性格的に知り合いの言葉は無下にはし辛いものがあるのだ。

「なに？ 早く受け取りなよ」

手を伸ばした体勢で固まるヘキサに、ネイトは眉根を寄せた。そんな彼女に彼は、なるようになれとばかりに言った。

「その……アレクに会ったんだけどさ」

「……いまなんて言った？」

ネイトの表情が変わった。

口調に混じる剣呑さに、しまったとヘキサは後悔するが、もはや手遅れだった。心持ち彼女から身体を離して続きを口にする。

「いや、アレク というか、セシリアがネイトに」

「っげんなあ！！」

その名前を耳にした途端、ネイトが爆発した。

ぽーんと放り投げられた革張りの本を、前のめりになってキャッチする。ネイトは猛烈な勢いで立ち上がると、盛大に倒れる椅子を無視してヘキサに詰め寄った。

「ボクの前であの女の名前を出すなって言ってるだろッ」

「わ、悪い。俺が悪かったから、落ち着けて！」

「なんだよ。そんなにボクの調整に文句があるのかよ。へキサもあの女のほうがいいっていうのかよお」

「いやいや！ 誰もそんなこと一言も言っていないし……！ てか、俺はあくまでもアレクの伝言を」
「うがぁ……！」

短い両手をバタバタと振り回すナイトを宥めようとしますが、落ちて着く様子のない彼女にへキサはほとほと困り果てた。

ほらみたことか。だから嫌だったんだ。内心で愚痴るものの、言ってしまった後では手遅れだった。

以前の爆発から大分経過しているから、内心では大丈夫かとも思っていたのだが、どうやらへキサの考えが足りなかったらしい。

いつもこうなのだ。セシリアの話題になるとすぐに感情を爆発させる。詳しい理由は知らない。どうやらナイトが一方的に、セシリアを敵視しているようなのだが。

「くそお。なにが思念剣だ、フラグメントだ！ ボクだって　　ううう、大体へキサが悪いんだからな！ この甲斐性なしッ！」

「……何故、そうなる」
「うるさいうるさい。ばか、あほ、うーっ」

誰か助けてください、と願いが天に届いたかはわからないが、救いの主は玄関のほうからひょっこりと現れた。

黒いゴスロリ服の少女。顔にかかる黒い長髪をかきあげて、リグレットは何事かと玄関から部屋の中を見回した。

「なんだか賑やかなね。楽しいことでもあったの？」

「うーっ、りぐれっとお」

リグレットが室内に入ると同時に、涙目のネイトが彼女に跳びついた。

「きゃ、ネイト？」

「へキサが……へきさ、が……」

自分に抱きつく猫耳少女の頭を撫でながら、彼女は安堵の吐息を吐く白髪の少年に視線をやった。冷たい眼差しにビクンッと震えた。

「ふうっ、へキサ。貴方はなにをしているのかしら？」

「……言っとくけど、俺はなにもしてないぞ」

物言いたげな視線に両手を上げて弁解する。困り顔なへキサに吐息をひとつ。リグレットは胸に顔を押しつけているネイトに、優しい声色で語りかけた。

「理由はわからないけど、へキサを許してあげて。後で私のほうから、きつく叱っておくわ。通常の三割マシでね。そうね……バケツ一杯分の油を飲ますとかはどうかしら？ きつと愉快なことになるわよ」

それはもうお仕置きではなく、拷問の間違いなのでは。リグレットの何気ない発言に、へキサは肝を冷やした。

「だから、俺はなにも」

「……うん。わかった」

黒髪の少女の言葉にこくと頷くネイト。

「リグレットがそういうなら許してあげる」
「ふふつ。いい娘ね」

髪を手で梳かれて、ネイトは目元を緩めた。普段は子供扱いされることを嫌う彼女だが、リグレットにだけは素直になるのだ。

「もういいや」

完全に蚊帳の外に置かれたヘキサがなげやりにつぶやく。

いつの間にか悪者にされているが、それで丸く収まるのならばそれでいいじゃないか。確かに原因の一端は自分にもあるんだし。

姉妹のように仲睦ましい二人の少女を横目に、ヘキサは天井を見上げながら自分にそう言い聞かせていたときだ。

玄関のほうから物音がしたかと思うと、いつも行動を共にしている、最後の一人が室内に入ってきた。

「こんにちわ、ヘキサ様。リグレットさん。それとネイトさんも
なにかありましたか？」

挨拶すると室内の雰囲気を感じ取ったのか。リンスは腰まである栗色の髪を揺らし、小首を傾げながら三人を見回した。

艶やかな栗色の長髪を彩る両翼を模した羽飾り。腕と足と胸だけを覆う金属の軽装鎧。騎士然とした少女の言葉に、ヘキサは苦々しく首を振った。

「なんでもない。それよりも今日は遅かったな」

「少々、野暮用がありましたので」

遅かった、といっても別に、明確な待ち合わせをしているわけで

はない。この時間帯ならいつもリンスのほうが先にいるので口を閉じてしまったのだ。

「それで、今日の予定はなにか？」

予定。はつきりいつてない。

ソロで活動しているとき以外は、こうしてここに集まっているのだが、彼女たちと狩りに行くのと目的なく時間を潰す割合が、大体半分ずつくらいだろう。

なにしろ自分はお尋ね者であり、そうそう人前にでれない立場にあるのだ。必然、行動できる範囲も限られてくる。

以前にさり気なく、他の誰かと狩りに行ってはどうだと言ってみただが、やんわりと否定されてしまった。

正直、何故リグレットたちがここにいるのかわからないときがある。ヘキサからすれば、彼女たちにとって自分と行動する意味がない、と思っっているくらいだ。

そう考えると不思議なモノだ。

四ヶ月前に一人になってしまったときは、もう一生誰かとうとうして時間を共有することなど、ないだろうと思っっていたのに。

いまの自分の周りには彼女たちがいる。それはレアアイテムにも変えられない価値あるモノで、きつと。

「やめだ、やめ」

誰の耳にも聞こえないよう小声でつぶやく。

最近、どうにも調子がおかしい。こんな感傷に浸るなんてどうかしている。久しぶりの旧友との出会いを引き摺るにも限度があるだ

ろう。

リグレットに知られでもしたら、女々しいと苦笑されているところだ。

「っと、そうだった。鍵だ、鍵」

と、そこで鍵の存在を思い出したヘキサは、懐から銀の鍵を取りだすと、照明に翳してしげしげと眺めた。

七章 原初の光景(3)

明るいところで見る銀の鍵には、緻密な細工が施されていた。これ単体で美術品といえるほどの出来だったが、へキサがこの鍵に求められているのは美術的価値ではない。

「……わからん」

モンスターからのドロップ品である以上、なにかしらの使用目的があるのは間違いないのだが、肝心のそれが検討もつかなかった。試しに指先で鍵を弾いてみるが、反応はなかった。ポップアップウインドも出現しない。硬質な感触に呻くと、手の平で鍵を転がしながら思索する。

ポップアップウインドがでない　ということとは、この鍵が未鑑定状態だということなのか。あるいは、開示条件をまだ満たしていないのか。専用のスキルが必要な可能性もある。理由はどうあれ、めんどくさいことになってきた。

「へキサ……？」

横から伸びてきた手が、嘆息するへキサから鍵をとった。リグレットである。何故か彼女は険しい表情で銀の鍵を凝視しながら口を開いた。

「……この鍵、どこで手に入れたの？」

その言葉に何事かと、リンスとネイトも白髪の少年に注視した。集まる視線に戸惑いながら、ヘキサは経緯を説明した。

その説明の間も、黒髪の少女は鍵から視線を外すことはなかった。

「ああ。そういうこと。……ふん。随分とサービスがいいじゃない。また、天秤が傾いても知らないわよ」

一人だけ合点がいった様子で頷くと、鍵をヘキサのほうに放り投げた。鍵を受け止めるヘキサを見やり、彼女は続けて意外なことを口にした。

「私、その鍵の使い道、知ってるわ」

「え？ マジで？」

「実物を見るのははじめてだけど、以前に話で聞いたことがあるの。アルツヘイクの『開かずの扉』の話は知っているかしら」

「あるっ……？ いや、聞いたことがない」

「わたしはあります。55層の古城ですよ。攻略のときに見ました」

聞き覚えのない単語に疑問の声を上げるヘキサとは反対に、リンスは小さく手を上げると彼のほうを見ながら言った。

「あのですね。アルツヘイクは55界層にあるお城のダンジョンのことで、『開かずの扉』というのは、その一番奥にある扉のことなんです」

これ見よがしに配置されたオブジェクトなのだが、リンスが言うには過去にその扉を開いた者がいないそうなのだ。

昔はそれでちょっとした話題になったことがあり、一部のプレイヤーの手でフラグの検証が行われたが結局、その扉が開くことはなく話題も自然消滅したらしい。

それは知らないはずだ、とヘキサは彼女の話聞いて思った。

ヘキサは55界層には過去に一回も行ったことがないのだ。スキップしたからである。ファンシーではプレイヤーによって解放された界層は、順に攻略しなくてもいいのだ。

界層毎に定められたレベルにさえ達していれば、一界層から一気に最前線にまで跳ぶことも可能なのである。

もつとも、そんな極端な飛ばし方をするプレイヤーはまずいない。いるとしたら、天才か馬鹿のどちらかだろう。

「つまり、この鍵がその扉を開けるアイテムってワケか？」

「そのとおり。その人たちの話では、扉の先には別のダンジョンが広がっているそうよ。その最深部には大きな鏡があって、その中に入ったプレイヤーは、はじまりの場所にて新しい武器が与えられるってことだったわ」

「はじまりの場所？ …… 先見の儀式 か」

最初にこの世界にログインしたときの記憶が脳裏を過ぎる。彼の体感時間では何年も前の出来事だが、あのときの光景はいまでも鮮明に思い出せた。

「正解。よかったじゃない。これで武器探しからようやく開放されるわね」

「……まだ、そうと決まったワケじゃないだろ。それに 先見の儀式。まさか、またあそこに行かなくちゃならないなんてなあ」

「なにか問題でも？」

「問題っていつかなんというか。あんまし、楽しい場所じゃないのは確かだな」

渋い顔をするヘキサに、少女たちは首を傾げた。

もしかしたら武器が見つかるかもしれないというのに、浮かない表情のヘキサは、がりがり和白髪を掻きながら立ち上がった。

「行くの？」

「せっかく機会だしな。行くだけ行ってみるさ」

とはいっても、ヘキサは一回も55界層に行ったことがないので、まずは地図の準備からはじめなければいけないのだが。

「でしたら、わたしが案内しますっ」

「リンスがか？」

「はい。わたしにお任せください」

「だったら、私も行こうかしら。どうせ暇だしね」

本人とは関係なく、トントン拍子に話が進んでいく。

難易度でいえば一人でも余裕だろうが、ヘキサとしては二人が行きたいというのならば、拒否するつもりはない。

「むーっ。ツマンない」

一方、三人の会話から取り残される形になったネイトは、椅子の上で両脚を抱えて頬を膨らませながら愚痴った。

「ふんだ。どーせボクは置いてきぼりなんだろう。いーよお、だ。独りで留守番するのがボクにはお似合いさ」

イジけるネイトだったが、流石に連れてはいけなかった。
デザイナーである彼女の戦闘能力は低い。最大限に見積もっても、
中堅に手が届くかどうかといったところだ。

ヘキサたちから見れば、55界層は決して難易度の高い層ではないが、ネイトにとっては歩くことさえ困難であろう。

「拗ねないの。ちゃんとお土産買ってきてあげるから」

よしよしとネイトの髪を撫でるリグレットを一瞥し、ヘキサは室内の時計の針を見やりながらリンスに声をかけた。

「リンス。いまから出発すると、城に着くのはいつくらいになりそうなんだ」

「そうですね。近くのポーターから向かうとして……おそらく、夜になるかと」

「夜か。めんどろだな。行くのは明日にするか」

「いいえ。その必要はないです。お城の近くに小さな村があるんですが、今日はそこで一泊しませんか？」

それもひとつの手だ。辺境であるため他のプレイヤーと鉢合わせすることもなさそうだ。また明日ここに集まるのは手間だし、リアルタイムの通信手段がない以上、現地集合ではなにか問題はあったときに対処できない可能性もある。

「リグレットはどう思う？」

「楽しそうでいいんじゃない。たまには友好を深めるのも悪くないわ」

「おし。決定だな」

そうと決まれば、善は急げ。遅くならないうちに行動したほうがいい。二人を連れて部屋を後にしようとするヘキサ。

「あの、ヘキサ様」

「なんだ？」

「少々気になったのですが、ヘキサ様の 先見の儀式 はどこだったんですか？ なにか気の進まない様子でしたが」

そうだな、とつぶやく。

場所は決闘場だ。魔力を持たない方術特化のプレイヤーには、お馴染みの場所だといってもいいが、一言で表すのならば。

「地獄、かな」

その言葉にきよとんとするリンス。

まあ、当然の反応だ。いきなり地獄なんて言っても、理解できるわけがない。しかし、他に言いようがないのだ。あの光景を地獄と呼ばずになんというのか。

廃墟と亡霊と白骨。小さな子供なら確実に心を病む。あんなのが自分の心象なのかと思うと、怖気に身体が震えてしまう。

あれは体験した者にしかわからない恐怖だ。そこにもう一度、行くのかと思い、ヘキサは憂鬱そうにため息を吐いた。

七章 原初の光景（4）

そこは決闘場。

あるいは瓦礫が散乱する廃墟。血のように赤い夕日。黒い亡者に占拠された観客席。地面に散乱する白骨に突き刺さる無数の磨耗した剣。

砕けた刃。錆びた刃。刃毀れた刃。破損した刃。白骨を砕き割り、墓標の如き剣群に囲まれて、彼は廃墟と化した決闘場の中央で立ち尽くしていた。

おぞましい光景だった。

夕日の赤と亡者の黒と骨の白。

目に焼きつくような血の赤。まるでペンキを塗ったかのような不自然な夕焼けだった。透明感がないといえいいのか。

空という感じがしないのだ。質の悪い騙し絵を見させられているかのような錯覚。それでいて血を連想させる生々しさに不快感がこみ上げてくる。

人の形をした黒い影が蠢いている。なにを言っているのかはわからない。しかし、それがどんな感情を抱いているかはわかった。

憎悪と怨嗟。観客席から身を乗り出す無数の影が、言葉ですらない耳障りな音を発しながら、怨嗟の呪詛を垂れ流す。

足の下で骨の碎ける感触がした。地面を埋め尽くす骨。背中から

翼を生やした骨。角のある髑髏。腕がななつもある骨に、足が一本しかない骨もあった。

明らかに人間ではないモノの骨もある。否、むしろそつちのほうが圧倒的に多かった。まともな形状の骨などない。

この世のモノとは思えない醜悪な光景に、彼は吐き気を堪えきれず嘔吐してしまった。びしゃびしゃと固形物混じりの吐瀉物が、奇怪な形をした骨にぶちまけられた。

上半身を折り曲げ、胃の中のモノをすべて吐きだす。ふらつきよろめく身体を支えようと、前に伸ばした手が一本の剣を掴んだ。

歪な片手剣だ。赤錆びた刀身は不恰好に捻れ、刀身としての意味をなしていない。酷い有様だった。これでは鈍器としてすら使えない。

涙で滲む視界に映る不様な片手剣。もはや武器としての型をなさない片手剣。だが、えづきながらも視線が、その剣から離れなかった。

『読み込み完了。魂の形質を抽出・固定化。心的強度：飢餓。属性：白夜。性質：埋葬の生人、黄泉還りの死人』

頭上から中性的な声が降ってきて

「くそつ」

最悪の目覚めだった。

薄暗い室内の天井に悪態を吐き、ヘキサはゆっくりと身体を起こ

した。額の脂汗を拭う。全身にぐっしょりと嫌な汗をかいていた。

十中八九、昼間のやりとりが原因なのは言うまでもない。

初回ログインのときの夢 否、悪夢を見たのは。久しぶりに見たが、この先も慣れることがないのは間違いなかった。

それにしても、どうして自分の 先見の儀式 は、こつも地獄じみているのだらう。不可解で苦しむ思いは、いつまで経っても消えなかった。

確かに同じログイン場所でも、個人差があるのは知っている。そして、その個人差がアバターの性能に、大きく影響しているのも理解している。

だが、他のプレイヤーに話を聞いても、自分のように醜悪な展開を経験した者は一人もいなかった。それを単なる個人差で済ましていいモノなのか。疑問は尽きない。

悪夢の余韻を引き摺る頭を振り、サイドボードのスタンドに触れる。彼の生命子に反応し、灯った光源が室内を薄暗く照らしだした。

タンスにベット。最低限の家具しかない室内は、ファンシーでは珍しくない宿屋の内装だった。しばらく滞在するなら別だが、一泊するだけならこれで十分だ。

ここはリンクスが言っていた、アルツヘイク城付近にある小さな村。そこに一軒だけのこじんまりとした宿屋だった。

疲れたからベットに横になった記憶はあるが、そこから先の記憶がない。遅めの夕飯を食べた後、そのまま寝てしまったようだ。

静まり返った室内には物音ひとつしない。時計の針を見れば、すでに午前0時を回っている。リグレットたちはもう寝たのだろうか。

右側の壁をぼんやりと見ながら、なんとなくそう思ったときだ。コンコン、と軽くドアがノックされ、控えめの声が室内に響いた。

「ヘキサ。私だけど、もう寝てるかしら？」

「リグレットか？ いや、起きてるよ」

「よかった。入るわよ」

どうぞ、と言うとドアが開いた。中に入り後ろ手にドアを閉める黒髪の少女は、いつもの黒いゴスロリ服に黒いクロークを纏っていた。

「どうかした？」

「”おまじない”よ。忘れてたでしょ」

その言葉に、そうだったな、と頷くヘキサ。確かに今週はまだだった。いつもなら昼間のうちに済ませてしまっただが、銀の鍵のドタバタですっかり忘れていた。

「律儀だなあ。別に明日 とうか、朝でもいいんじゃないか」

「なに言ってるの。こういうのはきちんとやるから効果があるのよ。半端にやるくらいなら、最初からやらないほうがマシだわ」

言っつて、彼女はヘキサの横に腰を下ろした。ぎしりと二人分の重さにベットが軋む。

「すぐに終わるから、じっとしていなさい」

リグレットは指先を伸ばすと、ヘキサの額に触れて、精神を集中させた。すると指先に淡い光が点り、額を接点に光が白髪の少年の身体を包んだ。

おまじない、というのはリグレットが一週間に一回、欠かさずにやるちよつとした儀式のようなモノだ。

ぬるま湯に浸かっているかのような感覚が、自身を覆う淡い光から伝わってくる。

それがどんな魔法かは、訊かされていない。本人が言うには、気持ちいを落ち着かせる効果があるらしいが、それ以上は乙女の秘密とはぐらかされてしまう。

ただ、事実としてこのおまじないと後は、不思議と気分がすつきりとするのだ。プラーシーボの類かもしれないが、確かな実感があるうえで自分の認識できる範囲内で悪影響を感じないことから、ヘキサも大人しくおまじないを受けることにしている。

額に温かな指の感触。指先から発せられる淡い光にしかし、ヘキサの意識は別のところにいつていた。

どつやらお風呂上りらしく、鼻腔をくすぐる石鹸の香りに、思わずヘキサは身体を揺らした。普段とはシチュエーションが違ったためか、薄暗く照らされるリグレットの姿は、どこか普段とは雰囲気が変わって見えた。

額や頬に張り付く、しめった艶やかな黒髪。化粧をしていなくても瑞々しい唇。暗闇の中でも映える白い肌。切れ長の瞳は憂いを帯びたような輝きを　　って、ちげえええええ　　！？

一瞬、あつちにすつ飛びかけた思考を、全力で押し止めるヘキサ。顔に出さずに堪えた自分を、手放して褒めてやりたかった。

そつえば、といまさらながらに思い出す。

戦闘中にリグレットと二人きりになる機会はそこそこあるが、室内で二人きりというのは、最近はなかった気がした。

拠点にしている家には、普段からネイトがいるし、リンスだつてよく顔を出す。そうなるとリグレットと二人だけになることなどそうそうない。

ヤバい。なにがヤバいつて聞かれたら、なにもかもがヤバかった。一度、意識してしまったのがマズかった。鼓動を抑えようと思えば思うほどに、早鐘打つ心臓に悪夢とは別の意味で、嫌な汗が噴き出すのが感じられた。

こんな邪な感情を抱いていると、眼前の黒髪の少女に知られたらどうなることやら。考えるだけで卒倒しそうになるのだから、実際に起きてしまったら死ぬしかない。

もはやこうなってしまうては、亀のようにひたすら縮こまって、リグレットが部屋から出て行くのを待つしかなかった。

彼女に変化を悟らぬように、平静を装うことに全神経を傾ける。じつと石のように硬直するヘキサには、異様に長く感じる時間が過ぎた。

「はい。終わったわよ」

リグレットの指先から光が消えた。

ベットに片手をつけて、身体を離すと立ち上がる彼女にほっと安堵する。よかった。どうにかこうにか無事に切り抜けた。後は彼女を見送れば、ミッションコンプリートだ。

なんて、それがいけなかった。

「あ、ああ　ぐはっ!？」

お礼を言おうとしたヘキサを襲う衝撃。

なにを考えているのか。立ち上がったリグレットが、なんの脈絡もなくヘキサに飛びついてきたのだ。安堵していたところへの不意打ちに、白髪の少年は対応ができず、黒髪の少女を胸に抱きかかえたままベツトに押し倒された。

七章 原初の光景(5)

両腕の中の自分とは違う体温に、最初へキサはなにが起こったのかわからずに、きょとんとした表情で視線を下に落とした。

黒い瞳と目が合った。上目遣いで潤んだ瞳に、自分の啞然とした間抜けな顔が映っている。目尻に宿る艶っぽい輝きと、温かくて柔らかな感触に、切断されていた脳内回路が強制的に接続された。

現実を正しく認識した瞬間、声にならない無音の叫び声を上げていた。

なんでリグレットに押し倒されているのか意味がわからない。普通、立場が逆じゃね？ と空回りする頭で、どこかの外れたことを考える。

「ちよちよちよちよちよちよ……っ！ なにやってんの!？」

「うるさいわね。そんな大声をださなくても、ちゃんと聞こえているわ。もっと小さな声で話してちょうだい」

慌てふためくへキサを見やり、クスクスと愉快そうに笑うリグレット。彼女は身体をへキサに預ける、小悪魔めいた微笑を称えて囁いた。

「そんな大声をだすと外に聞こえるわよ。……ひよっとしたら、リ

ンスが覗きにくるかも。ふふ。そうだったらリンスはどう思うかしらね」

「冗談ではない。どう考えてもバットエンドー直線ではないか。そんな理不尽な修羅場は、断固としてお断りだ。」

にも関わらず、ヘキサはリグレットを撥ね退けることができなかった。

否、撥ね退けたりしなくても、彼女に退いてもらえばそれで済む。ヘキサが頼めば、からかいながらも、リグレットは身を起こすに違いない。

なのに、その一言がでてこない。しなだれかかってくる柔らかな感触に、声がかすれて音にすることができなかった。

「冗談よ。入るときに消音の結界を張ったから、声が外に漏れることはないわ。……どんなに大声をだしても、ね」

それはそれで問題だ。いや、なにが問題なのかはわからないけど。ぐつぐつと沸騰した頭では、そんなことしか考えられない。

あわあわと目を白黒させるヘキサの慌てっぷりに、リグレットは満足げに目を細めた。鼓動を速める心臓に、彼女の右手が重なった。

「少しは気が楽になった」

「な、なに、が……？」

「部屋に入ってきたとき、酷い顔色してたから。それで元気づけてあげようと思って。……少しは効果があったかしら」

「そうかい。そりやもう、効果抜群だ。もう今日は寝れないかもな」

悪夢なんて余韻も残さず、完全に消し飛んだ。ついでに眠気も吹っ飛んで、朝まで起きていることになりそうだった。

「それはよかった。私も身体を張ったかいがあったわ」
「できれば今後は控えてくれると嬉しいかな。割と本気で……頼むから」

軽やかに微笑する黒髪の少女に、げっそりとしながらつぶやく。
この短い時間で、ごっそりと精神を削られた気がした。

「それで、なにがあったの？」

「……夢を見たんだ」

ぼつりと言葉を洩らす。

「先見の儀式 のときの夢でさ。見たのは何年ぶりかな」

「昼間に言っていたわね。地獄だったって」

「これがまた、笑っちゃうくらい酷いんだよ。下手なホラー映画よりも怖くて、それからしばらくは満足に寝れなかった」

白髪になったのも 彼の白髪も赤い瞳も後天的なモノではなく、
アバター形成時からモノである それが原因なのは、と当時は本気で考えたモノだ。

先見の儀式 は心象意識の具現化であり、内在する魂を抽出してアバターを形成する、この世界での一種の通過儀礼だ。

アバターは本人の魂より形成されるが故に、プレイヤーにとっての映し鏡に等しい。得意も不得意も、長所も短所も、プレイヤーの性質が強く反映される。

「ヘキサは最初から片手剣 なのよね」

「そうだよ」

へキサの初期武器は片手剣だった。

彼に限らず大半のプレイヤーは、初期の武器を相棒とする場合が多い。途中で武器の種類を変えた者も、最後には最初の武器に戻る者が大部分を占める。

初期で自分の性質にあった武器が選定されるためだ。

「他の武器を使おうとは思わなかったの？ 例えば 大剣、とか
「ちなみになんで大剣？」

大剣。その単語が彼女の口からでた途端、へキサの表情が変わった。しかめっ面を維持したまま、むすつとした物言いをする。

「別に。他意はないわ。ただ威力が高くて頑丈だから、片手剣よりもへキサと相性がいいんじゃないかと思ったの」

その問いにへキサは即答した。

「使わない。というよりも、使えない。言っただろう。俺は”片手剣しか使ったことがない”って。先見の儀式 のときからずっと、俺は片手剣一筋なんでな。いまさら他の武器なんて使えるかよ」

それに、と言葉を切り、続けて言う。

「もしもこの先、片手剣から他の武器に変える機会があったとしても、大剣は絶対には選ばないと思う。なんか嫌なんだよ。明確な理由があるわけじゃないけど、どうしてか大剣だけは使う気になれないんだ」

それは理屈ではなく、拒絶反応に近かった。

何故と問われれば、首を傾げるしかない。自分でも不明なのだが、
どういうわけか大剣を振るう気になれないのだ。

武器として信用できないといえいいのか。大剣を使うくらいなら、
素手のほうがマシだとすら思えるほどに。

「そう。確かに”貴方”なら、そうかもしれないわね」

儂げな微笑。ヘキサにその顔を見られないように顔を伏せる。

憂鬱そうにぼそりと零れたつぶやきは、ヘキサの耳に届くことは
なかった。俯いたリグレットを見やり、彼は困ったように言った。

「あの……それでなんだけど、そろそろ退いてくれないか？」

「どうして？」

顔を上げた彼女の顔には、いつもの楽しげな微笑があった。さき
ほどの儂い雰囲気は欠片もなく、リグレットの変化に気がつかない
ヘキサは脂汗を滲ませながら言った。

「いや、どうしてって言われても……ほらっ、当初の目的は達し
たんだろ。だから、そろそろ部屋に戻ったらどうかなあ、なんて」
「ふうん。そんなに私とくつつくのが嫌なのかしら」

あ、地雷踏んだかも。唇を尖らせて不満そうにするリグレットの
姿に、不吉な予感を胸に抱くヘキサ。思案する彼女に喉が鳴った。

「決めた。私、今日はここで寝るわ」

言って、首に手を回してくる黒髪の少女に、ヘキサは絶句してし

まった。石鹸の香りに混じる甘い香り。服越しからでもわかる柔らかなさにくらりとした。

「ね？ いいでしょ？」

「わかった　なんて、言うはずないだろうがっ。いまの会話のどこを切り取ったら、そんな結論がでてくるんだよ!？」

「なにが不満なの。いまなら私の身体を触り放題なのに。今日は特別に服の上からなら、胸に触ってもいいわよ」

「それが問題だって言ってるんだ！　お前はあれか。俺を殺すつもりなのか」

「大げさね。私を抱き枕だと思えばいいじゃない」

「思えるかッ！　無茶言うな!」

ふつつと聞き分けの悪い子供をあやすような口調に、ヘキサは大声で反論した。

「いまだってすでに色々ギリギリなのだ。これで一緒に寝るなんてことになったら、そのまま衰弱死してしまいかねない。」

七章 原初の光景(6)

本当になにを考えているのだろう。いくら知り合いとはいえ、仮にも男の部屋に泊まると、平気で口にできる彼女の神経が理解できない。

それだけ信頼されているのか。あるいは男として見られていないのか。それともこいつにはどうせなにもできないと思われているのか。

「みつつめっばいなあ」

そう判断してしまう自分に諦観してしまう。ここまで挑発するのなら、いつそ と踏み切れない辺りが、ヘキサのヘキサたる所以なのだろう。

二代目マンイータや最狂のPKなどと世間では揶揄されているが、基本的に他者に対しては無害で小心者なのだ。

頑として首を縦に振らないヘキサに、悲しそうな顔を作るとリグレットは、肩を竦めながら器用にため息を吐いてみせた。

「酷いわね。私は親睦を深めたいだけなのに。ここまで否定されると悲しくなるわ。……ひょっとして嫌われてるのかしら？」

「……馬鹿言っな」

声の質が変化した。

リグレットも本気で言っているワケではあるまい。いつもの冗談の類なのはヘキサにもわかっているが、それでも見過ごすことのできない言葉があった。

「俺がリグレットを嫌うだなんて、そんなことあるはずがない。その逆はあっても、それだけは絶対にありえない」

三ヶ月前、ヘキサが崖っぷちで踏み止まれたのは、リグレットが傍にいてくれたからだ。そうでなければ彼は今頃、本当の意味でマニータの再来になっていたはずだ。自身の欲望のためだけに、周囲を破滅させる真性の怪物に。

自分を引き止めてくれた彼女を、どうやったら嫌いになるというのだ。むしろ、どうしてリグレットがいまも隣りにいてくれるかのほうが疑問である。

「そう、なの……まさか、そんな風に思ってたなんて。ちょっと意外だったわ」

状況に流されている感は否めないが、白髪の少年が洩らした本音に、リグレットは目を瞬かせると呆けた調子で言った。

「リグレットこそ、どうして俺の傍にいるんだ？ お前の力ならもっと”上”だって目指せるだろうにさ」

黒髪の少女の能力を知っているからこそ断言できるのだ。『王城派』の中でも彼女の力は群を抜いている。その能力を知って、欲しがないプレイヤーなんていない。

いまでは入団することすら困難といわれる、三大ギルドとて例外

ではない。リグレットがその気になれば、ギルド内での地位を一段飛ばして駆け上がっていくのは想像に難くない。

「本当なら引つ張りだこのはずなのにな。なんだって俺なんかのために、時間の無駄遣いをしてるんだか」

こんなところで力を持て余していい人材ではないのだ。そして、それはもう一人の少女、リンスにも当てはまることもある。

「リンスにしてもそうだ。銀鎖同盟の幹部の一人だったのに、それをあっさり捨てるなんて。割りがあってないだろう」

元々、箱庭世界で三大ギルドと呼ばれていたのは、聖堂騎士団
・ 天上神歌教会 ・ 暁の旅団 のみつつである。

しかし、半年前に当時の第四勢力だった銀狼と、第五勢力の黄金の鎖がお互いに手を組み、銀鎖同盟として暁の旅団を追い抜き、第三勢力として三大ギルドの一角を奪い取ったのである。

リンスはその銀鎖同盟の幹部として、ふたつのギルドをまとめて先導を担う立場にあったのだが、突然ギルドを脱退してしまったのである。

それも過去に自分に助けられたことがある。それだけの理由で誰もが懂れる立場を、なんの躊躇もなしに放り投げたのだ。

「リグレットといいリンスといい、どうしてこうも俺の周りの奴は、自分の才能を無駄にしたいんだろうな」

後はネイトか。彼女は少々事情が異なるが、それでも自分と組む

ことで身動きがとれなくなっているのは事実だ。

彼女たちには感謝しているが、どこかで後ろめたく感じている部分もある。それはきつと、自分に付き合わせてしまっているという思いがあるからだ。

「まだ気にしていたの？ その答えは昔に言っただけですよ。私は私の意志でここにいてるってね。誰かにそれを強制されたワケではないわ……リンスだって、そのはずよ」

「だけどさ、ときどき考えちゃうんだ。俺がいなければこそこそする必要もないのに。俺がいるから狩場が限定されてしまう。俺がいるから他の奴と気軽にパーティを組めない。俺がいるから最前線の攻略に参加できない。損することばかりじゃないか」

かといつて、この居心地のいい空間をなくしたくない自分もいる。矛盾した話だ。自分、自分、自分。結局、自分のことしか考えていないということだ。これでリグレットたちのために、とよく口にしたモノである。

ヘキサが自己嫌悪に陥っていると、下から伸びてきた手がおもむろに彼の前髪を掴んだ。細い指が白髪を鷲掴みにして思いつきり引っ張った。

「いででで……！？ 痛い、痛いから引っ張るな！」

「大人しく聞いていれば、なによその卑屈な態度は。ちよつと頭にくಿತわ」

ぐいつと髪を手元に引っ張る。釣られて首が前に傾き、お互いの鼻が触れるほど近くに、リグレットの人形のように整った顔があった。

「言つつもりはなかったけど、やっぱり言つことにしたわ。……いい？ 一度しか言わないから聞き逃さないでよ」

普段は見ない真剣な表情だ。いつになく迫力を感じさせる黒髪の少女に、髪の毛の痛みも忘れて唾を呑み込んだ。

「私はへキサを」

「リグレットさん？」

背後から響いた別の声が、リグレットの言葉を遮った。錆びついたブリキのような動作で、そちらに視線を向けると、ドアを開けた体勢で硬直するリンスと視線が噛み合った。

「なに……しているんです、か……？」

「り、リンス。なんでここに」

啞然とするへキサ。突発的な展開に思考が追いつかない。心境としては、浮気のパレた彼氏のような心持ちだった、

「リグレットさんが部屋にいない……それで、へキサ様のところかと思つてノックしても返事がなくて……でも、鍵はかかってなくて……」

「そういえば、鍵をかけ忘れてたわ」

「忘れたじゃないっ。どうすんの、これ。あいつ完全に勘違いしてるぞー！」

状況を冷静に分析するリグレットに、わなわたと震える少女を指差して言う。一刻も早く誤解を解かないと大変なことになる。

白髪の少年の心情を読み取ったのか、私に任せなさいとばかりに、リグレットは身を起こすとリンスのほうに向き直った。

「聞いて、リンス。これは違うの。貴方は思い違いをしているわ」
「リグレットさん……?」

「これは そう、ヘキサの趣味なのよ」

「えっ!? は、ちょ、意味不……!」

「ヘキサには一週間に一回、女の子を抱きしめて寝る趣味があるの」
「なに、その設定!? 完全に変質者じゃないか!？」

とんでもないことを口走る彼女に声を張り上げる。嘘を吐くにしても、もっとマシな嘘があるだろうに。流石にこれでは、リンスも信じない

「そんな!? ヘキサ様にそんな趣味が!」

「うおいつ! 信じるのかよ!」

つまり自分は彼女にそういうことをする人間だと認識されていたのだろうか。口元に手を当てて戦慄する少女に、ヘキサは泣きたくなかった。

まあ、正解をいってしまえば、混乱していて状況を判断できていないだけなのだが。ヘキサ視点ではそれがわかるはずもなかった。

「なんだったら、私の代わりに抱かれみる?」

紛らわしい言い方をするリグレット。視線を右往左往させるリンスは頬を赤らめると、彼女の発言にこくと頷いた。

「一件落着ね。我ながら惚れ惚れとする手際だわ」

「どこがだよ! 状況が悪化してるぞ、おい!」

満足そうにつぶやくリグレットに全力で突っ込む。誤解が解ける

ことはなく、深けていく夜空に、少年の悲鳴が遭われっぽく木霊した。

七章 原初の光景(6) (後書き)

どうも、祐樹です。

むう。文の量の問題もありますが、話が全然進んでないです。次章こそは、派手にドンパチしたいモノですが、どうなることやらです。

えー、感想の返信が遅れています。すみません。そっちも順番に返信していくので、もうしばらくお待ちください。

感想はちゃんと読んでいますので、返信にまで手が回っていません。

つてな感じで、次章もどうぞよろしくです。
ではでは。

八章 破壊の咆哮（1）

アルツヘイク城の最奥。

王の間に座していたのは、大剣を担ぐ亡霊の騎士だった。いまはもう存在しない古城の主の帰還を願う亡霊は、侵入者である三人の探索者に憤怒の表情で襲いかかった。

しかし。

「遅い」

振り下ろされた大剣を半身になってかわす。すれ違いざまに一撃入れると、ついでに蹴りを叩き込んで体勢を崩した。

ヘキサと立ち位置を入れ替えるように、ハルバードの柄を握りしめたリンスは、亡霊騎士の懐に飛び込んだ。唸りを上げるハルバードが、亡霊騎士の右腕を跳ね飛ばす。

身悶える亡霊の鳩尾を回転させた柄が抉り、全身甲冑を纏った身体が、不気味なほどあっさりと宙に舞った。

空中で身動きのとれない亡霊騎士に、光の刃が突き刺さる。光属性の刃が内部から亡霊の身を浄化し清め、頭上から降ってきたヘキサの剣が、止めの一撃を見舞った。

床に叩きつけられた亡霊騎士は腕を頭上に伸ばすが、そのまま一矢報いることもなく、力を使い果たして消滅してしまった。

生命子に還元される亡霊騎士を見やり、白髪の少年は壊れた片手剣を放り捨てた。カラン、と乾いた音を立てる剣を横目に、新しく取りだした剣を腰の鞘に収める。

「お疲れ様です。楽勝でしたね」

「他愛もない。準備運動にもならないわ」

「そりゃ、まあ、このくらいの界層じゃあ、こんなモンだろう」

ボスモンスターといったところで、所詮は50界層クラス。ヘキサたちの敵ではなかった。戦闘開始からさほど時間を要さず、王座の間のボスモンスターを倒した彼らは、ドロップ品を回収すると、件の『開かずの扉』の前に立った。

王の間の奥。柱の影に隠れるようにして、ひっそりと佇む扉があった。装飾も取っ手もない、一枚の鉄板のような扉の真ん中には鍵穴がある。

「頼むから、ここまできて無駄骨でした、なんて止めてくれよな」

ヘキサは懐から銀の鍵を取りだすと、そつと鍵穴に差し込んだ。カチリ、と歯車が噛み合うような小さな音に、三人は顔を見合すと頷きあった。

「回すぞ」

ゆっくりと鍵を捻り

「見つけたッ！」

広間に響いた甲高い声に、中途半端なところで動作が止まった。

鍵穴に銀鍵を差し込んだまま、首だけで背後を振り返り、げつと喉の奥で呻き声を洩らした。

「半信半疑だったけど、本当にいるなんて。今日こそ決着つけるわよッ！」

捲くし立てるように声を荒げて、赤毛の少女は掲げた左手に炎を渦巻かせた。膨大な熱量が大気を炙り、陽炎のように背景を歪ませる。

「ハズミ……。なんで、ここにいるんだよ」

「どうでもいいわよ、そんなこと！ 覚悟しなさい！！」

激しく燃え上がる炎を前に、ヘキサを庇うようにリグレットとリンスが動いた。短杖とハルバードを構える少女たちと睨み合うハズミ。

一生即発の様相を呈する広場。突然の事態に目を白黒とさせるヘキサだったが、更なる闖入者に今度は目を見開くことになった。

「だめー」

炎が揺らめく。

ひよっこりと現れた青い髪の少女が、後ろからハズミに抱きついた途端、彼女の頭上に集束していた火球が一瞬にして霧散した。

「もーっ。そんなことしたら危ないよー」

「ちょ、放して。ひつつかないで。あいつに攻撃できないじゃない！」

「だからー、それがだめなのー」

腰に謎の少女を纏わりつかせたまま暴れるハズミ。お互いに知り合い同士らしい二人組みを見やり、急転する事態にヘキサは戸惑いを隠せなかった。

意味がわからない。何故、ハズミがここにいるのか。偶然にしては脈絡がなさすぎる。かといって、彼女にここを特定する根拠があるとも思えなかった。

おまけにハズミの他にもう一人、正体不明の少女がいるし。いかなる事柄が重なればこうなるのか、まったくもって理解できなかった。

「そんなことしちゃだめだよー」

「なに言ってるの。こいつは人間の敵。女の敵。百害あって一利なし。灰にして燃えるゴミの日に廃棄すべきなのよ!」

「酷い言われようですね。過去になにかあったんですか?」

「ない……と、思う」

余りの言われようにヘキサは呻いた。相変わらずといえはそれまでなのだが、どうしてこうまでも目の仇にされているのか。彼女に手を出した記憶は　まあ、ない。

多分、自分の存在が気に食わないのだろう。事実、それだけのことを彼は過去にしてしまっているのだから。

「いまの見た?」

そんな風に落ち込んでいると、そっとリグレットが耳打ちしてきた。

「なにが?」

「炎よ。ふっと掻き消えたわよね。あれをやったのは、あっちの青

「い髪の娘よ」

確かに不自然な消え方だった。ヘキサは抱きつかれた衝撃で消えたばかり思っていたのだが。リグレット言うには、どうやらそうではないようだ。

「火の元素を水で中和したのよ。かなりの高等テクだわ」

よほど元素との親和性がなければ無理な芸当だ。同じ魔法使いだからこそ、リグレットは一目でそれが理解できたのだ。

「そうなのか。俺には魔法を使ったようには見えなかったけど」

魔法の才能が皆無なヘキサは元素を視ることができない。だが、発生した魔法現象を視認することは可能である。魔法を使用したのなら、その残滓くらい見れそうなのだが。

「それだけ技術がずば抜けているってことよ。並の魔法使いには不可能なことだわ」

と、そこで一端言葉を区切り、下からねめつけるようにヘキサを見上げる。

「結局、彼女たちは貴方の知り合いなの？ 説明しなさい」

「ってもな、知り合いといふかなんというか」

青いほうは知らない。これが初対面である。

赤いほうは……なんだろう？ どちらかといえば知り合いよりも敵対関係に近い。もっとも彼女の方が一方的に、ヘキサを敵視しているのだが。

とはいえ、このままではラチが明かない。いつまでもここでも立ち往生しているわけにはいかないのだ。見ればハズミは抱きしめられたままジタバタしている。

「……………決めた。無視して行こう」

「え、よろしいんですか。ハズミさんはヘキサ様に用があるのでは？」

「ン……………？ なんだリンスは知り合い　ああ、いまはいいや。めんどろくに巻き込まれる前に、さつさと先に行くぞ」

「あ！？　こら、無視するなっ！　聞いてんのか！？」

聞こえてませーん。赤毛の少女の言葉を全力で無視すると、回しかけていた鍵を最後まで回し　唐突に、鉄板じみた扉が消失した。音もなく消えた扉の先には、のっぺりとした闇色の輝き渦巻いている。

疑問を抱く暇すらなかった。がくんと身体が前に傾いた。自分の意思ではない。扉から発せられる引力のようなモノに、身体が吸い込まれているのである。

「ヘキサ様！」

「まずっ。引き込まれる！？」

抗う余裕もなく、王の間にいた『五人』は扉の中に吸い込まれると、闇色の光の中に姿をくらしただった。

さて、どうしようかしら？

『此処』ではない『何処』。『何処』でもない『此処』。矛盾の狭間の境界線で、彼女は独りで静かに思考していた。

張り巡らしていた網に引っかかった五人のプレイヤー。お膳立てしたのが白翼なのは、もはや疑いようのない事柄である。それに対して自分のどう行動すべきか。それが問題なのだ。

このまま静観に徹して、天秤を傾けさせるのもひとつの手ではある。今後の展開も視野に入れるのならば、それこそが最善であるのは間違いなかった。

しかし、だからといってこのまま、白翼の思いどおりにコトが運ぶのも面白くない。はっきりと言ってしまえば気に入らなかった。

あの白翼の鼻を明かしてやれば、さぞかし痛快だろう。それだけで秤を戻す価値があるというモノである。

干渉か不干渉か。彼女は冷ややかな醒めた視線で、白翼のお気に入りであるプレイヤーをじっと見据えていた。

八章 破壊の咆哮(2)

地面に足が付き、ひんやりとした冷たい空気が頬を撫でた。

転移にも似た浮遊感から開放されたヘキサは、くらりとする眩暈を無視して周囲に視線を配ると、リグレットたちの安否を確認した。

「リグレット！ リンス！ いるかつ。いたら返事してくれ！」

「っ、うるさい。頭に響くから大声をださないでくれないかしら」

「うっ……頭が痛いです」

ヘキサの不安は杞憂だったようだ。声を張り上げるまでもなく、二人は彼のすぐ傍で片膝をついた体勢で頭を抑えていた。

ポーターによる転移と比べて、随分と乱暴な転移だった。三半規管を激しく揺さぶられたかのような感覚に、喉の奥からせり上がる吐き気を堪える。

「ここは……どこだ……？」

周囲の光景は一変していた。風化して廃墟と化した古城の面影はどこにもなく、黒い長方形の石で構成された通路が広がっている。

雰囲気的には回廊に近いが、そうではないことが直感でなんとなくだが把握できた。回廊を模した異なる空間。このダンジョンが『開かずの扉』の向こう側なのだろうか。

ならばこのダンジョンの奥にリグレットが言っていた、イベント

達成のためのアイテムである鏡があるに違いない。

「いったーっ。もう、なんなのよ」

「ふらふらするっ」

ふいに響いた彼ら以外の声に、そちらを見やるヘキサ。

赤と青。二人の少女は自分たちを見る視線に気がつくくと、伏せていた顔を上げて、白髪の少年の姿を認めた。

「ッ!? ヘキサ!」

どうやら有効範囲が王の間全体に設定されていたらしい。自分たちと一緒に跳ばされてきたハズミはヘキサを指差すと、威嚇するように炎を燦らせた。

「ここはどこ。なにをたくらんでるの!?!」

マズいな、とヘキサは小さく舌打ちした。誰の目から見ても、ハズミは明らかに興奮している。いつも以上に話を聞いてくれそうになかった。

雰囲気遭遇したときよりも悪化しているかもしれない。彼女からすればこの強制転移も、自分が原因だと思っっているのだ。彼に言わせれば不可抗力なのだが、半分は当たっているので否定し辛かった。

「だめー」

ヘキサが対処方法に悩んでいると、緊迫した場にはそぐわぬ緩い声色が木霊した。直後、赤毛の少女の頭上に大量の水が降り注いだ。

服から水を滴らせるハズミ。全身ずぶ濡れで、大雨に打たれたような酷い有様だった。指先の炎も消えてしまっている。

振り返れば白い法衣を纏った青い長髪の少女が、先端に青い宝玉がついた杖を右手に持って彼女のほうに向けている。

「喧嘩はだめだよ、ハーちゃん。ちゃんとお話しようよお」

頬を膨らませる青い髪の少女はそう言い、周囲に浮かべた水の塊を旋回させた。水の塊はふわふわと宙を漂うと、シャボン玉のように弾けて消えた。

「はあつ。わかった。聞けばいいんでしょ、聞けば」

水を引つ掛けられて、血の上った頭が冷えたハズミは、パチンッと指を鳴らした。

ぼおつと一瞬だけ炎がハズミの身体を包んだかと思うと、あれだけびしょ濡れだった彼女の服が湿り気も残さずに乾燥していた。

「それで？　なにがどうなってるのよ」

「実は、だな」

昨日、リグレットとリンスに話したことを、二人の少女にヘキサは聞かせた。

銀の鍵のこと。『開かずの扉』のこと。ハズミたちを転移に巻き込んでしまったのは、故意ではなくて事故だったこと。

簡単にまとめられた内容を聞き終え、ふうんとハズミは相槌を打った。

「なるほどねえ。だからこんなトコにいるんだ」

「納得したか」

「ふんっ。そうね……一応はしてあげる」

ぶいっつと唇を尖らせて顔を背けるハズミに苦笑いをすると、今度は彼のほうが彼女たちに対する疑問を口にした。

「それじゃあ、次はこっちの番だな。どうしてハズミとそっちの、えつと……」

「シルクだよー」

その名前をヘキサは知っていた。彼女と対面するのはこれが初だが、ハズミと同じく『箒』の二つ名を持つ青い髪の少女は、ファンシーでは有名人なのである。

「ハズミとシルクはなんだってここにきたんだ？」

当然の疑問だった。本来ならば最前線で戦っているべきな彼女たちが、いかなる用件でこの界層を訪れたのだろうか。

尾行されていたとは思わないが、かといって偶然で片付けるにはタイミングが絶妙すぎる。それなりの理由があつてしかるべき状況である。

「ちなみに私はハーちゃんに誘われたのー。一緒に行こうって」

「って、言ってるけど？」

「……気紛れよ。なんとなく気が向いたからきただけ」

「こんな中界層の外れにか？」

それこそ『開かずの扉』以外に、これといって目を惹くモノがない界層に？ 天上神歌教会 が誇る魔法使いの集団、『七本箒』

の一人である彼女が気紛れでやってきた。即興のいい訳だとしても少々苦しすぎはしないだろうか。

「そのワリにはさっきの広間で、ヘキサを探していたような素振りをしていたみたいけど？ それも偶然なのかしら？」

「っ！ ええ、そうよ。なんか文句あるの！？」

こいつ、開き直りやがった。

横から割り込んだリグレットの言葉に、何故か胸を張って答える赤毛の少女。どうやら本当のことを話すつもりはないようだ。

「まあ、いいや。……っで、ハズミはこれからどうするんだ？」

「決まってるじゃない。さっさと脱出するわ」

それはそうだ。求めるモノがある自分とは違い、ハズミたちにはそれが無い。衝突することなくこのまま別れるのならば、それが一番いいのかもしれない。

しかし、それでいいのだろうか？ ふとそんな疑惑がむくむくと脳裏を過ぎった。背筋が粟立つような感覚に、理由もわからずに困惑してしまう。

「なんだったら、俺たちと一緒にくるか？」

刹那だけ感じた嫌な予感に、気がつけばヘキサはそんなことを言っていた。ふと我に返って、自分の発言に後悔するが手遅れだった。問いに対する答えなど決まっているようなモノだ。むしろ、また彼女の機嫌を損ねるだけなのでは、と顔をしかめるヘキサだったが、

「いいわ。そうしましょう」

「え？ マジで？」

予想外の回答に思わず聞き返してしまった。

自分で提案しといてなんだが、彼女の言葉はヘキサにとって意外なモノだった。てっきり否定されるとばかり思っていたのだが。

「ええ。……それともあたしじゃ、不足だって言うの？」

そんなワケがなかった。『箒』の二つ名を持つ赤毛の少女を不足扱いなどと、普通に考えたらあり得ないことだ。

「まさか。ハズミがいてくれると助かる」

「……お世辞言ったって無駄よ。ここから出たら速攻でケリつけるんだからね。……シルクもそれでいい？」

「うん。大勢のほうが好きと楽しいよー」

そう言って、大きい瞳を柔和に細めてシルクは朗らかに笑った。

思わぬ出来事だった。『箒』が二人。戦力としては申し分ない。

これが白髪の少年にとって、幸運なのか不運なのか。

それが判明するのはもう少し後の話だった。

八章 破壊の咆哮(2) (後書き)

どうも、祐樹です。

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

ちょっとリアルで憂鬱になる出来事がありまして、モチベーションがガタ落ちしていました。書く心のゆとりなんてなかったですよ。それと上記に伴い、しばらくは平日に執筆するのが無理そうです。いつまでかは知りません。

というか、僕が知りたいくらいです。どうしてこうなったやら。

週に二回は更新したいんですけどね。もう口開いたら愚痴しかでてこないですよ。

八章 破壊の咆哮(3)

おかしな三人組。

それがハズミがヘキサたちに抱いた、率直な感想だ。

ヘキサの傍にリンスがいたのは意外だった。過去に何回かパーティを組んだていどの間柄でしかないが、こんなところで遭遇することになるとは思っていなかった。

あともう一人の黒髪の少女 名前はリグレットだったか。少ないながらも知識がある二人と比べて、彼女の存在はハズミにとっては謎だった。これほどの力量がありながら無名なのが信じられなかった。

最深部を目指すこと早一時間。強制転移直後のやりとりが嘘のように、ダンジョンの探索は思いのほか順調に進んでいた。

ダンジョンが切り替わったためか。出現するモンスターの種類が不死系統なのは古城と変わらないが、固体とレベルが跳ね上がっていた。

体感でいえば70界層後半と比べて遜色あるまい。いうまでもなく、敵ももはや並の探索者では歯が立たない強敵揃いである。

しかし、生憎と彼女たちは並 どころか、『王城派』の中でも突出した能力を持つ、ハイエンドクラスのプレイヤーだ。

このくらいの脅威などものともしていなかった。

ダンジョンに噛み合う金属音と着弾する爆発音が響き渡る。浮遊する発光体の輝きを弾く、沈んだ色合いの鎧を纏う白骨。虚ろな眼孔の奥には、爛々とした青い光が宿っている。

敵は不死系上位種のソウルナイト。ソウルウィザード。ソウルアーチャー。バランスのとれたアンデットモンスターの軍勢だった。剣と剣が交差し、甲高い音が響く。鏝迫り合いの体勢のまま、横からの更なる攻撃に、ヘキサは剣を滑らせると身体を反転させた。

槍による突きは彼のロングコートをかするに留まり、逆に遠心力の乗った盾が敵の頭部に叩き込まれた。宙を舞う敵は他の仲間を巻き込む地面に墜落した。

が、次の瞬間には何事もなかったかのように起き上がると、髑髏の顎をカタカタと鳴らして武器を振り回してくる。

アンデットモンスターは疲れを知らず、自身の身体が崩壊するまで戦うことを止めない。不死故の厄介な種族特性である。

剣、斧、槍。各々に繰り出される武器を掻い潜る。

ハルバードで敵を薙ぎ払う栗色髪の少女を横目に、振るわれる肉厚の刀身が白骨の腕を跳ね飛ばし、鋭い突きが髑髏の頭部を貫く。崩れ落ちる白骨が光に変わり中空に四散した。淡く輝く生命子は、それぞれの指輪に吸収され、内部に蓄えられた。

否、一人だけ違った。ヘキサである。白髪の少年の右手にも左手にも指輪はなかった。探索者にとって命の次に大事なはずの指輪を、彼は身につけていないのだ。

理由は簡単。必要ないからである。ヘキサのほうに流れてきた生命子が、彼の身体に直接吸収されていく。

非常識極まりない光景だ。彼の異常性を目の当たりにすると、真面目にレベル上げをするのが馬鹿らしくなってくる。

ヘキサ。二代目マンイータの二つ名を持つ、プレイヤーキラー。

四年前、箱庭世界を震撼させた伝説の殺人鬼、Aの後継者。そして、ユニークアビリティ『捕食』こそヘキサが、殺人鬼Aの後継者と評される所以である。

指輪に蓄えられる生命子は、モンスターのみに限定される。

生命子目当てで起こるプレイヤー同士での殺し合いを抑制するためなのか、それとも技術的な問題で不可能なのかはわからない。

だが、現実的な話としてモンスターからしか生命子を吸収できない、というのがプレイヤーの常識だった。その常識を破壊したのが、殺人鬼Aでありヘキサである。

『捕食』は指輪を介さずに、生命子を身体に吸収できる。つまりそれは生命子であるのならば、モンスター以外にも適応されるということだ。

即ち、プレイヤーである。探索者がその身に蓄えてきた膨大な生命子を、ヘキサは自分のモノにすることが可能なのだ。

これを効率の面から見た場合、『捕食』がもたらす恩恵は計り知れない。なにしろプレイヤーの持つ経験値を、ほぼそのまま頂戴することができるのである。これでレベルが上がらないはずがなかった。

現在、五年目　あと一ヶ月ほどで六年目に突入するが　のフアンシーで、中間の『三期生』である彼が『王城派』に匹敵、あるいは凌駕する生命子を内包し得る最大の理由がそれなのである。

ヒュンツと風斬り音がした。振り返りざまに跳ね上げた剣が、ソウルアーチャーが放った矢を両断した。

乾いた音を立てて地面に落ちた鏃には、てらてらとした緑色の液体が塗りたくられている。おそらく毒の類だろう。

鏃から滴る液体に触れた地面が、じゅつと溶けて煙が立ち昇った。硫黄のような腐臭にヘキサは顔をしかめた。

視界の隅で黒い光が迸った。白骨の騎士の後方に待機する死者の魔法使い。骨の腕には錆びた金属製の杖。

掲げられた杖が振り下ろされると、そこから凄まじい速度で闇色の閃光が放たれた。闇系統の中位魔法。闇の光の狙いは白髪の少年だった。

直撃すればただでは済まない一撃を前に、ヘキサはソウルナイトの斧を左腕の盾で受け止めると、軽い仕草で剣先を翻した。

切っ先が黒色の光に接触し、闇が一瞬にして砕け散った。まるで風船が弾けるように。その威力を披露することなく、呆気なく消滅した黒光。同時にヘキサの剣も粉々になった。用をなさなくなった柄を捨てて、取りだした新しい剣を構えると地面を蹴った。

膨大な生命子があってこそその技だが、なによりも驚くのはこともなげに魔法を切ったヘキサだろう。この手のMMORPGにおける強さとは、総じてみつつに分別可能だと赤毛の少女は考えている。

レベルと装備とプレイヤー自身の腕だ。通常のネットゲームがレベルと装備に強さの比重があるのに対して、ファンシーはプレイヤー自身に強さの比重がある。

むろんレベルが高く装備の性能がいいほうが有利なのは確かだが、

仮想世界体験型であるこのゲームは、プレイヤー自身の優劣がより顕著に浮き彫りになってしまう。プレイヤーの行動がよりダイレクトに反映されるからだ。これは仮想世界体験型の宿命ともいえる。

その中でヘキサの場合は、特に動体視力とそれに付随する反応速度が、常人とは一線を画している。飛来する魔法を狙って斬り落とすなんて真似を素でやってのけるのは、ハズミの記憶の中にも数えるほどしかない。

「ヘキサッ！」

声を合図にヘキサは盾で大剣の一撃を弾き、ブーツの底でソウルナイトの鎧を蹴り、勢いで後ろに全力で跳躍した。リンスもそれに倣い後退する。

直後、白骨騎士の群れ目掛けて、紅蓮の炎が牙を剥いた。炎はソウルウィザードに魔法防御を施された鎧を、いとも容易く溶解させた。

高熱に炙られ大気が悲鳴を上げる。熱量に歪む視界の中、身悶えるソウルナイトの手から武器が零れ落ちた。

炎の範囲外に逃げるように地面を這うが、まるで意思を持つかのように渦巻く炎は、獲物を決して逃がさなかった。

炎の勢いが収まる頃には、骸骨騎士の半分が炭化して事切れていた。舞い散る生命子。それでも魔法防御の効果か。全滅とまではいかなかったようだ。

よろよると立ち上がるソウルナイト。武器を掲げて突撃しようとし、身体を穿つ無数の杭に今度こそ一矢報いることなく絶命した。

水である。宙に浮かぶ複数の水球。いつの間にか敵の群れの頭上

に浮かんでいた水球から、まるで散弾の如く水の杭が撃ちだされる。狙いなんてあつてないようなものだ。壁を砕き、地面を穿ち、敵を串刺しにする。無差別に襲い掛かる水の杭。

防御なんて無意味だった。一、二発防いだところで、その倍の杭に身体を貫かれ、敵のことごとくが地面に這いつくばった。

水球の体積が尽きる頃には、前衛のソウルナイトは全滅。後衛のソウルウィザードとソウルアーチャーも、その大半が生命子へと還元されている最中だった。

そして、その生き残りの結末もすでに決定していた。

ヘキサたちの最後尾に位置するリグレットの右手。振動する金属の短杖から白い輝きが漏れている。決して強い輝きではない。

それはヘキサたちにとっては温かい光でありしかし、アンデットであるモンスターたちには、再び死を与える滅びの光だ。

炸裂する閃光は光属性の浄化魔法。戦闘当初ならいざ知らず、傷ついた身体でその光に抵抗するのは不可能だった。

光を浴びた骸骨が末端から剥離する。一瞬で長い年月が経過したかのように、ぼろぼろと身体が風化していく。

閃光がふつと消えたとき、そこには敵の姿はどこにもなく、散乱する武具と生命子の輝きだけが残されていた。

八章 破壊の咆哮（4）

即席のパーティとしては、上々の連携だった。強敵だったとは思えないほどスムーズに戦闘は行なわれ、こちらの被害は皆無。

特にパーティをはじめて組む、シルクとハズミの動きが想像以上によかった。パーティでの自分の役割をちゃんと理解しているのだろう。

リグレットではないが、流石は『箒』の二つ名を冠するだけはあるということなのか。

激しい激突から一点して静まり返る周囲の様子に、ヘキサはさつと左右に視線を走らせる。どうやらいまのが最後の一団だったようだ。

少なくともヘキサが知覚できる範囲内で、自分たち以外の気配は感じられなかった。

「リンス。そっちはどうだ？」

白髪の少年が意見を求めたのは魔法使いのリグレットではなく、前衛を務める騎士の少女だった。彼女はヘキサの言葉に目を閉じた。

「……こちらにも反応はないです。おそらくいまので当面は打ち止めかと思えます」

「そっか。なら、安心だな」

その言葉にヘキサはあっさりと警戒を解き、右手の剣を払うと背中
中の鞘に収めた。どうやら彼女の言葉を全面的に信用しているよう
だ。

事実、死人の渦巻くこのダンジョンにおいては、リグレットの探
知魔法よりも精度・領域共にリンスのほう为上だった。

「そろそろ一端、休憩にしない？ まだまだ先は流そうだから、こ
こら辺で一息入れましょう。魔石やアイテムも回収しないとイケな
いしね」

視線を下に落とすリグレット。

地面には散乱する武器に混じり、魔石が転がっている。強敵とさ
れるモンスターだけはある、中々の大きさだった。色は靈素の紫と
闇素の黒。ダンジョンの特色を考慮すれば当然だといえた。純度も
高くまとめて売れば、かなりの儲けになるだろう。

「そうだな。じゃあ、休憩ってことで」

「では、わたしは武器のほうを見てきますので、ヘキサ様は魔石の
ほうをお願いしてもよろしいですか」

「ああ、わかった」

「だったら私は、念のために簡易結界を張っておくわ」

遠ざかる背中に答え、身を屈めると地面に散らばっている魔石を
拾う。地面を舐めるように注意深く見回して、取りこぼしがないよ
うに気をつける。

ドロップ品を自動回収してくれるようなシステムがあればいいの
だが、生憎とそう都合のいい装置はこの世界にはなかった。こうし

て人の手で一個一個拾っていくしかないのだ。リアルすぎるのも考えモノである。

「私たちも手伝うよー。ね、ハーちゃん」

「もちろん。手伝うに決まってるじゃない」

「いいって。俺が拾つとくから、二人は休んでくれ」

二人の声に視線を地面に這わせたまま、ヘキサはひらひらと手を振った。

「えーでもー」

ちらりと視線を横にズラす。そこには短杖を構えるリグレットの姿があつた。彼らだけ働かせて、自分たちだけ休むというのは、なんだか決まりが悪く感じられた。

「大丈夫。大した量じゃない。それにハズミたちはゲストなんだからさ。休憩してくれよ。……あ、ドロップは均等にわかるから心配しないでいいぞ」

「誰もそんなこと心配してないわよ」

むつと頬を膨らませるハズミだが、最終的には折れてシルクと一緒に、身体を休めることにした。きよろきよろと目を配らせると、ちようどいい感じに出っ張っている石があつたので、そこに二人して腰を下ろした。

とはいうものの、やることがないとかえってつまらないもので。時間を持て余したハズミは、何気なく白髪の少年の後ろ姿をぼんやりと眺めた。

「……なによ。やっぱりこれならあたしたちなんて、必要なかったじゃない」

小さく愚痴を零す。

なにが自分たちがいないと危ない、だ。あの人の言葉だから素直に指示に従ったのだが、別に自分たちがいなくても大丈夫そうではないか。

ここまでの戦闘を見る限り、ヘキサたち三人だけでも十分に攻略できそうな勢いだっただ。確かに自分たちがいたほうが効率はいいだろうが、いなかったからといって攻略できないということはなさそうである。

と、愚痴ったところだなにかが変わるワケではない。ハズミは振り振ると、もうひとつの懸案すべき黒髪の少女に視線をやった。やはりハズミにはリグレットの存在が、気になって仕方がなかった。無機質な美貌もさることながら、その魔法の多様性には驚かされた。

簡易結界つと書いていたが、属性は光だろう。戦闘中に彼女は水系統に属する氷魔法と風の攻撃魔法、それに霊属性の回復魔法も使っていた。

つまり最低でも四属性の使い手だということだ。

よつつの元素を操れるとなれば、間違いなく魔法使いとして大成する器だといっていいはず。なのだが、記憶を探ってみてもリグレットという名前を聞いたことがなかった。

これほどの使い手。ましてや希少な霊属性を使えるのなら、引く手数多なのは想像に難くない。風の噂くらい聞こえてもよさそうなのだが。

「ねーねー。へキサさんとはどこで出会ったのー？」

そこまで思考したところで、退屈を紛らわせるためか、話しかけてきたシルクによって考えが中断させられた。

「な、なによ。やぶからぼうに」

「だって、ハーちゃんがあんなにムキになるなんて珍しいでしょー？ だからなにがあつたのかなーって」

「別に大したことないわよ。ただ……」

「ただー？」

「ちよつと争い沙汰になつてね。それで、その……なに？ あれよ、あれ。なんていうかその、さ」

途端に歯切れが悪くなる。その態度になにか思い当たる節があるのが、ピンときたシルクがハズミの耳元で囁いた。

「負けたの？」

「ち、違つわよー！」

反応は劇的だった。明らかに取り乱した様子のハズミは、捲くし立てるように言った。

「負けたわけじゃないわよ！ ちよつと油断してて ほ、本気じゃなかったんだから！」

「ハーちゃん。それ負け惜しみだよ？」

「な！ 違つ。私はへキサに負けてなんてないわよー！
「ん？ 呼んだ？」

自分の名前を耳にしたへキサが、何気なく振り返る。ハズミは顔

を赤くして硬直した。手甲をつけた左手を振り回すと、腕の軌跡にそって火の粉が踊った。

「うるさい！ こっち見んなつ。早く拾え！」

「わ、わかってるって」

露骨に態度が怪しかったが、下手に突っ込むと炎が飛んできそうな雰囲気だったので、なにやら理不尽なモノを感じつつも頷く。

黙々と魔石を拾い上げ、一折り専用のケースに収めた頃には、リンスのほうの回収作業も終わったようである。

リグレットと歩み寄る彼女の手には、細長い紙切れのようなモノが握られていた。表紙には剣や杖の絵が描かれている。

「むう。なんだ。数が少ないな」

カードの枚数を数えながら、ぼそりつつぶやく。

「そうですね。思ってたよりも武具の損傷が酷くて大変でした。なんとか武器は回収できましたが、防具のほうは全滅です」

実体化させた自分の本に、カードをまとめてしまいながら言うリンス。

「派手に魔法ぶっ放したからなあ。仕方がないか」

脳裏にさきほどの戦闘光景が浮かぶ。

炎に溶かされ、水の杭に撃ち抜かれたモンスターの姿に、それもそうかとヘキサは納得した。あれだけ派手に壊せばカードにできないのも当然だった。

むしろ、武器類を回収できただけ儲け物と思つべきだろう。
アイテムと魔石を回収し終えて、短いながらも休憩を取ったヘキサたちは、再び最深部に向かって歩きはじめた。

それからさらに一時間が経過した。散発的な戦闘をこなしながら、奥へと進む一同。当然のことではあるが事前にマップを入手できなかったため、このダンジョンがどこまで続いているのかがわからない。

経験上から判断するのならば、最低でも半分はきていると思うのだが。状況が状況だけに当てにしているものか悩んでしまう。などと、考えごとをしていたときだ。

唐突に視界が開けた。

広い円形のフロア。壁に灯された青白い炎が、フロアを薄暗く照らしている。自分たちが入ってきた反対側の壁がくり貫かれ、その奥には正八面体の透明な結晶体が見える。おそらくあれが脱出用のポーターなのだろう。

大広間は静かで物音ひとつしない。ヘキサは通路からざっとフロアを見回すが、目的である鏡は見当たらなかった。

彼らは周囲に敵がないのを確認すると、大広間にゆっくりと足を踏み入れた。そのまま何事も起きずフロアの中央付近まで行ったところで、唐突に眩い閃光が散った。

八章 破壊の咆哮(5)

へキサたちは弾かれたように警戒態勢に移行する。いつ戦闘に突入してもいいように、武器に手を添えながら、状況の変化に注視する。

この手のダンジョンにありがちな展開だ。おそらくこれからボスに相当するモンスターが出現して、そいつを倒さないとイベントがクリアできないのだろう。

我慢しようと思った。目先よりも遙か先に起こるであろう出来事を優先し、この場では自重しよう決めていた。

どんなモンスターかはわからないが、出現するモンスターの強さから、このダンジョンの難易度を70界層後半だと仮定しても、この面子でならばイケるだろう。

次層へと繋がる『回廊』を縄張りにする大型のボスモンスターならば話は別だが、リグレットの言葉からすでにこのクエストをクリアしているプレイヤーもいるようだし、問題にはならないはずである。

しかし、自分で思っていた以上に、白翼の存在を鬱陶しく感

じているようだ。彼が目的地に近づくにつれて、決めたはずの意志に揺らぎが生じた。

ダンジョンに突入した直後の、嫌な予感もいまは欠片もない。やはり自分の勘違いだったようだ。早くボスを倒してイベントをクリアしてしまおう。

今回こそは念願の剣が手に入るといいのだが。こればかりは入手してからでないと、なんともいうことができない。

我慢しようと思えば思うほどに強くなる衝動。それは彼らが大広間に到着した段階で、頂点に達していた。限界だった。これ以上は我慢できそうになかった。故に彼女は怨敵の寵愛者に”嫌がらせ”をすることにした。

体勢を低くし、鞘から剣を引き抜く。

彼らの視線が集中する中、頭上の光が収束して

黒翼からの命令。
フラッグオーダー

敵性脅威度を100から130に修正。フラッグエスト『選定の鏡』の難易度を再設定。配置モンスターの変更を要請<<<<<<許可。

アーカイヴに接続。検索範囲を第八深度に設定。検索キーワードを追加。条件に該当モンスターの検索を実行。

……。

……………。

.....。

検索完了。配置モンスターの変更を実行<<<<<<完了。

『天秤機能』による干渉率の測定。

白翼：0 || 黒翼：2。

『天秤機能』 + 1。

以上。

処理を終了。

空中で実体化した巨体が落下してきた。

ズシンツと落下の衝撃で重たい地響きが轟き、発生した振動の余波がヘキサたちの身体を大きく揺さぶった。

激しい振動に転びそうになるのを堪えて、ボスが現れたにも関わらず彼らはばかんと呆けた表情で、その巨体を見上げていた。

鉛色の光沢を放つ鱗。大気を燻らせる大きな口腔には鋭い牙。刃の如き爪を持つ強靱な四肢。床を打つ鋼の尾が地面を砕き、背中から生えた翼が旋風を巻き起こす。縦長の瞳孔は琥珀色に輝き、目の前の探索者たちを睥睨している。

そこに在るだけで世界を軋ませる圧倒的な威圧感。並の者ならその膨大な生命子に中てられて、身動きひとつできないであろう。

その存在の名を白髪の少年は口にしました。

「ドラゴン……ッ!？」

破壊の化身たる竜種がそこにいた。

竜が吼える。物理的な衝撃すら帯びた咆哮に、身体が反応して行

動を開始した。同時に竜の限界まで開かれた口腔に光が点る。

「マズッ」

口腔に収束した光が、強烈な閃光を伴い開放された。放れた光の束が周囲の光景を歪ませながらヘキサたちに迫る。

初動の遅れが致命的だった。相対距離が近すぎるのだ。ヘキサは瞬時に考えた。自分の敏捷ならば全力で避ければまだ間に合う。

だが、他の者たちはどうだろう。リンスはあるいは回避できるかもしれないが、敏捷性に劣る魔法使いの少女たちは無理だ。

竜の代名詞たる破壊の吐息。彼女たちがそれをまともに喰らえばどうなるかなど、考えるまでもなく明白だった。

故に、ヘキサは躊躇なく前にでると、盾を構えて機構を駆動させた。眼前に展開された防御膜がプレスを正面から受け止めた。

尋常ではない衝撃がヘキサの身体を襲った。その威力は砂漠の悪魔の比ではなかった。盾の機構が早くも悲鳴を上げたかと思うと、一瞬にして防御膜が消失した。

無防備になったヘキサを必殺の一撃が直撃　　する刹那だった。

白髪の少年を庇うように魔法障壁が出現した。

「長くは持たないわ！　いまのうちに後退して!!」

リグレットの緊迫した声色に、ヘキサとリンスが地面を蹴った。リンスはすくい上げるようにシルクを抱えると、入ってきた通路を指して駆ける。

ヘキサはリグレットとハズミを両脇に抱えると、リンスに倣って全力で走った。鼓膜を叩く軋み音。魔法障壁が消えかかっているの

だ。

パンッと障壁が弾けた。流石に威力は落ちてはいるようだが、完全に相殺するに至らなかったブレスが背後から迫る。

「このッ！」

抱えられたままハズミが腕を振るった。

腕の軌跡に添い放たれた火球が、竜の横っ面に命中して爆発した。着弾の衝撃で明後日の方向に逸れた光の束が、壁を砕いて斜めに亀裂を刻む。

その隙に通路に飛び込んだヘキサとリンスだったが、足を止めることはなかった。生命の危機から逃れるように、少しでも竜から離れようと遁走する。足が止まったのはリグレットの声が聞こえたときだった。

「ヘキサ。大丈夫。竜は追いかけてきていないわ」

振り返って目を細める。僅かな変化も見逃さないと、全神経を集中させるが、彼女の言葉どおり竜の気配は感じられなかった。

「それだけで……そろそろ下ろしてくれないかしら？」

ふと自分を見下ろせば、小脇に抱えた二人の少女。黒髪の少女は含み笑いを洩らし、赤毛の少女は頬を赤らめて硬直してしまっている。

「わ、悪いっ！」

慌てて少女たちを放す。あらかじめ予期していたリグレットは軽やかに着地するが、固まっていたハズミは受身もとれずに地面に衝突した。

「ふぎゅっ!？」

女の子にあるまじき呻き声を洩らすハズミに、あっとヘキサの頬を伝う汗。恨めしげな表情にあわあわとするが、彼女は顔を背けるだけだった。

「ゴメン。でも、わざとじゃ……!」

「いい。助けてくれたのでキャラにしてあげる」

珍しく大人しいハズミの様子に訝しみながらも、彼は大広間の方角を見やった。

竜種。大抵の物語でそうであるように、ファンシーにおいても竜の強大さは最強の別称として使われている。

その強さは他のモンスターとは一線を画す。竜種というだけで、強敵以上の評価が妥当だと云われているくらいなのだ。

「ったく。よりもよってドラゴンとはな。勘弁してほしいぜ」

個体数が少ない竜種に遭遇する機会など滅多にあるものではない。ヘキサとて遭遇したのはこれが二度目だった。

というよりも、何故竜がここにいるのかわからない。ダンジョン自体の難易度と釣り合いがとれていないのだ。

自分よりも前にこのクエストをクリアした連中は、あんな化け物を相手にして勝利したというのか。なにかがおかしい気がする。拭

いきれない違和感があった、
しばらくじつとしていたヘキサだったが、よしつと小さくつぶやくと口を開いた。

「ちよつと竜の様子を見てくる。リグレットも一緒にきてくれないか？」

「ええ。わかつたわ」

他の少女たちには待機していてくれるように言い、リグレットと二人で大広間の手前まできたヘキサは、通路からそつとフロアの中央に佇む巨体を覗き見た。

どうも移動範囲が制限されているらしく、鉛色の竜は翼をたたみ彫像のように動きを止めている。もっとも、あの巨体ではどのみち通路に入ることはいかならうが。

ヴリドラ。それが竜の固体名のようなだ。【識別】からもたらされる情報にしかし、ヘキサは思わず舌打ちしてしまった。

「くそつ。やっぱり駄目か」

【識別】でわかつたのは、名前だけだったのだ。他にはなにもわからない。名前以外の一切の情報を読み取ることができないのだ。つまり、両者の力量にはそれだけ差があるということである。

「こつちも駄目よ。探知魔法に手応えがないわ。どうもレジストされているみたいね」

もしやと思い連れてきたのだが、リグレットでも無理だったようだ。渋面になったヘキサは、踵を返すと少女たちがいる地点にまで戻った。

「撤退だ。リンスはポーターまで護衛を頼む。俺はアイツの注意を引きつけておくから、その間に脱出してくれ。俺もすぐに後を追う」

開口一番に白髪の少年から放たれた言葉に、少女たちは揃って顔を見合わせた。

八章 破壊の咆哮(6)

「撤退……ですか……？」

「不幸中の幸いってどうか、ポーターは起動してるからな。脱出するだけなら、アイツを倒さなくてもいいってことなんだから」

「……クエストを放棄するっていうの？」

「ああ、そうだ」

クエストに未練がないといえは嘘になる。クエストの報酬は難易度に比例する。その法則に今回のクエストを当てはめるのならば、ドラゴンなんて規格外の存在がでてきた以上、クエスト報酬である武器には相応に期待できるといえる。

ただし、それは同時にクエストがいかに危険かも物語っている。不安要素が多い中でドラゴンと戦うのは分が悪すぎるのだ。

「この中でドラゴンとやりあった経験のある奴はいるか？」

「ないわ」

「うーん、ないよー」

「私は一度だけあります」

「あたしもないかな。ドラゴンモドキとなら、何回もあるけど」

赤毛の少女がいうドラゴンモドキとは、ワイバーンなどの飛竜種のことだろう。飛竜種は飛竜種で確かに強敵なのだが、ドラゴンと

比べては見劣りしてしまう。竜種の下位互換というのが、一般的な意見である。

予想通りドラゴンとの戦闘経験者は、この場にはほとんどいなかった。個体数が少ないのだから、当然といえば当然なのだが。

戦闘経験のない竜種。

経験がないために相手の行動に対して、判断がつかずに躊躇は生まれてしまいかもしれない。ときにそれは致命傷になり得る。

即興でのパーティによる連携の不足。

ときどき組むリグレットとリンスは別にしても、ハズミとシルクとはこれをはじめてのパーティ。道中の敵ていどならば問題ないが、竜種が相手とあつては心許ない。

他にもある様々な不安要素。それらの要素を検討した結果、白髪の少年は撤退が妥当と決断を下したのだ。

そもそも当初の目的である武器にしても、必ずしもヘキサの全力に耐えうる武器が手に入るといふ保証があるワケではない。あくまでもその可能性が高いというだけである。

そんなあやふやなモノに、少女たちの命を賭けるなどできるはずもなかった。武器は入手しましたが、誰かが犠牲になったなど笑い話すらならない。

もしもこれが普通のネットゲームならば、それもいいかもしれない。成功したなら素直に喜ばいいし、失敗なら反省して次に活かせばいい。

だが、この世界にやり直しはない。一回死んでしまったら、それですべてが終わってしまうのだ。”例外はない”と、ナビゲーター

が断言している。

「……一度、ダンジョンをでたら、戻ってはこれないわよ」
「わかってる。もう鍵もないしな」

ダンジョンに突入するときに使ってしまったので、いま彼の手元に銀鍵はない。ひとつのアイテムには一回のクエスト。この手のクエストの基本ルールみたいなモノだ。

再度、このダンジョンにこようと思ったたら、もう一度銀鍵を入手するしかないが、その可能性は限りなく低いだろう。

「まあ、仕方がないよ。今回は諦めるさ」

「ヘキサ」

「なんだよ。言っとくけど、考えを変える気はないからな」

冷えたリグレットの声に、しかめっ面になるヘキサ。

伊達に普段から行動を共にしているワケではない。彼女がなにを言いたいのかは、凡そ検討がついていたが、ヘキサも意見を譲るつもりはなかった。

なかつたのだが

「正座」

「……え、なに？」

はじめはなにを言われたのか、理解できなかった。いや、聞こえてはいたが、自分の聞き間違いだと思ったのである。

「正座しなさい」

有無を言わせぬ口調。

地面を指差すりグレットの目は本気だった。

「いや、え……？　なんでこの状況で正座？」

「なにか文句でもあるのかしら」

「いえ。ないです」

条件反射とは怖いモノで、気がつけばヘキサはその場で正座していた。いきなりの彼の正座に、周りの視線が生暖かいのは、気のせいだと自分に言い聞かせる。

「かつこわる」

ハズミの素の一言が胸に痛い。感情のない一言がここまで痛いとは、日頃から罵倒される身分としては新鮮だった。一生、経験したくなどなかったが。

「どうしてすぐに諦めるのよ。ここにいる全員の力を合わせれば、勝てるかもしれないのに。なにを恐れてるの？」

「当たり前だ。竜だぞ、竜。慎重にならないほうが、どうかしてるんじゃないか。リグレットこそ冷静になれよ。竜なんて少人数で挑むモノじゃない」

「ふうん。冷静に、ね。……だったら聞くけど、もしここにソロできてたとしたら、貴方はどうしてたかしら」

「……逃げるに決まってるだろ。当然じゃないか」

何故かその回答がでるまでには、一瞬の間があった。明らかに動揺する白髪の少年の頭上から、微苦笑を帯びた言葉が漏れた。

「嘘。だって貴方、あの竜に勝てると思ってないかもしれないけど、

負けるとも思っていないのでしょ？ 逆鱗を看破できれば勝てる可能性がある。それが無理でも離脱するだけなら、できると踏んでるんじゃないかしら」

凶星だった。黒髪の少女の言葉は、彼の胸中をずばりと言い当てていた。あの鉛色の竜　ヴリドラは強い。レベルも自分たちよりも上。勝利することは難しいだろう。

しかし、難しいということは逆にいうなら、僅かにでも勝てる可能性があるということである。所詮、レベルなんて目安のひとつではない。勝てないと勝てないかもしれない、はまったくの別物である。

だとしたら妙な話だ。ソロでそれならば、より戦力の充実しているいまのほうで、勝率で考えるならば高いはずである。にも関わらず、彼が撤退を口にする理由はひとつだ。

「わたしたちが危険に晒されるから……でしょ。へキサが考えそうなことよね」

「……そこまでわかってるなら、今回は俺の」
「さて、ここで多数決をとりますようか」

おいつと突っ込むへキサを無視して、場の視線を集めるリグレットは高らかに宣言した。

「まずはへキサの意見に賛成の人は手を上げて」

渋々と手を上げたのは　へキサ一人だけだった。

「戦いを選ぶ人はって、聞くまでもないわね」

「撤退なら撤退でいいかもって思ったけど、そんな話聞かされた後じゃね。このまま逃げるなんてしゃくじゃない。ね、シルク？」

「うん。私もがんばるよー」

「ええ、皆で頑張りましょうっ」

「ってことみたいだけど、ヘキサはどうするの？ ああ、帰りたいなら一人でどうぞ。止めはしないわよ。どうぞお帰りくださいな」

「わかった。わかったよ！ 俺も戦う。それでいいんだろ！」

折れたのはヘキサのほうだった。というよりも、それしか選択肢はなかった。一人で撤退しても意味なんてない。こうなればやるしかなかった。

「でさ、どうするのよ。まさか無策で突っ込むなんて言わないわよね」

「もちろん。じゃあ、まずはお互いの手を打ちを明かしましょうか。隠し事なしでね」

そこで彼らは互いの手札を交換し合った。得意なことと不得意なこと。なにができて、なにができないのか。持ち得る手札を明かしていく。

驚くことは色々あったが、その中でも特に強い反応があったのは、リグレットの能力に話題が及んだときだった。

「はわー」

「……マジで？」

目を点にするハズミとシルク。その様子にヘキサは、だよなあとしんと顔を見合わせて苦笑した。彼らもはじめてそれを聞かされたときは、彼女流の冗談だと思ったものだ。

「あんたマジで何者？　なんでそれで無名なのよ。おかしいでしょ」

半目になるハズミ。魔法使いとしての立場上、ヘキサたちよりも余計に彼女の能力には考えさせられるのだろう。

「ハーちゃん。いまはしーっだよー」

「そうね。でも、後で話は聞かせてもらおうよ」

「まあ、それはおいおいとすること。それで、だけど……」

「その前にひとついいかな」

黒髪の少女の言葉に待ったをかける。真面目な表情を作ると、ヘキサは少女たちを”見上げながら”口を開いた。

「俺はいつまで正座してればいいんだ？」

結局、彼が立つことを許可されたのは、作戦会議が終わってからだった。

八章 破壊の咆哮(6) (後書き)

どうも祐樹です。

二回目のサブタイトルの変更です。

びっくりするくらい話が進まないですね。まあ、原因は明らかですけど。できれば今月中にこのクエストには、ケリをつけたいんですけど。

この先もイベント満載でぎゅぎゅう詰めなんで。

次章こそ終わるはず。多分。

それでは最後になりますが、意見や感想などがありましたら気軽にお知らせください。参考にさせていただきます。

では、また次章で。

九章 硝子の剣(1)

花畑を吹き抜ける突風。

異変を察知して面を上げた。

存在しないモンスターが存在している。それだけで凡その経緯は把握できた。大方、黒翼が干渉したのだろうが、それは意外なことであった。

黒翼のことだから天秤を優先して、今回は傍観するとはかり思っていたのだ。予想外の事態に焦燥を隠し切れない。

アーカイヴに接続。最上位アカウントによりあらゆる防壁を無条件で突破し、鉛色の竜の情報を引き出す。

ヴリドラは別のイベントのために用意されていたモンスターで、『貴晶種』にこそ及ばないが、この世界でも数少ない単一種のひとつ。

本来、『選定の鏡』で配置されていたモンスターとは別格であり、比べること自体が間違いと言えるほどである。

端的に言ってしまうえばヴリドラは、攻略中の80界層のボスモンスターよりも強い。つまりそれは現時点で遭遇し得るモンスターの中でも、最強であるということだ。

接触を図ったのは間違いだったのか。そんな考えが脳裏を過ぎる

が、すぐさま被りを振って否定した。どこかで接触しなければなら
ないのだ。避けては通れない道である以上、後は早いか遅いかの差
でしかない。

だいじょうぶ。あのひとは負けない。

彼の強さは”傍で見ている”自分が一番よく知っている。いまは
もう戻らない残響の記憶。在りし日の想いは確かに、この胸の奥に
刻まれているが故に。

胸の前で手を組んで瞑目する。天秤は揺らせない。いまの自分に
は祈ることしかできないが、祈りもまた力になると知っている。

がんばって。竜になんて負けないで。

その願いは誰の耳にも響くことなく、蒼穹の空へと吸い込まれて
いった。

各々がシステムブックを開き、アイテムやステータスの最終的な
確認をする。

先程も確認をしているが、なにしろこれから竜と一戦を交えるの
だ。念には念を入れるのは、当然の対処だといえるだろう。

「準備はいいかしら？ よければ竜狩りといきましょうか」

手元のパーティウインドでメンバーのステータス情報を確認しな
がら、リグレットはヘキサたちに訊ねた。ちなみにパーティリーダ
ーはリグレットが務めている。なりゆきからだが、面子から考えれ
ば妥当なところである。

一般的なゲームがそうであるように、ファンシーにおけるパーティシステムは、複数人で行動するうえで欠かすことのできないモノである。

パーティメンバーの状況把握はもちろん、戦闘で得られる経験値
生命子の分配の割り振りも設定できる。メンバー間で共有できる
個人情報も選択でき、余程親しい間柄でもない限り、基本情報の
みでステータスを公開することはないだろう。

基本情報のみの場合は、生死判定と異常状態の有無のみの情報開
示になる。この世界にはHPバーやMPバーなどが存在しないので、
このように簡素のモノになるのだ。

パーティ結成のレベル制限はなく、どれだけレベルの離れたプレイヤー間でも組めるが、レベル差に応じて経験値の割り振りに限度があるため、レベルの離れたプレイヤー同士でパーティを組む機会は早々ない。

黒髪の少女の言葉に頷くメンバーだが、ヘキサだけは口をへの字にして沈黙を保っていた。その様子に彼女は小首を傾げた。

「どうかしたの？ ヘキサ」

「いやー、さっきまで正座させられて、まだ足が痺れてるみたいなんだよ。これから決戦だっていうのに、参ったよなあ」

「あら、まだ気にしていたの。器が小さいわね」

露骨に嫌味っぽい言葉にリグレットは肩を竦めた。

「リンスもそう思わない？」

「……そういえば、リンスも止めてくれなかったな」
「す、すみません。てっきり私はいつものコミュニケーションだとばかり」

恨めしげな目をされて、あははは、と気まずそうに笑うリンス。
どうやら彼女はヘキサとリグレットとのやりとりを、一種のじゃれ合いと受け取っていたようだ。

思い当たる節はいくつかあった。行動を共にするようになった初期は、なにかとリグレットを押し止めてくれたリンスだが、最近は傍観することが多くなっていた。

ある意味親密になった証といえるかもしれない。しれないが、納得のいかないモノを感じずにはいられないヘキサだった。

「はあつ。まあ、いいや。　　そうだ。リグレット」

「なにかしら？」

「さっきも言ったけど、危険だと判断したらすぐに逃げる。時間は俺が稼ぐから」

俺が死亡してなかったらただけだな、と笑えない冗談を言うヘキサに、リグレットより先にハズミが嘔みついた。

「なにそれ。アンタを困にしろってこと？」

不愉快そうに眉根を寄せる赤毛の少女に、ヘキサは首を横に振った

「違う。そうは言ってない。全員で逃げられるならそれに越したことはないけど、そう上手くいくとは限らないだろ」

この箱庭世界にはポーターを除き、転移に属するアイテムや魔法

はない。

従ってダンジョンから脱出する手段は限られている。今回でいえばポーターでしか離脱できないのであろう。

そうなれば当然、誰かがその場でモンスターを足止めする必要がある。ヘキサはもしものときは、その役目を自分がやると言っているのだ。

「あくまでも万が一のときの保険だよ。それに足止めの一番の適任は俺だろ？」

魔法使いに足止めを任せるなど愚の骨頂。ならば残されるメンバーはヘキサとリンスしかいないわけだが、彼女を残して自分が先に逃げるなんて選択肢はありえない。

「それに俺は嫌われ者だから。死んだところで誰も困らないさ」

そう苦々しく口の端を歪めるヘキサ。自嘲する白髪の少年にリグレットは目を細めると、彼の頭を右手の短杖で叩いた。

「ごんつと鈍い音がして、頭を抑えてヘキサは呻いた。痛みで涙目になる彼を横目にし、普段よりもキツめの口調で彼女は言った。

「馬鹿なことを言ってる暇があるのなら、装備の再確認でもしなさい。くだらない妄言を吐くよりも、勝利の確率を上げるほうが先でしょうが」

「い、いや……だから俺は万が一の可能性をだな」
「返事はどうしたの？」

切れ長の双眸が自分を見ている。黒い瞳に息を詰まらせたヘキサは、根負けしたように肩の力を抜いた。

「……了解。善処する」

「結構。では、行きましようか」

「いいよー」

「さっさと終わらせるわよ」

口々にそう言い少女たちは、ダンジョンの奥へと消えていく。その場に放置される形になったヘキサは半ば呆然としていたが、その場に留まったりリンスの言葉にふと我に返った。

「ヘキサ様。わたしからもお願いがあります」

「な、なにかな？」

いつになく真剣な表情をするリンスに、思わずどもってしまふ。

「冗談でも誰も困らない、なんて言わないでください。……少なくともわたしは悲しみますから。本当ですよ？」

顔を下から覗き込まれる。優しげなしかし、有無を言わせない輝きを宿す瞳に、白髪の少年は「わかった」と頷くしかなかった。

「わたしが言いたいことはそれだけです」

ヘキサの返答に満足げな表情をすると、栗色の長髪をふわりと揺らして、彼女は踵を返して身体を反転させた。

「さ。行きましよう、ヘキサ様」

そう言い残して先行する三人を目指して走るリンス。遠ざかる背中になんとも言えない表情をすると、ヘキサは頬を掻きながら彼女

を後ろ姿を追いかける。

ほどなくして辿りつく終着点。大広間の手前まで引き返してきたへキサたちの視界に、フロアの中央に蹲る鉛色の竜が映っている。

「ンじゃ、やるか」

場違いなほど静かな口調。

その一言を合図に竜との戦いがはじまった。

九章 硝子の剣(2)

近づく複数の足音に、ヴリドラはゆっくりと身を起こした。それだけの動作で旋風が渦を巻き、地響きのように床が震えた。

琥珀色の瞳孔が矮小な者共を睥睨し、耳元で爆弾を炸裂させたかのような咆哮が、大広間全体を大きく揺さぶった。

何気ない動作のひとつひとつがすでに物理的な圧力を持つ。出鱈目にして規格外。これが竜種。あらゆる種族の頂点に君臨する威容がそこにあつた。

「これでも」

先手はヘキサだった。

剣の柄をくると回して、逆手に持ち替える。注ぎ込まれる生命子に熱を帯びた刀身が、赤々と輝き切っ先から熔解しだす。

「喰らつとけえッ!!」

渾身の力で投擲する。

赤い尾を引く一撃が、狙い違わずヴリドラの胸元に命中した。爆音じみた炸裂音が大広間に木霊し、波紋のように広がる衝撃波が床や壁を砕く。

凄まじい一撃だ。砂漠の悪魔に大穴を穿った攻撃である。さしものドラゴンも無傷ではあるまい。そんな思考は竜を前にしては、甘

いと言わざるを得なかった。

翼の羽ばたきが瓦礫を吹き飛ばす。その胸の鱗の数枚に、引つ掻いたような傷痕が浅く刻まれている。堅牢な竜の鱗はいかなる刃も通さない。傷とも呼べない攻撃の成果に苦笑しながら、ヘキサは新しい剣を取りだした。

地面を蹴り、一気に距離を縮める。内力術式で強化された身体能力を駆使し、一瞬にして間合いを詰める。振り回される尾を地面を這うようにして掻い潜り、肌を擦る暴風に頓着せず、跳ね上がった剣先が鱗を一閃した。

ギギツと異音がして火花が散った。まるで鉄を槌で打ちつけたかのような衝撃に、ヘキサの手のほうがビリビリと痺れる。

当然のように鉛色の鱗に傷はなく、逆に攻撃を加えたこちらのほうに被害があった。後方に跳びながら視線を手元に落とせば、刃先が僅かに欠けていた。

一合でこれでは、早々長くは持つまい。元より質よりも量を採用している以上、武器の損耗など日常茶飯事ではあるが、ここまで差があるとため息のひとつも吐きたくなってしまっても仕方ないことだった。

竜の右前腕が振り上げられる。振り下ろされる鋭利な爪に、先行していたヘキサとリンスは、それぞれ左と右に跳んだ。

ギロリと縦長の瞳が、リンスを捉え、竜は前腕を真横に薙ぎ払った。ガリガリと床を豆腐のように削る爪と、彼女の回転させたハルバードの刃が接触する。

重たい音がしてリンスの足元が砕け、踝までが床に埋まった。

「ッ。はああああッ！！」

裂帛の気合が響き、振り抜かれたハルバードが、竜の一撃を弾き返した。体勢が崩れて、竜の巨体が傾く。彼女の細腕からは信じれない膂力だ。

内力術式 金剛。息吹からの派生型方術である 金剛は、主に使用者の筋力を飛躍的に高めるが、それだけでは説明できないほど強化されていた。

稀に特定の方術とのみ、異常に相性のいいプレイヤーが存在し、彼らは通常ではありえない効率で方術を発動するという。

その一人がリンスであり、彼女の場合は 金剛 がそれに該当するのである。細腕からは想像できない怪力の正体がそれだ。

己が一瞬でも圧倒された事実には、憤怒の眼を鈍く輝かせるヴリドラの口腔から、荒い息に混じり淡い燐光が零れ落ちる。

喉を鳴らして上半身を仰け反らせる竜。ドラゴンプレス。再び必殺の一撃が放たれようとした刹那、ヘキサの後方から飛んできた炎がヴリドラに命中した。

派手に炎が飛び散る。やはり竜にダメージらしいダメージはなかったが、明らかに集中を阻害される形になり、プレスも発射の直前で遮られて止まった。

しかし、目を睨るのは竜種特有の鱗の強度だろう。いまの火炎球だって並の相手ならば、一撃で蒸発させるだけの威力があるのだが、連発してもまるで効いている気がしない。微風の如しだった。

生半可な攻撃では痛打に至らないとは思ってはいた。だが、ここ

まで並外れた耐久性を持っているとは思わなかった。

以前、一回だけ竜とは剣を交えた。半分は観戦のようなモノだった。記憶から判断するに、ここまで強度はなかったはずである。ひよっとしてこいつは、竜種の中でも上位の存在なのではないか。

ふと、そんな考えが頭に浮かんだ。ヘキサたちは知りようのない事実ではあるが、彼の考えは的中していた。

『単一種』たるヴリドラの強さは、竜種の中では凡そ中の上といったところだろう。モンスター全体から言えば上位に食い込む。逆にこれで中の上というのが、いかに竜種が別格であるかを物語っていた。

本来、竜との戦闘は長期戦を前提としている。竜の生命を削りきるには、相応に時間がかかるのである。

対竜戦には大規模なパーティが組まれる理由のひとつだ。ローテーションでパーティを入れ替えながら戦うのが、対竜戦の基本的な戦術である。

むろん、五人しかいない彼らにその戦法は使えない。だからこそ短期決戦。狙うのはただ一箇所。無数の鱗の一枚、逆鱗だけである。

逆鱗は竜種共通の唯一の弱点。逆鱗の下には中枢神経を束ねる中継点があり、そこを貫けば一撃で屠れるまさに竜の急所。短期決戦が前提条件にある以上、逆鱗を貫くことこそが勝利への鍵なのだ。

ただし、それとてそう容易なことではない。弱点を守るために、逆鱗は鱗の中で一番固く、全身の鱗を砕くほうが簡単と云われるく

らいである。

しかも、逆鱗の位置は固体ごとに異なるため、前もって位置を把握することができない。戦闘をしながら探すしかないのだ。

そのためには竜の生命子がある程度削り、感知系の魔法に対する抵抗力を低下させる必要がある。万全の状態ではまず通用しないためだ。

ヘキサとリンスはかく乱と後衛の防御。攻撃がリグレットたちに飛ばないように、竜の注意を自分に引きつける。

その間に怒涛の勢いで撃ち放たれる魔法の連打。間隔のない魔法の乱れ撃ちに、視界が白く染まり、多重で響く炸裂音が鼓膜を打つ。中空に刻まれる魔法光の軌跡。使い手は三人だというのに、まるで魔法使いが集団で魔法を行使しているかのようであった。

物理・魔法共に高い耐性を持つ竜ではあるが、こつも途切れなく魔法を乱射されては、ダメージがなくても流石に煩わしいのだろう。

「グオオオオオオオオ　　ッ！！」

鉛色の竜が咆哮した。直後、ヘキサたちと竜の間に、魔物を模った影絵のようなモノが出現した。ゆらゆらと揺らめく影絵が瞬き、ケタケタと不気味に笑った。

影絵の魔物に重なる二重円。ゴーストスピリット。それがそいつらの名前だった。竜の咆哮には魔力が宿り、呪文の詠唱もなく魔物を呼び寄せる。

不死系統。闇属性。弱点は光属性。竜と比べれば雑魚に等しいが、その分数が多い。目につくだけでも二十以上はいる。しかも、こうしている間に数がどんどん増えていく。

一匹一匹は弱くても、束になれば馬鹿にできない。おまけにこちららヴリドラも同時に相手にしなければならぬのだ。戦況は一気に不利なつたといえた。

「行きますッ！」

故に、リンスは速やかに行動を開始した。

ボツと掲げられた左手に濁った光が点った。黒と紫が混じり合った淀んだ輝きが、ボボツと不規則な瞬きを繰り返している。

左手を床に叩きつける。手の平を中心にして広がる濃密な影が床を侵食。ぼこぼここと気味悪く栗立つ影を突き破り、無数の髑髏が出現した。

白骨を覆う黒い甲冑。黒一色の剣と盾で武装した髑髏の軍勢が、瞬く間にその規模を拡大していく。その数、実に五十体。

霊素と闇素の複合属性。死者を思うがままに蹂躪する屍霊魔法。デスナイト死霊騎士リンスの本領が、ここに発揮される。

「進軍しなさい！ 私の軍勢レギオンッ！！！」

虚ろな眼孔に宿る鬼火。五十の髑髏は剣を振りかざし、麗しき主の号令に下、影絵の魔物に目掛けて、一斉に襲いかかった。

九章 硝子の剣(3)

激突する髑髏の軍勢と影絵の魔物。

数はゴーストスピリットのほうが断然に優位。際限なく虚空より湧いてくる。単純に数で比較するのならば、1対4といったところか。

次から次へと継ぎ足されることを考えれば尚のこと悪い。しかし、量は負けていても質は髑髏のほうが、影絵の魔物よりも数段は上だった。

拮抗したのは一瞬だけ。無造作に振り下ろされた剣が、ゴーストスピリットを一刀の下に両断する。切り裂かれた影絵の魔物は形を失い、生命子の残滓を残して消滅した。

それは対等な勝負ではなく、一方的な掃討戦だ。

攻撃は盾に阻まれて届かず、剣の一閃で一匹ずつ確実に潰されてる。一矢報いることすらできずに、なす術もなく殲滅されていくゴーストスピリット。

「へキサ様。こっちは私にお任せくださいッ！」

五十の髑髏を巧みに操りながら、自身もハルバードを振るい、リンスが声を張り上げた。

いくら一方的な戦闘とはいえ、竜の魔力に惹かれるゴーストスピ

リットは、一向にその数を減らさない。掃討速度と増殖速度はほぼ同じ。

結果、髑髏と影絵の悪魔は拮抗状態に陥っていた。

「わかった。そっちは頼む！」

リンスの声に答えたヘキサは、ゴーストスピリットの合間を縫うように駆け抜けて、再度ヴリドラに接近すると剣を振るう。

飛び散る火花。愚直なまでに振るわれる剣は、やはり竜への痛打にはならなかった。ここまでですでに剣を三本も使い潰している。

だというのに、竜へのダメージといえるのは鱗を割った最初の一撃のみ。後はなんらダメージを与えられていない。

長年、この世界で剣を振るっているが、ここまで手応えのない相手は久方ぶりだ。一人でも勝てるかもしれない？ くだらない戯言だ。現在の状況を見れば、それが可能か不可能なのかなど一目瞭然だった。

だからヘキサは、予定よりも早く、切り札の一枚を切ることにした。

「リンス！ 十秒だけ頼む……！」

彼女のほう見ずに叫ぶと、頭上から踏み下ろされる爪をかわす。影絵の魔物を潰す前腕を横目に、一気に竜から距離を取る。

「『ブック』」

”本”を開く。戦闘中に自ら隙を晒す愚考に、奇声を上げてゴーストスピリット群がってくるが、その悉くが進路上に立ち塞がる體に遮られて、彼の下まで辿りつくこともできずに切り刻まれた。

頁を捲り、スキルの頁を開くと、指先で頁に触れた。同時に中空に展開される半透明のウィンドを操作。スキルスロットに装備されているスキルの中から【換装】を選択。新しく出現した【換装】の画面を操作して、【換装】にセットされている武器を全部入れ替える。

本当はこの後に控えた『本番』に備えて、まだとっておくつもりだったのだが、贅沢を言っていられるような状況ではない。

欲しいの討伐への道筋。ならば、その道筋を自分が切り開くほかあるまい。

腰の後ろの鞘に新たな剣が納まるのを確認すると、すべてのウィンドを閉じて”本”も消し、ヘキサは床を蹴って跳躍した。

自分を守ってくれている髑髏を跳び越え、ゴーストスピリットの顔面を蹴りつけるとさらに加速。鉛色の竜へと突撃した。

空中で剣を引き抜く。

一切の飾りを廃した無骨な片手剣。銘は、ペルシダー。聖剣や魔剣とは違い特殊な固有能力はないが、腕のいい鍛冶師の手による名剣である。

刃を鳴らす。剣呑な輝きを秘めた刀身に、ヘキサは”全開”で生命子を叩き込んだ。

交差する刹那に刃を走らせる。切っ先が鉛色の鱗に触れ、ずぶりと刀身が半ばまで竜の巨体に喰い込んだ。剣先が肉を裂き、宙にどす黒い血が噴きだした。

赤い光を帯びた刀身が、堅牢を誇る竜の鱗を切り裂いたのだ。竜にとってもそれは、信じられない出来事だったのだろう。

ヴリドラの苦痛と屈辱と怒りに塗れた琥珀の双眸が、己が鱗を切り裂いた白髪少年を見下ろす。口の間から漏れる焰。苦痛に満ちた咆哮が、大広間に響き渡った。

「悪いけど、こっちにも余裕がないんだ」

鼓膜が破れそうなほどの大音量を耳にし、竜の怒りをその身に受けるヘキサ。その手の中で悶えるように揺らめく赤い光を注ぎ込まれ、無骨な刀身がギシギシと悲鳴を上げる。

「速攻でいかせてもらおうぞっ！」

咆哮にも負けない大声で言うと、ヘキサはヴリドラに躍りかかった。

尚、いつそうと激しくなる破壊の嵐。一瞬の判断ミスが致命傷になる攻撃を避け続ける。跳んで、駆けて、翻す。

縦横無尽にフロアを駆け抜けるヘキサの剣戟が、竜の体躯にいくつもの傷を刻み込む。最初の堅牢さが嘘のように、無骨な剣は鱗を切り裂く。

当然だ。こっちはなけなしの”とっておき”を使っているのだ。通用してくれなければ、本気で困るのである。

ヘキサの膨大な生命子に通常の武器は耐えられない。それはペルシダーも変わらない。いまも許容を超える生命子に軋み音をさせている。

だが、恒常的には無理でもほんの僅かな時間。一戦にも及ばない

短時間だけに限定すれば、彼の全開にも耐えうる武器も中にはあるのである。

ハーリー経由で入手したペルシダーも、その数少ない剣の一本。そうでもなければ竜の鱗に太刀打ちなどできなかつたに違いない。もっとも、その代償は高くついたが。どれくらいの値打ちかといえば、普段使用している剣ならば百本は買える。大仰に言っているのではなく、本当だから笑ってしまう。

これからはじまる赤字生活の変わりに、その自慢の鱗を全部引き剥がしてやる。

身体を捻り大気を裂く爪をかわし、翼の付け根に剣を振り下ろす。落下の加速を加わえた刀身が、鱗を貫いた。

柄から伝わる鈍い感触に剣を根元まで突き刺すと、ヴリドラは背中に纏わりつくへキサを振り落とそうと巨体を激しく揺さぶった。

剣を引き抜くと離脱し、その瞬間、頭上から巨大な氷柱が降り注いだ。シルクである。彼女の生成した三本の氷柱うち二本は、鱗に遮られて砕けてしまいが、最後の一本が狙い違わずへキサが刻んだ翼の根元の傷口を穿った。

衝撃で鮮血が散り、肉を貫く凍った氷の刃の感触に、ヴリドラは巨体を擦ると甲高く叫んだ。足元のゴーストスピリットを踏み潰し暴れ回る。

「うるさい。ちょっと黙ってる！」

中空で回転して勢いをつけ、氷柱に蹴りを叩き込む。氷柱が押し込まれて、さらに深く肉を抉り血を溢れ出せた。

飛び散る血を浴びないように、盾を翳して着地と同時に飛び退く。竜の血には強い毒素が含まれている。大量に浴びればそれだけで死にかなない。戦うだけで命がけなんて、まったくもって嫌になる思っていた。

様々な系統の魔法が飛び交う中、器用に立ち回りながら剣に生命子を流し込む。ここにきて戦況は徐々にヘキサたちのほうに傾きつつあるが、これが嵐の前の静けさにも似た兆候であることを理解し、彼は気を引き締めなおした。

そう、勝負はこれからだ。いまのはまだ序の口。準備運動程度の代物に過ぎないのだから。空気が変わった。具体的になにがどう変化したのか。肉眼では確認できないが、確かになにかが変わったことをヘキサは感覚で把握した。

ぐるると喉を鳴らすヴリドラ。舐めていた。侮っていた。己が驕りが誇りたる鱗を台無しにした。認めよう。彼らは矮小な雑多などではなく、戦意を交わらせるに値する存在だと。己の牙と鱗を賭けるに相応しいと。

故に、ここからは手を抜かない。竜の心臓に火が点る。心臓は鼓動を早め、全身に煮えたぎる血液を循環させた。

このとき竜は群がる矮小な存在を、はじめて”敵”として認識した。視線と視線が絡み合う。本当の意味での対竜戦の幕が上がった。

九章 硝子の剣(4)

稲妻の如く響く、劈くような咆哮。魂を萎縮させる竜の雄叫びが、大広間を揺さぶった。高まる闘争心に生命子が輝きを増し、魔力が加速度的に跳ね上がる。

膨張する魔力に巨軀を歪めるヴリドラが、両翼を大きく羽ばたかせ、刃のように研ぎ澄まされた烈風を生じさせた。

ふざけた量の魔力が練り込まれた咆哮に身体が一瞬だけ止まった。瞬きほどの隙だったが、竜を前にしては大きすぎる隙だった。

視界の端に映る金属質の尾の軌道に、左腕に装備する盾を割り込ませる。直後、視界が横にズレ、猛烈な勢いで身体が吹っ飛ばされた。

垂直に振り下ろした剣が床に突き刺さる。ギギギツと金きり音がして、剣と床との摩擦熱で眩い火花が散った。

右腕にかかる負担は半端ではなかったが、その甲斐がありすつ飛んでいく光景が緩やかになり、制動をかけられて減速していく。

八割は速度が削ぎ落とされたところで、過負荷に耐久力が限界に達したペルシダーの刀身が、バキンッと半ばからへし折れた。

支えを失ったヘキサは床をごろごろと転がると、勢いを利用して跳ねるように起き上がった。げぼつと血の混じった唾を吐き出す彼

の左腕が、力なく垂れ下がっている。尾の一撃で破損して用をなさなくなつた盾が、腕から滑り落ちて乾いた音を響かせた。

左腕は完全に折れていた。ズキズキと芯から疼くような鈍痛と、【自己再生】による治癒効果からくるむず痒さに顔をしかめる。

持ち上げた右手の中で、折れた剣が小さく鳴った。いかに名剣といえども、こうなってしまうてはただの屑鉄でしかない。

琥珀色の双眸が白髪少年を見据える。荒れ狂う魔力の奔流が突風と化し、何人たりとも寄せつけない障壁となっている。

アビリティ『竜の激昂』。一定値の生命子の減少及び戦意昂揚を引き金として発動する、竜種のみにも与えられた種族固有のアビリテイである。

その効果は絶大の一言に尽きる。全パラメータの上昇 基本性能の底上げという単純な効果は隙がなく、トリガーが生命子の減少である以上、発動を妨害することもできず、これといった対処の手段がない。

「へキサ様。ご無事ですかッ!？」

遠くで彼を案ずるリンスの声がした。

見れば彼女は髑髏の軍勢を引き連れ、ゴーストスピリットの群れと戦闘を継続させているが、どうにも戦況が芳しくなさそうだった。

ヴリドラの増幅した魔力に感応して、影絵の魔物もまた強化されているのである。竜と比べれば些細な強化だが、数が多いので束になれば馬鹿にならない。

いまは戦線を維持しているが、時間が経てば瓦解してもおかしく

ない。むしろ、リンスだからこそ辛うじて、拮抗状態を維持しているというべきか。

ならばこそ、ここで魔法使いたちが自らの本領を發揮した。

いくら短期決戦狙いとはいえ、最初から全力で飛ばして最後の最後で息切れしては意味がない。彼女たちはまだ余力を温存しているのである。

それが『竜の激昂』を合図に、いよいよ全開で行動を開始する。

「火。火。火。恋し焦がれる真紅の篝火」

朗々と流麗な韻律が紡がれる。

戦闘の狂乱に掻き消されるであろう小さな囁き声は、遠く離れた位置にいるヘキサの耳にも確かに響いた。

魔法の詠唱とはそういうモノなのだ。魔力を含ませた韻律は世界に干渉し、超常的な現象を実現させるが故に、“格”が高次元に至るほど物理的な束縛を受けない。

火は水によつて消され、水は火によつて蒸発する。そんな当たり前の常識すら、高度な魔法の前では無意味。火は水の中で燃え、水は火の中で蒸発しない。

それこそが魔法。常識を捻じ曲げる奇跡に他ならない。

炎が猛る。集う火の元素が形をなす。詠唱のままに真紅の炎が、ハズミの周囲に踊る。詠唱に導かれ紅蓮の炎は極限まで圧縮され、蛍の瞬きのような小さな複数の炎の塊となった。

儂い輝きだった。先程まで彼女が行使していた炎と比較したら、あまりにも小さくて頼りない輝き。だが、魔法に精通した者なら一

目で看破しただろ。

ハズミの周囲に瞬く蛍の輝き。それらひとつひとつに練り込まれた魔力量が、通常なら複数人の魔法使いによって放たれる大魔法に匹敵すると。

「貫け。ファイアフライ 蛍火！」

真紅の瞬きが乱舞する。

直進、鋭角、曲線。詠唱者の意思に呼応した蛍の輝き。幾何学的な軌跡を描いて竜へと解き放たれた蛍火は、魔力の障壁を容易く突き破り、鉛色の鱗に接触して炸裂した。

爆発音も爆炎もなかった。一瞬だけ膨張した蛍火が儚く消失したとき、後には全身から大量の血液を垂れ流す竜の姿があった。

ポタポタと流れる毒を含んだ血液。自慢の鱗は見るも無残に、虫食いのような有様だった。円球状に抉られた体躯。超高温に鱗が鉛のように融けている。全身を灼く炎の激痛に、ヴリドラは頭上を仰いで吼えた。

その竜の視線におかしなモノが入り込んだ。くすんだ銀色の液体。それがまるで無重力に浮かぶかのように漂っている。

「ぱぁんっ」

青髪の少女のおどけたような声色に、銀色の液体が弾け散った。竜に降り注ぐ銀の豪雨。刺激臭が鼻を突く。”強酸性の雨”に身を晒されて、竜の体躯から白煙が吹き上がった。

もしも竜が万全の状態だったのならば、鱗に遮られて大した効果

は得られなかったに違いないが、いまのヴリドラはヘキサやハズミによって全身に傷を負っている。

傷口から入り込んだ強酸が、竜の体内を駆け巡る。外と内から自身を焼け爛れさせる強酸に、ヴリドラが狂ったように暴れまわる。

竜種は毒物に対しても耐性を持つが、この強酸はただの液体ではなかった。シルクの魔力により生み出された液体には、ある種の呪的な効果が宿っている。彼女の意思が込められた強酸は、ただの強酸とはまったくの別物なのだ。

とはいえ、竜の魔力障壁を突破するレベルともなれば、早々容易なモノではない。巨体を焦がす”熱”に悶え狂うヴリドラ。

熱いの？ だったら……私が冷やしてあげる。

青い髪の魔女が静かに囁く。

「水。水。水。不変たる青き水面の波紋」

大気に満ちる水の元素。霊素と闇素の充満する世界にあつて、異常な密度で水の元素が集う。吐く息が白い。大広間の温度が急降下する。炎の残滓に燻られ高温になっている大気が、急激に冷やされて凍りつく。

キラキラと輝く氷の結晶。水は氷となりて、遍くモノを凍結させる。

「凍れる大地」
アイスエッジ

限定された空間に吹き荒む氷の嵐が具現する。

青い氷の刃が鱗を削るようにして体を抉る。咆哮すら呑み込む氷

の檻が、上下左右あますところなく竜に殺到した。

肉片が飛び散り、こびりつく血が青い氷を赤く染める。息すらできない氷の地獄。呼吸をすればその瞬間に、喉から体内に侵入した氷の刃が、内側から体を切り刻む。

赤と青。『箒』を冠する二人の魔女。その真価がここに展開される。

『箒』。それは 天上神歌教会 に所属する魔法使いの中にあつて、最強の魔法使いに贈られる称号である。

七つの魔法属性に対応した七人の『箒』。火属性の赤箒。水属性の青箒。風属性の緑箒。土属性の茶箒。光属性の白箒。闇属性の黒箒。霊属性の紫箒。

セブンティール
七本箒。それぞれの属性魔法に特化した七人の最強の魔法使い。
天上神歌教会 の切り札。

そして、三大ギルドの一角であり、魔法使い系ギルドとしては最大規模を誇る 天上神歌教会 で最強ということは、それはそのまま転じて箱庭世界における最強の魔法使いだということでもある。

開放された力は比類する者なき力を秘めていた。最強の魔法使いの肩書きが伊達や酔狂ではなく、真実であると告げるには十分過ぎる。

「グオオオオオオオオツ！」

氷の嵐を薙ぎ払う魔性の咆哮。鉛色の鱗に当初の輝きはなく、全身を己の血で赤くした竜はしかし、欠片も戦意を失ってはいなかつ

た。

竜の息に過剰な魔力が漏れている。視界が晴れると同時に放たれる必殺の吐息。一度放たればあらゆるモノを貫くドラゴンブレス。

だが、

「虹の彩色。万象を満たす壮麗の至宝」

粛々と紡がれる美麗な言霊。

ここにもうひとつ。黒髪の少女の異常性が発露する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8305p/>

Re:Talk+

2011年10月9日00時08分発行